観音寺市内遺跡発掘調査事業報告書 15

大野原古墳群 I

（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）

国庫補助事業報告書

範囲確認調査

2014.3

観音寺市教育委員会

観音寺市内遺跡発掘調査事業報告書 15

大野原古墳群 I

（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）

国庫補助事業報告書

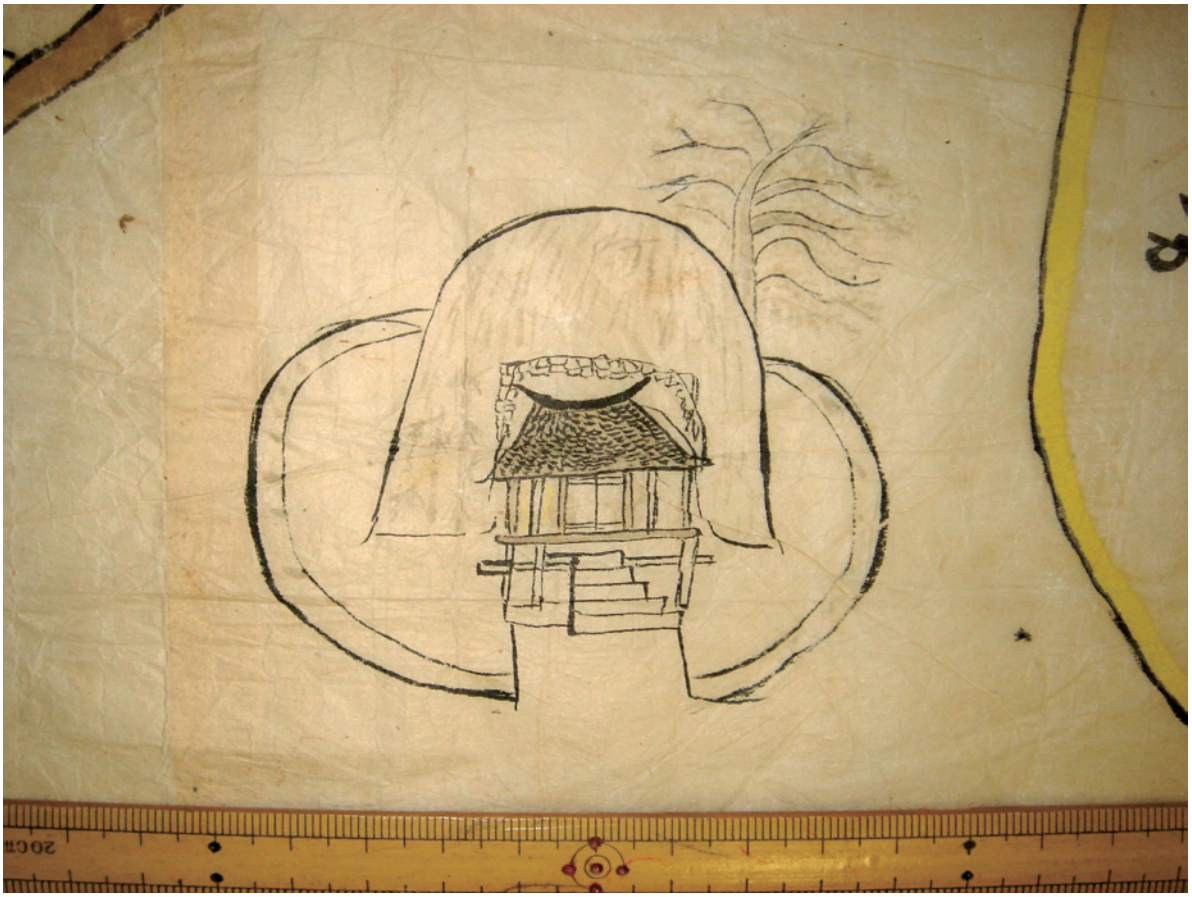
範囲確認調査

2014.3

観音寺市教育委員会

大野原古墳群（航空写真）

椀貸塚古墳羨道部（トレンチ２）



大野原八幡神社と椀貸塚古墳
【大野原開墾古図（正保２（1645）年）より】

例　　言

１．本書は、平成 18 年度から平成 20 年度までに実施した大野原古墳群の基礎調査と「香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会」の検討結果を受け、平成 21 年度から平成 25 年度にかけて観音寺市教育委員会が観音寺市内遺跡発掘調査事業（国庫補助事業）で実施した範囲確認調査と「香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会」の報告書である。

２．本報告書では、香川県観音寺市大野原町大野原に所在する、椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳（香川県指定史跡）を対象とした。

３．本書の執筆・編集及び椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳の石室実測・墳丘測量・土層図実測及び図面のトレース作業、出土遺物の整理作業は、観音寺市教育委員会事務局　生涯学習課　文化振興係長（兼）副主幹　久保田昇三が担当した。

４．挿図の一部に、「観音寺市全図」（1/25,000）」を使用した。墳丘測量図は 1/500・1/700、石室実測図・土層図は 1/100・1/50・1/40、出土遺物実測図は 1/3 としているが、例外もある。図面の方位は磁針方位で示した。また、実測図の縮尺はスケール・数値で表示した。

５．出土品・図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局生涯学習課で保管している。

６．本事業の実施及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

大野原八幡神社　宮司　柘植宗尚、宗教法人　慈雲寺　代表役員　藤井公真、大野原小学校　校長　石川徹、牧野巧、荻田公一郎、松岡豊史、森川健一郎、尾池辰生、田渕竹良、柴田耕作、伊達信重、石川順一、福田吉久、清水宏、平岩誠治、石井多喜夫、石井宗男、中野守雄、冨永信善、真鍋庄二、石川博之、高瀬要一、丹羽佑一、大久保徹也、菱田哲郎、守谷貞和、横山照美、田中覚、野口雅澄、新納泉、高橋照彦、清家章、吉田広、森格也、西岡達哉、片桐孝浩、北山健一郎、森下英治、信里芳紀、松本和彦、乗松真也、中勇樹、大田匠園　太田文雄、花谷浩、久保道生、大西節、木村英二、片山和幸、請川富子

【 本 文 目 次 】

頁

1．調査にいたる経緯 ---------- 1
（1）香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会設置要綱 ---------- 1
（2）検討委員会の構成 ---------- 2
（3）検討委員会の開催記録 ---------- 2

【香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会からの報告書】

2．香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会 ---------- 9
（1）調査・整備委員会設置の経緯 ---------- 9
（2）香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会規則 ---------- 9
（3）調査・整備委員会の構成 ---------- 10
（4）調査・整備委員会の開催記録 ---------- 11

3．発掘作業の経過 ---------- 15

4．遺跡の位置と環境 ---------- 19
（1）地理的環境 ---------- 19
（2）歴史的環境 ---------- 21

5．範囲確認調査の成果 ---------- 27
（1）椀貸塚古墳 ---------- 27
①墳丘・周濠 ---------- 27
②横穴式石室 ---------- 39
③出土遺物 ---------- 41
④小結 ---------- 43
（2）平塚古墳 ---------- 45
①墳丘・周濠 ---------- 45
②横穴式石室 ---------- 53
③出土遺物 ---------- 57
④小結 ---------- 57
（3）角塚古墳 ---------- 59
①墳丘・周濠 ---------- 59
②横穴式石室 ---------- 69
③出土遺物 ---------- 71

④小結---------- 71

6．大野原古墳群の自然科学分析（パリノ・サーヴェイ㈱）---------- 74

7．考察---------- 87
（1）三豊平野中央部における地域社会構成史からみた
大野原３墳（椀貸塚、平塚、角塚）の被葬者の性格　丹羽　佑一 ---------- 87
（2）大野原古墳群における石室形態・構造の変化と築造動態／讃岐及び周辺地域の大形横穴
式石室墳と大野原古墳群　大久保徹也 ---------- 95
（3）大野原古墳群からみた後・終末期の首長墳　菱田哲郎 ---------- 107

8．総括----------111
（1）各古墳の概要 ----------111
①椀貸塚古墳----------111
②平塚古墳----------111
③角塚古墳---------- 112
（2）大野原古墳群の編年的位置 ---------- 112
①石室構造／形態からの検討---------- 112
②出土遺物からの検討---------- 112
③大野原古墳群（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）の変遷---------- 114
（3）大野原古墳群の歴史的位置 ---------- 114
①大野原古墳群の特質---------- 114
②三豊地域における大野原古墳群 ---------- 114
③四国最大規模の巨石墳群としての大野原古墳群 ---------- 115

【 図 版 目 次 】

カラー図版１　大野原古墳群（航空写真）
カラー図版２　椀貸塚古墳羨道部（トレンチ２）
カラー図版３　大野原八幡神社と椀貸塚古墳【大野原開墾古図（正保２（1645）年）より】

椀貸塚古墳

図版１－１　墳丘（北東側から撮影）合成写真
図版１－２　椀貸塚の石碑と墳丘（西側から撮影）
図版２－１　石室開口部
図版２－２　墳丘（南側から撮影））
図版３－１　墳丘（トレンチ６付近から墳丘北東部を望む）
図版３－２　墳丘（北東側から撮影）
図版４－１　大野原八幡神社境内の八重垣神社（周堤部）
図版４－２　石室　前室から玄門、奥壁を望む（撮影年代不明）
図版５　　石室　玄室奥壁前（昭和 28 年 10 月 4 日撮影）
図版６－１　石室　玄室奥壁側　左側壁の石材が抜け落ちた跡の状況
図版６－２　石室内の「詰め土」
図版７－１　トレンチ１の土層
図版７－２　トレンチ１　周濠（内濠）と検出された石垣
図版８－１　トレンチ１　石垣裏（墳丘側）の状況
図版８－２　トレンチ２　羨道の閉塞石
図版９－１　トレンチ２　羨道右側壁と閉塞石
図版９－２　トレンチ２　羨道部（手前が左側壁、奥が右側壁）
図版 10－１　トレンチ２　羨道左側壁と閉塞石
図版 10－２　トレンチ２　羨道の閉塞土
図版 11―1　トレンチ３　石垣検出状況
図版 11―2　トレンチ 4-3　石垣の内側の墳丘盛土
図版 12―1　トレンチ 4-1　墳丘裾部と周濠（内濠）の状況
図版 12―2　平成 14 年度の調査状況（トレンチ 4 近くの墳丘裾部）
図版 13―1　トレンチ 5-1
図版 13―2　トレンチ 5-2　昭和期に造成した盛土の状況
図版 14―1　トレンチ６（椀貸塚側から岩倉塚側を望む）
図版 14―2　トレンチ６（岩倉塚側から椀貸塚側を望む）
図版 15―1　トレンチ６　内濠外縁部
図版 15―2　トレンチ６　周堤部土層
図版 16―1　トレンチ６　周堤部から外濠にかけての状況（写真左側が周堤、右側が周濠（外濠））
図版 16―2　トレンチ６　外濠外縁部の状況：写真左の石組は後世の水路
図版 17―1　トレンチ８、９、７、６（写真手前から）
図版 17―2　トレンチ７で検出された石垣
図版 18―1　トレンチ９（トレンチ７の石垣に続く石垣）
図版 18―2　トレンチ 10（外濠から内濠を望む、大野原小学校校庭）
図版 19―1　トレンチ 10　内濠外縁部
図版 19―2　トレンチ 10　外濠検出状況

図版 20―1　トレンチ 11　内濠外縁部
図版 20―2　トレンチ 12（椀貸塚側から岩倉塚を望む：周堤、外濠、岩倉塚墳丘）
図版 21―1　トレンチ 12（岩倉塚側から椀貸塚側を望む）
図版 21―2　トレンチ 12　椀貸塚外濠と岩倉塚墳丘の重なりの状況（１）
図版 22―1　トレンチ 12　椀貸塚外濠と岩倉塚墳丘の重なりの状況（２）
図版 22―2　トレンチ 12　周堤
図版 23―1　トレンチ 13　外濠、旧八幡の石垣、岩倉塚古墳墳丘
図版 23―2　トレンチ 13　旧八幡の石垣と岩倉塚古墳墳丘の状況
図版 24　　出土須恵器（１）
図版 25　　出土須恵器（２）
図版 26　　石室　　展開図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 27―1　奥壁　　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 27―2　前室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 28―1　前室袖石部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 28―2　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 29―1　右側壁　　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 29―2　左側壁　　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 30―1　石室床面　　平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 30―2　石室天井部　平面図　三次元地上レーザー計測画像）

平塚古墳

図版 31―1　墳丘（東側から撮影）
図版 31―2　石室開口部
図版 32―1　トレンチ１　石室左側壁外部の土層（１）
図版 32―2　トレンチ１　石室左側壁下層の状況（２）
図版 33―1　トレンチ１　東側セクション
図版 33―2　トレンチ２　石室右側壁外部の列石
図版 34―1　トレンチ２　石室右側壁外部の列石の状況（平面）
図版 34―2　トレンチ３
図版 35―1　トレンチ３　南側セクション　周濠部付近の土層
図版 35―2　トレンチ４
図版 36―1　トレンチ４　西側セクション　地山層と盛土下層部
図版 36―2　トレンチ４　西側セクション　地山層直上の黒色土と地山ブロック
図版 37―1　トレンチ４　南側（石室側）セクション
図版 37―2　トレンチ４　堤状遺構と周濠（写真左）
図版 38―1　トレンチ５　西側セクション
図版 38―2　トレンチ 6-1
図版 39―1　トレンチ 6-2
図版 39―2　トレンチ 7-1　周濠外縁部
図版 40―1　トレンチ 7-2　地山の立ち上がり箇所
図版 40―2　トレンチ８
図版 41―1　トレンチ８　東側セクション
図版 41―2　トレンチ９　東側セクション
図版 42―1　右側壁玄門部　玄門立柱石と「支え石」
図版 42―2　左側壁玄門部　玄門立柱石と「支え石」

図版 43―1　石室　右側壁の羨門石（写真左下）
図版 43―2　石室内の「詰め土」（羨道右側壁玄門付近）
図版 44　　出土須恵器
図版 45　　墳丘平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 46　　石室展開図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 47―1　石室開口部（三次元地上レーザー計測画像）
図版 47―2　奥壁部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 48―1　右側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 48―2　左側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 49―1　石室床面　平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 49―2　石室天井　平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 50―1　羨道玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 50―2　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）

角塚古墳

図版 51―1　墳丘（南西側から撮影）
図版 51―2　墳丘（北西側から撮影）
図版 52―1　墳丘（東側から撮影）
図版 52―2　石室開口部
図版 53―1　石室（羨道から奥壁を望む）
図版 53―2　石室　奥壁
図版 54―1　トレンチ１　羨門石（左側壁）
図版 54―2　トレンチ１　羨門石下部と須恵器出土状況
図版 55―1　トレンチ１　羨門石付近の土層
図版 55―2　トレンチ２　北側セクション
図版 56―1　トレンチ 3-1
図版 56―2　トレンチ 3-2　周濠外側斜面を検出（墳丘側から周濠に向かって撮影）
図版 57―1　トレンチ 3-2　(周濠から墳丘に向かって撮影)
図版 57―2　トレンチ 3-2　東側セクション　周濠外側斜面を確認
図版 58―1　トレンチ 3-2　西側セクション　周濠外側斜面を確認
図版 58―2　トレンチ 4-1　南側セクション
図版 59―1　トレンチ 4-1　東側セクション
図版 59―2　トレンチ 4-2　南側セクション
図版 60―1　トレンチ 4-3　北側セクション
図版 60―2　トレンチ５
図版 61―1　トレンチ５（拡張）
図版 61―2　トレンチ５（拡張）東側セクション
図版 62―1　トレンチ５（拡張）墳丘下層部
図版 62―2　トレンチ５（拡張）西側セクション
図版 63―1　トレンチ６（写真手前が周濠側）
図版 63―2　トレンチ６　北側セクション
図版 64―1　トレンチ７　北側セクション
図版 64―2　トレンチ８
図版 65―1　トレンチ８　東側セクション　地山層直上の黒色土層
図版 65―2　トレンチ９

図版 66―1　トレンチ９　西側セクション
図版 66―2　トレンチ 10
図版 67―1　トレンチ 10　東側セクション
図版 67―2　トレンチ 10　西側セクション
図版 68　　出土須恵器
図版 69　　墳丘平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 70　　石室展開図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 71―1　石室開口部（三次元地上レーザー計測画像）
図版 71―2　奥壁部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 72―1　右側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 72―2　左側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 73―1　石室床面　平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 73―2　石室天井　平面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 74―1　羨道玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 74―2　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）
図版 75　　テフラ・砂分の状況
図版 76　　植物珪酸体
図版 77　『大野原開墾古図』　1645（正保 2）年（『大野原町誌』より転載）
図版 78　『御宮相續ニ付万事覚帳』　1685（貞享 2）年
図版 79―1『名東縣下第廿四大區四小區　讃岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内　拾
　　從千三百九十六番至千五百八十六番』　1873（明治 6）年　平塚古墳と角塚古墳周辺部分
図版 79―2『香川県讃岐國三豊郡大野原村　鎮座　郷社八幡神社之景』1902（明治 35）年
　　（町制 25 周年　『写真は語る百年のあゆみ』大野原町　より転載）
図版 80―1　平塚古墳付近での秋祭の風景（昭和 10 年頃？）
図版 80―2　航空写真　昭和 30 年頃（平田昌久氏提供）

【 挿　図　目　次 】

頁

図１　大野原古墳群位置図 ---------- 20
図２　大野原の立体地質図と模式断面図 ---------- 20
図３　周辺遺跡地図(1/25,000) ---------- 22～23
図４　椀貸塚古墳・岩倉塚古墳　地形測量図・トレンチ配置図(1/700)---------- 28
図５　椀貸塚古墳・岩倉塚古墳　地形測量図・トレンチ配置図　その２(1/500)---------- 29
図６　椀貸塚古墳　トレンチ１　土層図(1/50)　---------- 30
図７　椀貸塚古墳　トレンチ２　土層図(1/30)　羨道部閉塞土の状況 ---------- 30
図８　椀貸塚古墳　トレンチ２　土層図(1/30)　羨道部閉塞石の状況 ---------- 30
図９　椀貸塚古墳　トレンチ３　土層図(1/50)　---------- 32
図 10　椀貸塚古墳　トレンチ 4-1、4-2、4-3　土層図(1/50)　墳丘盛土、裾部と内濠の状況 ---------- 32
図 11　椀貸塚古墳　トレンチ 5-1、5-2、11　土層図(1/50)---------- 34
図 12　椀貸塚古墳　トレンチ６　土層図(1/60)　---------- 34
図 13　椀貸塚古墳　トレンチ７　土層図(1/50)　内濠に造られた石垣の状況 ---------- 36
図 14　椀貸塚古墳　トレンチ９　土層図(1/50)　内濠に造られた石垣の状況 ---------- 36
図 15　椀貸塚古墳　トレンチ 10　土層図(1/60)　---------- 36
図 16　椀貸塚古墳　トレンチ 12　土層図(1/50)　---------- 38

図 17　椀貸塚古墳　トレンチ 13　土層図(1/50) ---------- 38
図 18　椀貸塚古墳　石室実測図(1/100) ---------- 40
図 19　椀貸塚古墳　出土遺物実測図（1/3） ---------- 42
図 20　椀貸塚古墳　復元イメージ図 ---------- 44
図 21　平塚古墳　墳丘測量図・トレンチ配置図(1/500) ---------- 46
図 22　平塚古墳　トレンチ１　土層図(1/40) ---------- 47
図 23　平塚古墳　トレンチ３　土層図(1/50)（１） ---------- 47
図 24　平塚古墳　トレンチ３　土層図(1/50)（２） ---------- 47
図 25　平塚古墳　トレンチ４　土層図(1/40)（１） ---------- 48
図 26　平塚古墳　トレンチ４　土層図(1/40)（２） ---------- 48
図 27　平塚古墳　トレンチ４　土層図(1/40)（３）南側（石室側） ---------- 49
図 28　平塚古墳　トレンチ５　土層図(1/50) ---------- 49
図 29　平塚古墳　トレンチ８　土層図(1/50) ---------- 49
図 30　平塚古墳　トレンチ９　土層図(1/60) ---------- 49
図 31　平塚古墳　トレンチ 6-1、6-2　土層図(1/50) ---------- 50～51
図 32　平塚古墳　トレンチ 7-1、7-2　土層図(1/50) ---------- 50～51
図 33　平塚古墳　石室実測図(1/100) ---------- 54
図 34　平塚古墳　出土遺物実測図（1/3） ---------- 56
図 35　角塚古墳　墳丘測量図・トレンチ配置図(1/500) ---------- 60
図 36　角塚古墳　トレンチ１　土層図(1/50) ---------- 61
図 37　角塚古墳　トレンチ２　土層図(1/50) ---------- 61
図 38　角塚古墳　トレンチ 3-2　土層図(1/50) ---------- 62
図 39　角塚古墳　トレンチ 3-2　土層図(1/50) ---------- 62
図 40　角塚古墳　トレンチ 4-1　土層図(1/50) ---------- 64
図 41　角塚古墳　トレンチ 4-2　土層図(1/50) ---------- 64
図 42　角塚古墳　トレンチ 4-3　土層図(1/50) ---------- 64
図 43　角塚古墳　トレンチ６　土層図(1/50) ---------- 64
図 44　角塚古墳　トレンチ５　土層図(1/50) ---------- 66
図 45　角塚古墳　トレンチ８　土層図(1/50) ---------- 66
図 46　角塚古墳　トレンチ９　土層図(1/50) ---------- 68
図 47　角塚古墳　トレンチ 10　土層図(1/50) ---------- 68
図 48　角塚古墳　石室実測図(1/100) ---------- 70
図 49　角塚古墳　出土遺物実測図（1/3） ---------- 72
図 50　粒度分布図（１） ---------- 79
図 51　粒度分布図（２） ---------- 80
図 52　火山ガラスの屈折率 ---------- 81
図 53　香川県横穴式石室集成（(　)は未調査） ---------- 94
図 54　九州の周堤付円墳 ---------- 109
図 55　勝堂古墳群（註１文献による） ---------- 109
図 56　紀氏系氏族の分布（岸俊男による） ---------- 110
図 57　墳丘・石室変遷図（墳丘 1/1,500、石室 1/200） ---------- 116

【 表　目　次 】

頁

表１　香川県指定史跡「椀貸塚、角塚及び平塚」古墳の調査工程表 ---------- 16
表２　観音寺市教育委員会における年次ごとの発掘調査体制 ---------- 17
表３　各古墳の基準点の座標と標高 ---------- 18
表４　分析試料一覧 ---------- 74
表５　粒度組成 ---------- 78
表６　テフラ分析結果 ---------- 81
表７　植物珪酸体含量 ---------- 81
表８　土壌理化学分析結果 ---------- 82
表９　アロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の類型区分基準 ---------- 82
表 10　椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳　計測データ ---------- 113
表 11　大野原古墳群関係文献資料一覧表 ---------- 119
表 12　土器観察表Ⅰ（椀貸塚古墳） ---------- 121
表 13　土器観察表Ⅱ（平塚古墳） ---------- 122
表 14　土器観察表Ⅲ（角塚古墳） ---------- 122

１．調査にいたる経緯

大野原古墳群の椀貸塚古墳、平塚古墳はその石室の保存が危惧されるため、平成９年度にその横穴式石室内に支保工（支柱）が設置されている。その当時、筆者は石室内を見る機会に恵まれたが、金属製の柱と角材で組みあげられた支保工で石室内部の様子をほとんど確認できない状況となっていたことを記憶している。確かに、椀貸塚の石室内には左側壁から抜け落ちたと思われる石材があり、抜け跡を観察すると墳丘の盛土層が確認できるのであるが、それは部分的なものであり、ここまで支保工を設置すべき状況であるかどうかは、はなはだ疑問であると感じていた。

その後、平成１７年の市町合併までは旧観音寺市の職員であったため内部の状況を確認することもなく時間が経過した。合併後は県指定史跡の「椀貸塚、角塚及び平塚」古墳の保存に関しては当然のごとく文化財担当の守備範囲となったため、平成９年の記憶をたどりながら石室内部の状況を確認したところ、支保工を設置した当時の状況とは大きく様変わりした風景が存在していた。支柱を固定していた角材の多くは腐っており、中には途中から折れてしまって下方に垂れ下がっているものやすでに落下しているようなものまであった。安全のために設置しているものが逆に極めて危険なものへと変貌していたのである。この状態をこのまま放置はできないと考え、今後の長期的な保存のために何ができるか、それも今この時からしなければならないと考えた結果、県、市、所有者等で相談・調整し専門家の指導や助言を得て、本格的な保存・活用のための方策を検討する保存・活用検討委員会の正式な設置と大野原古墳群の基礎的なデータを得るため調査を実施するに至ったのである。

（1）香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会設置要綱

平成 18 年 10 月 24 日
教育委員会告示第３号

（設置）

第１条　香川県指定史跡の椀貸塚、角塚及び平塚古墳の保存・活用に関する方策等について検討するため、香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会（以下「検討委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　検討委員会は、観音寺市教育委員会（以下「教育委員会」という。）の求めに応じて椀貸塚、角塚及び平塚古墳の保存・活用に関する必要な事項について検討する。

（構成）

第３条　検討委員会は、若干名の委員をもって構成し、教育委員会が委嘱する。

（任期）

第４条　委員の任期は、平成 21 年３月 31 日までとする。

２　補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（会長等）

第５条　検討委員会に会長及び副会長各１人を置く。

２　会長及び副会長は、委員の互選によりこれを定める。

３　会長は、検討委員会の会務を総理し、検討委員会を代表する。

４　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。
（会議）
第６条　検討委員会の会議は、会長が招集する。
２　検討委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。
３　検討委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。
（庶務）
第７条　検討委員会の庶務は、教育部生涯学習課において処理する。
（委任）
第８条　この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。
附　則
１　この要綱は、平成18年11月１日から施行する。
２　この要綱による最初の検討委員会の会議は、第６条第１項の規定にかかわらず、教育委員会が招集する。

（２）検討委員会の構成
検討委員会は７名の委員で構成された。その内訳は４名の文化財・考古学関係の専門家と観音寺市文化財保護審議会会長１名、市文化財保護協会会長１名、所有者及び地元代表１名である。以下に委員名簿を記載する。（敬称略）

【任期　平成18年12月25日～平成21年３月31日】

会　長	守谷　貞和	観音寺市文化財保護審議会　会長
副会長	丹羽　佑一	香川大学経済学部　教授（考古学）
委　員	高瀬　要一	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所　文化遺産部長（遺跡整備）（平成20年３月現在）
委　員	大久保徹也	徳島文理大学文学部文化財学科　教授（考古学）
委　員	菱田　哲郎	京都府立大学文学部歴史学科　准教授（考古学）
委　員	横山　照美	観音寺市文化財保護協会　会長（平成20年３月現在）
委　員	柘植　宗尚	大野原八幡神社　宮司（所有者及び地元代表）

（３）検討委員会の開催記録
検討委員会は平成18年12月から平成21年３月までの間に計５回開催した。第１回では検討委員会の趣旨説明と会長（守谷貞和氏）と副会長（丹羽佑一氏）を互選した。第２回では椀貸塚古墳の調査結果の検討、第３回では平塚古墳の調査結果の検討、第４回では文化庁の禰冝田調査官を招聘しご指導を頂くとともに角塚古墳の調査結果の検討を行った。第５回では検討委員会としてのこれまでの検討結果を報告書として提出すべく、内容のとりまとめを行った。報告書は平成21年３月30日に観音寺市長　白川晴司氏に委員を代表して横山照美氏が報告書を提出した。
以下に各回の概要と検討委員会からの報告書を記しておく。

・第１回検討委員会

日　時　平成 18 年 12 月 25 日（月）13:00～16:30

場　所　観音寺市大野原中央公民館研修室

参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名

議題等　①検討委員会の趣旨説明、会長の互選

②椀貸塚、角塚、平塚の現状説明

③検討委員会の計画（案）について

④現地確認（椀貸塚→角塚→平塚）

⑤意見交換、次回への課題について

・第２回検討委員会

日　時　平成 19 年 8 月 27 日（月）13:00～16:30

場　所　観音寺市大野原中央公民館研修室

参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１０名

議題等　①椀貸塚古墳の調査結果について

②現地確認（椀貸塚→平塚）

③椀貸塚の保存・活用について

④今後の予定について

・第３回検討委員会

日　時　平成 20 年 3 月 26 日（水）13:00～16:45

場　所　観音寺市大野原中央公民館研修室

参加者　委員５名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１０名

議題等　①平塚古墳の調査結果について

②今後の検討委員会の計画について

③現地確認（椀貸塚→平塚→角塚）

④今後の課題について

・第４回検討委員会

日　時　平成 20 年 10 月 7 日（火）13:30～17:00

場　所　観音寺市大野原図書館研修室

参加者　委員７名

文化庁文化財部記念物課文化財調査官１名

香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１３名

議題等　①角塚古墳の調査結果について

②現地確認（椀貸塚→岩倉塚→平塚→角塚）

③今後の課題について

④今後の検討委員会の計画ついて

・第５回検討委員会

日　時　平成21年３月２日（月）13:00～16:30

場　所　観音寺市大野原中央公民館研修室

参加者　委員６名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　　文化振興係担当職員１名　　計　９名

議題等　①検討委員会の報告書（案）について

②今後の調査計画について

③検討委員会について

④現地確認（岩倉塚）

【香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会からの報告書】

～ 大野原古墳群の保存と活用のために ～

Ⅰ　大野原古墳群の文化財的価値

香川県観音寺市大野原町大野原に所在する香川県指定史跡「椀貸塚、角塚及び平塚」古墳が築造された年代は椀貸塚が６世紀後葉、平塚が７世紀初め、角塚が７世紀の第二四半期に概ね位置付けられる。このことは、その石室規模や構造を観察し他の類例と比較することで、その変化の過程から推測が可能である。

特に、椀貸塚は玄室の規模については特筆すべきものがある。玄室長 6.8m、最大幅 3.6m、最大高約 3.9 m（現状値）を測り、床面積で 22.3 ㎡、同容積ではおおよそ 80 ㎥となる。このことは、四国内の各地での最大規模はせいぜい母神山鑵子塚クラス、すなわち床面積 10～12 ㎡程度であるのに対して、椀貸塚のそれはそれらの２倍となる。また、時代の多少の前後はあるが畿内中枢部の横穴式石室と対比しても、床面積では奈良県見瀬丸山古墳（推定 30 ㎡＋α）、同石舞台古墳（27 ㎡）に準じ、奈良県牧野古墳（22.4 ㎡）、同塚穴山古墳（21.8 ㎡）に匹敵する。対岸の吉備地域では例外的に巨大な横穴式石室であるコウモリ塚古墳（28 ㎡）、箭田大塚古墳（26 ㎡）などがあるが、これにも準じる規模となっている。

椀貸塚から平塚、角塚への変化は、一連の連続性をみとめることができ、この点についても注目すべきである。北部九州的な要素がしだいに失われて、畿内的な要素が強くなっていく状況が看取できる。その一特徴としては石材の大型化や壁面の平滑化が進んでいくことにあり、この変遷は同時期の多くの地域で同時に見られるもので、当該古墳群もそのような流れの典型として理解することができる。

なお、墳丘規模については今後墳形を含め範囲等の確認を慎重に行わなければならないが、これまでの墳丘測量調査の結果では、椀貸塚が直径 36m、平塚が直径 52m、角塚が約 50mの規模を誇ると推定され、いずれも大形の墳丘を有し、同時期のものからは群を抜く存在である。

以上のように、当該古墳群はその築造時期差などから三世代にわたるものとみられる。三基の古墳は歴代、四国地域で最大規模の横穴式石室を内蔵し、墳丘規模の点でも他を圧倒している。特に椀貸塚の玄室規模（床面積、容積）は、畿内地域の最有力墳石室に準じたものであり、畿外諸地域の通常クラス盟主墳の石室規模からは抜きん出た規模であると評価することができる。このような傑出した内容の大型墳が３世代にわたり、近

接した場所に連続的に築造されたことは古墳時代後期にあっては稀な存在である。四国地域はもちろん列島全体を見渡しても類例は乏しいと思われる。かつ、横穴式石室が比較的良好な状態で保存されていること、日常的にその状態を子細に観察できる点は高い意義を持ち、特別な付加価値のある極めて文化財的価値の高い重要な遺跡である。

なお、江戸初期の開村以来、椀貸塚は大野原八幡神社と一体のものとして、平塚は秋祭りのお旅所として活用され、まさに地域文化の核でありシンボルとしての役割を果たしている。このように長年に渡って重要な遺跡が神社関係者をはじめ地域の人々によって今日まで大切に守られてきた功績に敬意を表したい。

Ⅱ 大野原古墳群の現状と課題

本章では、椀貸塚、平塚、角塚の石室実測や墳丘測量などの基礎調査から明らかになった現状と保存管理上の問題点等を古墳ごとに指摘しておく。

① 椀貸塚古墳

石室内は平成９年度に支保工が設置され現在も同様な状態であるが、石室実測調査の際に腐食した木材の多くは除去し、床面に散乱していた木材の腐食破片の清掃作業を行ったことで、以前の絶望的に荒廃した状況からは一時的ではあるが脱した感がある。しかし、石室左側壁の奥壁近くの部分については、一石が側壁から抜け落ち外側の盛土層が見える状態であり、また別の箇所には、石材が二つに割れているが微妙なバランスで上部の石材がそれを押さえて側壁が保たれているものもあり、支保工が設置された理由もこの箇所にあると思われるので、この箇所に関しては今後何らかの補強対策の実施が最優先課題である。

また、石室が前述のような状態であることから万が一石室が崩壊してしまう可能性もはらんでおり、石室実測図は作成しているが、念のために３次元レーザー計測など最先端の技術を活用し科学的な詳細データを得ておくことも肝要である。神社境内の玉垣に囲まれた本殿背後に存在する椀貸塚の特殊な立地環境を考慮するとともに、今後の公開や活用を考えた場合必要な措置であると思われる。

次に、古墳の範囲を確認しておくことも必要である。神社境内には様々な施設が存在し条件的に制約はあるが、古墳の文化財的価値を評価する際には墳丘規模や周溝などを含めた全体的な古墳の範囲が大事な要素なる。さらに、石室の全体像（全長等）も不明な点がありこの点についても課題を残している。

最後に、残念ではあるが、これまで椀貸塚から出土した須恵器など築造時期を推定できる遺物が確認されていない。築造時期が推定できる須恵器があると大野原古墳群の成立を考える場合きわめて重要な資料になり、近接する岩倉塚や少し離れてはいるが母神山古墳群の鑵子塚との前後関係で椀貸塚の位置付けが可能になり、その存在の有無により大きく意味合いが変わってくるので、今後の遺物の発見に期待をしたい。

② 平塚古墳

石室には椀貸塚と同様に支保工が設置されている。同様に石室実測の際に腐食している木材は除去し内部の清掃を行っている。平塚については玄室部分の天井石の間から雨水の浸入が見られ、この点が石室の保存に大きく悪影響を与えていると思われる。石室実測調査中に降雨があると余り時間をおかずに石室内へ雨水の浸入を観察することができた。雨水が浸入することで同時に天井石上部の盛土を石室内へと流入させているものと考えられ、今後、早急に防水工事等の対策が必要である。築造当初はもう少し盛土があったのかもしれないが、現在の墳頂部と天井石上面間の盛土は1m余りと考えられ、非常に薄い盛土しか残されていない状態に起因するものと思われる。

次に問題となるのは、椀貸塚と同様に古墳の範囲確認や時期の確定である。特に、墳丘や全体的な範囲につ

いては注意が必要である。平成７年に県教委がトレンチ調査をした際には墳丘の南西側に周溝らしき遺構が連続した位置で確認されており、それらが平塚と一体のものであるかどうかを確認し、古墳全体の範囲を確定する作業が必要である。もし、前述の溝が平塚の周溝であると確認できれば直径 80m超の墓域を有する古墳になり遺跡の評価を大きく上方修正する必要が生じることになる。また、本古墳についても出土遺物は確認されておらず時期の特定は大きな課題となっている。

③　角塚古墳

角塚については椀貸塚、平塚に設置されているような支保工は設置されてはおらず、石室の公開・見学については現在のところ特段の支障はないと思われる。

本古墳は以前から方墳であるとされてきたが、昭和 30 年頃の航空写真を見る限りは方墳とするには少し無理がある旧状であることが判明した。また、平成５年度に実施された中央公園の造成に伴う角塚の確認調査の報告書に周濠外縁復元プランが方墳で示されているが、一部現状とは整合性がとれない箇所があるので、再度、墳形を含めた墳丘規模を見直す必要性がある。しかし、残念なことに墳丘の北側は道路が墳丘を削り取るように通され、東側については広範囲に墓地化されていることから、墳形等を確認できる範囲はごく限られた区域しか残されていないのが現状である。今後、角塚の位置付けに大きく係わることであるので慎重な確認調査を実施しておく必要がある。

また、本古墳においても出土遺物は確認されておらず具体的な築造時期は判明していない。その石室構築形態などから７世紀第二四半期と推定しているのであるが、今後もう少し具体的な時期を示す須恵器等の出土が期待される。

Ⅲ 大野原古墳群の保存・活用を図るための課題と方策

椀貸塚・角塚・平塚の保存・活用を考えるためには、本古墳群が置かれている現状と抱えている課題を整理する必要がある。これらの課題を解決、あるいは是正することが将来的な保存と活用につながる。すなわち整備計画ということになる。

以下、本古墳群に共通する全体的な問題と個々の古墳に分けてそれぞれの課題を記す。

①全体的な課題

本古墳群の価値・歴史的意義を積極的に発信し、地域文化・歴史的環境の核として市民の地域に対する誇りを育てていくことが重要である。すなわち、全国的に見ても巨大な石室を持つ古墳群であること、大野原が四国における古墳時代の一中心地であったことを示していること、当時の文化・歴史的背景などを三古墳の整備とともに市民に伝えていく必要がある。このためには古墳群の近くに資料館等のガイダンス施設が望まれる。

三古墳以外の古墳を含めて古墳群を連絡する見学路、道標、説明板、パンフレットなども整備したい。見学路整備は、新たに専用の歩道を設けるということではなく、ルート上にある既存の歩道の舗装を専用の仕様に変えることや、統一されたデザインの道標の設置などである。

また、古墳群の特徴である巨大な石室を実感してもらうには、石室に入ることが最善である。ただし、公開ということになれば見学者の安全確保が大前提であることも言を俟たない。当面、石室内部まで入れるのがむずかしいのであれば、入口から石室を見学する施設の整備が必要となる。このときに内部が見て取れる照明が欲しい。

三古墳の墳丘の広がりや周濠の有無については現状では調査データがなく、不明である。今後の発掘調査でこれらの成果が得られれば、可能な部分での復原的な整備、あるいは平面的な表示を行うことや、本来の形状

を説明板で解説する必要がある。

墳丘上に生育している樹木については、封土の流亡を防ぐ役割とランドマークとしての効用の二つのプラス面がある。一方、樹根による石室に対する悪影響や墳丘の形状を見えにくくするマイナス面がある。石室に影響している樹木は伐採するよりないが、墳丘形状を見えにくくしている樹木は下枝を整理することで改善できる。

古墳群がある場所は大野原町の中心部に近く市民が足を運ぶのには便利なのであるが、反面、市街化が進み、歴史的環境・景観は阻害されつつある。市の土地利用計画や景観計画に古墳群を重要な要素と位置づけて、古墳にとって望ましい景観を確保できうる計画を策定する必要がある。

②椀貸塚古墳

大野原八幡神社の本殿背後にある円墳である。本殿を建てる際に墳丘南辺部を削平し、削られた法面を石積で土留めしている。この時に石室の羨道部などが破壊され、現状は石積面に石室が開口するという特異なあり方を示している。本殿と石積面との間が狭く、本殿を囲む玉垣を墳丘にあてて本殿と石室前面間の通路を閉鎖している。また本殿周囲の地面は石室前室床面よりも 50cm 高い。したがって、開口部から石室に入るには小さな口から前室床面に下る形となり、簡単に入ることはできない。通常は玉垣で閉鎖されていることと、開口部の状況から、一般の見学者を受け入れることがむずかしい現状である。

こういう現状ではあるが石室の公開をどうするのかが問題である。限定的な公開とせざるを得ないと思うが、玉垣部に石室公開のための入口を設けることや、石室開口部を入り易く改善することなどが課題であろう。石室を公開する場合は、石室の安全性を確保することが必要である。

もう一点は雨水が開口部から石室内に入らないよう措置することである。開口部周囲の地面を外側に向かって低くすることや、場合によっては周囲に排水溝を設ける必要もあろう。

③平塚古墳

平塚での問題は、墳丘上で行われる祭りに伴う神輿台の設置やのぼり道整備によって封土の削平や形状の変化がある。頂上部の封土が薄くなったことが一つの要因となり、石室への水の浸入が見られる。簡便な対策としては石室の上部に防水シートを敷く方法がある。また、薄い封土上に生えた樹木の根による石室石組の破壊も懸念される。石室直上の樹は伐採すべきであろう。

また、祭りのために作られた平場やその土留め石積については、本来の墳丘を理解する上で大きな障害となっている。祭りとの調整が必要であるが、古墳の保護・活用と両立できるあり方を検討していただきたい。

墳丘裾部の現状はなだらかに周囲の道路に接しており、このために墳丘内への車の乗入れ・駐車が多い。墳丘の範囲を確認し、裾部を表現することにより、墳丘の明示と車の進入を制限するべきである。

④角塚古墳

角塚は、東側が共同墓地となっており、この墓地造成のために墳丘東辺部が削平され、石積で土留めされている。特に東北部にある焼却炉は墳丘を壊しているだけではなく、景観的にも大きなマイナス要因となっている。墳丘から離れた場所への移設もしくは廃止を検討すべきであろう。これが叶えば封土を復原的に整備し、墳丘を保護することができる。

角塚の南側は大野原中央公園と接している。また、同公園を挟んだ南側には平塚がある。しかし、この公園計画には角塚や平塚のことはほとんど考慮されていない。本公園が両古墳のジョイントの役目も果たしているのであるから、両古墳をつなぐ見学園路としての機能や、公園内からの両古墳への美しいビスタを形成する配慮が欲しい。また、歴史的景観とはほど遠いデザインの公園施設の改善も望まれる。公共施設が自ら範を示さ

ないことには、民間の施設や住宅などのデザインコントロールは理解を得ることができない。

角塚の南側は墳丘や周濠の復原も可能であるし、石室の公開についても支障なくできる。三古墳のなかで復原的な整備に支障がないのは、現状ではここだけであるから是非検討していただきたい。

墳丘上の樹木ではシュロが何本か繁茂しているのが気になる。伐採すべきであろう。

以上がおもな課題と方策であるが、この他に公開・活用のための具体策を以下に列記しておく。

・公開については、他自治体においても取組があるように、年１回程度は一般公開日を設けるべきである。これについては観音寺市内に限らず同様な巨石墳が所在する県境を越えた四国中央市等との広域的な連携を行う公開事業を実施することも斬新かつ有効な方法である。

・上記の公開事業に関連し、毎年定期的な見学会や説明会を開催するなど継続的に実施すべきである。啓発用パンフレットの作成は言うまでもなく、市役所ホームページについても専用ページを作成し内容の充実を図るべきである。

・小、中学校等に対しては、ふるさとの価値ある文化財を体感する機会を積極的に設け、次世代へと確実に引き継がれるように図らなければならない。

・大学等の研究者を招いてのシンポジウム等は普及・啓発を図るうえでは一つの大きな手段であり、古墳群の保護や文化財の愛護機運を盛り上げるための大きな起爆剤となりうるので、ぜひともその開催が望まれる。

・文化財を将来にわたって守り伝えるためには、行政の文化財担当部局だけでは不十分である。市役所全体と市民が密接に連携した日常的な活動が必要である。例えば、文化財の見学者に対して説明や案内を行う文化財ボランティアガイドの育成はその第一歩であり急務である。

Ⅳ 総括

椀貸塚、平塚、角塚は６世紀後葉から７世紀の第二四半期にかけて三世代にわたり連続的に築造された古墳群である。三基の古墳は歴代、四国地域で最大規模の横穴式石室を内臓し、墳丘規模の点でも他を圧倒している傑出した存在である。このような事例は古墳時代後期にあっては列島全体を見渡しても極めて稀で類例は乏しい。特に、椀貸塚の玄室規模（床面積、容積）は畿内地域の最有力墳の石室に準じた規模であり、まさに全国クラスのものであると高く評価できる。

このように、保存・活用検討委員会では古墳群の文化財的価値を認めているが、今後の保存や活用を図るには多くの課題がある。これらは、すぐにできることもあれば、長期的に取組むべき課題もある。ただ現状のままでは宝の持ち腐れとなるのは必至である。この価値ある歴史遺産をまちづくりに生かすとともに、地域の誇り・宝として次世代へと伝えなければならない。そのためには文化財、教育委員会の垣根を越えた市全体としての総合的な取組が求められる。

最後に、検討委員会では大野原古墳群の保存・活用をより効果的に進めていくためには、その文化財的価値により国指定史跡への道も有効な選択肢の一つであると判断するに至った。その理由として、

① 文化財を保存するためには厳格な法規制が必要であること、

② 保存のための技術的指導や補助金等の措置が受けられること、

③ 国指定文化財であるという、金銭では買うことができない特別な付加価値がつくこと、

などが挙げられる。このことにより、観音寺市独自の文化を学術的、法的裏付けを持って全国発信することが可能となり、観光的側面からも有用な資源になることは言うまでもなく、さらには未来を担う子ども達がふる

さとの文化を理解する格好の学習教材となりうることなどの多面的な効果が期待できる。但し、そのような場合になったとしても、実際の日常的な管理や修復等の業務には専門的知見や技術を伴うことが不可欠であるので、市としてしっかりとした人材育成や管理体制を整えておくことが重要である。

観音寺市を代表する、また全国的に誇れる貴重な歴史遺産である「椀貸塚、角塚及び平塚」の恒久的な保存、有効活用が図られるよう願ってやまない。

平成２１年3月３０日

観音寺市長　白　川　晴　司　殿

香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会

会　長　　守　谷　貞　和

副会長　　丹　羽　佑　一

委　員　　高　瀬　要　一

委　員　　大久保　徹　也

委　員　　菱　田　哲　郎

委　員　　横　山　照　美

委　員　　柘　植　宗　尚

２．香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会

（1）調査・整備委員会設置の経緯

平成１８年１２月～平成２１年３月の間に計５回開催された保存・活用検討委員会では前項に掲載した保存・活用検討委員会からの報告書を作成し、観音寺市長　白川晴司氏に提出した。その報告書では「大野原古墳群の保存・活用をより効果的に進めていくためには、その文化財的価値により国指定史跡への道も有効な選択肢の一つであると判断するに至った。」とあり、このことを受け、平成２１年度から観音寺市では国指定史跡をめざし国の補助事業制度を利用し、各古墳の範囲確認調査を実施するとともに、検討委員会から新たに今後の古墳の保存・整備に関して検討していただく調査・整備委員会を設置し議論を重ねることとなった。なお、調査・整備委員会設置要綱は平成２１年８月１日から施行し、同年９月２９日に第１回目の委員会が開催されている。また、平成２４年６月２７日に設置要綱から規則に変更している。

（2）香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会規則

平成24年6月27日教育委員会規則第７号

（趣旨）

第１条　この規則は、観音寺市附属機関設置条例（平成24年観音寺市条例第１号）第２条の規定に基づき、香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会（以下「調査・整備委員会」という。）

に関し、必要な事項を定めるものとする。
（所掌事務）
第２条　調査・整備委員会は、観音寺市教育委員会（以下「教育委員会」という。）の求めに応じて椀貸塚、角塚及び平塚古墳の調査・整備に関する必要な事項について検討し、教育委員会に対し提言するものとする。
（構成）
第３条　調査・整備委員会は、若干名の委員をもって構成し、教育委員会が委嘱する。
（任期）
第４条　委員の任期は、２年とする。ただし、再任を妨げない。
２　補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
（会長等）
第５条　調査・整備委員会に会長及び副会長各１人を置く。
２　会長及び副会長は、委員の互選によりこれを定める。
３　会長は、調査・整備委員会の会務を総理し、調査・整備委員会を代表する。
４　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。
（会議）
第６条　調査・整備委員会の会議は、会長が招集する。
２　調査・整備委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。
３　調査・整備委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。
（庶務）
第７条　調査・整備委員会の庶務は、教育部生涯学習課において処理する。
（委任）
第８条　この規則に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。
附　則
（施行期日）
１　この規則は、公布の日から施行する。
（経過措置）
２　この規則の施行の日の前日に廃止前の香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳調査・整備委員会設置要綱（平成21年観音寺市教育委員会告示第２号）第３条の規定により委嘱されている委員は、この規則による委員とみなし、その任期は平成25年７月31日までとする。

（３）調査・整備委員会の構成
検討委員会は７名の委員で構成されている。その内訳は４名の文化財・考古学関係の専門家と観音寺市文化財保護審議会会長１名、市文化財保護協会会長１名、所有者及び地元代表１名である。以下に委員名簿を委嘱任期順に記載する。（敬称略）

【任期　平成21年8月1日～平成23年7月31日】

会　長	守谷　貞和	観音寺市文化財保護審議会　会長
副会長	丹羽　佑一	香川大学経済学部　教授（考古学）
委　員	高瀬　要一	元　独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所　文化遺産部長（遺跡整備）
委　員	大久保徹也	徳島文理大学文学部文化財学科　教授（考古学）
委　員	菱田　哲郎	京都府立大学文学部歴史学科　准教授（考古学）
委　員	田中　　覚	観音寺市文化財保護協会　会長
委　員	柘植　宗尚	大野原八幡神社　宮司（所有者及び地元代表）

【任期　平成23年8月1日～平成25年7月31日】

会　長	守谷　貞和	観音寺市文化財保護審議会　会長
副会長	丹羽　佑一	香川大学経済学部　教授（考古学）
委　員	高瀬　要一	元　独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所　文化遺産部長（遺跡整備）
委　員	大久保徹也	徳島文理大学文学部文化財学科　教授（考古学）
委　員	菱田　哲郎	京都府立大学文学部歴史学科　教授（考古学）
委　員	野口　雅澄	観音寺市文化財保護協会　会長
委　員	柘植　宗尚	大野原八幡神社　宮司（所有者及び地元代表）

【任期　平成25年8月1日～平成27年7月31日】

会　長	守谷　貞和	観音寺市文化財保護審議会　会長
副会長	丹羽　佑一	元　香川大学経済学部　教授（考古学）
委　員	高瀬　要一	元　独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所　文化遺産部長（遺跡整備）
委　員	大久保徹也	徳島文理大学文学部文化財学科　教授（考古学）
委　員	菱田　哲郎	京都府立大学文学部歴史学科　教授（考古学）
委　員	野口　雅澄	観音寺市文化財保護協会　会長
委　員	柘植　宗尚	大野原八幡神社　宮司（所有者及び地元代表）

（4）調査・整備委員会の開催記録

調査・整備委員会は、平成21年9月から平成26年1月までの間に計10回開催した。第1回では教育長より委嘱状を各委員に交付し、検討委員会の趣旨説明と会長（守谷貞和氏）と副会長（丹羽佑一氏）を互選した。参加された各委員からは熱心な意見が活発に交わされ毎回充実した委員会を開催することができ、発掘調査成果をもとに稔ある委員会を重ねることができた。以下に各回の概要を記すことにする。

・第1回調査・整備委員会

日　時　平成21年9月29日（火）13:30～16:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①調査・整備委員会の設置要綱ついて
②会長等の互選
③調査・整備委員会及び調査計画について
④椀貸塚の範囲確認調査について
⑤現地確認（椀貸塚）
⑥意見交換
⑦その他

・第２回調査・整備委員会
日　時　平成22年3月18日（木）13:00～16:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　３階　会議室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①椀貸塚古墳三次元地上レーザー計測について
②現地確認（椀貸塚・岩倉塚→平塚→角塚）
③椀貸塚補足調査、平塚古墳測量調査について
④今後の調査計画について
⑤意見交換
⑥その他

・第３回調査・整備委員会
日　時　平成23年1月6日（木）13:00～16:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①平塚古墳の範囲確認調査等について
②現地確認（平塚）
③今後の調査計画について
④意見交換
⑤第４回調査・整備委員会の日程について
⑥その他

・第４回調査・整備委員会
日　時　平成23年3月22日（火）13:00～16:10
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名

議題等　①平塚古墳の範囲確認調査等について
②現地確認（平塚→角塚）
③今後の調査計画について
④意見交換
⑤第５回調査・整備委員会の日程について
⑥その他

・第５回調査・整備委員会
日　時　平成 23 年 9 月 7 日（水）13:00～16:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①椀貸塚古墳の補足調査について
②現地確認（椀貸塚→角塚）
③今後の調査計画について
④意見交換
⑤第６回調査・整備委員会の日程について
⑥その他

・第６回調査・整備委員会
日　時　平成 24 年 3 月 22 日（木）13:00～16:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①椀貸塚古墳の二重周濠等について
②角塚古墳の範囲確認調査について
③現地確認（椀貸塚→平塚→角塚）
④意見交換
⑤第７回調査・整備委員会の日程について
⑥その他

・第７回調査・整備委員会
日　時　平成 24 年 12 月 26 日（水）13:00～15:30
場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室
参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名
教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名
議題等　①椀貸塚と岩倉塚の関係について
②角塚古墳の範囲確認調査について
③現地確認（角塚）
④意見交換
⑤市長表敬訪問（市長応接室）16:00～16:35

・第８回調査・整備委員会

日　時　平成 25 年 3 月 15 日（金）13:00～16:30

場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室

参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名

議題等　①角塚古墳の範囲確認調査について

②現地確認（角塚）

③意見交換

④調査の成果と課題について

⑤今後の調査計画及び第９回調査・整備委員会について

・第９回調査・整備委員会

日　時　平成 25 年 8 月 28 日（水）13:00～16:00

場　所　観音寺市大野原中央公民館　２階　研修室

参加者　委員６名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１１名

議題等　①角塚古墳の範囲確認調査について

②現地確認（角塚→岩倉塚）

③意見交換

④調査の成果と課題について

⑤報告書の作成について

⑥今後の計画及び第１０回調査・整備委員会について

⑦その他

※委員１名は当日欠席。8 月 26 日（月）に議題の説明、現地確認終了後、ご意見ご指導を頂いている。

・第 10 回調査・整備委員会

日　時　平成 26 年 1 月 17 日（金）13:00～16:30

場　所　観音寺市大野原中央公民館　３階　第３会議室

参加者　委員７名　香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）１名

教育長　教育部長　生涯学習課長　文化振興係担当職員１名　　計１２名

議題等　①椀貸塚と岩倉塚の範囲確認調査について

②前回の委員会以後の調査の成果と課題について

③報告書の内容について

④現地確認（椀貸塚→岩倉塚）

⑤国指定申請に向けての考え方

⑥今後の計画及び第１１回調査・整備委員会について

⑦その他

３．発掘作業の経過

平成 18 年 12 月 25 日に第１回保存・活用検討委員会の開催後、各古墳の地形測量及び石室実測などの基礎調査に取りかかった。具体的には、椀貸塚が平成 19 年２月～同年８月、平塚が平成 19 年 12 月～平成 20 年４月、角塚が平成 20 年５月～同年９月の期間である。期間中には計５回の検討委員会を開催し、調査報告と今後の課題について検討し、平成 20 年度末には、検討委員会の検討結果を報告書にまとめ、観音寺市長　白川晴司氏に提出した。

平成 21 年度から平成 25 年度にかけては、国庫補助事業で各古墳の範囲確認調査等を行った。

平成 21 年度は、椀貸塚古墳の石室開口部と墳丘の周囲に５箇所の調査トレンチを設定し、石室全長と墳丘規模等の確認を行う範囲確認調査を実施した。（具体的な調査内容は後段で述べることにして本項では概略のみの説明とする。）同年９月には発掘調査現地説明会を実施しており、80 名の見学者があった。椀貸塚においては、範囲確認調査とあわせて三次元地上レーザー計測も実施している。また、11 月からは平塚古墳の墳丘の地形測量調査を平板測量で実施した。

平成 22 年度は、平塚古墳の石室開口部と墳丘周囲に計７箇所のトレンチを設定し、石室全長確認と周濠を含めた墓域全体の範囲確認調査を行った。平成 23 年３月には現地説明会を実施し、55 名の見学者を得た。また、椀貸塚と同様に三次元地上レーザー計測をあわせて実施している。

平成 23 年度は、調査・整備委員会の指摘を受け椀貸塚の補足調査を実施した。トレンチ６とトレンチ 10 から二重周濠と周堤が確認されたことは大きな成果であった。平成 23 年 11 月には現地説明会を開催したところ悪天候にもかかわらず 91 名の参加者があった。平成 24 年２月からは平塚の補足調査と角塚の範囲確認調査のため平塚はトレンチ９一箇所、角塚はトレンチ８箇所を設定し、石室全長と周濠を含めた範囲確認調査を実施し、あわせて三次元地上レーザー計測も実施した。平成 24 年３月に角塚で現地説明会を開催したところ 30 名の見学者であった。

平成 24 年度は、椀貸塚の範囲確認調査の補足調査のためトレンチ 12 を設定した。結果、椀貸塚と岩倉塚の築造順が確定したことが成果であり、以前からの懸案事項を解決することができた。また、椀貸塚の周堤や外濠及び岩倉塚周辺部分の複雑な地形を三次元レーザー計測で測量を行った。続いて、角塚の範囲確認の補足調査を実施した。６か所のトレンチ調査により角塚の墳形や規模等をほぼ推定可能な資料を得ることができた。平成 25 年３月に現地説明会を開催したところ 40 名の参加者があった。

平成 25 年度は、角塚の墳形及び規模の最終確認のために２か所のトレンチを設定し遺構検出を行ったところ、方墳である周濠を含めた古墳の全体の規模が推定可能となった。次に、椀貸塚と岩倉塚の間の状況確認のため補足調査トレンチを１箇所設定し、遺構の検出作業を行った。

以上がこれまでの平成 18 年度からの基礎調査と平成 21 年度から平成 25 年度にかけての範囲確認調査の調査概要である。別表に全体の調査工程を整理した。

表１　香川県指定史跡「椀貸塚、角塚及び平塚」古墳の調査工程表

西暦	元号	月	日	曜	委員会	椀貸塚	岩倉塚	平塚	角塚	現地説明会等	報告書
2006	H18	12	25	月	第1回検討委員会						
2007	H19	1									
		2				2/19 ～ 8/31 石室実測 墳丘測量					
		3									
		4									
		5									
		6									
		7									
		8	27	月	第2回検討委員会						
		9									
		10									
		11									
		12						12/17 ～ 4/24 石室実測 墳丘測量			
2008	H20	1									
		2									
		3	26	月	第3回検討委員会						
		4									
		5							5/22 ～ 9/11 石室実測 墳丘測量		
		6									
		7									
		8									
		9									
		10	7	火	第4回検討委員会						
		11					11/17 ～ 2/2 範囲確認				
		12									
2009	H21	1									
		2									
		3	2	月	第5回検討委員会						検討委員会報告書
		4									
		5									
		6									
		7				7/21 ～ 3/30 石室全長 範囲確認 三次元地上レーザー計測					
		8									
		9	29	火	第1回調査・整備委員会					9/26椀貸塚（80名）	
		10									
		11						11/5 ～ 2/2 墳丘測量			
		12									
2010	H22	1									
		2									
		3	18	木	第2回調査・整備委員会						検討委員会報告書（別冊）
		4									
		5									
		6									
		7									
		8									
		9									
		10									
		11						11/15 ～ 3/31 石室全長 範囲確認 三次元地上レーザー計測			
		12									
		1	6	木	第3回調査・整備委員会						
		2									
		3	22	火	第4回調査・整備委員会					3/13平塚（55名）	
		4									
		5									

2011	H23	6				5/2 ～ 11/25 補足調査					
		7									
		8									
		9	7	水	第5回調査・整備委員会						
		10									
		11								11/5椀貸塚（91名）	
		12									
2012	H24	1									
		2						2/10～2/17 補足調査	2/9～3/30 石室全長範囲確認 三次元地上 レーザー計測	2/4～ 発掘調査写真展	
		3	22	木	第6回調査・整備委員会					3/24角塚（30名）	
		4								～5/6 発掘調査写真展 郷土資料館	
		5									
		6									
		7									
		8				8/13～10/2 補足調査 三次元地上 レーザー計測					
		9									
		10									
		11							11/21～3/29 補足調査		
		12	26	水	第7回調査・整備委員会						
2013	H25	1									
		2									2/8～3/29 自然科学分析
		3	15	金	第8回調査・整備委員会					3/16角塚（40名）	
		4								3/10～5/26 発掘調査写真展 Ⅱ　郷土資料館	
		5									遺物整理
		6									
		7									報告書作成
		8	28	水	第9回調査・整備委員会				7/5～10/3 補足調査		
		9					8/26～10/31 三次元地上 レーザー計測				
		10				10/4～11/7 補足調査					
		11									
		12									
2014	H26	1	17	金	第10回調査・整備委員会						
		2									
		3									報告書発行

表２　観音寺市教育委員会における年次ごとの発掘調査体制

年度	西暦	教育長	教育部長	生涯学習課長	生涯学習課長補佐	文化振興係長・調査担当
平成18年度	2006	大平　幸男	図子　博則	竹川　敬三	高橋　剛徳	久保田　昇三
平成19年度	2007	大平　幸男	図子　博則	竹川　敬三	高橋　和博	久保田　昇三
平成20年度	2008	大平　幸男	図子　博則	竹川　敬三	高橋　　茂	久保田　昇三
平成21年度	2009	大平　幸男	岡田　和則	白井　三郎	中村　能身 大西　雅文	久保田　昇三
平成22年度	2010	大平　幸男	岡田　和則	白井　三郎	大西　雅文 近藤　厚子	井上　　英明 久保田　昇三
平成23年度	2011	大平　幸男	千秋　英志	白井　三郎	亀澤　房代	久保田　昇三
平成24年度	2012	大平　幸男	大西　保行	白井　三郎	亀澤　房代	久保田　昇三
平成25年度	2013	大平　幸男	大西　保行	大西　雅文	梶　　敬一	久保田　昇三

表３　各古墳の基準点の座標と標高

椀貸塚古墳の基準点の座標と標高

測地系:世界測地系
座標系:第Ⅳ系

等　級	点　名	X座標	Y座標	標　高
４級基準点	Ｗ－１	120,542.654	15,025.261	28.431
	Ｗ－２	120,571.513	15,043.668	28.584
	Ｗ－３	120,607.188	15,068.334	29.409
	Ｗ－４	120,656.700	15,077.701	29.103
	Ｗ－５	120,627.006	15,041.949	29.336
節　点	Ｓ－１	120,596.397	15,049.666	29.291
	Ｓ－２	120,638.498	15,096.595	29.578
	Ｓ－３	120,652.717	15,052.384	29.001
	Ｓ－４	120,597.831	15,029.456	29.448

※標高は直接水準測量より

平塚古墳・角塚古墳の基準点の座標と標高

測地系:世界測地系
座標系:第Ⅳ系

等　級	点　名	X座標	Y座標	標　高
４級基準点	Ｈ－１	120,350.543	14,794.898	27.630
	Ｈ－２	120,205.734	14,704.337	27.677
	Ｈ－３	120,317.962	14,824.360	27.753
	Ｈ－４	120,168.887	14,700.651	28.283
節　点	Ｓ－５	120,238.973	14,796.925	29.315
	Ｓ－６	120,185.755	14,778.688	28.773
	Ｓ－７	120,204.816	14,740.413	29.003
	Ｓ－８	120,200.107	14,721.375	29.066

※標高は直接水準測量より

４．遺跡の位置と環境

（１）地理的環境

大野原古墳群が立地する地域は香川県観音寺市大野原町大野原であり、讃岐山脈を源とする柞田川が形成した扇状地のほぼ中央部の標高 30m前後に位置する。現在の瀬戸内海燧灘の海岸線までは西方向へ約 2.5 ㎞、扇状地がはじまる讃岐山脈の山麓部までも同じく約 2.5 ㎞の距離がある。また、平成 17 年 10 月 11 日の市町対等合併により観音寺市となるまでは三豊郡大野原町の町域であり、近くには大野原町役場（現大野原支所）がおかれるなど、農村部であるが比較的人口が集中する町の中心部において古墳群は存在感のある歴史的景観を形成している。大野原町は香川県の最西端近くに位置し、合併までは町の北部から東部にかけては旧観音寺市と西部は旧豊浜町と接していた。町の南部は讃岐山脈を境に徳島県三好市（旧池田町など）や愛媛県四国中央市（旧川之江市、旧三島市など）に接し、北西部は瀬戸内海の燧灘を臨む。

南部の県境には阿讃山系の雲辺寺山（911m）がそびえ、ここに源を発する柞田川水系は、下流に扇状地をつくり、古くから穀倉地帯三豊平野の一角を形成してきた。この柞田川水系は我が国最初期のマルチプルアーチ式コンクリート造堰堤で知られる豊稔池を経て、五郷ダムのある前田川と合流し井関池に入り、更に、170 余りのため池や毛細血管のようにはりめぐらされた水路で大野原町のほぼ全域と旧観音寺市の柞田地区を潤しながら燧灘に注いでいる。

柞田川水系に広がる五郷・萩原・紀伊・中姫地区や海岸線に沿う花稲地区は近世以前から開かれた地域である。また、大野原の中心部であるいわゆる大字大野原（現在の大野原町大野原）地区は丸亀藩主生駒高俊の家臣西島八兵衛が井関池の築造に取り組んだのを引き継ぎ、約 360 年前に平田与一左衛門等が土地を拓き現在の美しい田園風景の礎を築いた。その背景には、香川県特有の気候に加え、扇状地であることからの水不足に苦労し、それを長年にわたる地域の人々の知恵と努力により克服し、現在の一大農業産地（レタス・タマネギ等）を形成するに至った歴史がある。

大野原町の地質を概観すると、雲辺寺山など讃岐山脈を造る海底堆積物の和泉層群、五郷山公園や大谷池周辺で見られる湖沼堆積物の三豊層群、山麓の丘陵及び台地を形成する洪積層、そして平野部の沖積層などからなっている。また、香川県全体の基盤ともなっている花崗岩類（花崗閃緑岩を主とする）は、西南日本内帯の領家帯に属する古い岩石である。本来は地下の深いところにあるが、香川県内では観音寺市母神山（池之尻町など）や琴弾山（八幡町・有明町）などのように地上に露頭しているところを散見できるが、大野原町内では丸井北付近でわずかに見られるだけである。なお、屋島や飯野山を形成する讃岐岩質安山岩などの讃岐層群は見られない。

前述の和泉層群が形成されたのは中生代の終わり頃の白亜紀の後期(約 7,000 万年前)とされている。同群は和泉山脈から淡路島の南端、阿讃の県境を走り愛媛県の高縄半島から松山に至るまで、中央構造線の北側に沿って 300 ㎞にわたって続いている。南側は中央構造線に切られて三波川帯の結晶片岩と接している。よって阿讃山脈は和泉層群の岩石からできており、おもに砂岩層と泥岩層が互い違いに重なった層を形成しており、ところどころに凝灰岩をはさみ、基盤の花崗岩の上に不整合関係となって堆積している。具体的には、五郷ダムや豊稔池、井関池水門で観察できる。アンモナイトやイノセラムスなどの化石が産出する。

次に、第三紀鮮新世（約 700 万年～200 万年前）から第四紀の初め頃に湖が香川から大阪方面に及ぶ淡水湖が形成されていた時代に三豊層群は堆積している。三豊層群は粘土、砂、礫などからなる未固結

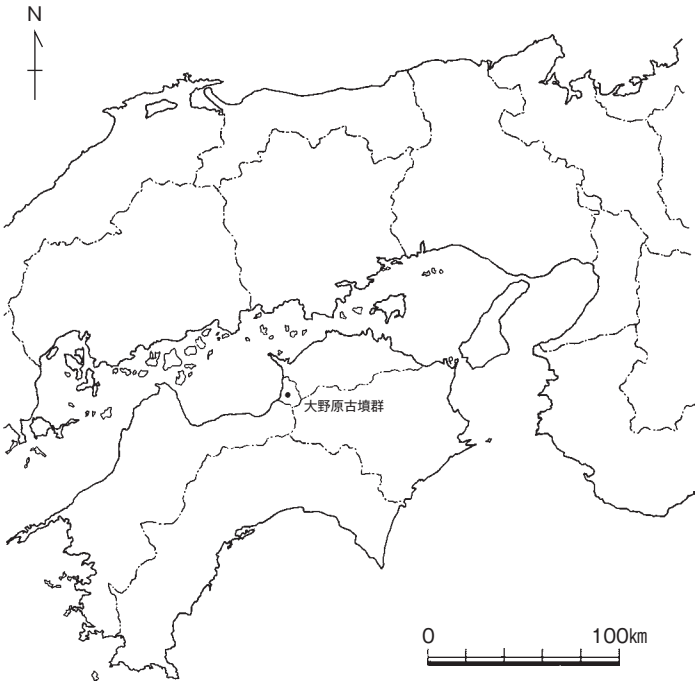
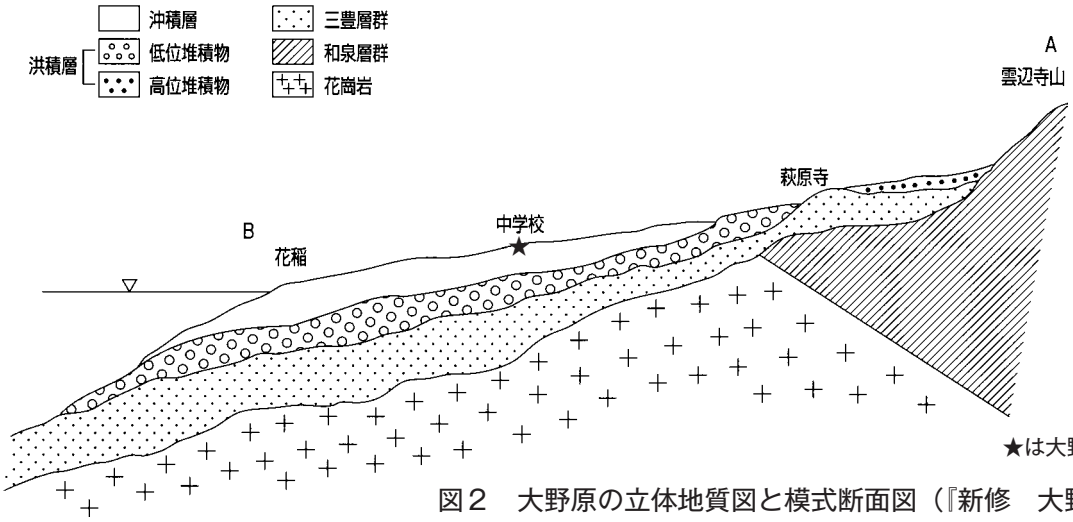


図１　大野原古墳群位置図

大野原の地質構造模式断面図（上記図のA―B断面）



★は大野原古墳群の位置を示す。

図２　大野原の立体地質図と模式断面図（『新修　大野原町誌』から転載）

の軟泥となっている。主として花崗岩及び和泉層群の岩石から成っている。隣接する三豊市山本町などの地層には、徳島県の吉野川で見られる三波川結晶片岩類の礫が混入している例もある。大野原町での三豊層群は井関から丸井まで雲辺寺山麓に台地上に広がっている。青灰色ないしは暗灰色の泥岩、砂岩、白色砂質シルトまたはこれらの互層が見られ砂礫層を伴っているところもある。メタセコイヤの球果や葉の化石が多数発見されている。

新生代・第４紀・洪積世（200 万～1 万年前）には、雲辺寺山を造る和泉層群が浸食され山麓に堆積した洪積層が形成される。地層は基盤の和泉層群及び三豊層群を不整合におおっており、径 2～5 ㎝から人頭大の和泉砂岩、泥岩を主とした礫層から成っている。礫の間隙を埋めている基質は砂ないしシルトであり、灰黄色～黄褐色を呈している。この礫層には礫の風化が進んだいわゆるくさり礫があることや基質の一部が赤色土化しているという特色が見られる。内野々、福田原、丸井のミカン畑あたりに多い地層である。

大野原地域の平地部は沖積世（約１万年～現在）に、柞田川（全長 16 ㎞、流域面積 61 ㎢）や唐井手川の堆積作用による扇状地が海岸近くまで達したものであり、砂、礫、粘土により成っている。平地部の地下は沖積層（厚さ 5～20m）、洪積世堆積物（厚さ 10～30m）、三豊層群（厚さ 40～80m）、及び基盤の花崗岩となっている。大野原古墳群はこの沖積世に形成された扇状地の中央部（扇央部）の標高 28～29m 前後の位置に築造されている。

最後に、本地域の気候について触れておく。香川県西部の観音寺市は瀬戸内式気候に属している。気候の特色は、規則正しい四季があり、年間を通じて晴れた日が多く雨の日が少ない。平均気温は約 16 度であり、年間降水量は 1,000 ミリ前後でその多くは梅雨期と台風時に集中し他の期間は少ない。日照時間が長く、温暖で少雨という典型的な瀬戸内式気候である。また、警報等の発令や冬季の積雪も少なく、干ばつ（水不足）被害を除けば、自然環境に恵まれた住みやすい地域であるといえる。このような自然環境が約 1,400 年前の古墳時代においても大差ないものであるならば、人々はおのずと当該地域を居住地として選択したであろうことは想像に難くない。

（２）歴史的環境

観音寺市内の旧石器時代の遺跡は、ナイフ形石器が出土した伊吹町の西ノ内遺跡があるが、遺跡の内容については未詳である。

縄文時代になると、なつめの木の貝塚（高屋町）、樋ノ口遺跡（本大町）、院内貝塚（豊浜町和田）などが確認されている。特に、なつめの木の貝塚は平成４年に発掘調査が実施され、縄文時代後期前半の土器、石器、獣骨やアサリなどの二枚貝の貝の堆積層が確認されている。これらの一括資料は中部瀬戸内における土器形式の空白部分を埋める資料としてのみならず、当時の生活環境や生態系を知る上で貴重な資料となっている。

弥生時代になると、室本遺跡（室本町）、古川銅鐸出土地（古川町）、一ノ谷遺跡群（本大町、古川町）、藤の谷遺跡（粟井町）、岩鍋遺跡（粟井町）、中姫遺跡（大野原町中姫）などが確認されている。室本遺跡出土の「鋸歯重弧文壺」等の６点は弥生時代前期の貴重な資料であり昭和 33 年に香川県指定文化財（考古資料）に指定されている。同じく県指定となっているものが藤の谷遺跡出土の細形銅剣３口である。また、当地域では銅鐸も出土している。大正 12 年に偶然に発見された外縁付鈕流水文銅鐸である古川銅鐸である。このように当地域は、銅剣、銅鐸及び銅矛などが混在して出土する東西文化の影響を

1．椀貸塚古墳
2．岩倉塚古墳
3．平塚古墳
4．角塚古墳
5．四角塚古墳
6．観音堂古墳
7．町役場南側古墳
8．瀬後経塚
9．若宮（石砂）古墳
10．吉塚古墳
11．西の後１号墳
12．西の後２号墳
13．王塚
14．岡の宮古墳群
15．福田原頂懸神社古墳
16．竜王山古墳
17．豆塚５号墳
18．豆塚１号墳
19．豆塚２号墳
20．豆塚３号墳
21．豆塚４号墳
22．縁塚古墳群
23．赤岡山古墳群
24．宗像古墳
25．平岡遺跡群
26．雨之宮神社３号墳
27．道下２号墳
28．道下１号墳
29．小森塚１号墳
30．将賢塚
31．平田家住居跡
32．野田古墳
33．墳穴古墳
34．大塚
35．十三塚
36．柞田駅跡
37．かねはり塚
38．陶印出土地
39．小天王塚古墳
40．土井ノ内西 189 番地塚
41．土井ノ内西 223 番地塚
42．菅原神社古墳
43．立石古墳
44．中姫遺跡
45．神田古墳
46．中関のにっこうさん
47．青岡（安井）大寺
48．百々古墳
49．柞田城跡
50．一里山遺跡
51．公明文荒神
52．四至勝示跡
53．黒島林１号古墳
54．黒島林大龍王古墳
55．鐘子塚古墳
56．上母神８号墳
57．瓢箪（ひさご）塚古墳
58．千尋神社１号墳
59．千尋神社４号墳
60．千尋神社５号墳
61．千尋神社５号墳
62．名所塚古墳
63．久米塚古墳
64．久米東塚古墳
65．藤目城跡
66．藤の谷遺跡
67．大原東古墳
68．お塚さん
69．みこし山古墳
70．地神塚
71．経塚
72．青塚古墳
73．古川遺跡
74．柞田八丁遺跡
75．長砂古遺跡
76．石田遺跡
77．一ノ谷遺跡群
78．一ノ谷遺跡群
79．乳若屋敷跡
80．上野古墳群

※ ━ ━ ━ は推定南海道を示す

図３　周辺遺跡地図(1/25,000)

受ける特殊な地域となっている。

古墳時代になると当地域ではじめて墳丘を有した鹿隈鑵子塚古墳（高屋町）が出現する。その後、古墳時代中期の五世紀中頃になると、大型の初期横穴式石室に阿蘇熔結凝灰岩製刳り抜き式舟形石棺が埋納されている直径 35mの円墳である丸山古墳が比較的海岸近くの丘陵部に突如として築造される。他に先駆けて横穴式石室を採用していること、北肥後型の舟形石棺を埋納していること、精巧に造られた馬形埴輪等の形象埴輪が出土することなどは、被葬者の活動範囲の広さや実力を雄弁に語っている。続いて同じ阿蘇石を石棺にもつ青塚古墳の帆立貝式前方後円墳が比較的内陸部に築造される。この丸山古墳と青塚古墳の被葬者は恐らく同時代に活躍した人物であろうと考えられ、阿蘇石を石棺に採用している共通性はあるが墳形や立地に相違があり誠に興味深い。また、市内豊浜町和田にある台山古墳（方墳）も古墳時代中期のものであり埴輪等が出土している。

６世紀の前半になると母神山古墳群が形成されはじめる。最終的には 50 基を超える古墳群となる県内でも屈指の後期古墳群である。古墳群を代表的するものの一つに瓢箪（ひさご）塚がある。全長 44 mの墳丘に周濠と周堤を配する当地域に残された唯一の前方後円墳である。埋葬施設は未調査であるため不明であるが、恐らくは善通寺市の王墓山古墳のような横穴式石室が内包されているのではないかと思われる。なお、周濠からは一般的な円筒埴輪のほか須恵質の円筒埴輪や須恵器片などが出土している。6 世紀の後半になると鑵子塚古墳が築造される。墳丘直径が約 30mあり、複室構造の横穴式石室を内包する。副葬品には金銅製馬鈴、単鳳環頭大刀柄頭、三葉環頭柄頭、銀製冠立飾などの一級資料がある。特に、銀製の冠の立飾は全国でわずか４例しかなく、貴重な資料となっている。また、石室については玄室＋前室に短い羨道がつけられる構造であり、その祖形は山口県防府市の黒山三号墳に求められるとも言われている。石室全体は端整に構築され美しささえ感じられると言っても過言ではない。この石室こそが香川の横穴式石室普及のモデルになったのではないかと考えられている。これに続く地域を代表するような古墳は大野原地域に移り、大野原古墳群が形成される。

大野原古墳群のうち椀貸塚古墳は大野原八幡神社の本殿の背後にある。その名のとおり椀貸伝説が伝えられ神社の祭神とともに人々の信仰を集めている。

平塚古墳は椀貸塚から南西方向約 600mのところにあり大野原八幡神社の秋の例大祭のお旅所となっている。秋祭り３日目、神社を出発した３基の神輿は神幸行列をして平塚まで移動し、墳頂部に設けられた石垣の上に据えられ神事が執り行われる。さらに神事の後には壇尻１台と太鼓台（ちょうさ）１台が神輿前まで墳丘を登り（おやまのぼり）奉納を行い祭りが最高潮を迎える神聖な舞台となっている。

角塚古墳は椀貸塚古墳から南西方向約 400mのところで、椀貸塚古墳と平塚古墳との間にある。角塚古墳の東側と西側の一部には墓地が形成されており、椀貸塚古墳、平塚古墳とは異なった役割を担っている。古墳の北側は道路、西・南側については公園となっており、３基の古墳の中で最も墳丘地形が改変されている。

また、上記の３基の古墳以外にも椀貸塚古墳の近くには岩倉塚古墳、角塚古墳の近くには四角塚古墳、少し離れたところには観音堂古墳の３基の古墳が現在も良好な状態ではないが残されている。以上、計６基の古墳が比較的狭い地域に残されているが、江戸初期（寛永年間）の平田家による大野原開墾始まったころには、地名が示すとおり、いわゆる大野原であり、まだまだ相当数の古墳が存在していたようである。例えば、安政５（1858）年に編纂された『西讃府志』の大野原村の記述には「塚穴十一　此地開キシ時百七十アリシトイヘリ、今其名アルハ、椀貸、平塚、角塚、豆塚ナドイヘルアリ、・・・」とあ

り、正確な数字は定かではないが、その数の多さを物語っている。角塚古墳の築造後、やがて古墳時代は終焉を迎える。そしてこの７世紀後半から、前述の平田家の開墾が始まるまでは、約 1,000 年の時間を要することになる。この間の大野原地域の様子を窺える資料は乏しい。

開墾後の資料については、開墾が始まって間もない正保２年（1645）の『大野原開墾古図』がある。古図の中心部には大野原八幡神社とその背後に椀貸塚古墳と思われるものが描かれている。こんもりとした墳丘とそれを取り巻くような周濠らしきものが見て取れる。これが、紙資料で確認できる椀貸塚の初見であると思われる。しかし、平塚古墳、角塚古墳については表現されておらず、その付近一帯を「芝」という文字が書かれているのみである。

40 年後の貞享２年（1685）の『御宮相續ニ付万事覚帳』に神社の修理を行った時の記録が残されている。その中の「地形之覚」には神社を拡張した記載があり、「・・〆拾三間四尺　但塚穴の口きわより玉垣のきわまで　今までは塚穴石垣きわより玉垣まで拾弐間弐尺」、「一　塚穴ニ戸仕ル筈・・」、「一　塚穴之左者廣ケ石垣も仕筈」、「一　右両方之堀リ埋土者塚之両脇又者馬場の両脇小塚ノ土取申筈」など神社にある塚穴＝椀貸塚古墳の当時の状態を若干ではあるが窺うことができる資料である。また、元禄６年（1693）にも神社の大修理が行われているようで椀貸塚古墳にも何らかの改変がなされている可能性がある。

明治時代の資料には、明治 35 年（1902）の『香川県讃岐國三豊郡大野原村　鎮座　郷社八幡神社之景』があり、神社の建物、玉垣、石垣等の配置が詳細に描かれている。概ね現況と異なる印象を受けないが、一部椀貸塚古墳の開口部の付近は、土塀が設けられ、石垣のほぼ中央部には縦長の巨石が存在している点は現在とは様子を異にしている。なお、図中には「椀貸塚ノ縁由」として「相傳ノ昔塚穴ニ地主神在リテ太子殿ト云フ神霊著シキヲ以テ惶テ穴ニ入ルモノナシ・・」の記述がある。

ここまでは、椀貸塚古墳に関する資料を紹介してきたが、平塚古墳、角塚古墳についてはどうであろうか。時代は前後するが明治６年（1873）頃に作成された『名東縣下第廿四大區四小區　讃岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内　拾　從千三百九十六番至千五百八十六番』には平塚古墳、角塚古墳の旧状を示す図が残されている。平塚古墳については、墳丘は勿論、周濠を含めた墓域を示すであろう土地区画が明瞭に記載されており、古墳の原形を考察するための格好の資料である。金比羅道から平塚古墳にいたる道は墳丘と同様に緑色に着色され祭礼の際、神輿が通る通路が整備されお旅所の存在を窺わせる。角塚古墳については、この頃古墳の東側には埋葬場が形成されていることが解かる。墳形については明瞭ではない。なお、近くを通る道は角塚道と表記されており、少なくとも角塚という名称はすでに一般的に使用されていたことが推し量ることができる。

なお、平塚古墳については前述のとおり大野原八幡神社のお旅所として使用されており、大正 10 年に刊行された『三豊郡史』（昭和 48 年復刻）掲載写真にはすでに神輿が据え置かれる石垣の存在が写されている。このことは神事を執り行うお旅所の機能を果たすため、一定の平坦な空間を確保する必要があり墳丘の頂上部を削平したことを示している。地元の古老からの聞き取りであり時代は特定できないが、外部から石材等を持ち込み平塚古墳の石室天井部の補修をしているようである。これは石室天井高と削平した墳頂部高の差があまりなく、このころからすでに石室内に雨水等が浸入し石室の保存に影響を与えていたことを窺わせる話である。

以下、関連の資料を紹介する。

『復刻讃岐叢書（第一）国譯　全讃史』昭和 47 年 8 月 1 日発行　発行所　藤田書店
「椀箱冢　大野原八幡の後にあり　岩冢の側に穴あり。・・・此の穴龍宮城に至る。昔は八幡祭禮の時、此の穴より膳椀を出だして借りき。ある時過ちて其の膳椀を損じければ、以来又借さずと云へり。」

『古今　讃岐名勝圖繪』昭和 5 年 10 月 20 日発行　発行所㈱高松製版印刷所
「八幡社　大野原八幡宮の社後椀貸穴の上にあり一説に或内なる於社なりと云いかゝ走手侍。」「塚穴十一と其塚説　相傳此地開拓の時百七十餘ある中今中の残るは柘貸平塚角塚豆塚。傳曰椀塚は地主神を太子殿と稱へ穴へ入者なし村人椀を得んことを乞へは倍せり一時中姫人此塚上に在す應神祠に用あり食飯箸悉皆借て事足せり後に村人借て一箸を失せり夫より止と云當時開墾の時此穴に入る人あり神人告て曰く八幡を祭れと依て此穴を奥の院と云。」

大野原古墳群の角塚古墳が築造された時期頃に、埴穴塚古墳（大野原町花稲）や雲岡古墳（豊浜町）などの小型の方墳が築造されているが、やがて古墳造りの時代は終焉を迎える。その後、讃岐国には多くの古代寺院が営まれるようになるが、当地域でも高屋町の高屋廃寺や大野原町の青岡（安井）大寺が知られている。時期は白鳳期や奈良～平安時代の瓦（八葉単弁蓮華文軒丸瓦、六葉単弁蓮華文軒丸瓦、四重弧文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦など）が出土しているが、発掘調査が行われていないので、詳細な内容は不明である。大野原古墳群とこれら古代寺院との関係についても同様であり、大野原古墳群の被葬者像を考察する上でも重要な遺跡である。また、これも位置等の詳細は不明であるが、南海道やその駅の一つである柞田駅も比較的近くに存在していたのではないかと考えられている。さらに、柞田町の柞田八丁遺跡の近くからは陶印（印影：封印）が発見されている。このようなことから、大野原町の紀伊地区の青岡集落の頂懸神社周辺、中姫地区の安井集落の安井菅原神社周辺、柞田町の八丁集落を含むエリアについては古代の遺跡が集中しており、今後、地域の歴史を明らかにするためには注目しておく必要がある。

５．範囲確認調査の成果

（１）椀貸塚古墳

①墳丘・周濠

・トレンチ１（平成 21 年度）

墳丘の範囲確認のために墳丘の南側に長さ 6.4m のトレンチを設定し検出作業を行った。

調査の結果、トレンチ中央部で神社建物の主軸に平行する石垣を検出した。石垣の高さ約 1.2mを測り、周濠内に堆積した暗茶褐色土（墳丘流土）の上部に構築される。地山層上に設置したものではなく、石垣自体の安定感はない。平成 21 年度の調査では、本石垣の設置理由は明らかではなかったが、平成 23 年度のトレンチ６，７，８，９の調査成果や『大野原開墾古図』（正保２年）を考慮すると、大野原八幡神社の社殿建設のための平坦なスペースを古墳の前面に確保する必要が生じたが、周濠が旧状を反映した状態で低地として遺存しており、それを埋め戻すための造作に伴って構築された施設と判断できる。よって、本石垣は神社の東端を示す可能性が高い。石垣を境にその外側は地表下 1.5m（標高約 28m）に地山層があり、その上位には墳丘流土層を認める。さらに、地表までは瓦片等を含む層位で幾層にも及ぶ埋め戻しが行われている。

石垣の内側（石室のある墳丘側）は地山層が墳丘内側から周濠側に向かって緩やかに落ち込んでおり、前述の石垣外側の堆積状況を勘案すると、墳丘、地山、周濠とそれを埋めるために築いた石垣の関係が明瞭である。地山面から周濠底までの深度は約 90cm を測り、古墳築造に際し、少なくとも本深度分は周濠を開削した状況が想定できる。周濠埋土は墳丘流土層以外見られず、近世以後の削平の可能性がある。

遺物の出土状況は、提瓶が図 6 の 27 層から出土しているが、同層には後世の瓦片等が存在しているので、近世以降の埋め立て時に混入したと見られる。

なお、周濠の外縁部は土地の制約もあり確認できなかったが、外方に向かって徐々に地山層が高さを増しており、他のトレンチの状況等を考慮すると、周濠外縁部はトレンチ南端に近接した箇所に所在するものと考える。

・トレンチ３（平成 21 年度）

墳丘西側の「椀貸塚の石碑」の前面に長さ 3m のトレンチを設定した。神社本殿をはさみ、また石室に対する位置関係を考慮してトレンチ１に対応する配置とした。

遺構検出の結果、地表下 1.3m で石垣を確認した。石垣は残存高約 60cm を測り、その方向が神社建物の主軸（南南西方向）に平行するとともに、埋め立てに伴う層位を認めることから、トレンチ１で検出した石垣と同じ性格の石垣と判断できる。よって、石垣検出箇所は神社創建時に低地として遺存していた周濠部分に相当すると考えられ、神社の西端と捉えることができる。トレンチ１と３の石垣間は約 26m を測り、このスペースが大野原八幡神社の社殿を建設するために造営した御神域ともいえるスペースであったと推定される。

石垣の外側には拳大の礫を多量に包含する厚さ約 70cm の礫層を認める。文献では複数回の神社の拡張が記録されており（江戸期）、礫層はそれに伴う造成土の可能性が高い。今後の活用等を考慮して、下位の調査は行っていないが、結果的には、本トレンチは全域周濠内に含まれているため、社殿建設に伴う石垣や造成土を撤去しない限りは墳丘の盛土等は確認できないことになる。

※１　　は周堤の範囲を示す。
※２ トレンチはTと略している。（ex.トレンチ1→T1）
※３ 周濠（内濠）の外縁ラインを示す。
※４ 周濠（外濠）の外縁ラインを示す。

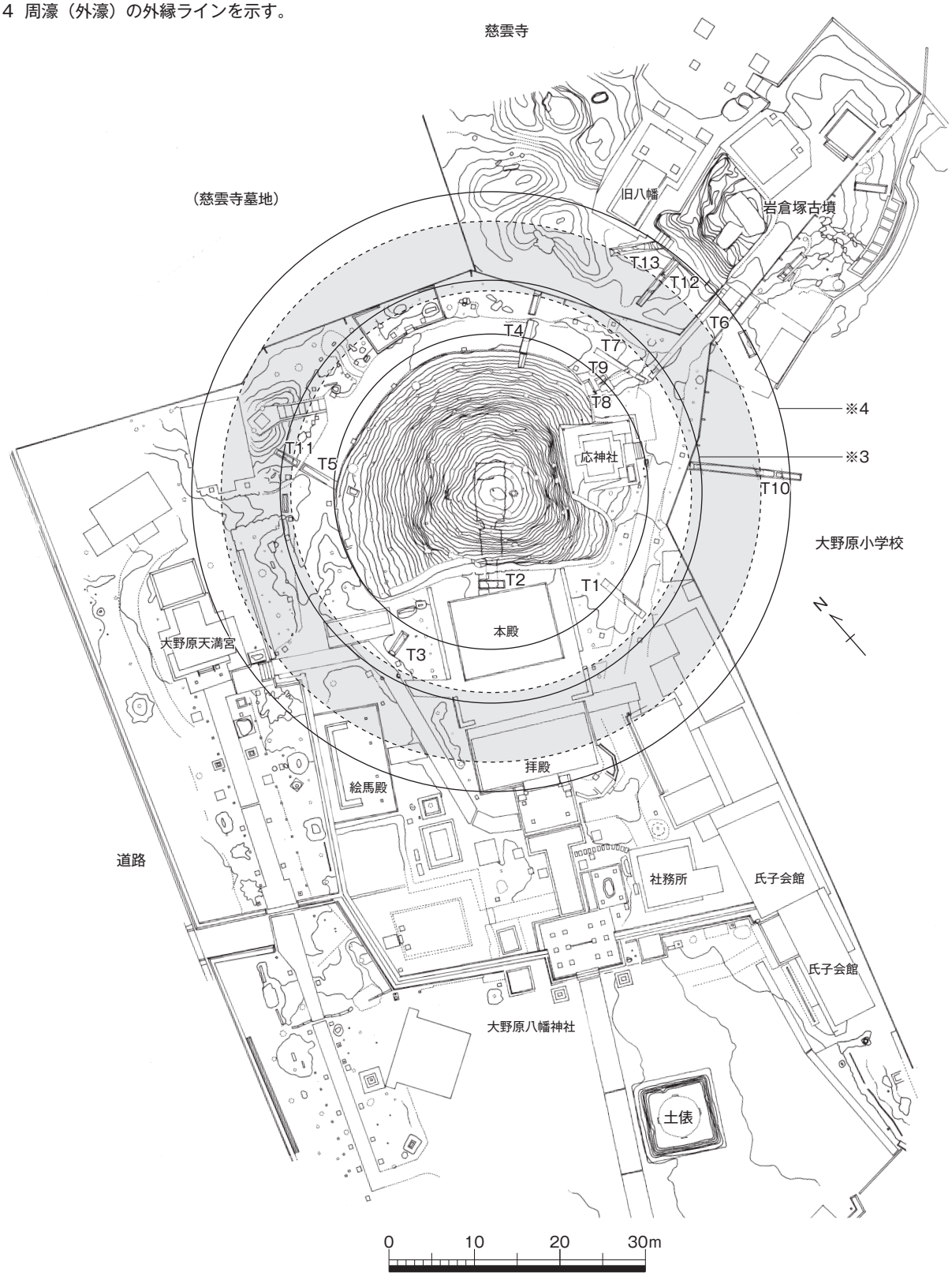


図４　椀貸塚古墳・岩倉塚古墳　地形測量図・トレンチ配置図(1/700)

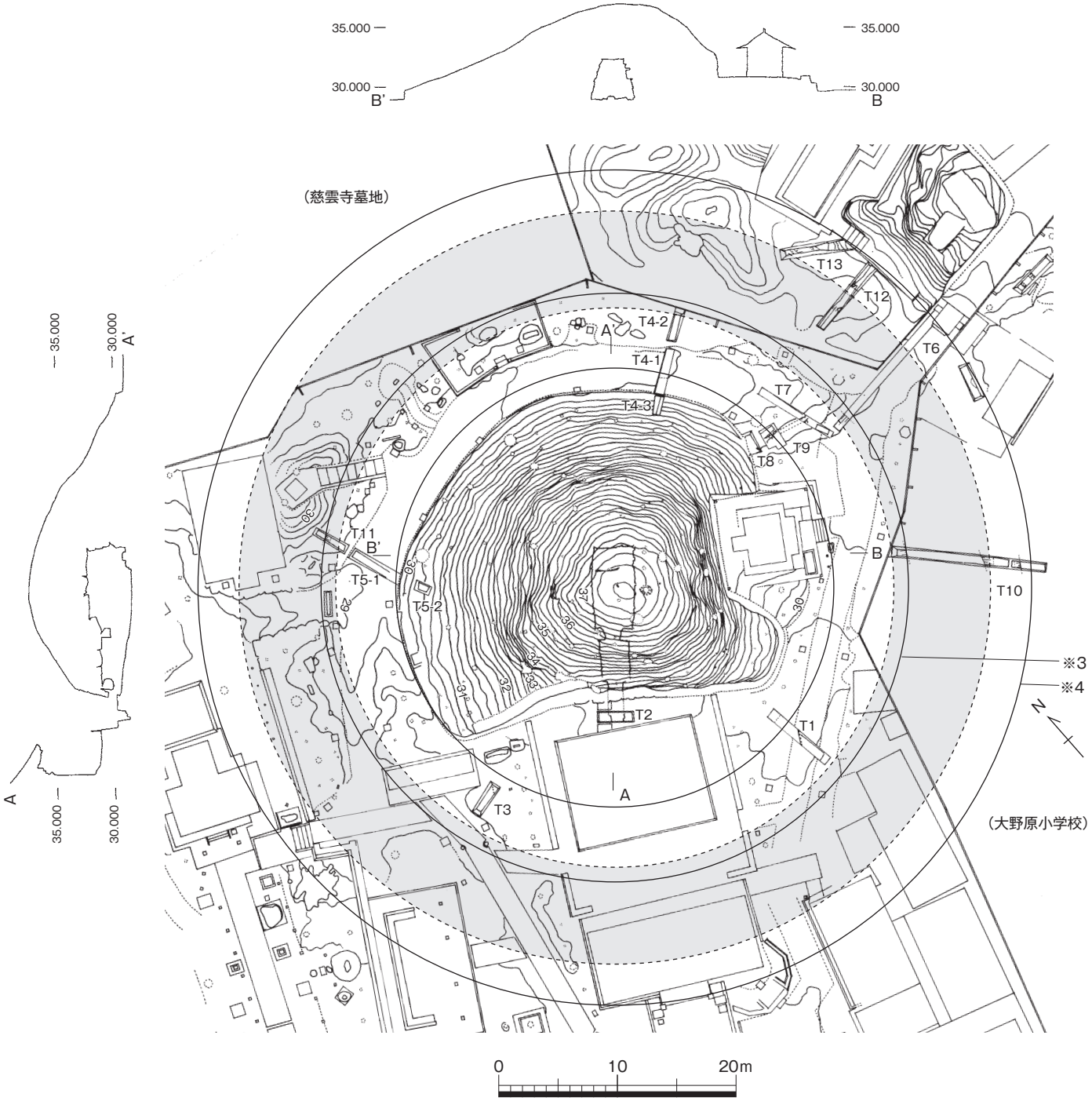
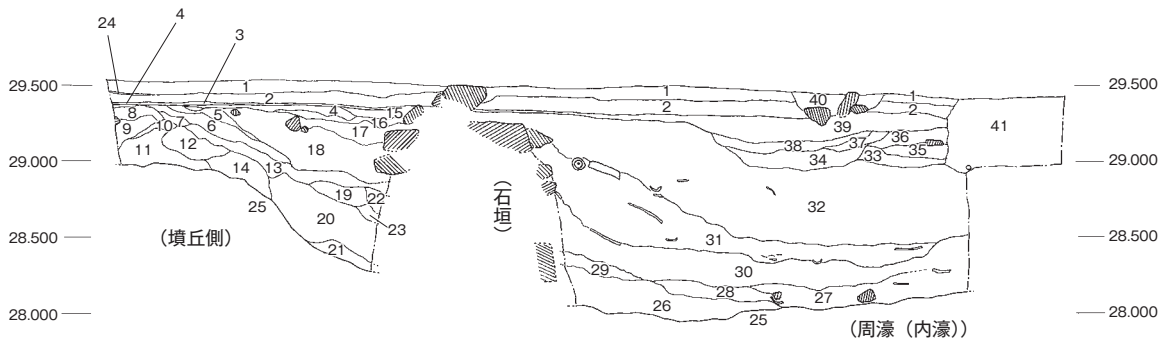


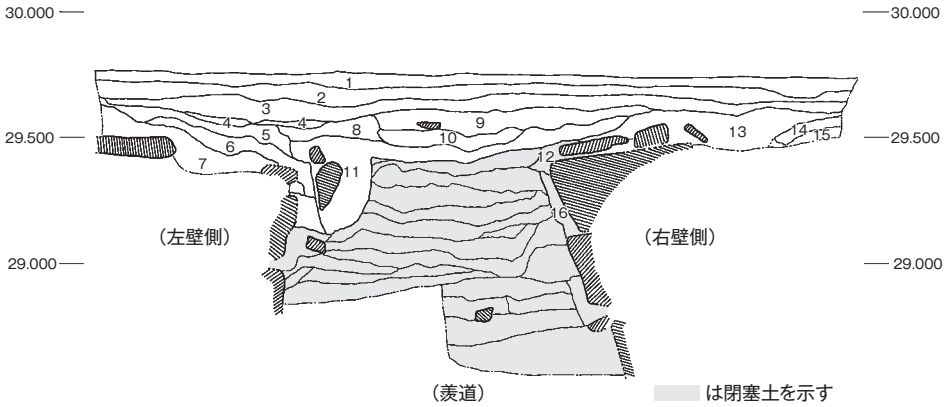
図５　椀貸塚古墳・岩倉塚古墳　地形測量図・トレンチ配置図　その２(1/500)

※１　　は周堤の範囲を示す。
※２ トレンチはTと略している。
※３ 周濠（内濠）の外縁ラインを示す。
※４ 周濠（外濠）の外縁ラインを示す。



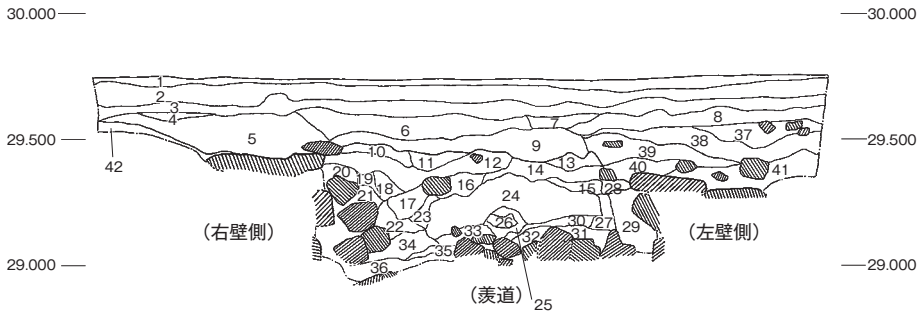
1　黄褐色土（花崗土）
2　茶褐色土（花崗土）
3　細石層
4　黄灰褐色土
5　茶褐色土
6　暗茶褐色土
7　暗黄灰褐色土
8　黒灰色土
9　暗灰褐色土（黄色混）
10　暗黄灰褐色土
11　黒色土（少し黄色混）
12　黄茶褐色土
13　暗黄茶褐色土
14　暗灰褐色土
15　暗灰褐色土（黄色混）
16　黒灰色土
17　黄褐色土
18　黒褐色土（黄粒混）
19　暗黄灰褐色土
20　暗灰茶褐色土
21　暗黄灰褐色土
22　暗黄灰褐色土
23　暗灰茶褐色土
24　灰褐色土
25　黄褐色土（地山層）
26　暗茶褐色土
27　暗灰褐色土
28　黄褐色土
29　黄褐色土
30　暗黄茶褐色土
31　黄褐色土
32　黄茶褐色土
33　黄茶褐色土（礫を多く含む）
34　黒色土（瓦片多く含む）
35　黄褐色土
36　黄灰褐色土
37　黄茶褐色土
38　黄茶褐色土
39　細石層
40　かく乱層
41　かく乱層

図６　椀貸塚古墳　トレンチ１　土層図(1/50)



1　黄茶褐色土（花崗土）
2　暗茶褐色粘質土
3　細石層（径5mm程度）
4　暗茶褐色粘質土
5　暗茶褐色土（黄色多く混）
6　暗黄茶褐色土（黄色混）
7　暗茶褐色粘質土
8　黄褐色土（黄色混）
9　暗茶褐色粘質土
10　黄茶褐色土
11　暗茶褐色土（黄色混）3cm程度の円礫含む
12　黄茶褐色土
13　暗茶褐色土
14　黄茶褐色土
15　暗茶褐色土
16　灰褐色土

図７　椀貸塚古墳　トレンチ２　土層図(1/30)　羨道部閉塞土の状況



1　黄褐色土（花崗土）
2　暗茶褐色土（細円礫混）
3　細石層（径５mm程度）
4　黄灰褐色土
5　灰茶褐色土（黄色粒混入）
6　灰褐色土
7　灰褐色土（軟質）
8　暗灰茶褐色土
9　黄茶褐色土（黄色粒混入）
10　暗灰茶褐色土
11　黄灰褐色土
12　灰茶褐色土（軟質）
13　黄褐色土（かたい）
14　黄灰茶褐色土
15　黄灰褐色土
16　明灰茶褐色土（軟質）
17　明灰茶褐色土（かたい）
18　黄褐色土（かたい）
19　明黄灰褐色土
20　黄褐色土
21　黄灰褐色土
22　明黄褐色土
23　明黄褐色土（軟質）
24　黄茶褐色土（かたい）
25　灰褐色土（軟質）
26　黄茶褐色土（かたい）
27　明黄褐色土（軟質）
28　黄茶褐色土
29　暗灰褐色土
30　明黄灰褐色土
31　黄灰褐色土
32　黄灰褐色土
33　黄茶褐色土
34　暗灰褐色土（軟質）
35　暗黄灰褐色土
36　黄灰褐色土（かたい）
37　暗黄茶褐色土
38　暗黄灰褐色土
39　暗茶褐色土（瓦片混入）
40　暗黄茶褐色土
41　黒褐色土
42　暗茶褐色土

図８　椀貸塚古墳　トレンチ２　土層図(1/30)　羨道部閉塞石の状況

・トレンチ４（平成 21 年度）

墳丘北西側、石室主軸から少し東側に寄った墳丘裾部に設定したが、上部構造物の関係で 4-1、4-2、4-3 にトレンチを細分して設定した。全体の長さは 8.9m を測り、直線的な配置とした。

4-1 は現墳丘の周囲に築かれた石垣の外側を巡る幅 4m 強の通路部分に設定した。石垣は高さ約 60cm を測り、昭和時代の築造となる。調査の結果、地表下約 1m で地山層を検出し、墳丘端と考えられる傾斜の変換点を確認した（墳丘裾部＝周濠の下場）。さらに、墳丘端から石室側へ約 1.2m の地点にも変換点を認め、これより上部に盛土を施した状況も観察できる（図 10・2～3 層）。

4-2 は、4-1 から慈雲寺側との境界にあるブロック塀までの間に設定した。周濠の外縁部の立ち上がりを想定したが、標高約 27.8m の高さで検出した周濠底面の地山層がブロック塀近くまで平坦に続いており、トレンチ内に周濠外縁部は所在しない状況を確認したに留まる。周濠埋土は黒色土や暗茶褐色土を主体とする軟弱な墳丘流土層が約 60cm 堆積している。それより地表までの層は周濠を埋め立てた比較的新しい層である。本トレンチでの遺物の出土は確認されなかった。

以後の調査成果に基づく周濠の推定復元では、ブロック塀のすぐ外側に周濠外縁部の立ち上がりが所在するものと想定できる。

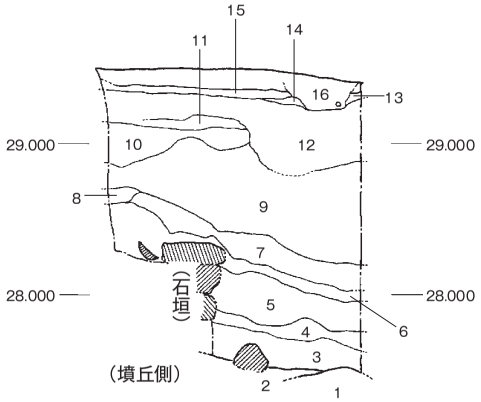
4-3 は墳丘盛土の遺存及び施工状況を確認するために、前述の墳丘周囲を巡る石垣の墳丘側に設定した。調査の結果、石垣付近はその設置に伴って墳丘が削平された状況であったが、石垣から墳丘側に 70cm の箇所では墳丘盛土が良好に遺存していた（図 10・18～33 層）。礫を多く含む黄茶褐色の地山層の上に、厚さ 10～25cm の黒色土が敷設され、その上層には黄褐色土、黒色土、黄褐色土、黒色土、黄褐色土が交互に盛土されている。幾層にも及ぶ盛土であるが、土質は軟弱であり、版築と呼称可能な施工技術によるものではない。また、4-1 と 4-3 の地山層の高さに 0.6mほどの比高差を認めるが、何に起因した結果であるかは即断できない。

・トレンチ５（平成 21 年度）

墳丘北西側の通路部分とその延長線上の墳丘石垣内側の墳丘盛土状況を確認するためにトレンチ 5-1、5-2 を設定した。トレンチ全長は 6.4m を測る。

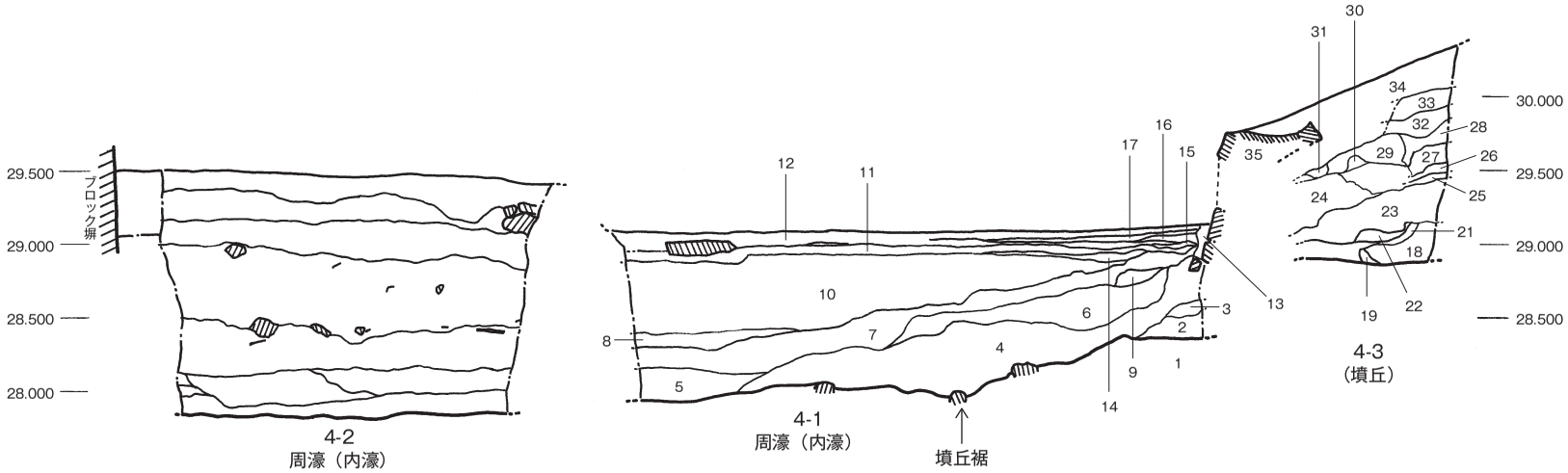
5-1 は地表下 1.3m（標高約 27.6m）で地山層に達する。埋土下層は暗茶褐色土、上層は礫を多く包含する黄茶褐色土となり、後者は周濠を埋めた造成土、前者は墳丘の流入土と判断できる。確認した地山層はおおむね平坦だが、墳丘側に向かってわずかに高さを増しており、トレンチの大部分は周濠内に位置し、石垣直下付近に墳丘裾部が所在するものと考えられる。周濠埋土は約 70cm の軟弱な暗茶褐色土が堆積している。

5-2 は墳丘部分に設定したトレンチであり、表土直下での墳丘盛土の検出を想定していたが、1.1mにも及ぶ造成土を検出し、標高約 29.1mで地山層、その上部にわずかに墳丘盛土を確認した（図 11・22～23 層）。トレンチ設定部分は現墳丘が歪に広がり、墳丘コンターラインにも乱れを認める箇所であり、その要因は後世の造成であることが判明した。なお、神社宮司からは昭和時代に土砂による造成を行ったという証言を得た。また、5-1 で検出した周濠底の地山層と墳丘部分で検出した地山層の比高差は 1.5m を測り、墳丘南半部分に比して（トレンチ１等）、周濠を深く開削した状況が想定できる。なお、本トレンチでの遺物の出土は確認されていない。



1　黄茶褐色粘質土（地山層）
2　黄灰褐色土（礫多く含む）
3　黄茶褐色土（小円礫多く含む）
4　茶褐色土
5　黄褐色土
6　灰茶褐色土
7　黄茶褐色土
8　暗茶褐色土
9　礫層（拳大の円礫）
10　黄茶褐色土
11　黒色土
12　黒褐色土（黄混入）
13　花崗土
14　細石
15　花崗土
16　花崗土

図9　椀貸塚古墳　トレンチ３　土層図（1/50）



1　赤褐色土（礫を多く含む）（地山層）
2　黄褐色土（小礫混）
3　黄灰褐色土
4　暗黒色土
5　暗黄茶褐色土
6　暗茶褐色土
7　茶褐色土
8　暗灰褐色土（瓦片多く含む）
9　暗黒褐色土
10　黄褐色土（近世以降の遺物混入）
11　黄灰褐色土
12　黄灰褐色土
13　かく乱層
14　暗黄灰褐色土
15　黒褐色土
16　暗黄茶褐色土
17　花崗土
18　黒色土
19　黄褐色土（礫多く含む）
20　黒色土
21　黄褐色土
22　暗黄茶褐色土
23　黄茶褐色土（礫混入）
24　暗茶褐色土
25　黒色土
26　黄茶褐色土
27　黒色土
28　黄茶褐色土
29　灰茶褐色土
30　黄褐色土
31　黄褐色土
32　黒色土
33　黄茶褐色土
34　暗灰茶褐色土（かく乱層）
35　コンクリート

図10　椀貸塚古墳　トレンチ4－1、4－2、4－3　土層図（1/50）　墳丘盛土、裾部と内濠の状況

・トレンチ６（平成 23 年度）

大野原八幡神社から岩倉塚古墳の石室開口部前を経て、慈雲寺境内に抜ける幅約 3m 余りの通路のうち、神社の所有地で設定したトレンチである（全長 13m）。

椀貸塚古墳と岩倉塚古墳の間に設定したトレンチであるため、両墳の周濠の重複関係に留意して調査を実施したが、結論的には椀貸塚古墳が二重周濠と周堤を有することを初めて確認するとともに、わずかに岩倉塚古墳の墳丘盛土を確認しえた。

トレンチ西端部で周濠の外縁部の立ち上がりが良好な状態で確認でき（傾斜角度約 45°）、現状での周濠底と外縁部の上端部分との比高差は 1.5mを測る。周濠外側では地山層がほぼ平坦面を保ちながら約 6m広がり、その上部に黄茶褐色土や黒色土等による盛土が施される（図 12・25、33～34）。調査の進展に伴って当該箇所が周堤であることが判明するが、さらにその外側にも周濠が存在することが明らかになった。つまり、椀貸塚古墳は周堤と二重周濠を有することになる（これ以後、本報告書では石室に近い内側の周濠を「内濠」、周堤の外側の周濠を「外濠」とする）。内濠は幅 8m、深度 1.4m、外濠は幅 5m、深度 1.2mを測り、規模は内濠が外濠を上回る。二重周濠の濠底の比高差は 0.5mを測り、内濠が外濠より 0.5m深い。周濠埋土は内濠が黒色土、暗茶褐色土、外濠が暗黒褐色土であり、どちらも軟弱である。遺物の出土状況は須恵器片が２点のみで器種は不明である。

二重周濠間には周堤が築かれる。幅 8mを測り、内濠幅と近似した数値を示す。元来の高さは不明だが、本トレンチでは地山整形後、黄茶褐色土を施した後（図 12・25 層）、黒色土を敷設し（同 33・34 層）、さらにその上部に盛土を施す（同 35～38 層）。黒色土は本墳では周堤部分と墳丘盛土の最下部（トレンチ 4-3）で検出できる。墳丘築造に際して、地山層を整形後、墳丘各所に敷設した基部的な盛土と評価でき、いわゆるブラックバンドと呼ばれる旧地表土等に関連した層位とは性格を異にする。本トレンチでは黒色土下に一部盛土を認める（同 25 層）。本墳では他に確認できないほど精良な盛土であり、かつ軟弱な状況を呈しており、局所的な設置と理解したい。なお、周堤は最も遺存状況が良好なトレンチ 11 付近では内濠底との比高差が 2.6mに達しており、本トレンチでの比高差が 1.1mであることから、顕著な削平を受けた状況が想定できる。

また、トレンチ東端部で椀貸塚古墳の外濠に覆い被さるように、岩倉塚古墳の墳丘盛土が施される（図 12・45～51 層）。椀貸塚古墳の外濠埋土との重複関係は、後世に構築された石垣で確認できないが、外濠外縁部の立ち上がりを認め、断定はできないが、外濠開削後に岩倉塚古墳の墳丘を築造するという築造順が想定できる。

こうした状況を踏まえて、『大野原開墾古図』の椀貸塚の絵図を観察すると、神社建物の背後に椀貸塚の墳丘が描かれ、その周囲に太い線と細い線の二重線が描かれているのが看取できる。表記の差異は外側の太い線が内濠外縁部の立ち上がった上場、細い線が内濠底から外縁部に立ち上がる傾斜変換点である下場と考えることができ、絵図の作者は内濠の外縁部の立ち上がりの立体的表現を試みたと推測できる。トレンチ 1、3 で確認した石垣について、内濠を埋め立てて神社建物の建設用地を造成するための施設という性格を付与したが、こうした表記理解はそれを否定するものではない（ただし、絵図が描かれた正保２（1645）年には、少なくとも外濠は埋没していたと考えられる）。

・トレンチ７（平成 23 年度）

1　地山層
2　暗茶褐色土（小礫多く混入）
3　暗黄茶褐色土
4　黄茶褐色土
5　暗灰茶褐色土
6　黄茶褐色土（礫混入）
7　暗茶褐色土（小礫混入）
8　暗黒褐色土
9　黄茶褐色土（礫多く混入）
10　黒褐色土（周堤盛土）
11　暗茶褐色土
12　暗黄茶褐色土
13　黄褐色土（周堤盛土？）
14　暗茶褐色土（周堤盛土？）
15　黄褐色土（周堤盛土？）
16　暗茶褐色土
17　黄茶褐色土（花崗土）
18　黄褐色土
19　暗茶褐色土
20　黄褐色土
21　黄茶褐色土
22　黄灰褐色土（礫含む）（墳丘盛土）
23　茶褐色土（墳丘盛土）
24　暗灰黒色土
25　暗灰茶褐色土（黄色粒混入）
26　明黄褐色土
27　暗黒茶褐色土
28　黄茶褐色土
29　暗黄茶褐色土
30　暗茶褐色土
31　黄茶褐色土
32　暗黄褐色土（瓦片、礫多く含む）
33　暗茶褐色土
34　暗黒茶褐色土
35　明黄茶褐色土（花崗土）
36　暗茶褐色土（表土）

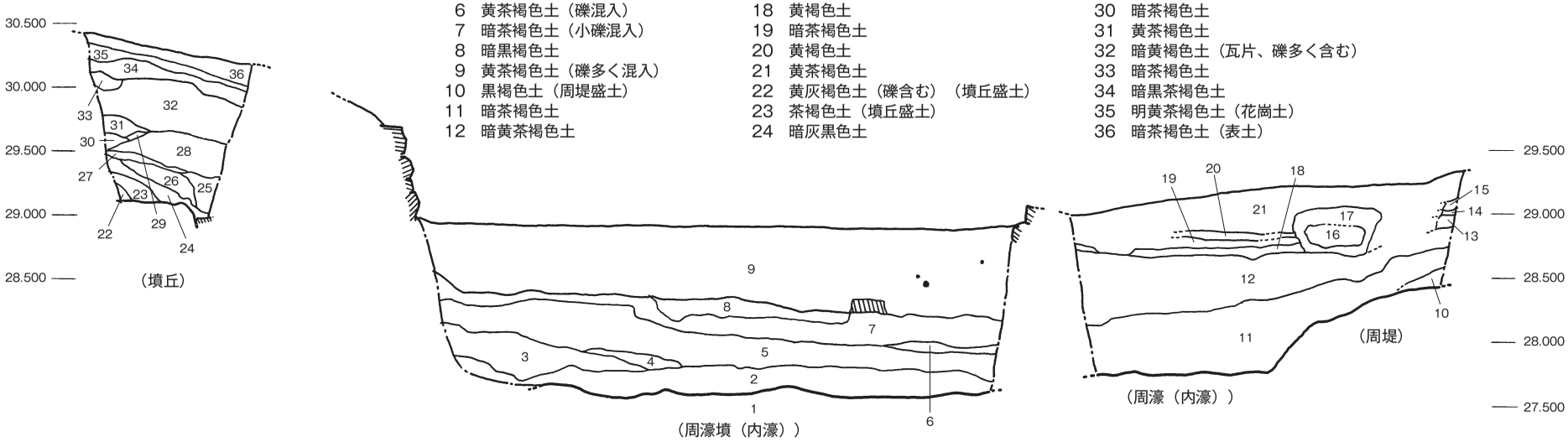


図11　椀貸塚古墳　トレンチ5−1、5−2、11　土層図（1/50）

1　黄褐色土（礫を多く含む）（地山層）
2　黒色土
3　暗茶褐色土
4　黄茶褐色土
5　黄褐色土（礫を多く含む）
6　暗茶褐色土
7　黄褐色土
8　黄褐色土
9　黒色土
10　黄茶褐色土
11　暗茶褐色土
12　暗灰茶褐色土
13　黒色土
14　黒色土
15　暗黒褐色土（礫を多く含む）
16　暗黒茶褐色土
17　暗黒褐色土（5～6㎝の円礫多く含む）
18　暗茶褐色土
19　木の根
20　暗黒茶褐色土
21　暗黄茶褐色土
22　黄褐色土
23　黄褐色土
24　黄茶褐色土
25　黄茶褐色土
26　暗黄茶褐色土
27　暗茶褐色土
28　暗黒茶褐色土
29　黒色土
30　暗黒茶褐色土
31　木の根
32　木の根
33　黒色土
34　黒色土
35　黄褐色土
36　黒色土
37　暗灰茶褐色土
38　暗灰茶褐色土（黄色粒混入）
39　暗灰茶褐色土
40　黄茶褐色土（礫を少し含む）
41　黒色土
42　かく乱層
43　花崗土
44　花崗土
45　暗茶褐色土
46　黄褐色土
47　黒褐色土
48　黄褐色土
49　灰茶褐色土
50　黒色土
51　黒褐色土
52　暗茶褐色土
53　暗灰茶褐色土
54　花崗土

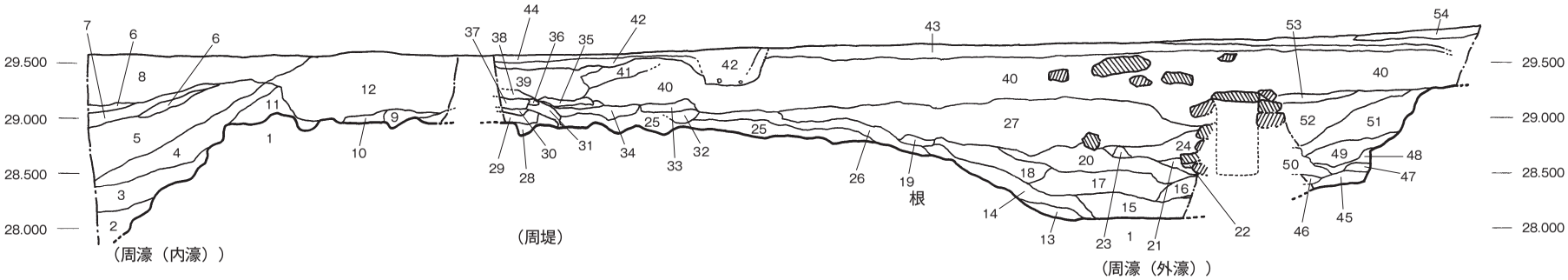


図12　椀貸塚古墳　トレンチ6　土層図（1/60）

トレンチ６で二重周濠と周堤の存在を確定するまでにはかなりの時間を費やした。本トレンチは混沌とした状況を理解するために、トレンチ６の西側に直交する方向に設定したが（長さ 7.2m）、結果的にはトレンチ全域が内濠の範囲内に収まる状況となった。

調査の結果、地表下 1.5m で地山層を検出し、その上部には 50～60cm の厚さで暗茶褐色土が堆積し、さらに地表面までは瓦片などを比較的多く含む層位を認め、前者が墳丘流土、後者が造成土と判断できる。周濠埋土は前述の軟弱な墳丘流土が標高 28.5m付近まで堆積しており、それから上層の地表までは 1m 程度の造成土層である。また、本トレンチでの遺物の出土は確認されていない。

なお、トレンチ６に近い箇所で石垣を検出した。石垣は高さ約 1.2m を測り、トレンチ９まで続く。トレンチ 1、3 で検出した石垣とは形状や用材が異なり、異なる性格の石垣と想定でき、位置関係から椀貸塚古墳の墳丘の一角に所在する応神社に関連した施設と思われる。応神社は大野原村の神社ではなく、隣接する中姫村の神社であり、この神社をめぐって頻繁に紛争が起こっていたようで、中姫村の人々が参拝の支障となる椀貸塚の内濠の深みを埋め立てて陸橋的な施設を造った可能性を想定したい。設置時期は明らかではないが、『大野原開墾古図』と同様に、内濠の凹み形状が本石垣の構築時期まで遺存していたことを示す間接的な証左といえる。

・トレンチ８（平成 23 年度）

トレンチ７で検出した石垣の延長及び墳丘裾部の盛土状況を確認するために設定した。

結果、墳丘裾部を取巻く石垣は地山層を削り込んで構築しており、構築段階かそれ以前かの判断はできないが、少なくとも当該箇所の墳丘裾部は地山層まで開削を受けた状況であった。墳丘盛土も確認できない。また、７トレンチで検出した石垣は本トレンチでは確認できなかった。

・トレンチ９（平成 23 年度）

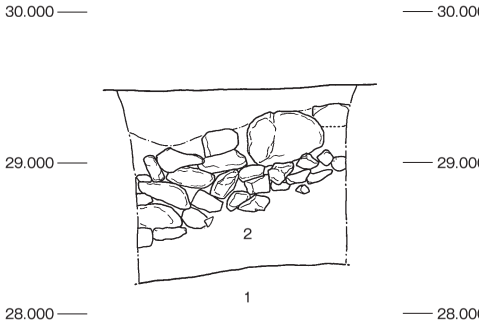
トレンチ８で確認できなかったトレンチ７の石垣の検出を目的として、トレンチ７・８間に設定したトレンチである（長さ 1.6m）。

結果、トレンチ７の石垣の延長部を検出した。石垣は地山層ではなく、周濠内への墳丘流土を基盤として構築されており、基底石材は墳丘流土の堆積状況に呼応して、墳丘側ほど高くなる。当初は古墳に伴う施設の可能性も考慮したが、こうした状況から後世の改変であることが確実となった。

・トレンチ 10（平成 23 年度）

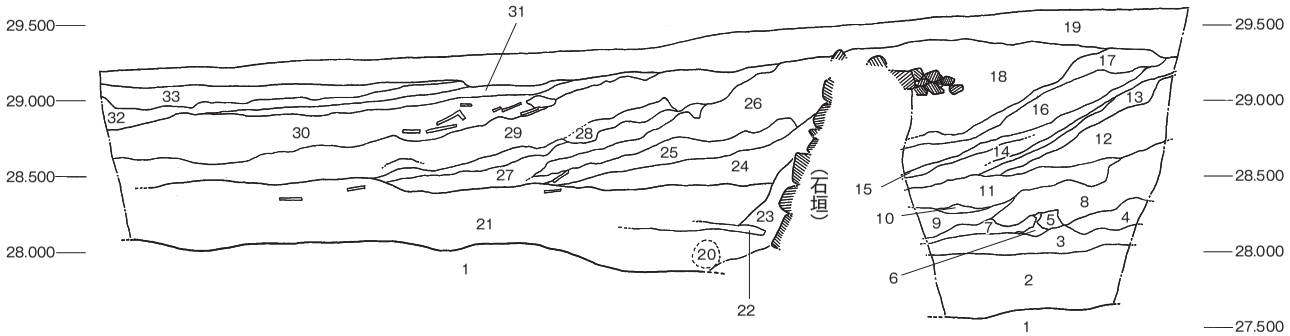
トレンチ６で確認した二重周濠と周堤を別地点で追認するために設定したトレンチである。内濠と外濠及び周堤を一体的に確認し、かつ長い延長距離を確保する必要があるため、こうした条件に符合した場所として、大野原八幡神社に隣接する大野原小学校の校庭内を選定し、トレンチを設定した。調査に際しては、玄室中心部を古墳の中心点と仮定し、トレンチ６で確認した外周施設の位置関係から、本トレンチで想定される内濠等の位置をあらかじめ予測し、その位置で遺構が検出できるか否かに留意した。

調査の結果、ほぼ予測した位置で二重周濠を確認した（ただし、本トレンチでは後世の土地利用の関係で周堤は大きく削平された状況であった）。本トレンチで確認した範囲では、内濠は幅 0.9m、深度 0.6m、外濠は幅 2.6m、深度 0.4mを測り、トレンチ６と同様に内濠が外濠を幅・深度ともに上回る規模を



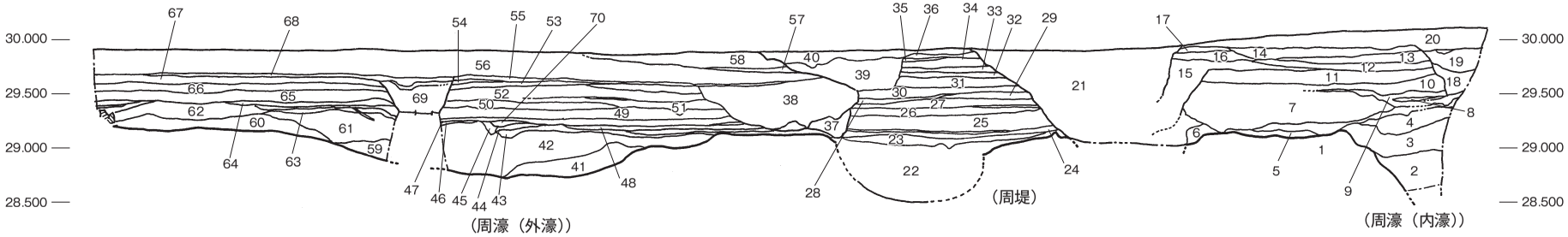
1　地山層
2　暗茶褐色土

図14　椀貸塚古墳　トレンチ９　土層図（1/50）
内濠に造られた石垣の状況



1　地山層
2　黒色土（小円礫多く含む）
3　暗茶褐色土
4　黄褐色土
5　黒色土
6　茶褐色土
7　黄褐色土
8　礫層（拳大の円礫）
9　暗黄褐色土
10　黒色土
11　礫層（小円礫）
12　黄茶褐色土
13　茶褐色土
14　暗茶褐色土
15　茶褐色土
16　黄茶褐色土
17　黄褐色土（円礫含む）
18　暗黄茶褐色土
19　暗茶褐色土
20　植物の根
21　暗茶褐色土
22　黄褐色土
23　暗灰茶褐色土
24　暗黄茶褐色土
25　黄褐色土
26　暗茶褐色土
27　黄褐色土
28　茶褐色土
29　黒茶褐色土
30　暗茶褐色土
31　黄褐色土（花崗土）
32　黒褐色土
33　花崗土

図13　椀貸塚古墳　トレンチ７　土層図（1/50）　内濠に造られた石垣の状況



1　黄褐色土（地山層）
2　黒色土
3　暗茶褐色土
4　暗黄茶褐色土
5　黒灰色土
6　暗黄灰色土
7　暗灰茶褐色土
8　黒灰色土
9　黄褐色土
10　暗黄灰褐色土
11　黄茶褐色土（花崗土）
12　暗黄茶褐色土（花崗土）
13　黄茶褐色土（花崗土）
14　黄白褐色土（砂質）
15　暗黄灰褐色土
16　灰褐色土
17　黄茶褐色土（花崗土）
18　かく乱層
19　かく乱層
20　黄灰褐色土
21　かく乱層
22　かく乱層
23　黄白色土
24　暗灰褐色土
25　灰茶褐色土
26　黄茶褐色土（花崗土）
27　黄褐色土（花崗土）
28　黄灰褐色土
29　黄灰褐色土
30　黄茶褐色土（花崗土）
31　黄褐色土（花崗土）
32　黄茶褐色土（花崗土）
33　暗茶褐色土（花崗土）
34　茶褐色土（花崗土）
35　灰褐色土
36　茶褐色土
37　かく乱層
38　かく乱層
39　かく乱層
40　黄灰褐色土
41　黒色土
42　暗茶褐色土
43　黄茶褐色土（花崗土）
44　黄灰色土
45　黄褐色土
46　黄褐色土
47　黒色土（ゴミの層）
48　灰褐色土
49　灰茶褐色土
50　暗茶褐色土（花崗土）
51　花崗土
52　黄灰褐色土
53　黄褐色土（花崗土）
54　黄茶褐色土（花崗土）
55　黒灰色土
56　茶褐色土（花崗土
57　花崗土
58　花崗土
59　黒色土
60　暗茶褐色土
61　暗茶褐色土
62　黒色土（礫を多く含む）
63　黄褐色土
64　花崗土
65　黄灰褐色土
66　黄茶褐色土（花崗土）
67　黄茶褐色土（花崗土）
68　黒灰色土
69　かく乱層
70　暗茶褐色土

図15　椀貸塚古墳　トレンチ10　土層図（1/60）

測る。埋土は内濠・外濠ともに、黒色土、暗茶褐色土が堆積しており、どちらも軟弱である。なお、出土遺物は確認されていない。

二重周濠間の基盤層が露出した幅 6m間が周堤に相当する。後世の削平が顕著であり、トレンチ 6 で検出した黒色土やその上部の盛土は確認できない。

以上の結果、複数地点で二重周濠と周堤の存在を確認するとともに、内濠、外濠、周堤の規模・形状がよく似ていることが判明した。さらに、外周施設の検出位置から、玄室中央部を古墳の中心点としたほぼ正円の墳丘プランが復元でき、高い規格性が窺える。

・トレンチ 11（平成 23 年度）

二重周濠と周堤の把握に伴い、周堤の状況を確認するためにトレンチ 5-1 の北西側（八重垣神社側）に追加設定したトレンチである（全長 3.1m）。

調査の結果、トレンチ中央部付近まではトレンチ 5-1 から続く平坦な内濠底が続き、そこから明瞭な傾斜変換点を伴って立ち上がる内濠外縁部を確認した。周濠埋土は約 50cm の軟弱な暗茶褐色土が堆積している。

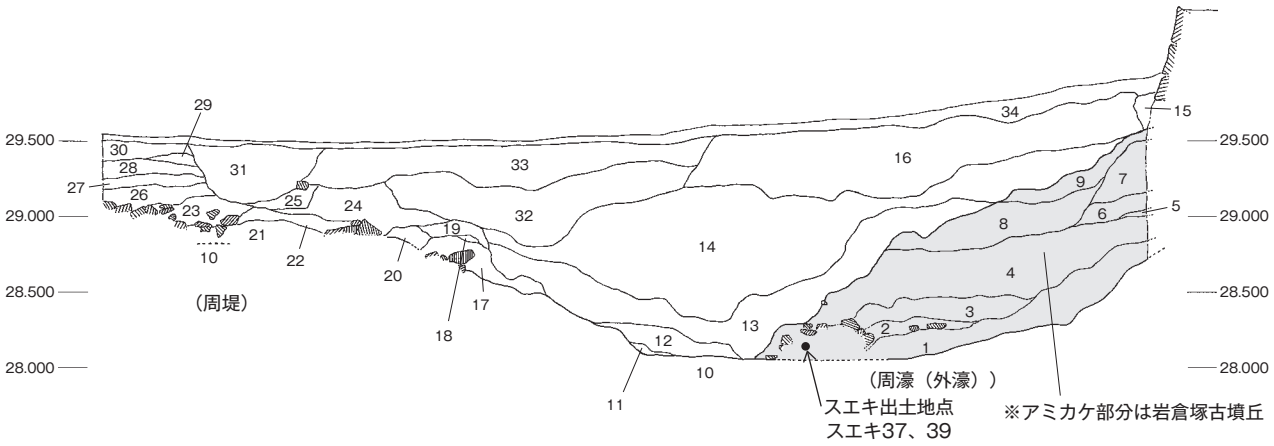
内濠の外側には塚上に安置された祠が所在する（八重垣神社）。トレンチは盛り上がりには及んでいないが、トレンチ北端部で周堤盛土がかろうじて確認できる（図 11・10 層）。盛土は地山層の直上に施されるが、トレンチ６でみられる黒色土は介在しないものの、黒褐色土であり、盛土と判断した。よって、当初後世の盛土と考えていた塚は、周堤の旧状を反映する蓋然性は高いものと考える。塚の頂部は標高 30.2mを測り、その頂部まで周堤盛土があると仮定すれば、トレンチ 11 の周濠底との比高差は 2.4m に達する。トレンチ６・10 では周堤上部は削平により旧状を窺い知ることはできないが、周堤高を考える上では留意すべきデータとなる。

・トレンチ 12（平成 24 年度）

椀貸塚古墳に隣接する岩倉塚古墳との前後関係を確認することを主目的として慈雲寺境内に設定したトレンチである（全長 7m）。

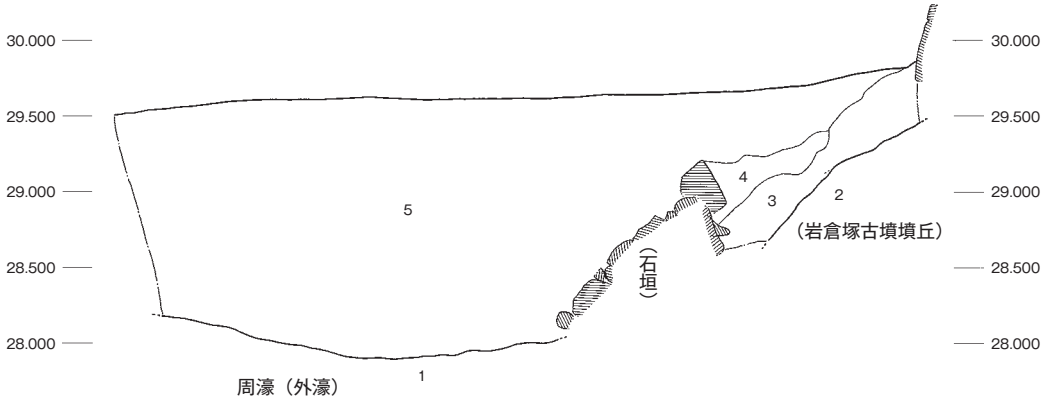
調査の結果、椀貸塚古墳の周堤、外濠、岩倉塚の墳丘盛土を検出した。椀貸塚古墳の周堤は地山層を削り残し、地山整形後に黒色土を敷設した後（図 16・21 層）、上部に幾層にも及ぶ周堤盛土を施す（図 16・23～28 層）。黒色土には拳大からその２倍程度の礫を多量に包含しており、安定した基盤形成を意図したものと推され、入念な築造がなされたものと評価できる。ただし、盛土は細かな施工単位とは対照的に軟弱であり、墳丘盛土と近似した状況を呈する。周堤から外方の岩倉塚古墳側に向かって、地山層は漸次低くなり、標高 28m 付近で外濠底となり、約 2mほどの平坦面が続き、外濠底の地山層は緩やかに立ち上がる。さらに、外濠の半分を埋めるように、岩倉塚古墳の墳丘盛土が施された状況を確認した（図 16・1～9 層）。墳丘面の傾斜角度は約 40°を測る。比較的大きな単位で墳丘盛土がなされる（図 16・4、8 層）。黄白色土や赤褐色土は椀貸塚古墳では確認できない盛土であり、椀貸塚古墳に比して、堅緻な盛土と評価できる。

注視すべきは、椀貸塚古墳の外濠周濠埋土と岩倉塚古墳の盛土の関係である。図 16・11～12 層が外濠



1　黒灰色土
2　暗灰褐色土
3　黒茶褐色土
4　灰茶褐色土
5　黄白色土
6　赤褐色土
7　黄白色土（礫多く含む）
8　黄白色土
9　暗茶褐色土
10　黄褐色土（円礫多く含む）（地山層）
11　黒灰色土
12　暗黄褐色土
13　暗黄茶褐色土
14　黄褐色土（瓦片、ガラス片等有）
15　暗黄茶褐色土
16　黄茶褐色土（瓦片多く含む）
17　黒褐色土
18　黄褐色土
19　黄茶褐色土
20　黄灰褐色土（小円礫含む）
21　黒色土
22　暗茶褐色土
23　黄褐色土（小円礫含む）
24　黒茶褐色土
25　黄茶褐色土
26　暗茶褐色土（小円礫含む）
27　黄褐色土
28　暗茶褐色土
29　黄灰褐色土
30　黄茶褐色土
31　黄褐色土
32　黄茶褐色土
33　暗茶褐色土
34　表土

図16　椀貸塚古墳　トレンチ12　土層図（1/50）



1　黄褐色土（小円礫を多く含む）（地山層）
2　黄茶褐色土（1cmの小円礫、5～10cmの円礫含む）（墳丘）
3　暗茶褐色土
4　黄褐色土（礫を多く含む、瓦片等）
5　かく乱層（瓦片、ガラス容器等）

図17　椀貸塚古墳　トレンチ13　土層図（1/50）

埋土であるが、椀貸塚古墳完成後に堆積した外濠埋土（1・11・12 層）、岩倉塚古墳築造後に堆積した周濠埋土（13 層、両墳からの流入土）、おそらくは江戸期に属する最終埋没土（14 層）に大別できる。トレンチ 6 ではこうした重複関係は確認できず、両墳の築造時期の相対関係を明らかにすることはできなかったが、本トレンチで確認した重複関係から、椀貸塚古墳→岩倉塚古墳という前後関係が確定した。さらに、岩倉塚古墳の墳丘盛土に被覆された椀貸塚古墳の外濠埋土（図 16・2 層）からは、高坏の脚部等（実測図番号 37,39）が出土しており、椀貸塚古墳の築造時期を考える上での指標となる。椀貸塚古墳の築造から完成後の一時期を示唆するとともに、岩倉塚古墳の上限を画するものと評価できる。

・トレンチ 13（平成 25 年度）

トレンチ 12 で確認した状況の追認と岩倉塚古墳の墳丘規模や形態等データを得るため慈雲寺境内の旧八幡の裏に設定したトレンチである（全長 6 m）。

調査の結果、椀貸塚古墳の外濠は確認したが、旧八幡の石垣が岩倉塚古墳の墳丘を地山層まで大きく開削して構築され、さらに低地として旧状を留める椀貸塚古墳の外濠の堆積土は地山層付近まで除去された状況であった（図 17・5 層下部における瓦片の存在等）。よって、両墳の重複関係及び岩倉塚古墳の墳丘データを得ることはできなかった。なお、トレンチ東端部では岩倉塚古墳の墳丘が良好に遺存する状況を確認した（図 16・2 層）。検出に留めたため、盛土の施工状況は不明である。

②横穴式石室

・トレンチ２（平成 21 年度）

現在の石室開口部は社殿建設に伴い墳丘の南西側を大幅に削平し、開削面を石垣で被覆し、その中央下部に石室開口部を設けている（現在の開口部）。そうした状況もあり、従前の石室全長は開削された開口部までの長さを計測し、全長 12.1m としていた。今回の調査では石室内部の調査は行っていないが、現開口部の状況及び羨道の内容把握を主目的とし、現開口部から大野原八幡神社本殿の土台までの間に、石室主軸に直交する方位にトレンチを設定した。

調査の結果、大きく３点の成果があった。

第１は羨道の両側面で石積みを検出した点である。羨道の存在を確認するとともに、検出した石積みの開口部側に続く石材が存在しない状況を確認した（ピンポールによる簡易ボーリング）。両側壁ともに前面に続く石材は認められず、本トレンチで確認した石積みが石室の入口（羨道）に位置する石材と判断でき、暫定的ではあるが、横穴式石室の全長が確定した（右側壁での計測で全長 14.8m）。

第２は羨道の幅である。床面までの検出は行っていないが、羨道入口の石積みの最も高い位置にある石材間の距離は 95cm を測るが、持ち送り構造を考慮すると、床面付近の羨道幅は少なくとも 1.35m はあると推定できる。

第３は、石室の閉塞状況が明らかとなった点である。閉塞は羨道部で行われ、10～15cm 程度の閉塞石を充填するとともに、それを前面から被覆するように厚さ 5～10cm 程度の単位（確認できる範囲で 16 層）の土で補完して閉塞がなされる（「閉塞土」と仮称、図 7・11 層の下層）。仔細に見ると、閉塞石は羨道入口付近では乱雑に置かれているが、奥側の現石室開口部付近、おそらくは前室玄門部では長さ 20～30cm 程度の長楕円形の石材を小口積みする。追葬等による施工状況の差異とも理解できるが、注意を要する。なお、閉塞土は羨道内に留まらず、その前面にまで及ぶことが平面的に確認でき、前庭部の存

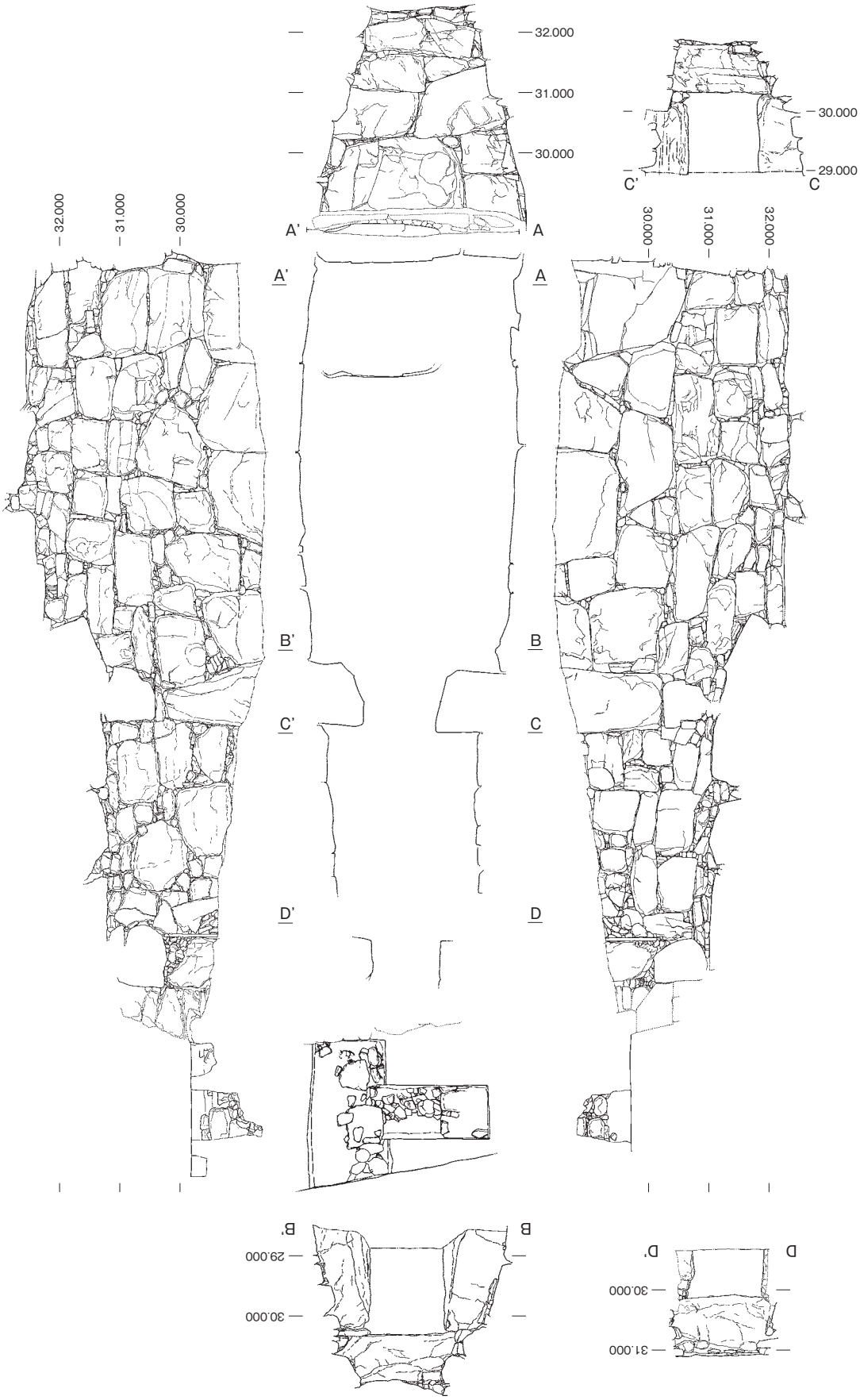


図18　椀貸塚古墳　石室実測図（1/100）

在を含め、今後の検討課題を提示する。

・石室の実測調査

横穴式石室内部についての調査は測量調査に留め、平成 19 年 2 月から同年 8 月にかけて具体的な基礎資料を得るため平板による地形測量と横穴式石室内部の実測を行った。床面は未調査であり、詳細を報告するができないため、ここでは石室構造の概略について記すことに留める。

1　複室構造の横穴式石室を内包し、その全長は 14.8m を測る。
2　玄門立柱石を内側に突出して配置する両袖式石室である。
3　前室は玄室（後室）に比して、長さ・幅ともに著しく矮小化する。
4　玄室（後室）床面積は 24.6 ㎡、玄室（後室）空間容積は 72.7 ㎥、玄室（後室）天井高は 3.9mを測る。（最下部での計測）
5　玄室（後室）平面プランは緩やかな胴張気味を呈する。
6　玄室（後室）幅は前室幅より広い。
7　左右の側壁は持ち送り気味に内傾し、段数は概ね５段積みである。
8　右側壁に比して左側壁は目地がとおり、整然と積まれる。
9　石材は上部ほど、小形化する。
10　石材の隙間を埋めるように土を充填した箇所を多く認める（詰め土）。
11　玄室（後室）の天井石は４石で構成。奥壁から３石は水平に架けられるが、玄門に近い１石は斜めに高架する。
12　玄室（後室）天井高は前室天井よりも高い。
13　玄門部は立柱石上に横架材を高架し、その上部に天井石と同化するように大形石材を斜め架けすることで前壁高を確保する。
14　復元した羨道幅に基づく限り、前室の立柱石も側壁より内側に突出する。
15　前室高は後室高より一段低いが、羨道との関係は不明である。
16　短い羨道部が付設する。
17　閉塞は羨道で行われる。塊石を用い、さらにその前面を土で被覆する（閉塞土）。
18　石材は和泉砂岩が用いられ、花崗岩や安山岩等は確認できない。

③出土遺物

石室床面は未調査であり、出土遺物は範囲確認のために設定したトレンチ及び表面採集によるもので須恵器が 40 点である。

時期比定が可能な須恵器は少ない。39 は高坏脚部で、長脚二段三方透かしであり TK43 式並行期に属する。トレンチ 12 の外濠埋土から検出したもので、岩倉塚古墳の墳丘盛土に被覆された出土状況を示す。37 は 39 と同一地点から出土しており、接合関係はないが同一個体で有蓋高坏の坏身となる。1 は二方向透かしの高坏脚部である。トレンチ 11 の排土中。3 は提瓶で胴部にカキ目を認める。トレンチ 1 の内濠周濠埋土出土（図 6・27 層）。7 は提瓶あるいは平瓶の口縁部と思われる。トレンチ 10 の排土中。24 は粗いヘラ切り痕を認め、壺の底部としたが、蓋坏の蓋である可能性も残す。トレンチ 3 出土。26 は器種不明であるが、端部に脚部へと続く傾斜変換点が確認できる。2, 6, 8, 10, 12, 13, 20, 25, 28, 34, 40 は正確

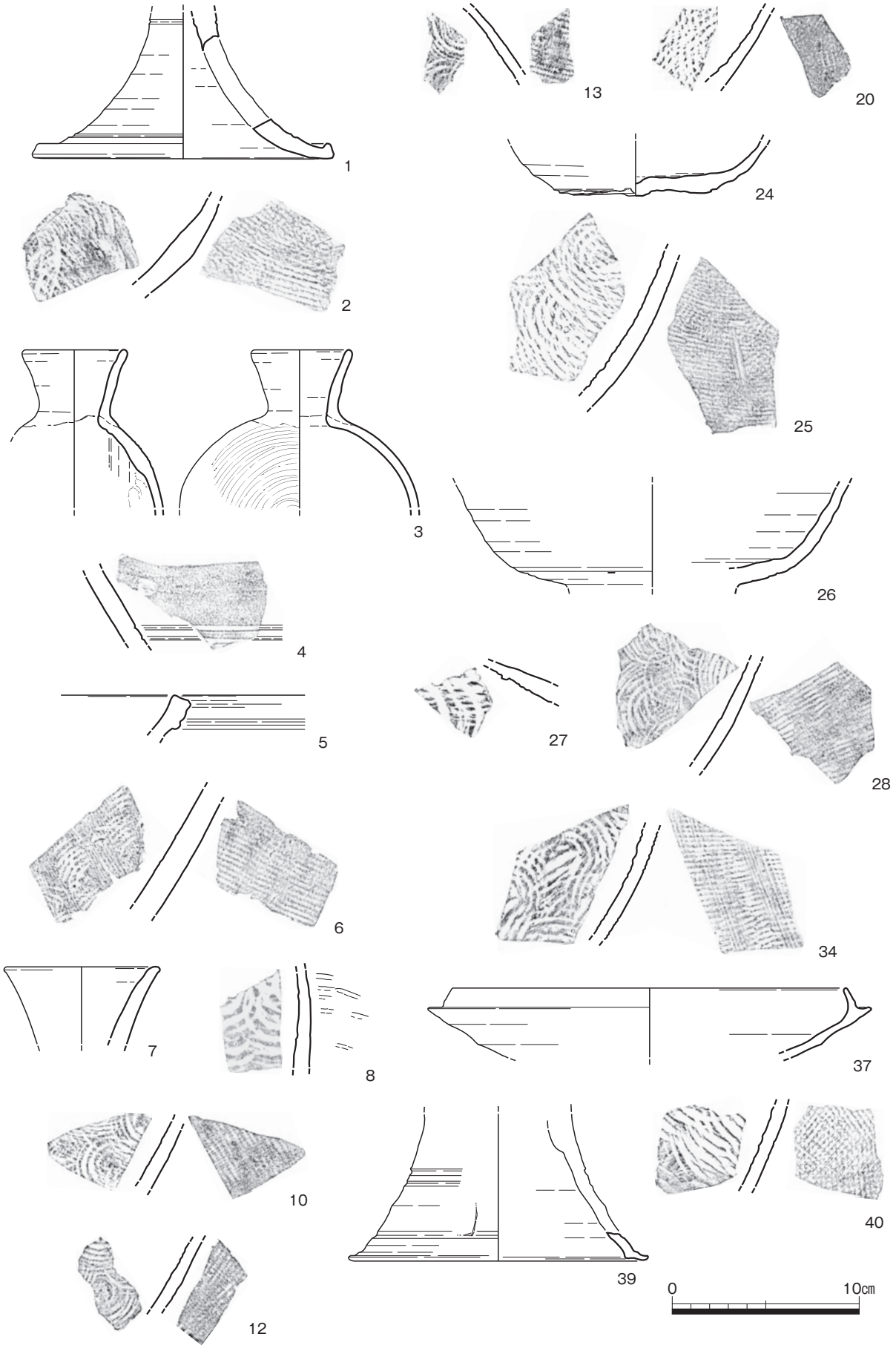


図19　椀貸塚古墳　出土遺物実測図（1/3）

に器種を限定できないが、甕と思われる。内面には青海波文、外面には平行・格子叩きを認める。

④小結

墳形・規模　直径37.2mを測る円墳である。外周施設として二重周濠と周堤を有し、それを含めた範囲は径70mに達する。その占有面積は約3,850㎡となり、広大な面積を占有した状況が窺える。内濠底の標高が確定したトレンチ１（28.0m）と現墳丘頂部との比高差は9.5mを測る。

現況では墳丘裾部を石垣が取巻くが、墳丘を囲繞する通路設置に伴って元来の裾部を 1.5m前後開削しており、元来の墳裾を示すものではない。西側で復元墳丘ラインと合致する箇所もあるが、当該箇所は後世に盛土が施された箇所となる。また、墳丘南側には大野原八幡神社の本殿、東側には応神社が設けられ、墳丘は大きく開削されている。

外周施設　二重周濠と周堤を認める。内濠幅8m、外濠幅5m、周堤幅8mを測り、ほぼ内掘と周堤幅が等しい関係にある。外濠に比して内濠は深度も深く、外縁部の立ち上がりの傾斜も強い。周堤は二重周濠間に位置し、地山層を平坦に整形後、黒色土を敷設した後、盛土で築造される。元来の高さは削平により明らかではないが、トレンチ12では地山層から0.4mの高さを認め、トレンチ11周辺の塚状の盛り上がりが周堤の旧状を反映したものと仮定すれば、当該箇所では地山層から 1.7mの盛土、内濠底との比高差は 2.6mを測る。周濠からの須恵器の出土量は極めて少なく、周堤上に須恵器を配置した状況は想定できない。また、各トレンチで検出した外周施設は、玄室（後室）中央部を中心点として設定した正円形上に位置し、内濠と周堤幅の近似性とともに、規格性の高さが窺える一方、周濠底の標高は一様ではない状況も認める。内濠はトレンチ１が28.0m、トレンチ４が27.9m、トレンチ５が27.5m、外濠はトレンチ12が28.0m、トレンチ６が28.2m、トレンチ10が28.8mとなる。周堤部の地山層で確認すると、トレンチ11は28.5m、トレンチ12は28.8m、トレンチ６は28.9m、トレンチ10は29.1mを測る。おおむね南から北、東から西へわずかに傾斜する地形が想定でき、平面形には高い規格性が窺えるが、地形環境を克服した状況ではなかったと推される。

なお、本墳の東に岩倉塚古墳が所在する。従前、前後関係が問題となっていたが、今回の調査で椀貸塚古墳の外濠の半分を埋めるように、岩倉塚古墳の墳丘が構築されており、前後関係が確定するとともに、椀貸塚古墳の東側の外濠は岩倉塚古墳と共有している状況となる。

墳丘築造　トレンチ設定が後世の開削が顕著な墳丘裾部に留まるため、詳細な情報を提示することはできないが、墳丘の大部分は盛土で築造される。トレンチ4-3・1によると、地山整形後に厚さ10～25㎝の黒色土が敷設し、その上部に黄褐色土、黒色土、黄褐色土、黒色土、黄褐色土を交互に盛土する。幾層にも及ぶ盛土であるが、土質は軟弱であり、版築と呼称可能な施工技術によるものではないが、地山上面に敷設する黒色土は拳大程度の礫を混入させており、いわゆるブラックバンドと呼ばれる旧地表を示すものではなく、墳丘基部の安定化を意図して設置したものと考えられる（自然科学的分析では非アロフェン系クロボク土に分類）。同様の黒色土は周堤部分にも認める（トレンチ６、12）。

また、旧地形との関係についても現時点では言及できないが、トレンチ１・4-3・5-2の地山層の標高がおおむね標高 29.0±0.1mである点は留意すべきである。前述した周濠底や周堤部分の地山層の標高から、南東から北西への旧地形の傾斜を想定したが、墳丘部分の地山面は対角に位置するトレンチにおいても同標高を測り、地山整形段階に平坦面を創出した可能性が高い。なお、想定される玄室床面の標高は28.5m前後となる。

表面観察では葺石や段築は確認できない。

出土遺物　石室内の調査を実施していないため、現時点では墳丘に設定したトレンチから出土した須恵器に限られる。周濠出土遺物であるため、築造時期を厳密に反映するものではないが、岩倉塚古墳の墳丘に被覆された外濠埋土から出土した須恵器は重要である。長脚二段三方透かしの高坏であり（図 19 の 39）、TK43 式並行期に属するものと考える。椀貸塚古墳の築造後、岩倉塚古墳築造までの時期を示す遺物と評価できる（岩倉塚古墳の玄室及び前庭部から出土した高坏も同型式期に属する）。また、図 19 の 37 は 39 と接合関係はないが、同一個体で有蓋高坏の杯身である。

なお、本墳の所属時期は石室形態や他墳との関係等も考慮して、総括で検討を加えたい。

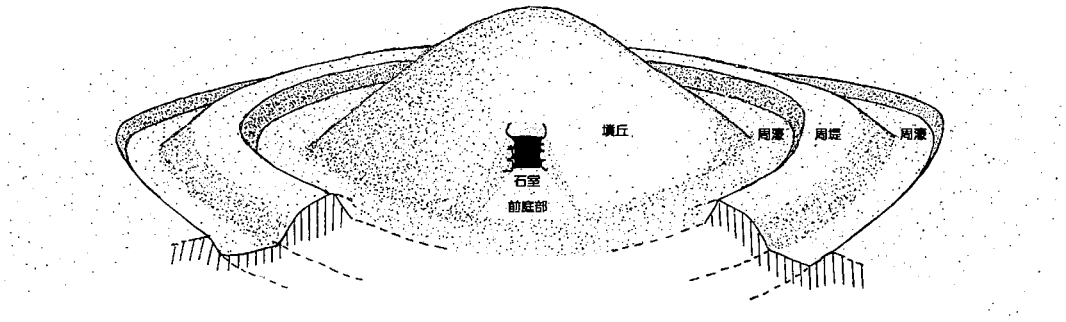


図20　椀貸塚古墳　復元イメージ図

（2）平塚古墳

①墳丘・周濠

・トレンチ３（平成 22 年度）

墳丘東側に所在するスロープの脇に全長 5.2m のトレンチを墳丘中心方向に向かって設定した。

トレンチ中央部地点、地表下約 1.3m で旧耕作土を認め（図 23・12 層）、下位約 20cm で地山層に達する。本トレンチ中央部で外側に向かって傾斜する変換点があり、暗黒茶褐色土が堆積する（図 23・8 層）。顕著な削平で旧状は失われるが、現況ではこの変換点が墳丘と周濠の境と理解できる。本来であれば、これより西側には墳丘構成土があるが、後世の耕作域としての土地利用の結果、墳丘内側まで約 2m 付近まで開削された状況であった。こうした内容は昭和 30 年頃の航空写真と符号する。その後、古墳の周囲に大量の土砂等が搬入され、1m 程かさ上げされ、現在に至る状況が想定できる。

周濠底面は、立ち上がり部からトレンチ端までの約 2m はほぼ平坦面が続く。トレンチ西端部では削平を免れた墳丘盛土を認める（第 23 図 2～6 層）。黒茶褐色土・黄褐色土・暗灰茶褐色土を交互に盛土するが、版築と呼称可能な築造技術によるものではなく、総じて軟弱な土質となる。

遺物の出土状況は、平塚古墳全体で 13 点の出土であるが、本トレンチでは 10 点（須恵器 9 点、土師器 1 点）とその大部分を占めるが、かさ上げの搬入土、旧耕作土からである。

・トレンチ４（平成 22 年度）

墳丘北側の墳丘裾部付近に全長 5.1m のトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ中央部で地表下 60cm までは昭和時代の造成土を認め、下位で墳丘盛土を確認した。特徴的な築造技術が確認できるため、トレンチの３面の土層図を提示した。以下、築造過程に従ってその内容を記す。まず、地山整形がなされる。地山を堤状に削り残し（図 25・2～4 は地山層で盛土ではない）、その内側は東西方向では傾斜するが（トレンチ東壁では標高 27.0m、西壁では 27.2m）、南北方向では水平に開削し、少なくともトレンチ端までの 2mは開削される。この削り残しを堤状遺構と仮称するが、その規模は幅約 2m、現状での高さ 0.7mを測り、内側の開削深度は現状で 0.6～0.7mを測る。堤状遺構の内側には盛土が施されるが、最下部には厚さ 1 cm 程度の黒色土を認め、その上部から盛土が施工される。下部には周辺の地山層と酷似した径 20cm 程度のブロック状の土が乱雑に置かれ（図 26 の 8・10・14・17 層）、それを被覆するように、明黄褐色土・暗灰褐色土・暗灰褐色土といった土を乱雑に盛土する。トレンチ東壁（図 25）ではやや細かな単位での盛土施工とも見えるが、土質も軟弱であり、移植ゴテで簡単に掘り起こすことができる。これらの盛土構成土の多くは地山層に酷似しており、堤状遺構を削り残し、その内側を開削した際に生じた土を用いた可能性が高い。現高での堤状遺構の掘り方より上部の盛土については、西壁面でのみ確認でき、東壁面では後世の造成土となる。西壁面では図 26 の 36・37 層がこれに相当する。軟弱な黒色ないし黒灰色土で、堤状遺構内の盛土に比して盛土単位もやや荒くなる。遺物は出土していない。

一方、堤状遺構の外方は緩やかに落ちて周濠に連続し、墳丘流土と考える埋土をかろうじて確認した（図 25 図 42～43 層）。周濠埋土は軟弱で、遺物は出土してない。

・トレンチ５（平成 22 年度）

石室開口部南西側の周囲の道路近くで約 2m のトレンチを設定検出した。

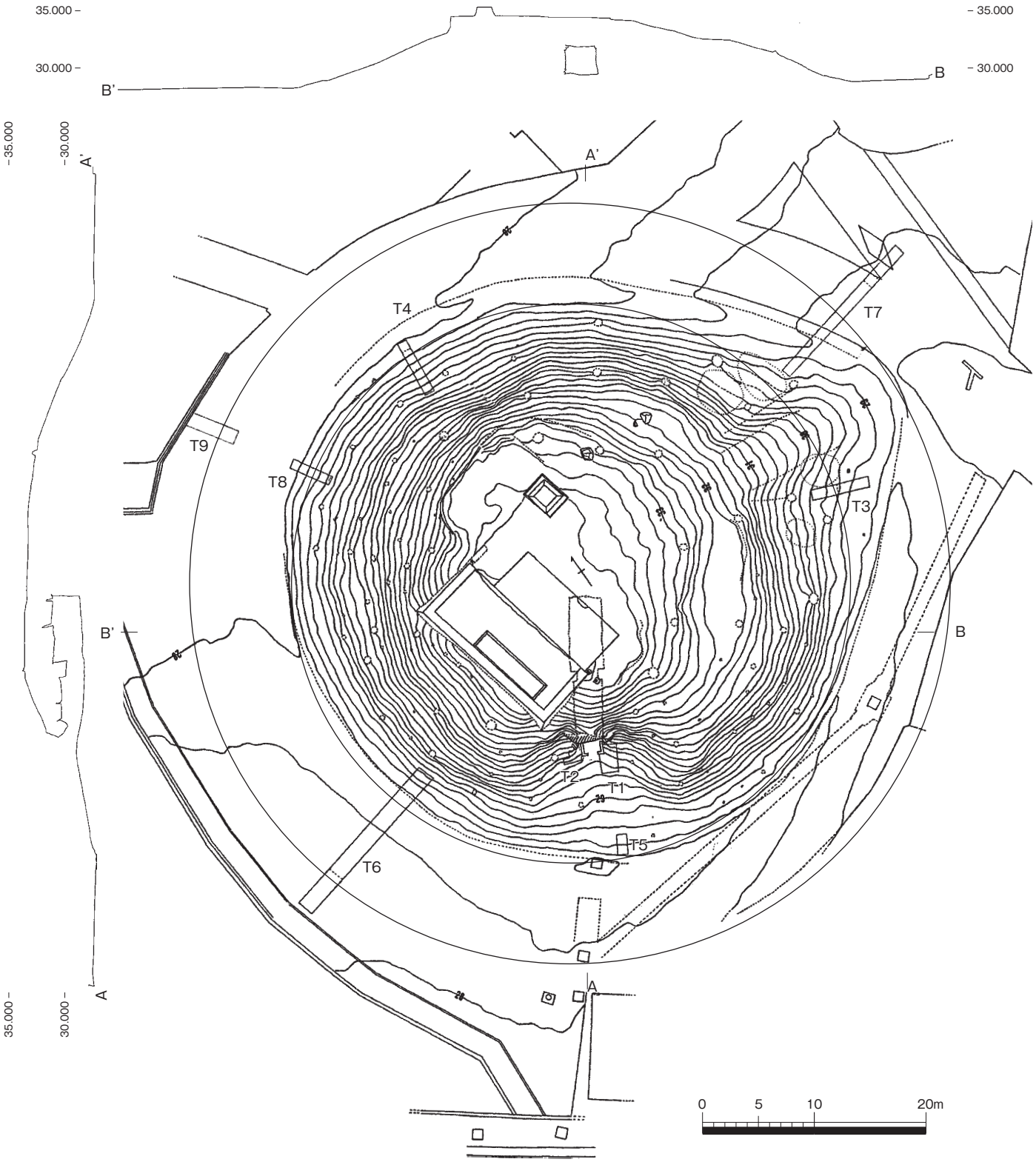


図21　平塚古墳　墳丘測量図・トレンチ配置図（1/500）

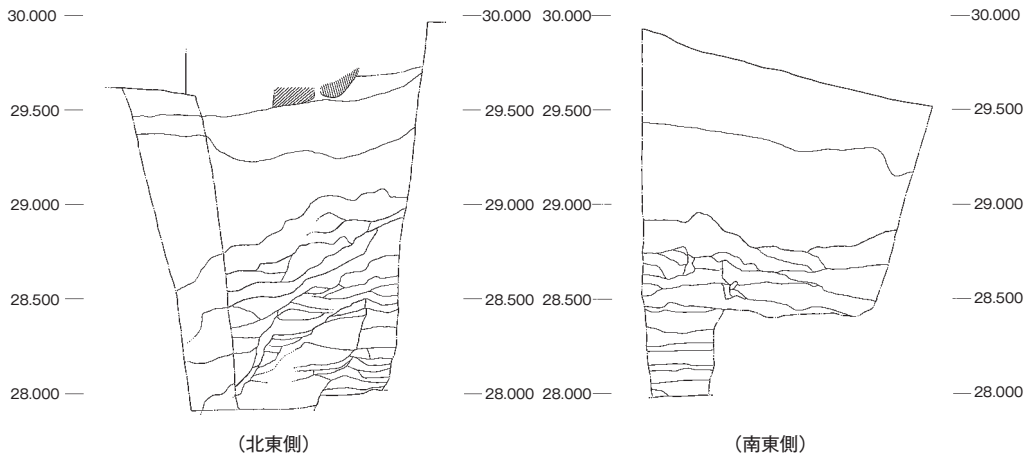
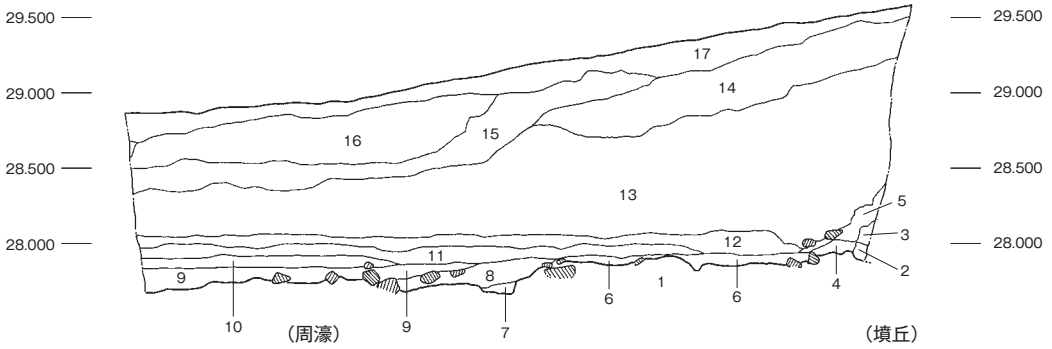
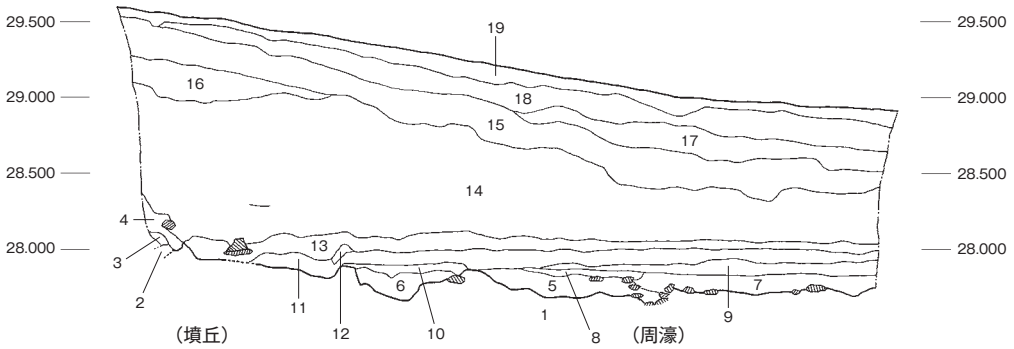


図22　平塚古墳　トレンチ１　土層図（1/40）



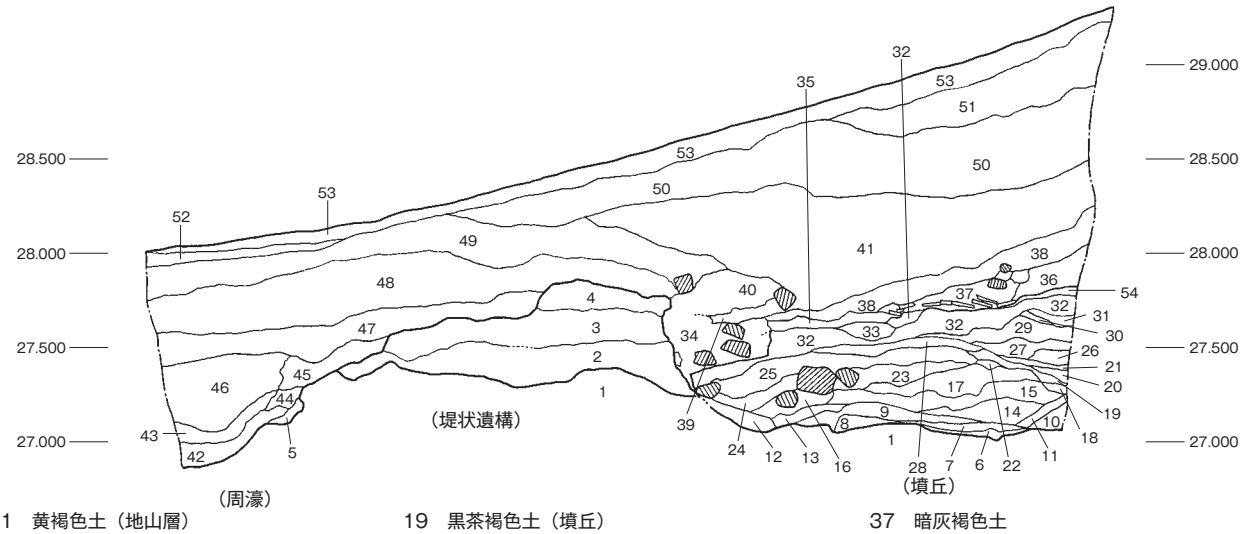
1　黄灰褐色土（地山層）
2　黒茶褐色土（墳丘）
3　黄褐色土（墳丘）
4　暗灰茶褐色土（墳丘）
5　暗黄茶褐色粘質土（墳丘）
6　黒茶褐色土（墳丘）
7　暗灰茶褐色土
8　暗黒茶褐色土
9　黒色土
10　暗茶褐色土
11　暗灰茶褐色土
12　灰褐色土
13　黄褐色土（円礫を多く含む）
14　暗灰褐色土
15　灰茶褐色土
16　黄茶褐色土
17　腐植土（表土層）

図23　平塚古墳　トレンチ３　土層図（1/50）（１）南側



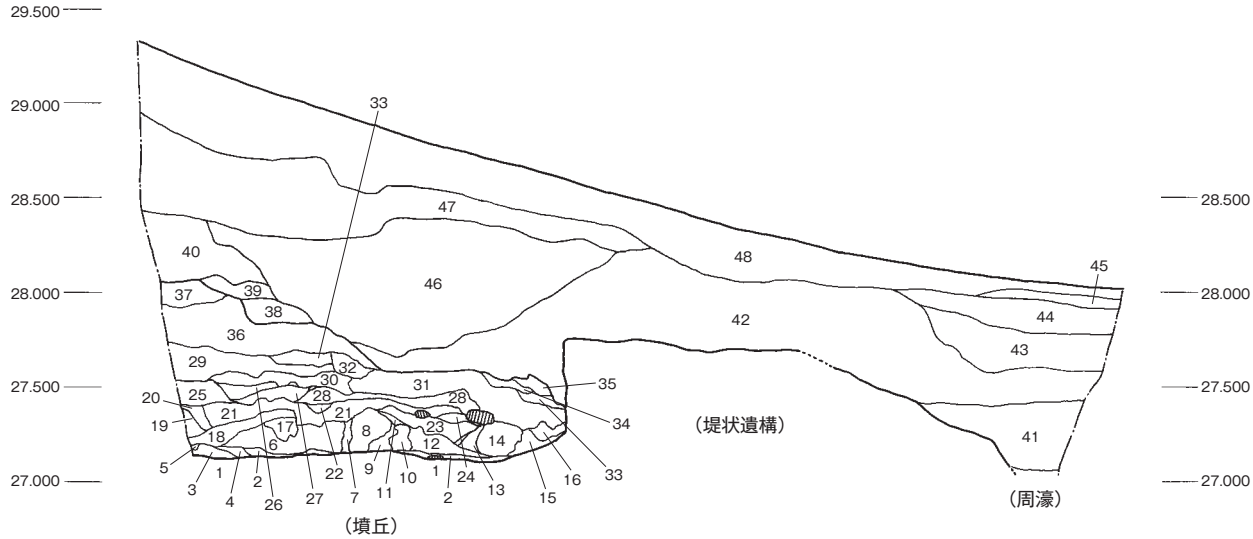
1　黄灰褐色土（地山層）
2　黒茶褐色土（墳丘）
3　黄褐色土（墳丘）
4　暗黄茶褐色土（墳丘）
5　暗黄茶褐色土
6　暗黄茶褐色土
7　黒色土
8　黒茶褐色土
9　暗茶褐色土
10　黒茶褐色土
11　暗灰茶褐色土
12　灰褐色土（礫含む）
13　灰褐色土
14　黄褐色土（円礫多く含む）
15　暗灰褐色土（円礫多く含む、ごみ、瓦礫多い）
16　暗灰褐色土
17　黒褐色土（ごみ、瓦礫多く含む）
18　黄茶褐色土
19　腐植土（表土層）

図24　平塚古墳　トレンチ３　土層図（1/50）（２）北側



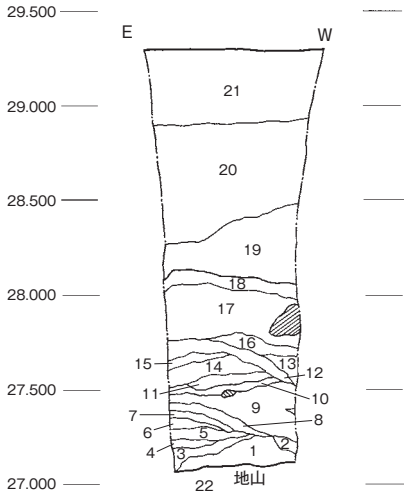
1　黄褐色土（地山層）
2　明黄褐色土（地山層）
3　黄茶褐色土（地山層）
4　黄灰褐色土（小礫含む）（地山）
5　暗茶褐色土
6　黒色土（墳丘）
7　黄茶褐色土（墳丘）
8　黒色土（墳丘）
9　黒茶褐色土（黄茶褐色土混入）（墳丘）
10　暗茶褐色土（墳丘）
11　黄褐色土（墳丘）
12　灰茶褐色土（墳丘）
13　暗黒茶褐色土（墳丘）
14　暗茶褐色土（墳丘）
15　黄灰茶褐色土（墳丘）
16　黄灰褐色土（墳丘）
17　暗黄灰茶褐色土（墳丘）
18　黒茶褐色土（墳丘）
19　黒茶褐色土（墳丘）
20　暗茶褐色土（墳丘）
21　黒茶褐色土（墳丘）
22　暗黒茶褐色土（墳丘）
23　暗灰茶褐色土（黄褐色粒混入）（墳丘）
24　暗黒褐色土（墳丘）
25　暗茶褐色土（墳丘）
26　暗茶褐色土（墳丘）
27　暗黒褐色土（墳丘）
28　黄褐色土（灰黒褐色土混入）（墳丘）
29　暗黒茶褐色土（墳丘）
30　黒茶褐色土（墳丘）
31　黒茶褐色土（墳丘）
32　黒茶褐色土（黄褐色粒が多く混入）（墳丘）
33　暗灰茶褐色土（墳丘）
34　黄灰茶褐色土（かく乱層）
35　黄灰褐色土
36　暗黒茶褐色土
37　暗灰褐色土
38　暗黒褐色土（黄褐色粒混入）
39　暗灰茶褐色土
40　暗茶褐色土（かく乱層）
41　黄褐色礫層（円礫を多く含む）
42　灰茶褐色粘土層
43　黄灰褐色粘土層
44　灰茶褐色粘質土
45　暗茶褐色土
46　黄茶褐色土（礫を多く含む）（かく乱層）
47　暗黄茶褐色土（礫を多く含む）（かく乱層）
48　黄灰褐色土（かく乱層）
49　灰褐色土（かく乱層）
50　暗灰褐色土
51　黄灰褐色土
52　黄茶褐色土（花崗土）
53　表土
54　黒色土

図25　平塚古墳　トレンチ４　土層図（1/40）（１）東側



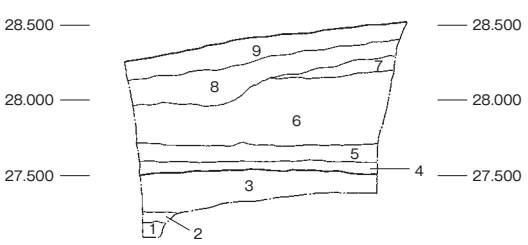
1　黄褐色土（地山層）
2　黒褐色土（墳丘）
3　淡黄茶褐色土（墳丘）
4　淡茶褐色土（墳丘）
5　暗灰褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
6　明黄褐色土（墳丘）
7　明黄褐色土（墳丘）
8　淡茶褐色土（墳丘）（地山ブロック）
9　明黄褐色土（墳丘）
10　淡茶褐色土（墳丘）（地山ブロック）
11　明黄褐色土（墳丘）
12　明黄褐色土（暗灰褐色混入）（墳丘）
13　灰茶褐色土（墳丘）
14　淡茶褐色土（墳丘）（地山ブロック）
15　淡茶褐色土（墳丘）（地山ブロックの割れ）
16　明黄褐色土（暗灰褐色混入）（墳丘）
17　淡茶褐色土（墳丘）（地山ブロック）
18　暗灰褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
19　暗黄褐色土（墳丘）
20　黄白色土（墳丘）
21　暗灰褐色土（墳丘）
22　暗灰褐色土（墳丘）
23　暗灰褐色土（墳丘）
24　暗茶褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
25　黄灰褐色土（墳丘）
26　灰茶褐色土（墳丘）
27　暗灰褐色土（墳丘）
28　暗茶褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
29　暗灰褐色土（墳丘）
30　暗灰褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
31　暗黄茶褐色土（墳丘）
32　暗黄灰褐色土（墳丘）
33　淡黄茶褐色土（墳丘）（地山ブロックの割れ）
34　暗灰褐色土（墳丘）
35　淡黄茶褐色土（墳丘）（地山ブロックの割れ）
36　暗灰茶褐色土（墳丘）
37　暗黒褐色土（黄粒混入）（墳丘）
38　暗茶褐色土（礫少し含む）
39　暗黒褐色土（礫多く含む）
40　黒褐色土
41　暗茶褐色土（10㎝程度の円礫含む）
42　灰茶褐色土（10㎝程度の円礫多く含む）
43　暗灰褐色土
44　暗黄茶褐色土
45　花崗土
46　礫層（大小の円礫が主体）
47　瓦礫層（スレート瓦、日本瓦片を多く含む）
48　黄灰褐色土

図26　平塚古墳　トレンチ４　土層図（1/40）（２）西側



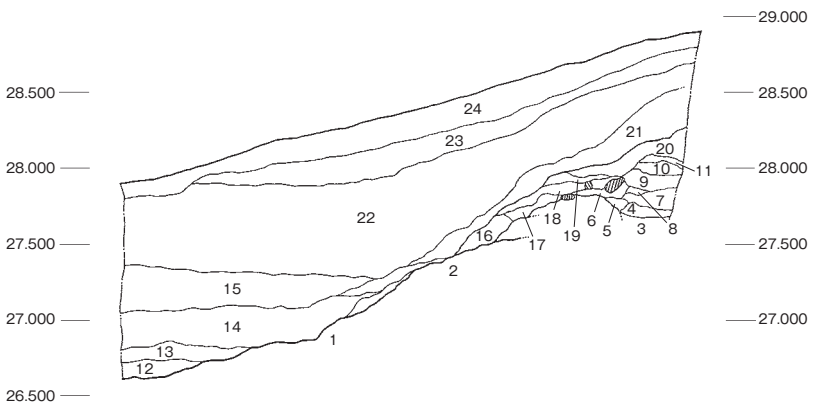
1　明黄褐色土（墳丘）（地山ブロック）
2　暗灰褐色土（黄粒を多く含む）(墳丘)
3　黒褐色土 (墳丘)
4　黒褐色土（灰色が混入）(墳丘)
5　黄茶褐色土 (黒褐色土混入）(墳丘)
6　黒褐色土（黄粒が少し混入）（墳丘）
7　暗灰褐色土（黄粒を多く含む）(墳丘)
8　黒褐色土（墳丘）
9　黄灰褐色土（墳丘）
10　灰褐色土（墳丘）
11　黄褐色土 (墳丘)
12　黒褐色土（黄粒を多く含む）（墳丘）
13　暗黄灰褐色土（墳丘）
14　暗灰褐色土 (墳丘)
15　黒褐色土（墳丘）
16　暗灰褐色土（墳丘）
17　黒褐色土（墳丘）
18　黒褐色土（黄粒が混入）（墳丘）
19　黒茶褐色土
20　瓦礫層（スレート瓦、日本瓦片等）
21　黄灰褐色土
22　黄褐色土（地山層）

図27　平塚古墳　トレンチ４　土層図（1/40）（３）南側（石室側）



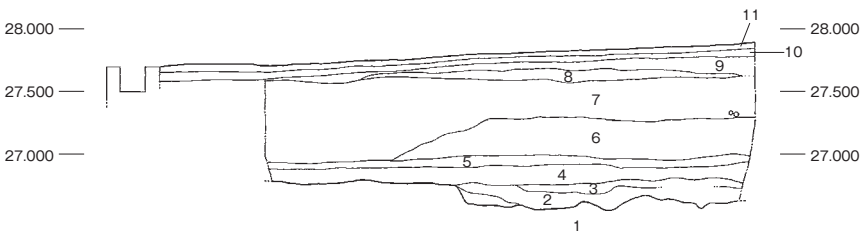
1　黄茶褐色砂質土（地山層）
2　茶褐色砂質土（地山層）
3　砂礫層（地山層）
4　灰茶褐色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　黄茶褐色土（小礫多く含む）
7　花崗土
8　暗黄茶褐色土（礫を多く含む）
9　黒褐色土（表土層）

図28　平塚古墳　トレンチ５　土層図（1/50）



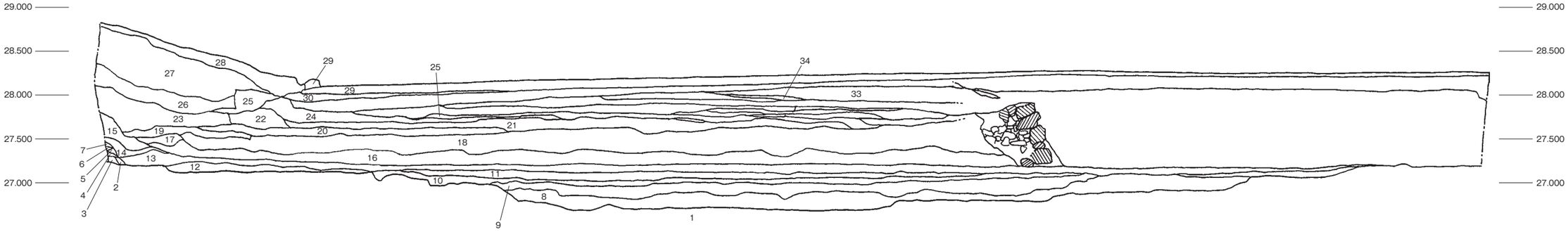
1　地山層（砂礫を多く含む）
2　地山層（黄褐色粘土）
3　暗茶褐色土（墳丘）
4　黄褐色土（墳丘）
5　黄灰褐色土（墳丘）
6　黄灰褐色土（墳丘）
7　灰茶褐色土（墳丘）
8　黄茶褐色土（墳丘）
9　暗茶褐色土（墳丘）
10　黄灰褐色土（墳丘）
11　黄褐色土（墳丘）
12　黄灰褐色土
13　暗黒褐色土
14　灰茶褐色土
15　黄褐色土
16　淡黄茶褐色土
17　黄灰褐色土
18　黄茶褐色土
19　黄灰褐色土
20　暗灰茶褐色土
21　暗茶褐色土
22　灰茶褐色土（礫、ゴミ等が多く混入）
23　暗茶褐色土
24　表土層

図29　平塚古墳　トレンチ８　土層図（1/50）



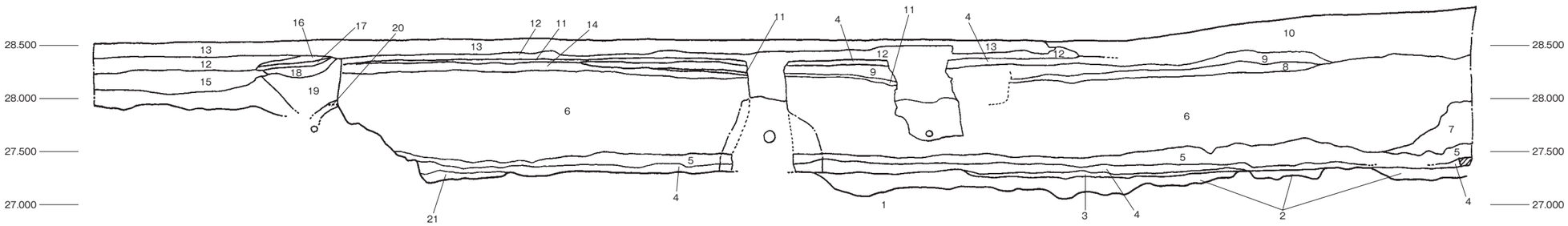
1　地山層
2　灰黒色土（小円礫を多く含む）
3　暗茶褐色土（黄粒多く含む）
4　灰茶褐色土
5　灰色土
6　黄茶褐色土（小円礫多く含む）
7　暗茶褐色土（円礫多く含む、瓦片、ごみ等を多く含む）
8　黄灰褐色砂質土
9　黄赤褐色土（花崗土）
10　砕石
11　アスファルト

図30　平塚古墳　トレンチ９　土層図（1/60）



1 地山層
2 淡茶褐色土（墳丘）
3 黄白色土（墳丘）
4 白色土（墳丘）
5 茶褐色土（墳丘）
6 黄茶褐色土（墳丘）
7 暗黄褐色土（墳丘）
8 黄灰褐色土（礫を多く含む）
9 黒色土（礫含む）（周濠）
10 黒色土（周濠）
11 黄褐色土
12 黄茶褐色土（かたい）
13 黄灰褐色土
14 黄茶褐色土
15 茶褐色土
16 灰褐色土
17 暗灰茶褐色土
18 瓦礫層
19 灰茶褐色土
20 黄茶褐色土
21 黄茶褐色土
22 黄灰褐色土
23 黄茶褐色土
24 暗黄茶褐色土
25 黄灰褐色土
26 黄褐色土
27 黄灰褐色土
28 暗茶褐色土（表土）
29 アスファルト
30 砕石
31 花崗土
32 花崗土
33 花崗土
35 黒灰色土（黄粒混）

図31　平塚古墳　トレンチ6－1、6－2　土層図（1/50）



1 橙褐色土（礫を多く含む）（地山層）
2 黒色土（1cm程度の礫を多く含む）（周濠）
3 暗灰茶褐色土（黄粒多く含む）
4 暗灰茶褐色土
5 灰褐色土（旧耕作土）
6 黄茶褐色土（10cm程度の円礫を多く含む）
7 灰茶褐色土（円礫含む）
8 黄褐色土
9 暗茶褐色土
10 暗灰褐色土
11 花崗土
12 砕石
13 アスファルト
14 暗灰茶褐色土
15 セメント
16 アスファルト
17 花崗土
18 砕石
19 花崗土
20 砂

図32　平塚古墳　トレンチ7－1、7－2　土層図（1/50）

調査の結果、地表下 70㎝、で旧耕作土層を確認した（図 28 の 4・5 層）。その下位は地山層であり、墳丘盛土が一切確認できない。墳丘が後世の土地利用で開削されるとともに、少なくとも標高 27.5mで地山層を認めることを確認した点が調査成果と言えよう。

・トレンチ６（平成 22 年度）

墳丘の西側で墳丘の一部と周辺のアスファルト道路下に、墳丘中心部方向に向かって幅 1.5m、長さ 16m で設定した。

調査の結果、道路下から約 90㎝で耕作土層を検出し（図 31 の 13 層）、さらに下位約 30㎝で地山層を認める（図 31 の 1 層）。トレンチ中央部では長さ 8.4mの範囲で黒色土を認め（図 30 の 9 層）、位置関係から周濠埋土の可能性を想定した。厚さ 20㎝ほどで、底面はほぼ平坦である。埋土は比較的多くの礫を含むが軟弱である。遺物は出土していない。

トレンチ東端部は見かけの墳丘裾部に相当する。当該箇所では地表下 1.4mまで後世の盛土が厚く堆積するが、かろうじて、墳丘盛土の可能性が高い埋土を検出した（図 31 の 2～7）。茶褐色土・黄白色土・黄茶褐色土で構成され、軟弱な土質となる。その下位は地山層となり、標高 27.2mを測る。元来、周濠は一定の深度を有していたと考えるが、後世の土地利用によって、顕著な削平が行われ、周濠の底部のみが遺存していると思われる。なお、地山層の標高は他のトレンチに比して、本トレンチが最も低い点は看過できない。27.2mという標高はトレンチ４の堤状遺構の内側の開削面と同数値を示し、墳丘西側が相対的に低い状況を考慮すると、元来当該箇所に堤状遺構が存在した可能性も否定できない。トレンチ東端部から 4m付近で、周濠埋土が消失する部分は、復元墳丘ラインに合致する。

また、平成７年度に隣接する保養施設の建設に伴う試掘調査で確認した溝状遺構については、二重周濠の一部である可能性を完全に否定するものではなく、継続的に注視しておく必要がある。

・トレンチ７（平成 22 年度）

墳丘東側のトレンチ６の延長線上の道路下に幅 1m、長さ 15m のトレンチを対置的に設定した。

調査の結果、地表下約 1.2m で耕作土を確認し（図 32 の 5 層）、さらに下位 50㎝で地山層を検出した。トレンチ西半部の 6.6mの範囲で黒色土が堆積し（図 32 の 2 層）、最深部で約 30㎝の厚みとなる。周濠の埋土は 1㎝程度の小円礫を多く含む黒色土で軟弱である。遺物は高坏の口縁部（図 34-8）がトレンチ排土中から出土している。

元来周濠は一定の深度を有していたが、耕地化に伴う削平により大規模に開削されたと考えられ、それを示唆するように、トレンチ東端付近では地山層が急激に立ち上がる（標高は 28.0m）。周濠埋土が途切れる箇所よりも東で立ち上がるが、その間は耕地化に伴う削平により地山層が消失したものと考えられる。なお、隣接するトレンチ３では標高 27.9mの地山層上位に盛土が施されており、本トレンチ設定箇所の地山層と同数値を示すことから、周濠深度は元来 1mほどあったと推測できる。

・トレンチ８（平成 22 年度）

トレンチ４で確認された地山を削り残した堤状遺構の範囲確認と堤状遺構から周濠への構造の確認を

目的として、トレンチ４の南側約 14m の墳丘裾部分に長さ 4m のトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ４ほどの規模ではないが、堤状遺構の存在を確認した。堤状遺構はトレンチ墳丘側で検出し（堤の内側は未調査）、幅約 0.8m、高さ 0.3m以上の規模で基盤層を削り残し（図 29 の 2 層）、その内側の掘り方内に盛土を施し（3～11 層）、トレンチ４と同様に掘り方より上部は盛土単位がやや荒くなる（16～20）。いずれも埋土は軟弱である。盛土からの遺物の出土は認められない。堤状遺構の範囲については墳丘の北西側（海側）のトレンチ４・８間の範囲に展開することは確実であり、可能性を含めると、トレンチ６まで広がるかもしれない。

また、堤状遺構の外方は緩やかに傾斜し、周濠に繋がる。周濠埋土は３層に大別でき、下層に黄灰褐色土（12 層）、中層に暗黒褐色土（13 層）、上層に灰茶褐色土（14 層）が堆積する。埋土は軟弱であり、遺物は出土していない。

なお、本トレンチにおいても現墳丘面は後世の造成土で構成されていることを確認した。

・トレンチ９（平成 23 年度）

墳丘裾部から連続する周濠の存在を確認したトレンチ８の延長線上に設定し、外縁部の立ち上がりを確認することを主目的に設定した（全長 4.2m）。

調査の結果、他のトレンチと同様に、地表下 1.0mまで耕地化に伴う削平を受けた状況を確認した（図 30 の 4 層）。トレンチ６・７で検出した黒色土は確認できず、後世の削平に伴って周濠埋土は消失したと考えられる。なお、トレンチ中央部で地山が外側に向かって緩やかに立ち上がる状況をかろうじて確認した（図 30 の 2 層）。トレンチ６・７で確認した周濠外縁ラインと概ね一致している。

②横穴式石室

・トレンチ１（平成 22 年度）

石室左側壁の前面において石室全長を確認する目的で 1.6m×1.4m のトレンチを設定した。

調査の結果、現在残存している左側壁の前面に側壁の続きは存在しなかった。ただし、石室玄門部付近の基底石はおおむね標高 29.0mを設置面としており、羨道部付近との大きな比高差は考えられず、本トレンチでは同標高付近には後世の改変が加わっている。加えて、後述する右側壁の状況を考慮すると、左側壁の現最前面の石材の前面には、元来羨門石が存在した可能性が高いと考える。

また、本トレンチでは石室下部の築造状況についても断割調査を実施した。側壁基底石の設置面は標高 29m 前後と考えるが、その下位１m以上の深度で入念な盛土が施された状況を確認した。地山層までの確認は行えていないが、標高 28m付近で安定した層位があり（図 22 の 1 層、基盤盛土）、その上部に墳丘盛土を施す。盛土は暗茶褐色土・黄茶褐色土・暗茶褐色土等を交互に設置しており、他のトレンチで確認した盛土とは異なり、10 層もの細分が可能な小単位で施工され、堅緻に叩き締められた盛土であり、版築と呼称しても違和感はない。石室付近の墳丘に限って、入念な盛土を施したと考えられる。さらに、そうした状況にも係らず、再度施工した盛土を開削してその内側に版築状の盛土を施し、墳丘盛土とは異なる黄色系の土を充填し、堅く叩き締めた状況も認める。いわゆる掘込地業と呼ばれる基礎工事に用いられる技法と評価でき、石室下部については、さらに入念な基礎工事というべき措置を行ったと考えられる。

なお、28m付近の安定した層位は緻密で堅く締まっており、付近の地山層とは異なるため、ここでは

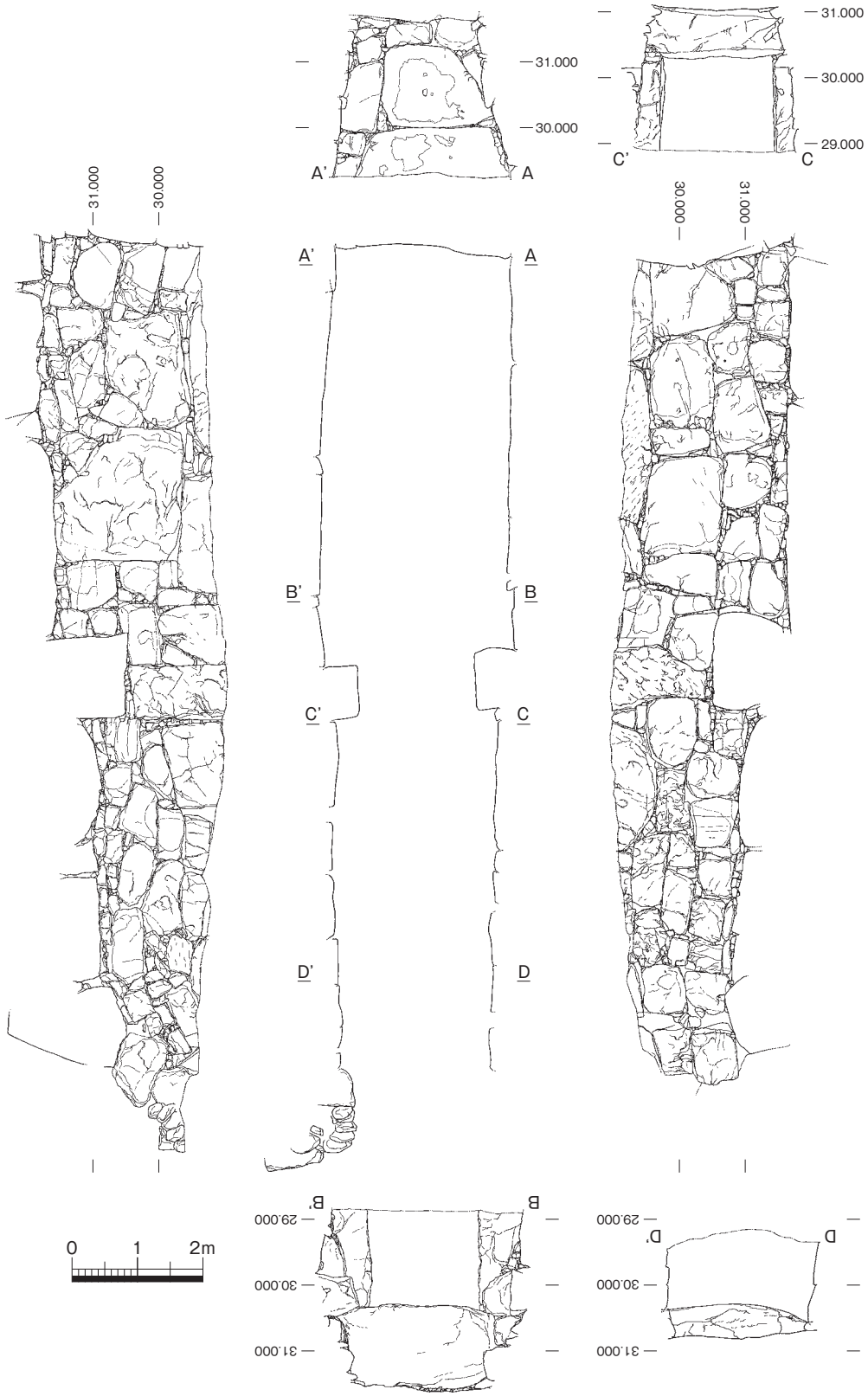


図33　平塚古墳　石室実測図（1/100）

基盤盛土と表現しておく（隣接するトレンチでは28m前後で地山層を確認）。
　また、本トレンチからの遺物の出土は確認できない。

・トレンチ２（平成22年度）
　トレンチ１と同様の目的で、石室右側壁入口付近に設定した。
　調査の結果、従前最前面と考えていた羨道部側壁の石材の前にもう１石設置された石材を確認することができた。独立した立柱石ではないが、羨道側壁より内側突出させて配置しており、羨門石と考える。また、羨門石の外側では30～50㎝前後の石材を二段分、小口積みした石積みを検出した。５石程度で構成され、平面的には緩やかな弧を描くように広がり、さらに、90°屈曲させて、先の石積みとは形状の異なる方柱状の石材を横積みする（トレンチの範囲内でこの石材に続く石材は認められない）。開口部や前庭部の構造を考える上では注意すべき内容を提示するが、現時点ではその性格については保留しておきたい。よって、石室全長については、羨門石を羨道右側壁の端と考え、13.2mとしておく。
　なお、トレンチ２の石室外部の列石付近から須恵器蓋坏の蓋が出土する（TK217式並行期）。

・石室の実測調査
　石室内部については、椀貸塚と同様に平成18年度の基礎調査開始以前までは詳細な資料が整備されていなかったため、平成19年12月から同年４月にかけて平板による地形測量と横穴式石室内部の実測を実施した（図 33）。床面は未調査であり、詳細報告ができないため、ここでは石室構造の概略について記すことに留める。
１　単室構造の横穴式石室で、全長は13.2㎜を測る。
２　玄門立柱石を内側に突出して配置する両袖式石室である。
３　玄室床面積は18.3㎡、玄室空間容積は41.3㎥、玄室天井高は2.6mを測る。（最下部での計測）
４　玄室平面形は矩形を呈する。
５　玄室幅は羨道幅より広いが、その幅差は僅少である。
６　左右の側壁は台形状を呈し（直線的に内傾）、段数は概ね４段積みである。
７　右側壁に比して左側壁は目地がとおり、整然と積まれる。
８　石材は上部ほど、小形化するが、基底石等には2mを越える大形石材が用いられる。
９　石材間の詰め土を１箇所のみ認める。右側壁の玄門部の羨道側壁と立柱石の間。
10　玄室の天井石は３石あり、奥壁から玄門部に向かって高さを減じる。
11　玄門天井石は玄室、羨道の天井石より一段低く高架される
12　玄門天井石は１石で構成され（鴨居石化）、玄門立柱石単独で保持できず、玄室側壁から支え用の石材を突出させて支持する。
13　羨道平面形は開口部に向かってわずかに幅を減じる。
14　羨道の天井石は３石あり、開口部に最も近い天井石はわずかに降下する。
15　羨道開口部には内側に突出した羨門石を認め、さらに性格の判然としない石積みが続く。
16　羨道長は玄室長に比して少し短い。
17　用材は一石の花崗岩を除き、和泉砂岩が用いられる。花崗岩は羨道部玄門側の天井石で使用。

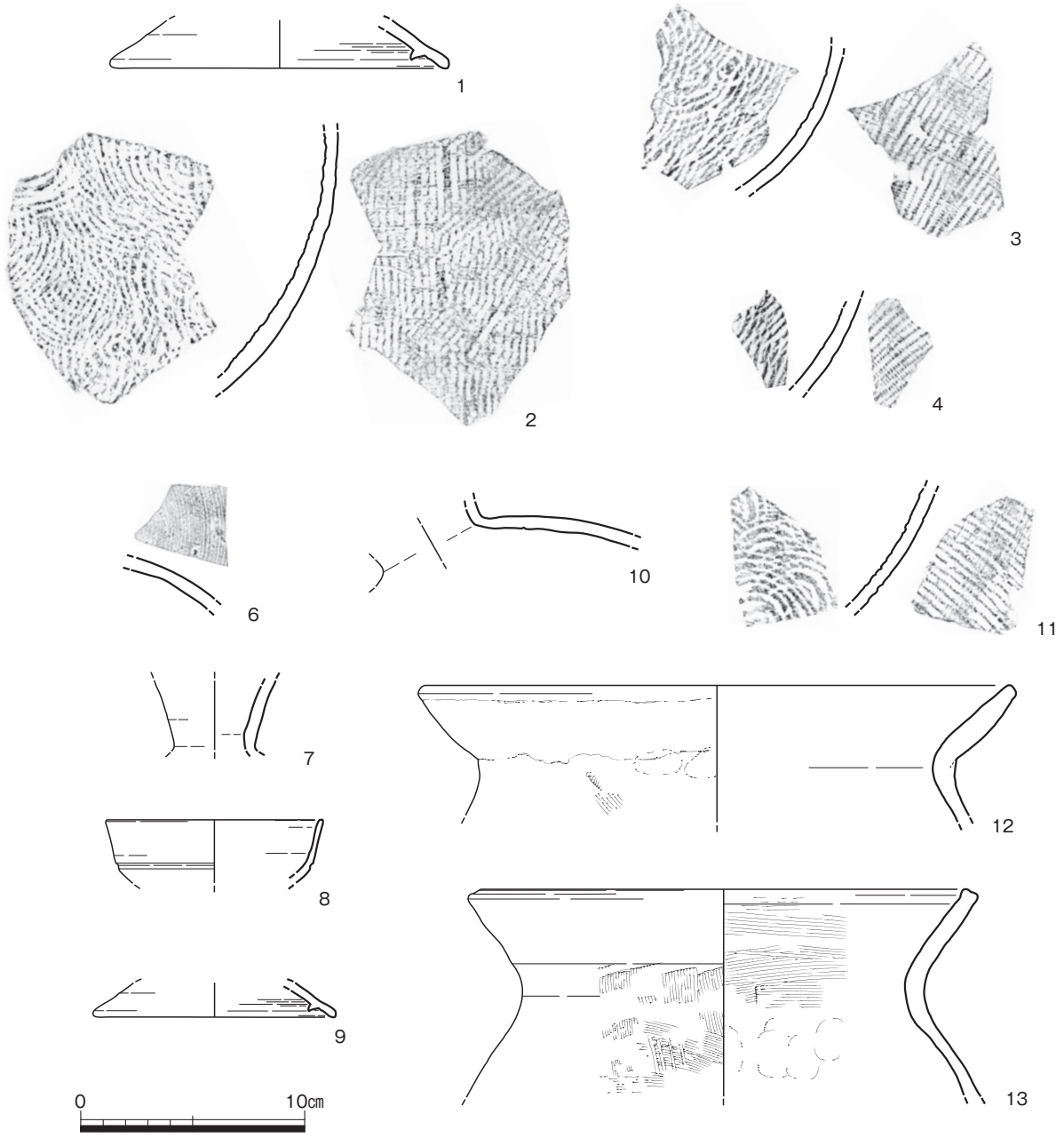


図34　平塚古墳　出土遺物実測図（1/3）

③出土遺物

石室床面は未調査であり、出土遺物は範囲確認のために設定したトレンチ及び表面採集によるもので、須恵器と土師器の 13 点で極めて少なく時期比定ができるものは限られている。

1 は蓋坏の蓋である。かえりが退化する。トレンチ２の石室外部の列石付近からの出土である。6 は外面にカキ目があり、提瓶の可能性が高い。トレンチ３からの出土である。8 は高坏の口縁部で沈線を一条認める。トレンチ７の排土中からである。10 は平瓶でトレンチ３からの出土である。13 は土師器の甕であり、赤褐色の内面外面ともハケ目が観察できる。同じくトレンチ３からの出土である。
2, 3, 4, 9, 11 は器種は特定できないが、甕の可能性が高い。内面には青海波文、外面には叩き後のハケ目を認める。9 は前庭部付近の表面採集であり、それ以外はトレンチ３からの出土である。

④小結

墳形・規模　直径 50.2mの円墳である。外周施設として周濠を有し、それを含めた範囲は径 66.7mに達する（讃岐最大規模の円墳）。その占有面積は約 3,490 ㎡を測る。周濠底と現墳丘頂部との比高差は約７mを測るが、大野原八幡神社の御旅所となる石垣の設置に伴って削平を受けていることから、元来の墳丘はもう少し高いものであったと推測できる。

なお、各トレンチで確認したように、現墳丘の外表部には大規模な後世の造成がなされており、現認できる墳丘は本来の墳丘面ではないが、おおむね現墳丘裾部に合致した位置で元来の墳丘裾部が確認できる。ただし、墳丘西側のスロープは秋祭りに際して、御旅所となる本墳頂部に檀尻や太鼓台が上がるために設置されたものである。

各トレンチで検出した墳丘裾部の位置から、古墳の中心点は奥壁と右側壁の隅角より奥側 1.4m の地点に求められ、墳丘プランはほぼ正円に復元できる。

外周施設　周濠が墳丘を巡る。後世の耕地化に伴って遺存状況は良好ではなく、多くのトレンチでは周濠底を確認したに留まるが、トレンチ４では墳丘面に沿って緩やかに傾斜する状況が確認できる。推定幅 8.4m、周濠底は平坦であり、幅広の浅い逆台形状に復元できる。深度は不明だが、墳丘裾部の地山層の標高（トレンチ３が 27.8m、４・８が 27.8m、６が 27.2m（５が 27.5m））、トレンチ７の外縁部の地山層の標高からは 1m程度に復元できる。

墳丘築造　堤状遺構と仮称したが、本墳では墳丘裾部の地山層を削り残して堤状の地形をつくり、開削した内側に盛土を施している。その幅はトレンチ４で 2m、トレンチ８で 0.8mを測り、内側の開削深度は、上面が削平を受けた数値であるが、トレンチ４で 0.6～0.7m、トレンチ８で 0.3mを測る。安定した地山層にも係らず、こうした措置を施しており、かつ内側に施工した盛土には開削した土が用いられる。加えて、施工した盛土は結果的には軟弱なものである。検出箇所は比較的旧地形が低い箇所に位置しており、現時点では盛土の流失防止を意図した土止め的な性格を付与しておきたい。ただし、墳丘盛土を施した地山層の標高で旧地形を推測すると、墳丘の東側のトレンチ６が最も低くなるが、当該箇所では堤状遺構は確認できない。もっとも、耕地化に伴う削平が顕著な箇所であり、周濠の位置関係を考慮すると、墳丘裾部付近に同様の施設が所在した蓋然性は高いと考える。

また、石室開口部に設定したトレンチ１では、他地点とは異なり、極めて堅緻に施工された盛土を検出した。5㎝ 程度の小単位を版築と呼称しても可能なほど堅く叩き締めており、明らかに堤状施設に伴う盛土とは構築技術が異なる。さらに、下位の確認は行えていないが、想定される地山層から 0.5mほ

ど上部で基盤盛土と仮称した堅緻な盛土を検出している。加えて、石室方向に向かって掘込地業がなされた状況も確認でき、石室下部ではより丁寧かつ入念な盛土が施される。

一方、堤状遺構に伴って施工された盛土には大量のクロボク土が用いられる。おおむね 2～10cm 単位で、クロボク土と明黄褐色土・暗灰褐色土等を相互に置きながら、墳丘を築造するが、盛土は堅緻なものではなく、逆に軟弱な状況を呈する。先行する母神山古墳群の各墳の盛土は固く締まっており、当地域が版築状に墳丘盛土を施工する技術を保有しなかったとは考えられず、墳丘表面に葺石を設置しない点を考慮すると、黒い外観を意識した可能性すら想起される。

表面観察では葺石や段築は確認できないが、墳丘表面には後世の造成土が加えられており、元来の設置の有無は判然としない。

出土遺物　石室内の調査を実施していないため、現時点では墳丘に設定したトレンチ出土遺物に限られる。確実に時期比定が可能な遺物は、石室外部の石積み付近が出土した須恵器である（蓋坏の蓋、図 34 の１）。かえりが退化しており、TK217 式並行期に属する。高坏口縁部（図 34 の８）、平瓶（図 34 の 10）等も参考となるが、そこまで下る資料ではないと考える。

なお、本墳の所属時期は石室形態や他墳との関係等も考慮して、総括で検討を加えたい。

（3）角塚古墳

①墳丘・周濠

・トレンチ１（平成 23・24 年度）

左側壁における石室全長把握を意図し、石室開口部の前面に設定した。

調査の結果、羨道の延長部において羨道を構成する石材一石を新規に確認した。従前、地表面では確認できなかった石材で、一辺１m前後、高さ 1.5mの方柱状を呈し、内面は羨道左側壁の基底石ラインに合致する。標高 28.2mの地山層上に設置されており、確認した限りでは掘り方は認められない。さらに、その前面に接するように、地山面で石材の抜き取り跡のような遺構を検出した（図版 54-2）。前述した石材が設置された地山層は当該箇所まではほぼ水平に広がり、その南側で落ち込むが（新規確認石材から南へ 0.9mの地点）、本遺構は水平面で検出しており、羨道開口部の石材の抜き取り痕である蓋然性は高い。石材の形状は不明だが、掘り方は前述した石材より明らかに内側に位置し、推測の域を出ないが、内側に突出した羨門石が設置された可能性も想定できる。図 36 で提示した土層図では、3～5 層が抜き取り跡の埋土と考える。ただし、実証性に乏しく、現時点では新たに検出した石材を羨道最前部の石材と捉え、全長 12.5mと考えておきたい。なお、抜き取り痕の調査は行っていないが、上面より蓋坏の蓋が出土した（図 49-１）。

また、本トレンチでは図 36 の２層を除き、いずれも後世の盛土であることが判明した。他のトレンチでも厚い造成土を確認しており、２段築成を想起させる墳丘中位の平坦面は、昭和時代（戦後）の複数回に及ぶ造成に伴って形成されたと判断できる。ここでは現墳丘、特に段築状の平坦面や墳丘中位の段は後世の改変に伴うものであり、本来の墳丘形状を反映するものではないことを強調しておきたい。２層については、石室構築と並行した盛土ないし石室構築に伴う裏込土と考えたい。なお、開口部前面における地山層の落ち込みは、想定される周濠とは距離が離れており（周濠内側の肩部は新規確認石材から約５mに位置）、前庭部の構造等を含め、今後の課題となる。

・トレンチ２（平成 23 年度）

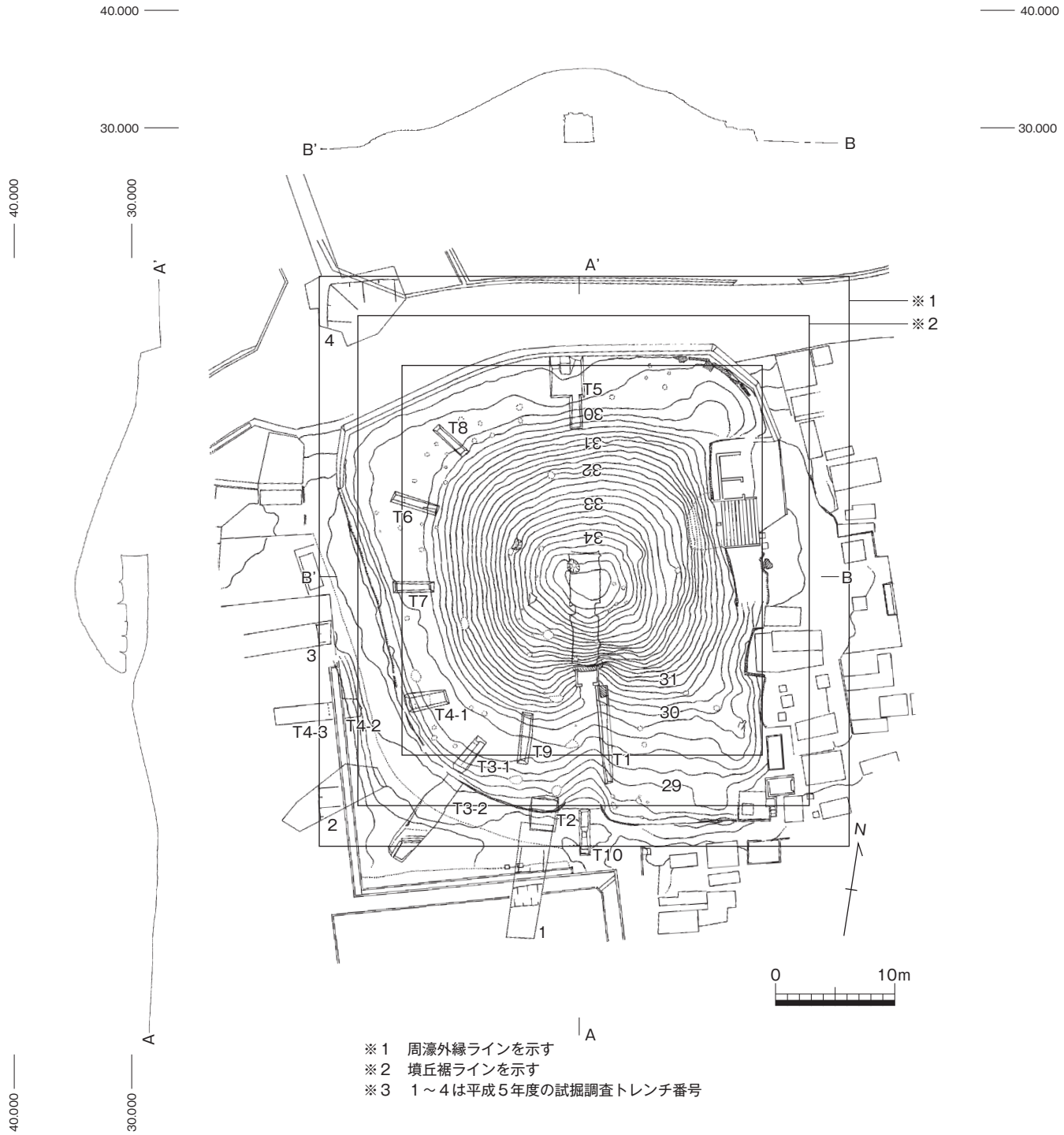
墳丘南側、開口部前面の平坦面の下位に築かれた石垣からその脇にある通路にかけて設定したトレンチである。

調査の結果、本トレンチで検出したすべての土層は、昭和時代の造成土であることが判明した。石垣を伴う段差は旧状を反映する可能性も想定したが、後世の造成に伴って形成されたものであった。周辺のトレンチの状況から、トレンチ設定箇所は周濠部分に相当することが明らかであり、大量の土砂でその窪みを埋め戻した状況と理解できる。なお、石垣近くの通路において、地表下約 2m（標高 25.9m）の深度で、部分的ではあるが、周濠底部面（地山層）を確認した。

・トレンチ３（平成 23 年度）

墳丘南西側の平坦面にトレンチ 3-1（全長 3.3m）、その方向で延長した箇所にトレンチ 3-2（全長 8.5m）を設定した。

3-2 東側土層面では周濠肩部を検出した。上面は耕地化に伴って削平を受けて盛土は消失するが、地山層から明瞭な変換点を伴って落ちる周濠を確認した（傾斜角度約 35°）。周濠には下層に黒褐色土（図 38 の７層）、上層に礫層が堆積するが（８層）、後者は後世の造成土となる。７層は黒褐色土で軟弱であ



※1　周濠外縁ラインを示す
※2　墳丘裾ラインを示す
※3　1～4は平成5年度の試掘調査トレンチ番号

図35　角塚古墳　墳丘測量図・トレンチ配置図（1/500）

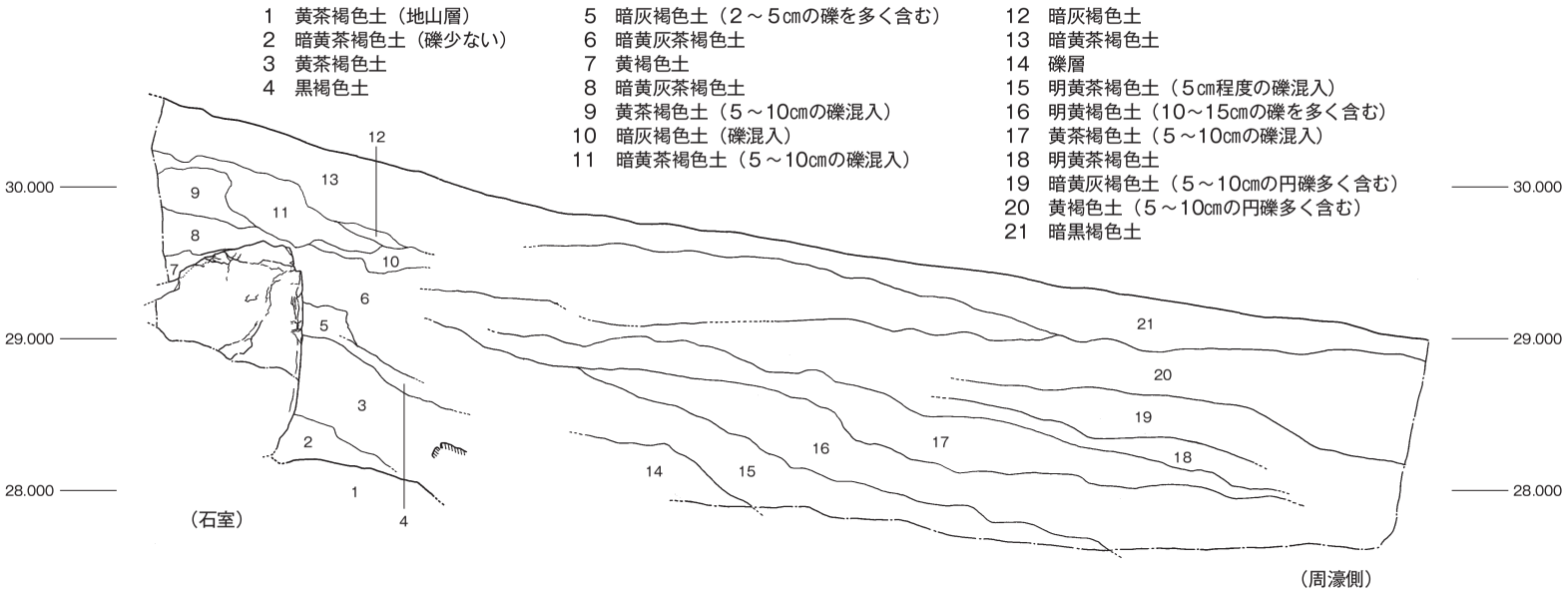


図36　角塚古墳　トレンチ1　土層図（1/50）

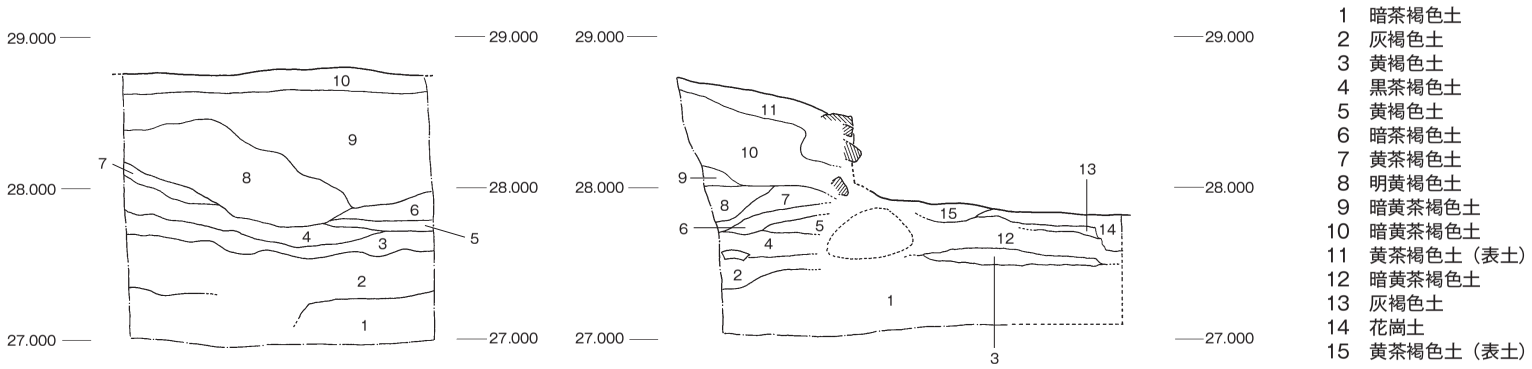
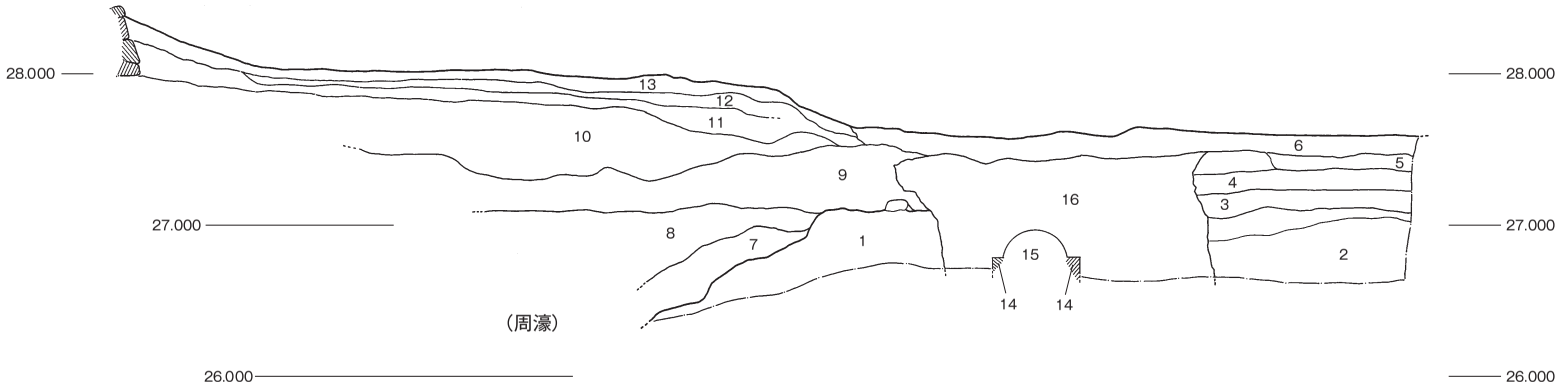
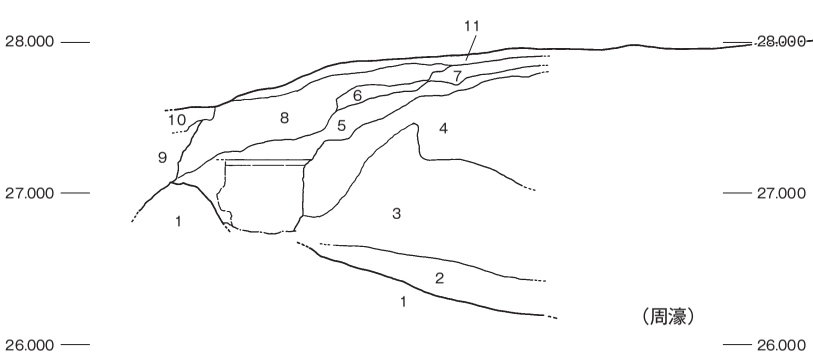


図37　角塚古墳　トレンチ2　土層図（1/50）



1　暗黄褐色土（地山層：２０ｃｍ程度の円礫含む）
2　暗黄褐色土（地山層：２０ｃｍ程度の円礫含む）
3　暗灰褐色土（耕作土）
4　花崗土
5　花崗土
6　砕石
7　黒褐色土
8　礫層（５～１０ｃｍの円礫）
9　暗灰茶褐色土
10　暗黄茶褐色土（５～２０ｃｍの礫が主体）
11　黒褐色土
12　花崗土
13　表土
14　コンクリート
15　排水管（ヒューム管）
16　花崗土

図38　角塚古墳　トレンチ3－2　土層図（1/50）東側



1　暗黄褐色土（地山層：２０ｃｍ程度の円礫含む）
2　黒褐色土
3　礫層（５～１０ｃｍの円礫）
4　暗茶褐色土（５～ 10ｃｍの円礫を多く含む）
5　暗茶褐色土
6　花崗土
7　花崗土
8　黄茶褐色土（３～５ｃｍの小円礫を多く含む）
9　黄褐色土（割石を多く含む）
10　砕石
11　表土

図39　角塚古墳　トレンチ3－2　土層図（1/50）西側

る。礫の包含はほとんど無く、８層とは明瞭な差がある。

同 3-2 の西側土層面では周濠外縁部に向けて緩やかに立ち上がる周濠底を検出した。トレンチ南端部は大きく開削され、外縁部は確認できない（図 39 の９・10 層）。周濠埋土の大部分は後世に埋め戻した礫層だが（３・４層）、底面には元来の周濠埋土を認める（２層）。埋土は黒褐色土で軟弱である。礫層中より須恵器が１点確認されているが、後世の埋戻しであるので本古墳のものである可能性は低い。

・トレンチ４（平成 23 年度）

墳丘西側に設定したトレンチである。墳丘の構造及び周濠の位置等の確認を目的として設定した。トレンチ 4-1 は 3.3m、トレンチ 4-2 は 1.2m、トレンチ 4-3 は 5m を測る。

4-1 では墳丘盛土を良好な状況で検出した。地表下 1.8m、標高 27.9mの地点で平坦に整形された地山層を認め、その上部に茶褐色土・黄白色土・黄褐色土等の盛土が施され（図 40 の２～４層）、黒色土を経て（６層）、黄茶褐色土・黄褐色土・黒色土（８～10 層）が盛土される。盛土の単位は比較的小さいが、総じて軟弱な状況を呈する。６層より上位の盛土に比して、下位の盛土はやや堅緻である。黒色土（６層）は数 cm 程度の厚みで、他の盛土とは一見して異なるものである。後述するトレンチ８では、ほぼ同標高で平坦な地山層を認め（標高 28.1m）、その直上で酷似した黒色土を検出しており（図 45 の２層）、黒色土は古墳の築造単位を考える上でのキー層位と考えられる。

また、本トレンチでは墳丘から周濠に連続する落ち込みも確認した。緩やかに傾斜するが、27.2m付近に変換点を認め、墳丘と周濠の境と判断した。周濠の上部は後世の造成土で埋め戻されるが（７・13～19 層）、下位には元来の埋土が堆積する（図 40 の 11・12 層）。埋土は暗黒褐色土で礫の混入は少なく軟弱である。遺物の出土は無い。

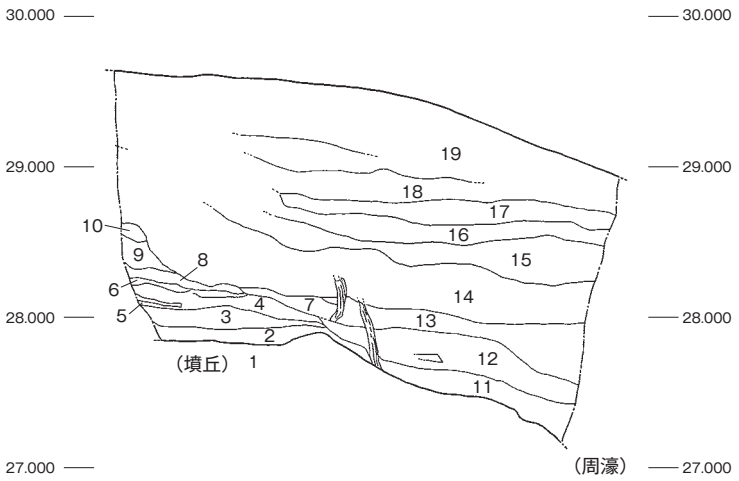
4-2 では地表下 1m の深度で周濠埋土の一部をかろうじて確認したが（図 41 の１・２層）、それ以外の土はすべて後世の造成土である。

4-3 では標高 27.2mで地山層を確認するとともに、周濠外縁部を検出した。周濠埋土は礫を多く含む黒色土であり、後世の造成土ではない。墳丘側の 4-1 では標高 27.9mで地山層を検出しており、本トレンチとは 0.7mの比高差を認める。旧地形を反映、後世の削平等、様々な要因が想定できるが、現時点では判断できない。

・トレンチ５（平成 24・25 年度）

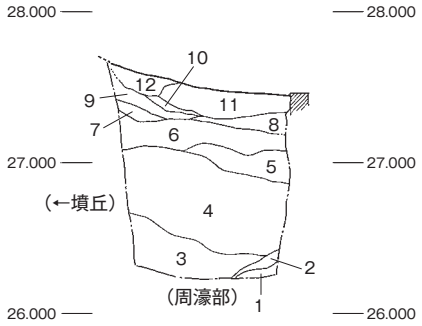
墳丘北側、石室主軸を延長した箇所に設定した。平成 24 年度に幅 1m、長さ 4.5m の規模で調査し、翌年度に補足調査を実施した（3.5×2.8m）。

調査の結果、元来の墳丘面の可能性が高い傾斜面を確認した。トレンチ中央から北側では傾斜角度は約 30°を測るが、トレンチ南側の墳丘上方側では傾斜は緩やかになる（標高 29.6m前後）。北端部は周濠底に近接した箇所となるが、調査範囲内では濠底は検出できない。今回の一連の調査では可能な限り平面検出に留めたが、標高 27～28m付近の想定墳丘面には多く礫を包含しており、周濠埋土との関係が峻別できないため、一部ではあるが、盛土状況を確認するために断割調査を行った。地山層は標高 26.9m で確認できる。墳丘内の状況は判然としないが、断割部分で検出した角度を維持しながら、２m ほどは墳丘側に延びる可能性が高い。地山層の直上には黒色土があり（図 44 の２層）、比較的細かな単



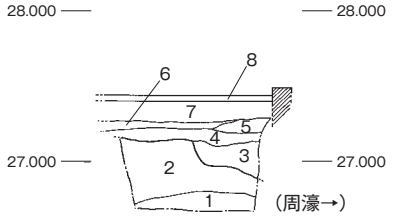
1　黄褐色土（1～2cmの円礫混）（地山層）
2　茶褐色土
3　黄白色土
4　黄褐色土
5　茶褐色土
6　黒色土
7　黒色土
8　黄茶褐色土
9　黄褐色土
10　黒色土
11　暗黒褐色土
12　黄茶褐色土
13　暗黄灰褐色土
14　黄茶褐色土（礫混入）
15　礫層（3～5cm）
16　暗茶褐色土（礫多く含む）
17　黄褐色土
18　暗茶褐色土
19　暗茶褐色土（礫多く含む）

図40　角塚古墳　トレンチ4－1　土層図（1/50）



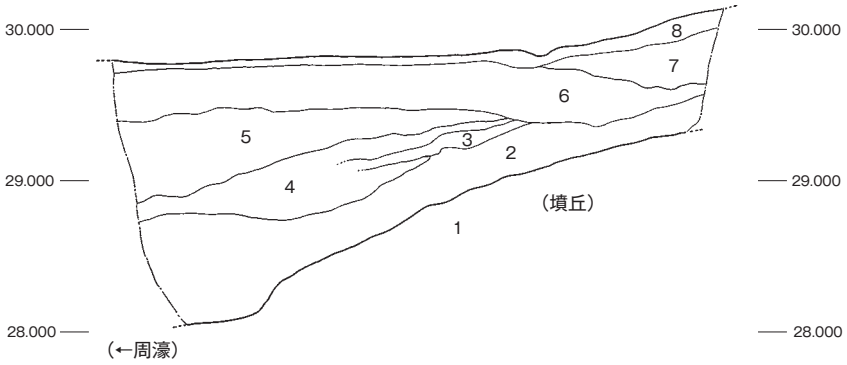
1　黄茶褐色土
2　黒色土
3　暗茶褐色土
4　暗黄茶褐色土
5　暗黄灰褐色土
6　暗灰茶褐色土
7　黄褐色土（花崗土）
8　砕石層
9　暗茶褐色土
10　花崗土
11　砕石層
12　黄褐色土（花崗土

図41　角塚古墳　トレンチ4－2　土層図（1/50）



1　砂質土
2　地山層
3　黒色土（礫を多く含む）
4　黄茶褐色土
5　砕石層
6　黄褐色土
7　砕石層
8　アスファルト

図42　角塚古墳　トレンチ4－3　土層図（1/50）



1　暗茶褐色土（墳丘）
2　暗黄灰褐色土（5～10cmの礫多く含む）
3　赤褐色土
4　暗茶褐色土
5　暗黄茶褐色土（5～10cm礫多く含む）
6　黄茶褐色土（2～5cmの礫多く含む）
7　暗黄茶褐色土
8　腐植土（表土層）

図43　角塚古墳　トレンチ6　土層図（1/50）

位の盛土を経て（３～７層）、上部には拳大からその２倍程度の礫を多く包含する盛土を認める（８・９層）。黒色土は地山層直上にあり、標高は異なるものの、トレンチ４の６層と同等の性格を付与することができる。隣接するトレンチ８との地山検出レベルとの差異が問題となるが、トレンチ８は本トレンチより設定位置が高いため、標高 28.1mで地山層とその直上への黒色土設置が確認でき、トレンチ５でも８と同標高付近では地山層が平坦化している可能性は高いと考える。よって、前述したように、２mほど墳丘内側に入り込んだ標高 28m付近で地山層が平坦に整形され、上部黒色土が施された状況を想定した。黒色土上部の盛土は暗茶褐色土を交互に積み重ね、それを被覆するように黄褐色土や茶褐色の肌理の細かい土が用いられ、緩やかに傾斜する地山層に沿って斜めに施工される。さらに、上部に墳丘面と想定した８・９層を設置する。この段階の盛土は地山形状に沿うものではなく、墳丘面を整えつつ、その傾斜角度に沿って同じ厚みで設置された可能性が高い。その表面は堅く叩き締められているため、墳丘面と判断した。なお、遺物の出土はない。

なお、墳丘面より上位の層位は、主に昭和時代の造成土であった。従前、北側を走る市道によって墳丘は大きく開削された状況を想定していたが、逆に墳丘は厚い造成土で被覆された状況であった。付近の古老からは、幼少期には古墳の斜面は急勾配であり、両手をついて登ったという証言を得ており、検出状況に合致する。

・トレンチ６（平成 24 年度）

墳丘西部、北寄りに設定したトレンチである。

調査の結果、トレンチ５と同様に墳丘面と考える傾斜面を確認した。図 43 の１層の上面ラインが墳丘面に対応し、以高は後世の盛土となる。表面は極めて堅く叩き締められており、墳丘面と判断した。トレンチ５と同様に、本トレンチの上方は傾斜が鈍くなっており、叩き締められた表面等、共通した内容を認める。

また、トレンチ西端付近で傾斜変換点を認め、周濠の墳丘側の肩部と考えた。墳丘北側のトレンチ５では墳丘斜面部北側に本トレンチほどではないが傾斜の変換点を認めることができるので、墳丘斜面から周濠への肩部と判断した。

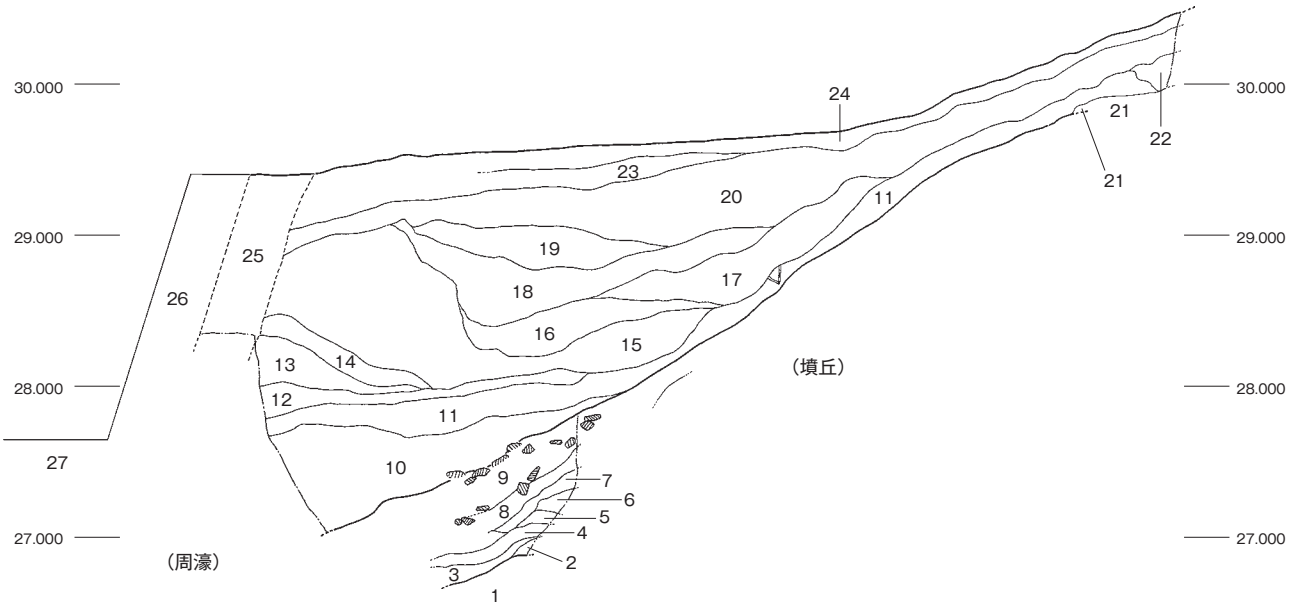
・トレンチ７（平成 24 年度）

墳丘西部、平成 23 年度で確認したトレンチ 4-1 とトレンチ６との間にある平坦面に設定したトレンチである（3.6m）。両トレンチの内容をその間隙で追認することを主目的として設定したが、予想に反して大きく開削された状況であった。

・トレンチ８（平成 24 年度）

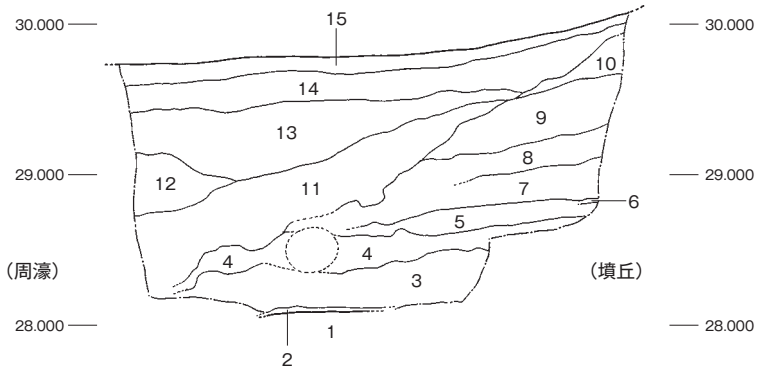
墳丘北西部、トレンチ５とトレンチ６の間に設定したトレンチである（3.4m）。

調査の結果、墳丘盛土の施工状況を良好な状態で確認することができた。標高 28.1mで平坦に整形された地山層を認め、直上の黒色土を経て（図 45 の２層）、以高比較的荒い単位の盛土を認める（３～10 層）。３・４層はぼそぼそとした軟弱な盛土であるが、５～９層は比較的堅緻であり、その表面はトレンチ５・６と同様に叩き締められた状況を呈する。黒色土は厚さ２cm と薄く、盛土というよりは、灰層と表現した方が適切であり、トレンチ 4-1・５で検出した黒色土と同等の性格と考える。なお、黒色土



1　地山層
2　黒色土
3　暗黒茶褐色土（小円礫混入）
4　暗黒茶褐色土
5　暗茶褐色土（小円礫混入）
6　黒色土
7　黄茶褐色土（小円礫混入）
8　暗茶褐色土
9　黄茶褐色土（10㎝程度の円礫混入）
10　暗茶褐色土（礫混入少ない）
11　黄茶褐色土
12　暗茶褐色土
13　暗灰茶褐色土
14　コンクリート混入土（やわらかい）
15　小円礫層
16　黄茶褐色土（灰を多く含む）
17　円礫層（５～10㎝程度）
18　灰に炭細片が多く混入する層
19　黄褐色土
20　黄褐色土（炭の細片を多く含む）
21　黒色土
22　黄茶褐色土
23　灰褐色土（ガラス、ビニール、陶器片、プラスチック等を多く含む）
24　表土層
25　控積みの礫層（20㎝程度のものが多い）
26　コンクリートブロック
27　アスファルト舗装道路

図44　角塚古墳　トレンチ５　土層図（1/50）



1　黄褐色土（地山層）
2　黒色土（墳丘）
3　暗黄灰茶褐色土（10㎝の円礫多く含む）（墳丘）
4　黒色土（墳丘）
5　暗黄茶褐色土（墳丘）
6　黒色土（墳丘）
7　明灰褐色土（5～10㎝の円礫を多く含む）（墳丘）
8　明灰褐色土（5～10㎝の円礫を多く含む）（墳丘）
9　明黄褐色土（5～10㎝の円礫を多く含む）（墳丘）
10　暗黄茶褐色土（墳丘）
11　暗黄茶褐色土
12　黄褐色土（5～10㎝の円礫を多く含む）
13　黄褐色土
14　黄茶褐色土
15　腐植土（表土層）

図45　角塚古墳　トレンチ８　土層図（1/50）

は地山層直上にのみ施されるものではなく、本トレンチではその上位に設置された盛土にも認めるが（４層）、前述した黒色土とは厚みや構成土が明らかに異なる。

また、標高 29.4mより下位の盛土傾斜面は約 30° の傾斜角度だが、それより上部は鈍くなる。こうした特徴はトレンチ５・６でも確認でき、盛土の施工状況は異なるが、表面が堅く叩き締められた状況を呈することから、10・11 層の下面は元来の墳丘面と考えておく。

・トレンチ９（平成 24 年度）

墳丘南側の斜面から平坦部にかけて設定したトレンチである（4.5m）。墳丘南側で設定したトレンチ２、3-1 では墳丘盛土の状況が良好に確認できなかったため、その内容把握を主目的に追設定した。

調査の結果、墳丘北ないし西側とは異なる施工状況の盛土を確認した。地山層は確認できないが、盛土は下部ではほぼ水平に設置され（図 46 の３～５層）、標高 29m前後の墳丘上部側では斜め方向に施される（８～13 層）。６・７層は土層図では前述した盛土を開削した後世の改変に伴う埋土のように見えるが、堅く締まっており、現時点では盛土と判断している。明らかに墳丘西側や北側とは盛土状況が異なり、旧地形や石室開口部前面の関連施設の存在等、様々な要因が考えられるが、現時点では判然としない。なお、本トレンチでは標高 27.6mで地山層は確認できない。よって、トレンチ９を含めた墳丘南側の盛土内容については、今後の課題となるが、現時点では墳丘南面では、下部の水平盛土と上部の斜め盛土が基本的な盛土構造であり（墳丘北側と同構造）、局所的に６・７層のような盛土を施した状況を想定しておきたい。

また、15 層の黒色土は他のトレンチで確認した地山層直上の黒色土ではなく、墳丘盛土を構成する盛土と考えたい。それ以高は後世の造成土となる。

・トレンチ 10（平成 25 年度）

墳丘南側、石室開口部正面南側の通路部分に石室主軸に平行して設定したトレンチである（3.8m）。墳丘南端部を画する周濠外縁部の確認を主目的とした。

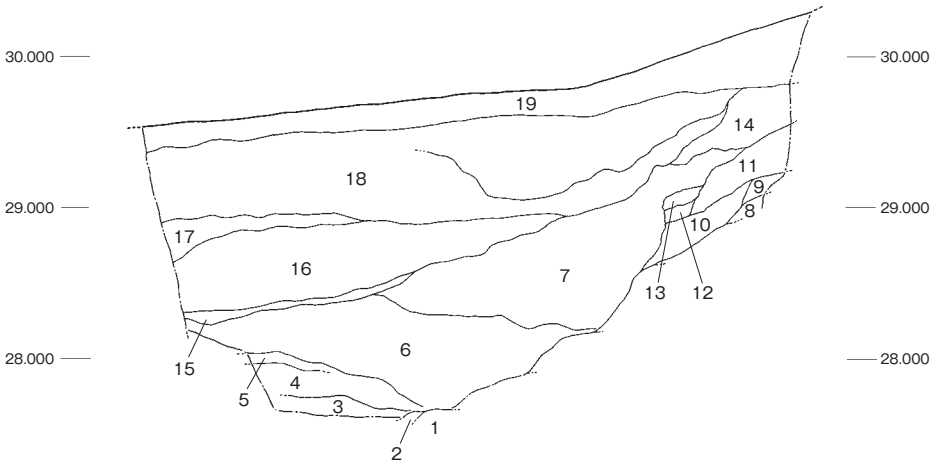
調査の結果、周濠の外縁部は後世の改変で失われるが（配管設置工事）、外縁部に向けた周濠の立ち上がり及び周濠埋土を確認した。検出した立ち上がりの角度と他のトレンチにおける墳丘外の地山層レベル等を考慮すると、外縁部は標高 27.4m、配管工事で設置されたヒューム管の右上方付近に求められる。周濠埋土は図 47 の 12 層であり 10～20cm の礫を多く含む黒色土が堆積している。なお、出土遺物は確認できなかった。

・過去の調査

平成５年度に、大野原中央公園造成工事に伴う角塚古墳の確認調査が大野原町教育委員会によって実施され（大野原町教育委員会　『角塚　―大野原町中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告―』1995 年）、墳丘西側及び南側にトレンチが設定されている。図 35 の１～４トレンチが角塚古墳周辺に設定されたトレンチである。今回の調査に際してもその調査成果を参照としており、ここでその概要を記す。

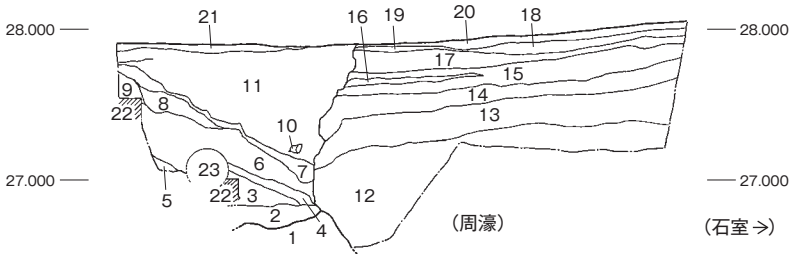
１トレンチ

墳丘南側に設定。トレンチ南側で時期不明の溝１条、トレンチ北半部で北に大きく開削された落ち込み肩部が検出されている。後者は近代の遺物を包含する礫層だが、疑問を残すものの角塚古墳の南側を



1　黄灰茶褐色土（墳丘）
2　暗茶褐色土（墳丘）
3　明黄褐色土（墳丘）
4　暗黄褐色土（墳丘）
5　暗茶褐色土（墳丘）
6　黄茶褐色土（小円礫を多く含む）（墳丘）
7　暗黄茶褐色土（墳丘）
8　明黄褐色土（小円礫を含む）（墳丘）
9　黄褐色土（墳丘）
10　暗黄灰褐色土（墳丘）
11　黄茶褐色土（墳丘）
12　暗黄茶褐色土（墳丘）
13　暗黄茶褐色土（墳丘）
14　黄茶褐色土（墳丘）
15　黒色土（墳丘）
16　黄褐色土（礫を多く含む）
17　茶褐色土
18　かく乱層
19　暗茶褐色土

図46　角塚古墳　トレンチ９　土層図（1/50）



1　地山層（黄褐色土：２０ｃｍ大の礫を含む）
2　細石層
3　暗茶褐色土
4　花崗土
5　花崗土
6　暗茶褐色土
7　花崗土
8　暗茶褐色土（花崗土混入）
9　花崗土
10　缶コーヒーの缶（K2 01 940930）
11　かく乱層
12　黒色土（１０～２０ｃｍの礫を多く含む）
13　暗茶褐色土
14　黄茶褐色土
15　暗黒褐色土
16　花崗土
17　花崗土
18　暗茶褐色土（小円礫混入）
19　黒色土
20　花崗土
21　花崗土
22　コンクリート
23　排水管（ヒューム管）

図47　角塚古墳　トレンチ10　土層図（1/50）

画する周濠外縁部と評価されている。ただし、今回の調査で検出したトレンチ10の周濠埋土とは堆積状況や構成土が異なり、積極的に周濠と評価することはできない。

２トレンチ

墳丘の南西部、想定される周濠の外縁部に設定。耕地化に伴って上面は削平を受けるが、地山層（灰褐色砂礫層）と周濠外縁部と立ち上がりが検出されている。周濠深度は 1.7mを測る。埋土は上層に灰色礫層が厚く堆積し、濠底に沿って黒色粘質シルトが堆積する。周濠の堆積状況は今回の調査で検出した周濠の内容に合致する。

３トレンチ

墳丘西側中央部に設定。トレンチ東端部で周濠埋土と考えられる黒色土が検出されている。

４トレンチ

墳丘の北西側、市道を挟んで北側に設定したトレンチ。地表下 0.8mで黄色礫混じりシルト層（基盤層）を認め、直角に屈曲する周濠外縁部が検出される。深度は2.3mを測り、埋土は３層に大別される。上層は礫層で埋め戻した造成土で、中層は黒色砂質土、下層は地山ブロックや礫を含む灰褐色礫混じりシルト層となる。周濠埋土は今回の調査で検出した状況に共通する。

以上、平成５年度の調査概要についてその概要を記したが、２・３・４トレンチの周濠外縁部の検出状況は角塚古墳の墳丘プランを復元する上で参考になる。ただし、１トレンチで検出した周濠については、埋土が隣接するトレンチ10とは状況が異なり、周濠外縁部とは首肯できない。

②横穴式石室

角塚の石室内部に関する資料は、従前、詳細な資料が整備されていなかった。そこで、平成 20 年 5 月から同年９月にかけて平板による地形測量と横穴式石室内部の実測を実施した。床面は未調査であり、詳細を報告するができないため、ここでは石室構造の概略について記すことに留める。

1　単室構造の横穴式石室である。
2　トレンチ１で検出した石材を最前面の石材とすれば、全長は12.5m を測る。
3　玄門立柱石を内側に突出して配置する両袖式石室である。
4　玄室床面積は10.1 ㎡、玄室空間容積は25 ㎥、玄室天井高は2.4m を測る。（最下部での計測）
5　玄室平面は矩形を呈する。
6　玄室幅と羨道幅はほぼ等しい。
7　側壁の断面形状は矩形を呈し。段数は１段積みとなる。
8　奥壁と右側壁はほぼ一石、左側壁は二石で構成され、石材の大形化が顕著である。
9　玄室の天井石は２石あり、奥壁から玄門部に向かってわずかに高さを減じる。
10　玄門天井石は羨道天井石と一体化し、前壁高は低く、羨道天井高との段差も認められない。
11　羨道平面形は開口部に向かってほぼ直線的に延びる。
12　羨道の天井石は３石あり（開口部に１石存在した可能性も残る）、ほぼ水平に高架される。
13　現時点での羨道開口部の石材は内側に突出するものではない。ただし、抜き取り痕に羨道石材が設置されていたと仮定すれば、内側に突出する羨門石であった可能性が高い。
14　玄室に比して、羨道は長く、その長さは２倍近い数値を示す。
15　玄室用材の多くは花崗岩だが、羨道は天井石を除き、すべて和泉砂岩である。

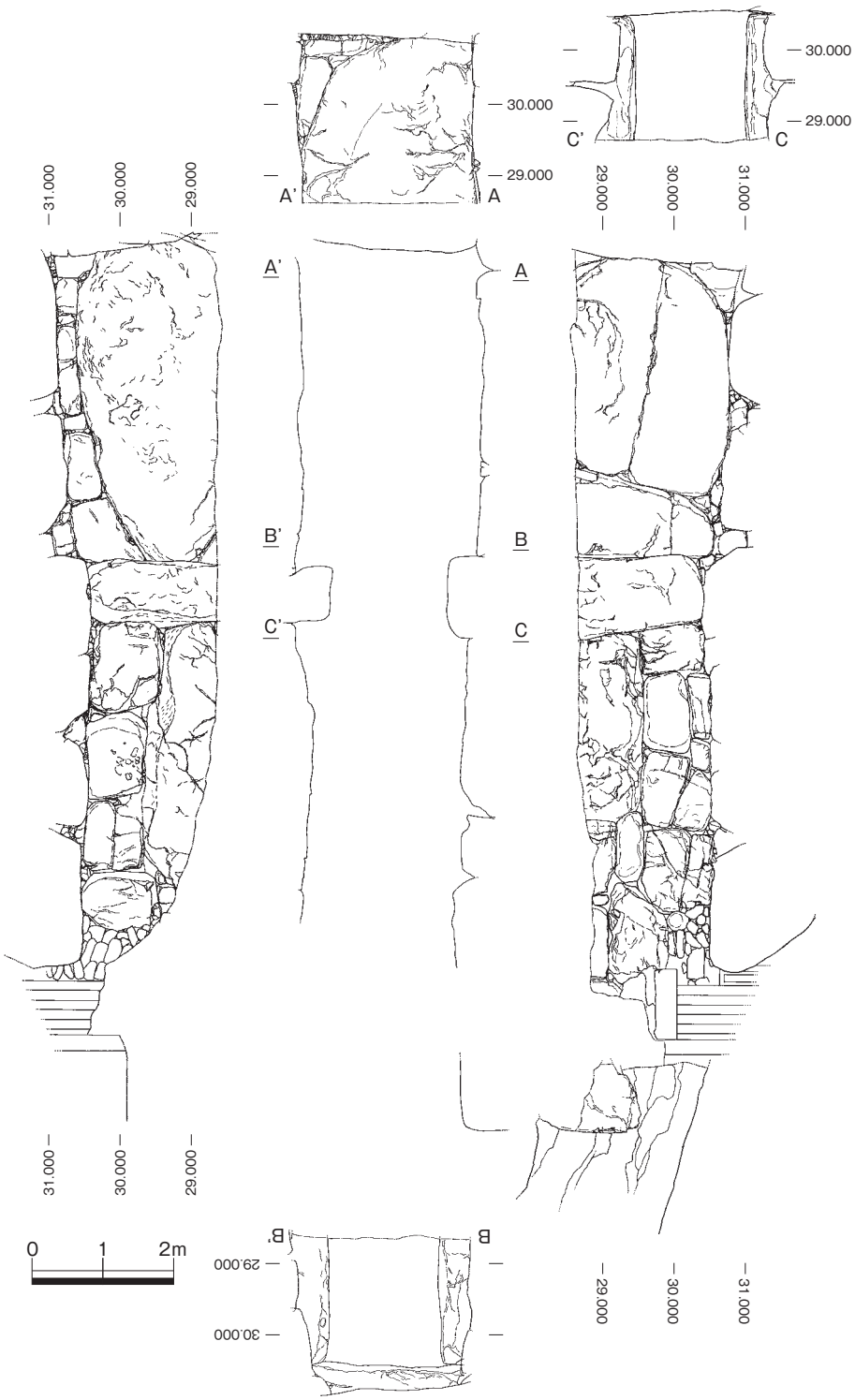


図48　角塚古墳　石室実測図（1/100）

③出土遺物

石室床面は未調査であり、出土遺物は範囲確認のために設定したトレンチ及び表面採集によるもので須恵器が 23 点である。

図 49 の１は蓋坏の蓋である。つまみは欠損するが、内側にはかえりがあり、TK217 式並行期に属する。トレンチ１の羨道部前面の石材の抜き取り痕から出土したもので、古墳の築造時期を考える上では重要な指標となる。5, 13 は蓋坏の身である。5 の立ち上がりは矮小化したものであるが、5 は表面採集で 13 は昭和時代の盛土であるため、混入品の可能性を残す。2, 4, 6, 7, 14, 16, 17, 18, 20, 22, 23 は器種は特定できないが、甕の可能性が高い。内面には青海波文、外面には叩き目とハケ目を認める。4, 20 は表面採集となる。

④小結

墳形・規模　南北長 41.7m、東西長 37.8mの方墳である。昭和 30 年頃に撮影された航空写真では円墳状を呈し、かつ現墳丘表面の大部分は昭和時代の大幅な造成で形成された状況であったため、従前からの方墳と言う評価に捉われずに検討したが、各トレンチの内容や平成５年度の調査成果から、方墳と判断した。外周施設として周濠を有し、それを含めた範囲は南北 48.4m東西 44.5mを測り、占有面積は約 2,154 ㎡を測る。トレンチ 3-2 で復元した周濠底面（標高 26m）と現墳丘頂部との比高差は約９ｍを測る。讃岐最大規模の方墳である。

なお、墳丘の推定に際しては、墳丘側での周濠肩部の位置（トレンチ 3-1・4-1・５・６）、周濠外縁部の位置（トレンチ 3-2・4-3、10、平成５年度調査２～４トレンチ）、石室主軸方位等を考慮し、周濠幅を７ｍと考え、墳丘西側の墳丘ラインないし周濠外縁部ライン、南北の周濠外縁部ラインを確定させ、南北に７m幅の周濠を置いた上、石室主軸で反転して復元した。復元した墳丘推定ラインでは古墳の中心点は玄室奥壁から 60cm 玄門側に寄った地点が中央となる。

外周施設　周濠が墳丘を巡る。周濠深度は極めて深く（４トレンチでは 2.3m）、かつ上部は昭和時代に礫層で埋め戻されており、調査は困難を極めた。前述したように、各トレンチで周濠外縁部及び墳丘側での周濠肩部を特定し、７ｍという幅を設定し得た。断面形状は平坦な底面構造から墳丘面側では傾斜角度約 30°、外縁部側では比較的急激に立ち上がる。元来の周濠埋土は底面付近で黒褐色土、それより上部では黄茶褐色土を認める程度で、椀貸塚古墳と同様に堆積は進行せず、長らく低地として遺存していたと考えられる。

墳丘築造　各トレンチで確認したように、現墳丘の外表部には大規模な後世の造成がなされていたが、トレンチ 4-1・５・６・８では逆に厚い造成に被覆されることで良好な状況で墳丘面を確認することができ、最小限の断割調査で盛土の施工状況を確認した。

墳丘トレンチ８では標高 28.1mで地山層が平坦に整形された状況が確認でき、その上部に薄く黒色土が敷設され、以降盛土が施される。隣接するトレンチ５では８に比してトレンチ設定箇所が低いため、標高 27mで地山層を認めるが、断割調査で検出した地山層ラインをその角度のまま墳丘内部に延伸すると、約２mほどでトレンチ８に対応する位置関係となり、標高 28mに達する。本トレンチでも地山層直上には黒色土を認め、その上部に盛土が施される。同様に、トレンチ１の開口部で新たに確認した羨道石材の設置面もほぼ同数字を示す（28.2m）。さらに、トレンチ 4-1 では標高 27.9mで地山層が平坦に

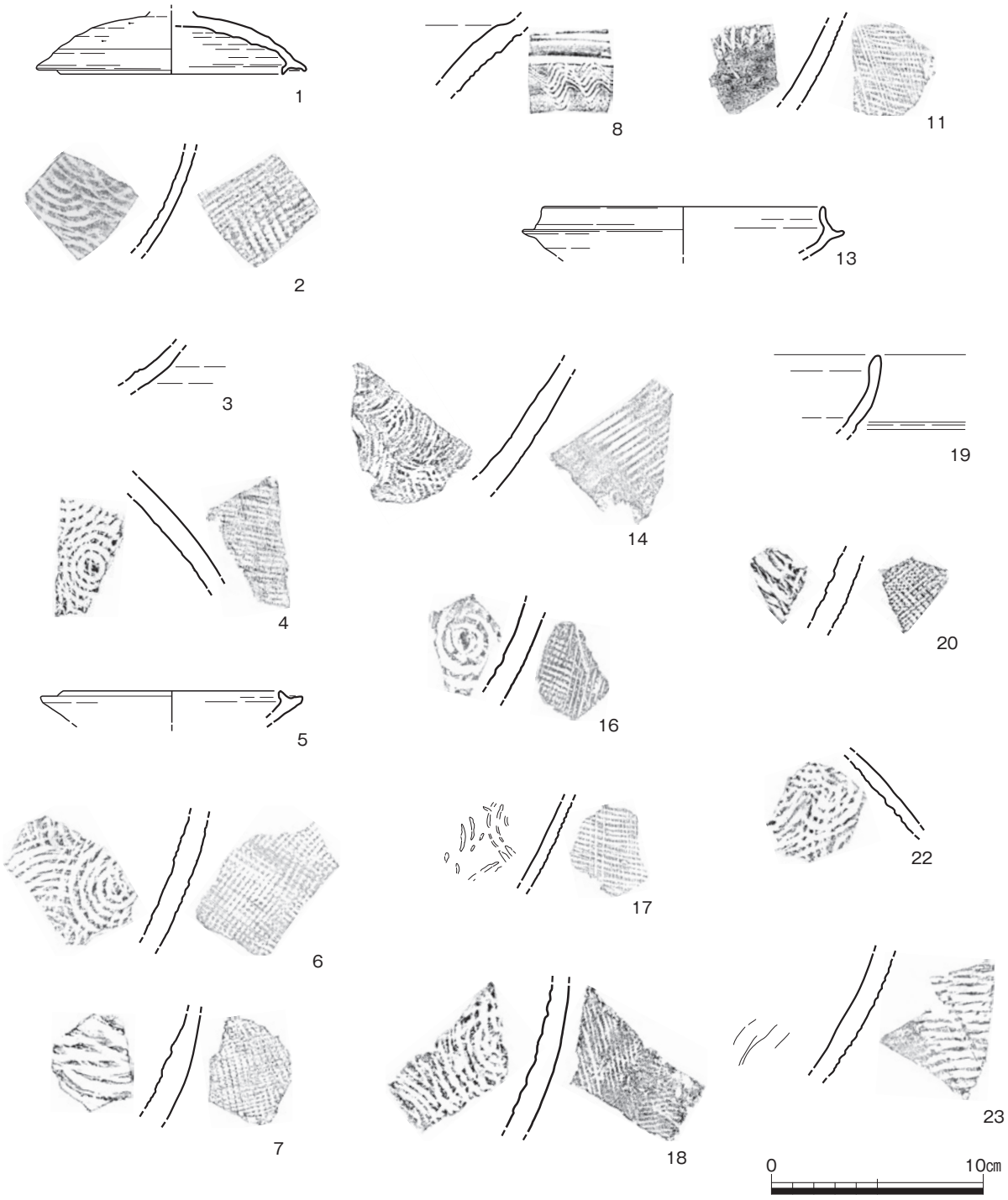


図49　角塚古墳　出土遺物実測図（1/3）

整形され、その上部に安定した盛土を施し、標高28.2mにトレンチ５・８の地山層直上に付設された黒色土に酷似した黒色土が敷設される。地山直上ではなく、一部の盛土上に黒色土を敷設しており、トレンチ５・８とは施工状況が異なるが、トレンチ１の設置面標高28.2mを積極的に評価すると、南側では標高が高くなる可能性もあり、トレンチ4-1の地山層直上の盛土は標高が低い部分に設置した基部盛土と考えることもできる。こうした推測が可能であれば、墳丘北側では28.0m、南側では28.2mの標高でほぼ平坦なステージの創出を意図した地山整形が行われ、一部ではその平坦面を補うために盛土を施し（基部盛土）、その上部に黒色土を敷設した墳丘基礎整形という築造工程を復元することができる。石室床面の標高は不明だが、この平坦面は石室構築及び墳丘盛土の基礎となる重要なステージであったと考えられる。なお、地山直上に薄く黒色土を敷設する状況は平塚古墳でもみられる。堤状遺構の内側開削面に盛土を施すが、その最下面で確認できる。

また、墳丘盛土はトレンチ設定箇所で一様ではないが、地山層が低い箇所では単位が小規模な盛土を叩き締めながら設置する傾向にあり（トレンチ５）、その他の箇所では単位は比較的荒くなるものの堅緻に盛土が施される。トレンチ５・８では盛土の表面が堅く叩き締められた状況であり、墳丘面である可能性を想定した。トレンチ５では表面を被覆した盛土には拳大からその２倍程度の石を意図的に混入させるが、トレンチ８ではこうした盛土は確認できず、盛土と同様に、地山面が低い箇所における特別な処置であったと考える。墳丘面を仔細に観察すると、トレンチ５・８では標高29.6m付近までは傾斜角度約30°を測るが、それ以高では鈍くなっており、同様の状況は墳丘面が遺存する可能性があるトレンチ６でもみられる。傾斜変換点は段築の存在を肯定するものではないが、少なくとも墳丘下部では急傾斜を指向した築造がなされたと考える。

出土遺物　墳丘に設定したトレンチ出土遺物の多くはいわゆる混入遺物である可能性を否定できないが、トレンチ１の羨道石材の抜き取り跡から出土した須恵器は本墳の築造時期の指標となる（蓋坏の蓋、図49の１）。かえりの短い形状、欠損するがつまみを有し、TK217式並行期に属する。ただし、本遺物も厳密には混入品となる。

なお、本墳の所属時期は石室形態や他墳との関係等も考慮して、総括で検討を加えたい。

6．大野原古墳群の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、大野原古墳群の墳丘等の盛土堆積物の性質を把握するために実施した粒度分析、テフラの検出同定、屈折率測定、植物珪酸体分析、土壌理化学分析に関する自然科学分析結果について述べる

1. 試料

分析試料は、大野原古墳群を構成する椀貸塚古墳、角塚古墳、平塚古墳で採取された 14 点である。分析試料と分析項目の詳細を表 1 に示す。粒度分析は全点、それ以外の分析項目については、比較的黒味の強い色調を呈する堆積物 (ここでは便宜上、黒色土と呼ぶ) である椀貸塚古墳の T6 の WT62011-10-03-2 および平塚古墳の T4 の 8 の計 2 点を対象として実施する。

2. 分析方法

(1) 粒度分析

公文・立石編 (1998) の方法を参考に礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピ

表４　分析試料一覧

	古墳名	トレンチ名	土壌サンプル番号	備考	採取年月日	実測図番号	分析				
							粒度	テフラ	屈折率	植物珪酸体	土壌理化学
1	椀貸塚	T11（内濠外側から周堤にかけて）	A	内濠堆積土（周堤側）	20111125	1	○				
2	椀貸塚	T6（内濠外縁から外濠外縁にかけて）	WT62011-10-03-1	周堤盛土	20111003	2	○				
3	椀貸塚	T6（内濠外縁から外濠外縁にかけて）	WT62011-10-03-2	周堤盛土	20111003	2	○	○	○	○	○
4	角塚	T4(墳丘裾から周濠へ)	T4-1A	墳丘盛土	20120328	6	○				
5	角塚	T4(墳丘裾から周濠へ)	T4-1B	墳丘盛土	20120328	6	○				
6	角塚	T8（墳丘盛土）	T8B	墳丘盛土（下から2層目の黒色土）	20121219	図面未	○				
7	角塚	T8（墳丘盛土）	T8A	墳丘盛土（地山直上）	20121219	図面未	○				
8	平塚	T4	3	墳丘盛土	20110324	7	○				
9	平塚	T4	8	墳丘盛土	20110324	7	○	○	○	○	○
10	平塚	T4	9	墳丘盛土	20110324	7	○				
11	平塚	T4	10	墳丘盛土	20110324	7	○				
12	平塚	T4	11	墳丘盛土	20110324	7	○				
13	平塚	T4	14	墳丘盛土	20110324	7	○				
14	平塚	T4	15	墳丘盛土	20110324	7	○				

ペット法で行った。また、粒径区分は Wentworth(1922) に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を乾燥して 2mm φ篩でふるい分ける。2mm φ篩上粒子は水洗・乾燥後、64、32、16、8、4、2mm φ篩でふるい分け、篩上残留物の重量を測定する。一方、2mm φ篩下粒子は 10.00g をビーカーに秤量し、蒸留水と 30％過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤 (4％カルゴン) を加え、撹伴しながら 30 分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で 1 時間振とうする。振とう終了後、水で全量を 1000ml にする。この沈底瓶を 1 分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分 (0.063mm ＞)、粘土画分 (0.0039mm ＞) を 10ml 採取し、105℃で 24 時間乾燥させた後、重量を測定する。ピペット法終了後、懸濁液を 63 μ m 篩で水洗し、篩上残留物を 105℃で 5 時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、0.125mm φ篩でふるい分け、篩上残留物の重量を測定する。ピペット法およびふるい分け法によって求められる各粒径区分における残留質量 (通過質量) から粒径区分範囲ごとの質量百分率 (％) を算出する。

(2) テフラ分析

1) テフラ検出同定

a) 選択した試料を約 20g 秤量し、蒸発皿に入れる。

b) 試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。

c) この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。

d) 試料の観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

e) 分析結果を一覧表にて示す。

(3) 屈折率測定

a) 選択した試料より火山ガラスを実体顕微鏡下で拾い出す。

b) 温度変化型屈折率測定装置である MAIOT(古澤 ,1995) を使用し、屈折率の測定を行う。

c) 測定結果は、ダイアグラムの形で呈示し、各試料のレンジとモードを示す。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を試料毎に図示する。

(5) 土壌理化学分析

ここでは、1) 土壌腐植の量や質 (光学特性) に関する調査、2) 三枝ら (1993) に準じたアロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の区分に関する調査を行う。

全炭素・全窒素は乾式燃焼法 (土壌環境分析法編集委員会 ,1997)、腐植形態は本名・山本 (1992) による簡易形態分析法に準じた。また、アロフェン質、非アロフェン質の区分は選択溶解分析法の酸性シュウ酸塩可溶ケイ素、アルミニウムおよびピロリン酸塩可溶アルミニウムを L.P.van Reeuwijk(1986) に従って定量した上で、三枝ら (1993) における判定基準により区分した。以下に各分析項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル (平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器) で微粉砕し、微粉砕試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 全炭素・全窒素量 (乾式燃焼法)

微粉砕試料 500 ～ 1000mg を正確にはかり、サンプルボードに充填した後、CN コーダー (ヤナコ分析工業製) に挿入する。試料をキャリアガス (Ｈｅ) 気流中で 950℃に加熱燃焼し、発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2 及び N_2 の組成にする。TCD 検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの全炭素量 (%) および全窒素量 (%) を求める。また、全炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率) を算出する。

3) 腐植形態分析 (簡易法)

炭素 50mg 相当の微粉砕試料を 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5％ NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうする。振とう終了後、0.1％高分子凝集剤溶液 1 ～ 2 滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15 分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液 10ml を 50ml 容メスフラスコにとり、蒸留水で定容とする (NaOH の濃度は約 0.1％となる)。この溶液について、分光光度計により 400、450、520、600、610nm の吸光度を測定する。600nm の吸光度が 0.100 を越える場合には、さらに 0.1％ NaOH 溶液で希釈して測定する (測定時間は抽出後、3 時間以内)。結果は、Melanic Index(MI)=K_{450} ／ K_{520}、Color Density(CD)=K_{600} ×希釈倍率、⊿ logK=log(K_{400} ／ K_{600})、Pg Index(PI)= K_{610} ／ K_{600}) で表示し、腐植酸の型を判定する。

4) 酸性シュウ酸塩可溶ケイ素 (Sio)、アルミニウム (Alo)

風乾細土試料 1000mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液 (pH3) を 100ml 加え、暗所で 4 時間振とうする。振とう後、0.4％高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計によりケイ素 (Si) およびアルミニウム (Al) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのケイ素とアルミニウムの含有量 (%) を求める。

5) ピロリン酸塩可溶アルミニウム (Alp)

風乾細土試料 1000mg に 0.1M ピロリン酸ナトリウム溶液を 100ml 加え、16 時間振とうする。振とう後、0.4％高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、原子吸光光度計によりアルミニウム (Al) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのアルミニウムの含有量 (%) を求める。

3. 結果

(1) 粒度分析

粒度組成および Folk & Ward(1957) による粒度指標値の解析結果を表 2 に示す。また、粒度分布図

を図 1、2 に掲げる。なお、泥質堆積物の粒度分析では細粒部分の分析値が得難いことより、粒度指標値の解析にあたってはFriedman(1962) に準じ、8 φ以下の粒子については、14 φまでに等分配されるものと仮定し、4 ～ 8 φのシルト分についても 1 φ毎に等分配した条件で計算を行っている。以下に古墳ごとに粒径組成の特徴を述べる。

1) 椀貸塚古墳

内濠堆積土1点と2点の周堤盛土の3点の試料があるが、平均値はいずれもシルトを示す。淘汰度は、内濠堆積土は極めて悪い、周堤盛土はいずれも非常に悪いとなるが、歪度は 3 点ともにほぼ対称であり、尖度は、内濠堆積土は中間的、周堤盛土は突出および非常に突出となった。淘汰度不良の傾向は、中礫や細礫の混在する状況を示しているが、平均値や歪度、尖度が示すようにシルト主体の堆積物である。また、3 点間の粒径組成に特に明瞭な差異は認められない。

2) 角塚古墳

4 点ともに墳丘盛土である。平均値は、T4 の 2 点が細粒砂と極細粒砂、T8 の 2 点がシルトである。淘汰度は極めて悪いまたは非常に悪いであり、歪度はほぼ対称または負の歪みが示された。尖度は、T4 の試料では扁平と中間的となったが、T8 の試料は突出であった。全体的には、上述した椀貸塚古墳の内濠堆積土や周堤盛土と近似した粒径組成である。T8 に比べると T4 の盛土の方が、礫の含有量もやや多いことから、砂質かつ淘汰度の不良な特徴を示している。ただし、4 点間で特に大きく異なる組成ではない。

3) 平塚古墳

7 点の試料はいずれも墳丘盛土である。平均値は、T4 の 9 と 10 の 2 点のみ極細粒砂であり、他はいずれもシルトである。淘汰度は、T4 の 11 のみ非常に悪いであり、他はいずれも極めて悪いとなっている。歪度は、平均値が極細粒砂の 2 点のみ負の歪みを示し、他はほぼ対称である。尖度は、T4 の 10 と 15 が中間的であるほかは、いずれも突出となっている。全体的には、上述した椀貸塚古墳および角塚古墳の堆積物と大きく異なる組成ではなく、各評価の値も近いと言える。平均値が極細粒砂となった試料は、いずれも礫の含有量が他の試料よりもやや多いことによるものであるが、他の評価値はシルト主体の堆積物であることを示している。

(2) テフラ分析・屈折率測定

分析結果を表 3 に示す。2 点の試料からは、スコリアおよび軽石はいずれの試料からも検出されなかった。火山ガラスは、2 点の試料ともに中量含まれる。火山ガラスの特徴は 2 点ともに同様であり、無色透明のバブル型が多く、少量の褐色を帯びたバブル型が混在する。

火山ガラスの屈折率測定結果を図 3 に示す。2 点の試料ともにほぼ同様のレンジを示し、その値は n1.508-1.514 と言える。モードは、椀貸塚古墳の黒色土では n1.511 付近にあるが、平塚古墳の黒色土では明瞭ではない。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表 4、図 4 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。植物珪酸体含量は、椀貸塚古墳の黒色土では約 28,300 個 /g、平塚古墳の黒色土では約 13,500 個 /g であり、椀貸塚古墳の黒色土の方が多い。

ただし、植物珪酸体の産状は同様であり、いずれもメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ススキ属などが認められる。

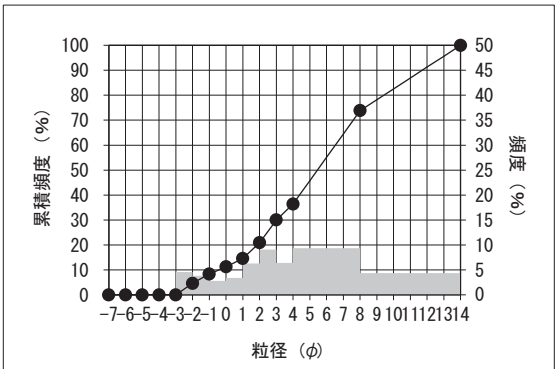
(4) 土壌理化学分析

土壌理化学分析結果を表 5 に示す。以下に 1) 土壌腐植の特性、2) アロフェン質・非アロフェン質

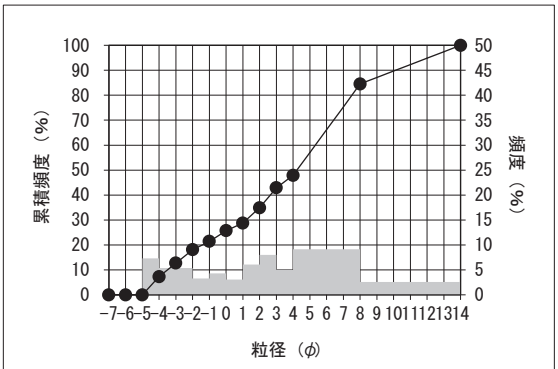
表５　粒度組成

試料				粒度組成（%）													粒度解析評価（Folk and Ward, 1957）				
				礫						砂					泥						
				大礫	中礫				細礫	VCS	CS	MS	FS	VFS	シルト	粘土	中央値（Md_ϕ）	平均値（M_Z）	淘汰度（σ_I）	歪度（Sk_I）	尖度（K_G）
	古墳名	トレンチ名	土壌サンプル番号	<-6φ	-6～-5φ	-5～-4φ	-4～-3φ	-3～-2φ	-2～-1φ	-1～0φ	0～1φ	1～2φ	2～3φ	3～4φ	4～8φ	8φ<					
1	椀貸塚	T11	A	0.0	0.0	0.0	0.0	4.6	3.8	2.8	3.4	6.3	9.1	6.4	37.4	26.2	5.45 （シルト）	5.67 （シルト）	4.51 （極めて悪い）	0.04 （ほぼ対称）	1.04 （中間的）
2	椀貸塚	T6	WT62011-10-03-1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	1.5	2.2	4.2	6.6	6.2	59.9	16.5	5.76 （シルト）	5.58 （シルト）	3.15 （非常に悪い）	-0.01 （ほぼ対称）	1.46 （突出）
3	椀貸塚	T6	WT62011-10-03-2	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	1.8	1.4	1.9	4.0	5.7	4.8	54.2	22.6	5.98 （シルト）	6.10 （シルト）	3.90 （非常に悪い）	0.01 （ほぼ対称）	1.54 （非常に突出）
4	角塚	T4	T4-1A	0.0	0.0	0.0	13.2	8.5	5.4	4.3	3.6	5.2	7.0	5.1	34.8	12.9	3.55 （微粒砂）	2.84 （細粒砂）	4.90 （極めて悪い）	-0.07 （ほぼ対称）	0.78 （扁平）
5	角塚	T4	T4-1B	0.0	0.0	7.3	5.4	5.4	3.3	4.3	3.1	6.1	8.0	5.0	36.6	15.5	4.23 （シルト）	3.26 （微粒砂）	5.07 （極めて悪い）	-0.16 （負の歪み）	0.94 （中間的）
6	角塚	T8	T8B	0.0	0.0	0.0	5.6	8.1	1.9	1.9	2.6	5.2	6.8	5.0	48.7	14.2	5.06 （シルト）	4.04 （シルト）	4.43 （極めて悪い）	-0.22 （負の歪み）	1.19 （突出）
7	角塚	T8	T8A	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	1.4	2.1	4.8	7.0	6.0	58.8	18.7	5.87 （シルト）	5.89 （シルト）	3.20 （非常に悪い）	0.08 （ほぼ対称）	1.37 （突出）
8	平塚	T4	3	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9	1.1	2.4	2.8	7.8	11.2	7.4	42.8	17.6	4.97 （シルト）	4.96 （シルト）	4.00 （極めて悪い）	0.00 （ほぼ対称）	1.21 （突出）
9	平塚	T4	8	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7	1.5	3.0	3.6	6.7	9.3	6.6	43.3	21.3	5.35 （シルト）	5.44 （シルト）	4.18 （極めて悪い）	0.02 （ほぼ対称）	1.16 （突出）
10	平塚	T4	9	0.0	0.0	0.0	7.7	5.8	1.6	3.6	3.2	5.9	8.6	6.2	41.5	15.9	4.71 （シルト）	3.98 （微粒砂）	4.53 （極めて悪い）	-0.15 （負の歪み）	1.13 （突出）
11	平塚	T4	10	0.0	0.0	0.0	12.3	2.9	2.1	3.0	4.2	7.0	8.8	5.8	37.2	16.7	4.42 （シルト）	3.68 （微粒砂）	4.86 （極めて悪い）	-0.12 （負の歪み）	1.07 （中間的）
12	平塚	T4	11	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	4.0	4.8	4.3	7.0	9.7	7.4	46.1	15.5	5.01 （シルト）	4.74 （シルト）	3.67 （非常に悪い）	-0.02 （ほぼ対称）	1.12 （突出）
13	平塚	T4	14	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	1.5	2.7	2.7	6.1	9.3	6.9	44.6	22.5	5.53 （シルト）	5.72 （シルト）	4.05 （極めて悪い）	0.05 （ほぼ対称）	1.16 （突出）
14	平塚	T4	15	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	4.2	3.1	3.6	6.3	8.8	6.1	40.1	22.2	5.23 （シルト）	5.25 （シルト）	4.44 （極めて悪い）	0.01 （ほぼ対称）	1.11 （中間的）

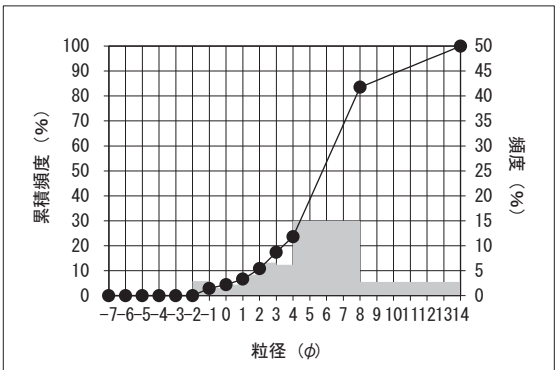
註）VCS：極粗粒砂　CS：粗粒砂　MS：中粒砂　FS：細粒砂　VFS：極細粒砂



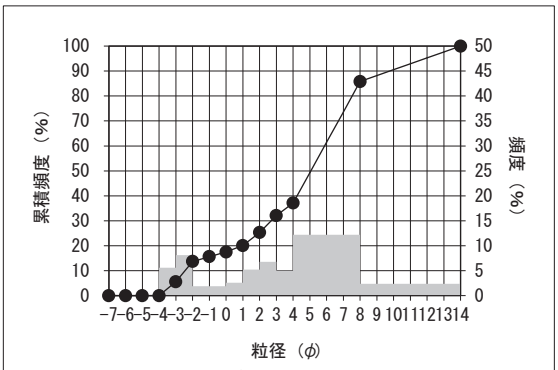
1　椀貸塚　T11　A



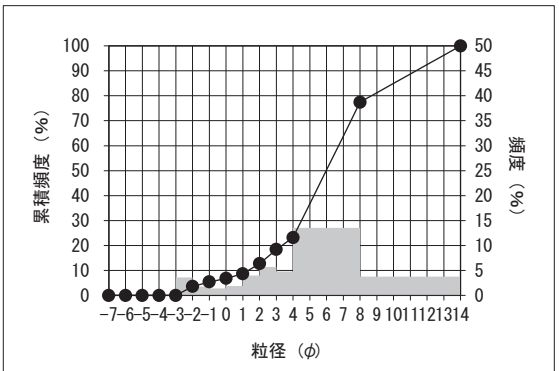
5　角塚　T4　T4-1B



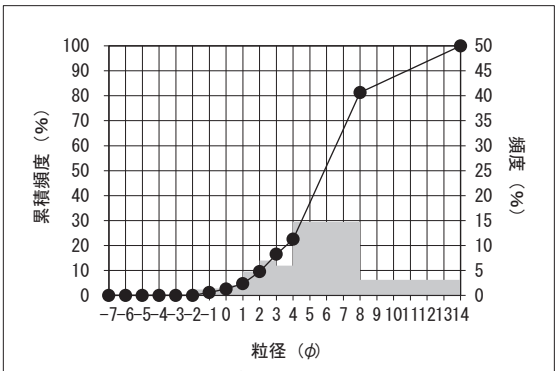
2　椀貸塚　T6　WT62011-10-03-1



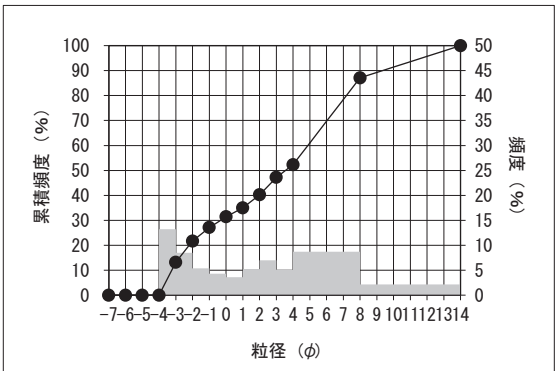
6　角塚　T8　T8B



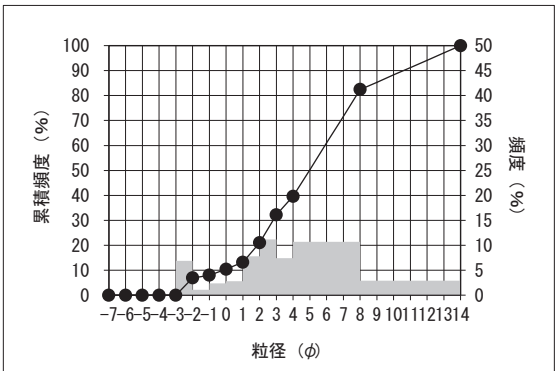
3　椀貸塚　T6　WT62011-10-03-2



7　角塚　T8　T8A

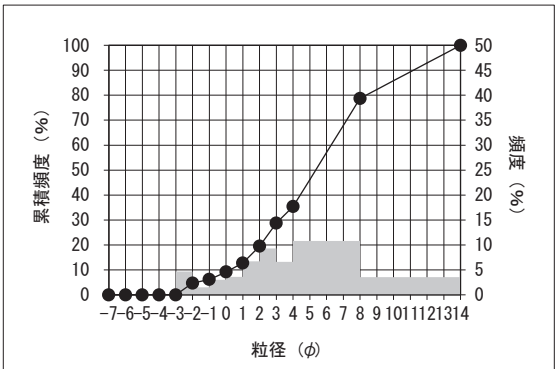


4　角塚　T4　T4-1A

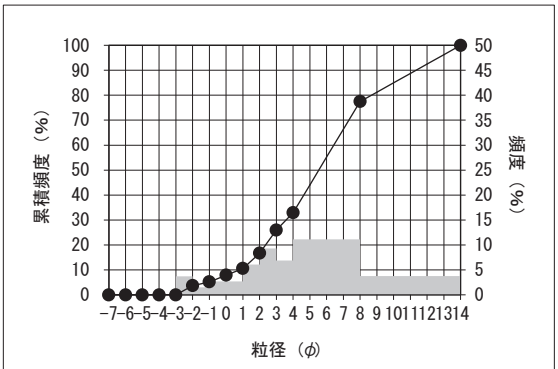


8　平塚　T4　3

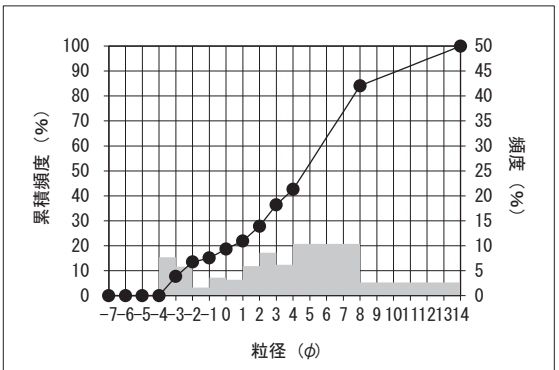
図50　粒度分布図（1）



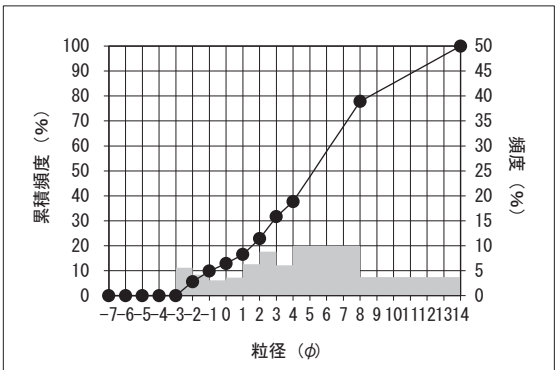
9　平塚　T4　8



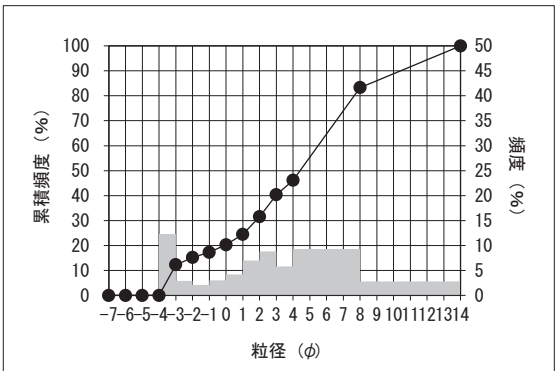
13　平塚　T4　14



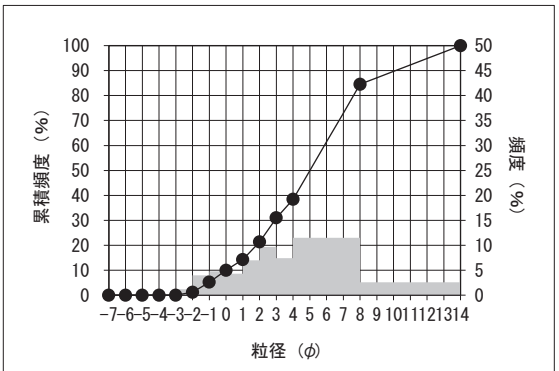
10　平塚　T4　9



14　平塚　T4　15



11　平塚　T4　10



12　平塚　T4　11

図51　粒度分布図（2）

表６　テフラ分析結果

古墳名	トレンチ名	土壌サンプル番号	備考	スコリア	火山ガラス		軽石	由来するテフラ
				量	量	色調・形態	量	
椀貸塚	T6	WT62011-10-03-2	周堤盛土	－	＋＋＋	cl・bw>br・bw	－	K-Ah
平塚	T4	8	墳丘盛土	－	＋＋＋	cl・bw>br・bw	－	K-Ah

凡例　－:含まれない．(+):きわめて微量．＋:微量．＋＋:少量．＋＋＋:中量．＋＋＋＋:多量．
cl:無色透明．br:褐色．bw:バブル型．md:中間型．pm:軽石型．

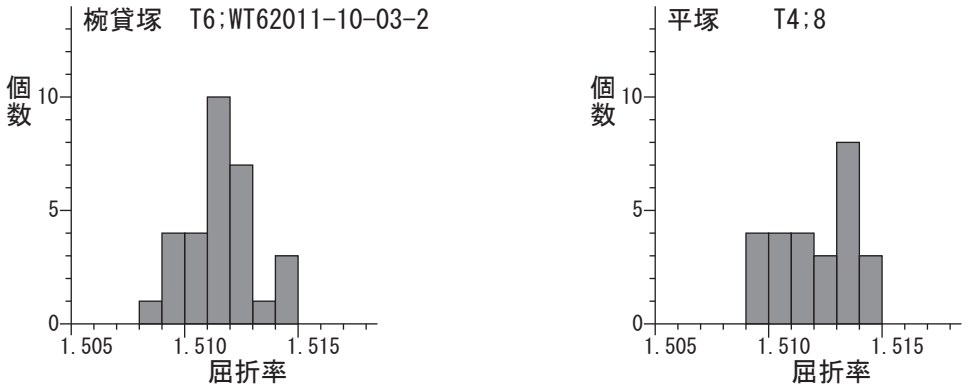


図52　火山ガラスの屈折率

の区分、3) アロフェン含量の３項目に分けて述べる。

1) 土壌腐植の特性

全炭素量は、椀貸塚古墳の黒色土で 8.74%、平塚古墳の黒色土では 4.14% である。一般的な土壌では全炭素≒有機炭素と見て差し支えないことより、1.724 を乗じて換算した腐植含量としては椀貸塚古墳の黒色土で約 15%、平塚古墳の黒色土では 4.14% では約 7% となる。簡易法による腐植形態分析では両試料とも Melanic Index(MI) は 1.7 以下、⊿logK も 0.65 以下、かつ Color Density(CD) も 2.5 以上の光学特性を示すことより、腐植化度の高い A 型腐植酸であることが確認され、MI が 1.55、⊿logK が 0.54 と低く、CD が 12 と高い諸特性から黒色度の強い腐植酸を多量に含んでいることが示唆される。

表７　植物珪酸体含量

(個/g)

分　類　群	3 椀貸塚 T6	9 平塚 T4
イネ科葉部短細胞珪酸体		
メダケ属	2,900	1,400
タケ亜科	3,900	2,500
ウシクサ族ススキ属	<100	200
不明	5,300	2,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
メダケ属	3,800	1,600
タケ亜科	6,200	2,900
ウシクサ族	200	200
不明	5,900	2,400
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	12,200	6,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	16,100	7,000
植物珪酸体含量	28,300	13,500

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100：100個/g未満

2) アロフェン質、非アロフェン質の区分

アロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の類型区分は、三枝ら (1993) に従い、Alp/Alo 比、Sio 含量および粘土含量をもとに判定する。なお、本調査では土壌学分野で用いられる 2 μ m 以下を対象とした粘土含量の分析は実施していないが、主に地質積学分野で用いられる 4 μ m 以下を対象とした粘土が 20% 以上であるため、類型区分基準である粘土含量 8％以上の条件は満たしているとの前提で判定を行う。

表８　土壌理化学分析結果

試料名				土色	全炭素	全窒素	C/N	腐植形態（簡易法）					選択溶解分析					
	古墳名	トレンチ名	土壌サンプル番号		(%)	(%)		Melanic Index	Color Density	⊿logK	Pg Index	腐植酸型	Si*o* (%)	Al*o* (%)	Al*p* (%)	Al*p*/Al*o*	(Al*o*-Al*p*)/Si*o* (mol.ratio)	アロフェン含量 (%)
3	椀貸塚	T6	WT62011-10-03-2	10YR1.7/1黒	8.74	0.41	21	1.55	11.99	0.534	0.946	A	0.51	2.30	1.27	0.55	2.0	3.6
9	平塚	T4	8	10YR3/1　黒褐	4.14	0.17	24	1.55	11.95	0.546	0.937	A	0.15	0.85	0.58	0.68	1.8	1.1

注．(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
(2)Si*o*：酸性シュウ酸塩可溶ケイ素（Si）。
(3)Al*o*：酸性シュウ酸塩可溶アルミニウム（Al）。
(4)Al*p*：ピロリン酸塩可溶アルミニウム（Al）。
(5)アロフェン含量：Si*o*に7.1を乗じて算出。

類型区分の基準を一覧としてまとめたものを表６に掲げたが、本基準に従えば２点の試料はともに Alp/Alo 比≧ 0.5 であることより、非アロフェン質黒ボク土に区分される。

表９　アロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の類型区分基準

Al*p*/Al*o*比	Si*o*含量(%)	粘土含量(%)	類型区分
≧0.5	－	－	非アロフェン質黒ボク土
＜0.5	≧0.5%	－	アロフェン質黒ボク土
	＜0.5%	≧8%	非アロフェン質黒ボク土
		＜8%	アロフェン質黒ボク土

三枝ほか(1993)による

3) アロフェン含量

アロフェン含量は、Parfitt,R.L., and Wiison,AD.(1985) に従い、(Alo-Alp)/Sio 比および Sio 含量から求めた。アロフェンの Al/Si 比は (Alo-Alp)/Sio 比によって評価でき、普通１～２のものが大部分である。アロフェン含量は、(Alo-Alp)/Sio 比が１の場合には Sio 含量に５を、(Alo-Alp)/Sio 比が２の場合には Sio 含量に 7.1 を乗ずることによって求められる。

２点の試料における (Alo-Alp)/Sio 比は２程度であることから、今回は Sio 含量に 7.1 を乗ずることによってアロフェン含量を推量する。ア」ロフェン含量は椀貸塚古墳の黒色土で 3.6%、平塚古墳の黒色土では 1.1% である。平塚古墳の黒色土に比べて椀貸塚古墳の黒色土の方が、アロフェンが僅かに多い特徴はあるものの、どちらもアロフェンに乏しい土壌であることが確認される。

4. 考察

大野原古墳群は、三豊平野南部に広がる段丘化した扇状地上に立地する。栗原 (1972) などの地形分類を参照すれば、古墳群の位置する扇状地は、更新世末に段丘化が進み、地名面が離水した低位段丘に区分されている。したがって、古墳群周辺の扇状地表層は、耕作などの人為的な大きな土地改変が行われる以前に、基本的には更新世末以降に形成された土壌に覆われていたと判断される。

今回の分析の対象とされた各古墳の周堤盛土や墳丘盛土については、いずれも最大で中礫サイズの礫を少量含みながらもシルトを主体とする堆積物であった。これらは、腐植を多く含む黒色土、砕屑物を主体とする堆積物に大別される。粒度分析の結果からは、同じ古墳内でも異なる古墳間でも、盛土の中で粒径組成が大きく異なるような堆積物が認められなかったことが明らかとなった。古墳の立地面の地形・地質的特性および粒度組成を考慮すれば、盛土に使用された堆積物は、古墳群周辺に分布する扇状地最上部の堆積物に由来する可能性が高いと考えられる。このことからは、盛土に使用された堆積物が、特に人為的な手が加えられたような痕跡に乏しいことが指摘される。

分析試料のうち黒色土については、椀貸塚古墳の黒色土も平塚古墳の黒色土もほぼ同様の特性が得られている。まず、いずれの試料からも中量程度の火山ガラスの含有が確認された。両試料から検出

された火山ガラスは、形態や色調の特徴と屈折率から、鬼界アカホヤテフラ (K-Ah: 町田・新井 ,1978) に由来する。K-Ah の噴出年代は、町田・新井 (1978) 以来、放射性炭素年代である 6300 年前という年代で知られていた。最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。また、湖底堆積物における年縞による K-Ah の年代も推定されている (福沢 ,1995)。これらのことから、K-Ah の噴出年代については暦年代である 7300 年前という年代が表示されるようになってきている (例えば町田・新井 (2003) など)。

したがって、椀貸塚古墳の黒色土も平塚古墳の黒色土も 7300 年前以降に形成された扇状地上の土壌であると判断される。さらに、この土壌は、土壌理化学分析により、腐植含量も比較的高く、腐植形態も腐植化の進行した A 型腐植酸であり、黒色度の強い腐植酸を多量に含んでいることなどから、扇状地の表層で長期間にわたる土壌化作用で形成されたいわゆる黒ボク土であると考えられる。両試料においては、腐植の光学特性に大きな差はないため、同質の腐植が蓄積していると判断されるが、腐植含量に見られるように量的な面で異なる。植物珪酸体含量が両試料間で異なっていたことを考慮すると、過去の地被植生や微地形の状況が腐植含量に反映されている可能性が高いと考えられる。なお、植物珪酸体分析において産出の目立ったネザサ節を含むタケ亜科は乾いた土地条件を好むことから、遺跡の立地と調和的と言える。

なお、黒ボク土に分類されることが確認できた椀貸塚古墳の黒色土および平塚古墳の黒色土であるが、これらは、非アロフェン質黒ボク土に区分された。松山・三枝 (1994) は、西日本におけるアロフェン質黒ボク土と非アロフェン質黒ボク土の分布の規則性について、降水量や P-E 指標（降水量と蒸発量の比の指標）だけではなく、完新世に噴出したテフラの堆積状況が密接に関連していると述べている。すなわち、テフラが厚く堆積している地域にはアロフェン質黒ボク土が分布し、降灰の影響の少ない地域では非アロフェン質黒ボク土が分布するとした。四国地方は、非アロフェン質黒ボク土が多く分布する地域とされている。今回の分析結果は、その事例とも整合するものとなった。今回の試料からは K-Ah に由来する火山ガラスが検出されているものの、おそらくこの程度の含有量では、アロフェンの形成は進行しないのであろう。

5. 小結

以上の分析結果から、古墳の盛土および周濠内埋土は、段丘化した扇状地の最上部を構成するシルト主体とする堆積物に由来する可能性が高いことが指摘される。このうち、古墳の盛土内に特徴的に挟在した黒色土は、古墳の立地面の表層に形成された黒ボク土からなる土壌層位 A 層に由来すると判断される。黒色土以外の砕屑物を主体する堆積物は、黒ボク土の下層（次層）に存在し、土壌化の影響を受けた土壌層位 b 層を主体とする推測される。これらは、扇状地が離水する過程で累重した洪水堆積物や、離水後に積層した風成堆積物と推定される。

なお、本地域では、風成堆積物の供給量が小さいため、上に凸状の横断面をなす砂礫で埋積される流路堆積物が表層直下に存在する領域があると考えられる。よって、古墳の盛土および周濠内埋土に含まれる礫は、このような流路堆積物からの再堆積と認識される。

上記のような由来を示す堆積物が、古墳の盛土では、黒色土と砕屑物を主体する堆積物が縞状に累層することが、発掘調査によって確認されている。このことから、墳丘の築造にあたっては、扇状地最上部を構成する表土（黒ボク土）とその下位の洪水ないし風成堆積物の礫混じりの泥質堆積物を区別していた可能性が示唆される。また、分析結果および古墳立地面の地球科学的な観点をふまえると、これらの古墳の盛土では、異なった堆積物などを混合するような粒径のコントロールの意図は乏しか

ったと解釈される。黒色土が黒ボク土に由来することから、古墳が立地する段丘化した扇状地表層では、腐植含量の高い黒色の土壌が発達していたと捉えられる。しかし、今回発掘を行っている古墳では、盛土基盤において黒ボク土が認められない。このことから、古墳周辺では、築造時に表土が削平されたことが推測される。

今回分析を行った古墳の盛土および周濠内埋土については、立地面のより詳細な地形発達史や、表層堆積物の空間的分布から、さらに解釈していくことが今後の課題と思われる。

引用文献

土壌環境分析法編集委員会編 ,1997, 土壌環境分析法 . 博友社 ,427p.

土壌養分測定法委員会編 ,1981, 土壌養分分析法 . 養賢堂 ,440p.

Fork,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. J.Sed. Petrol,27,3-26.

Friedman,G.M.,1962,On sorting,sorting coefficients and the lognormality of the grain-size distribution of sandstones. J.Geol.,70,737-753.

福沢仁之 ,1995, 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物 . 第四紀研究 ,34, 135-149.

古澤　明 ,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

本名俊正・山本定博 ,1992, 腐植の簡易分析法 . 土壌構成成分解析法 . 博友社 ,7-35.

近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.

公文富士夫・立石雅昭編 ,1998, 新版砕屑物の研究法 . 地学双書 ,29, 地学団体研究会 ,399p.

栗原権四郎 ,1972, 瀬戸内南岸沖積平野の地質 . 東北大地質古生物研邦報 ,73,31-65.

町田　洋・新井房夫 ,1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰 . 第四紀研究 ,17,143-163.

町田　洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 ,1987, 姶良Ｔｎ火山灰の 14 Ｃ年代 . 第四紀研究 ,26,79-83.

松山信彦・三枝正彦 ,1994, 西日本におけるアロフェン質黒ボク土と非アロフェン質黒ボク土の分布 . ペドロジスト ,38,2-9.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

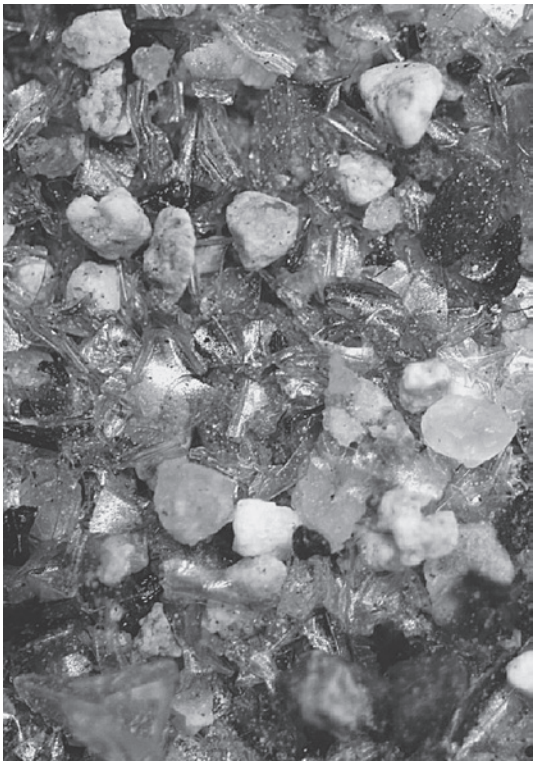
Parfitt,R.L. and Wiison,AD.,1985.Estimation of allophone and halloysite in three sequences of volcanic soils.Catena Suppl,7,1-8.

ペドロジスト懇談会 ,1984, 野外土性の判定 . ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック , 博友社 ,39-40.

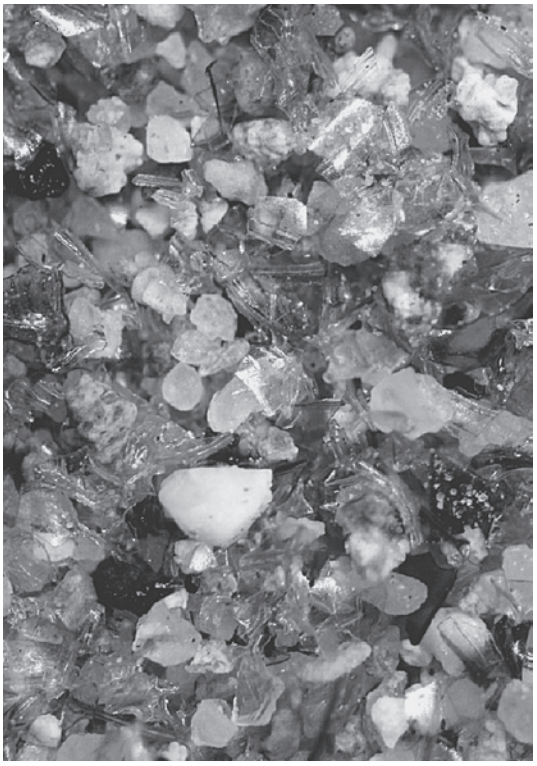
Reeuwijk,L.P.van,1986,PROCEDERES FOR SOIL ANALYSIS.International Soil Reference and Information Centre.106p.

三枝正彦・松山信彦・阿部篤郎 ,1993. 東北地方におけるアロフェン質黒ボク土と非アロフェン質黒ボク土の分布 . 土肥誌 ,64,423-430.

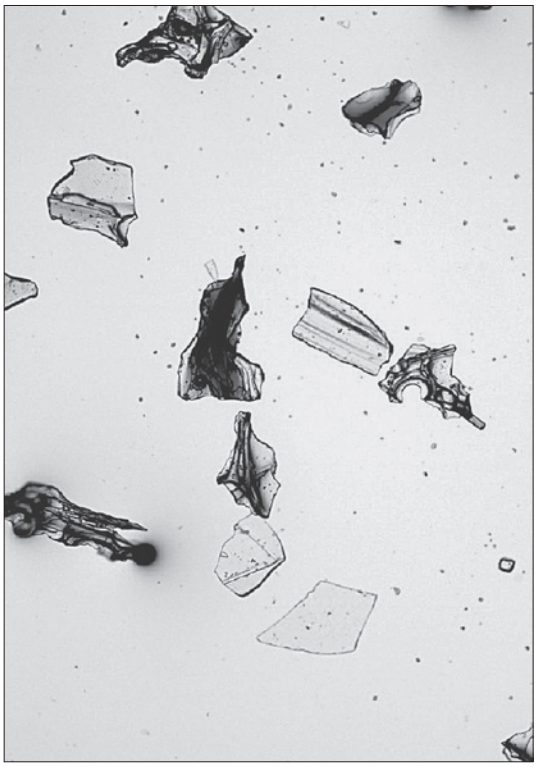
Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.



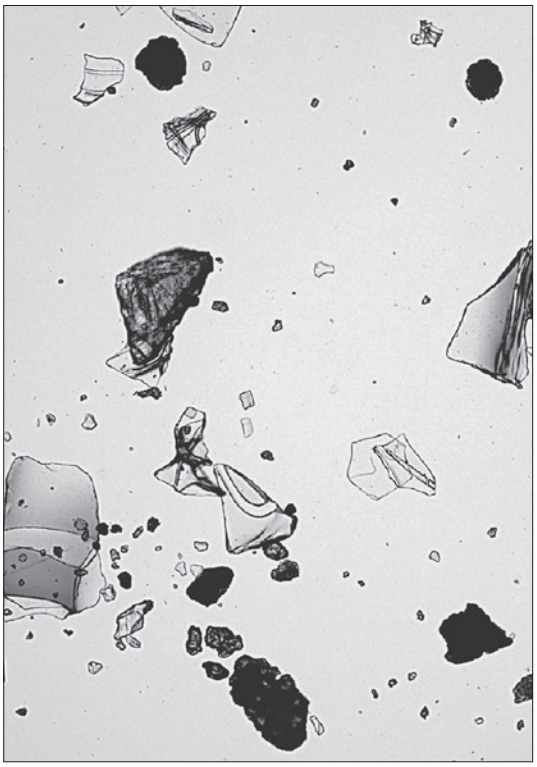
1.砂分の状況(椀貸塚　T6;WT62011-10-03-2)



2.砂分の状況(平塚　T4;8)



3.K-Ahの火山ガラス(椀貸塚　T6;WT62011-10-03-2)

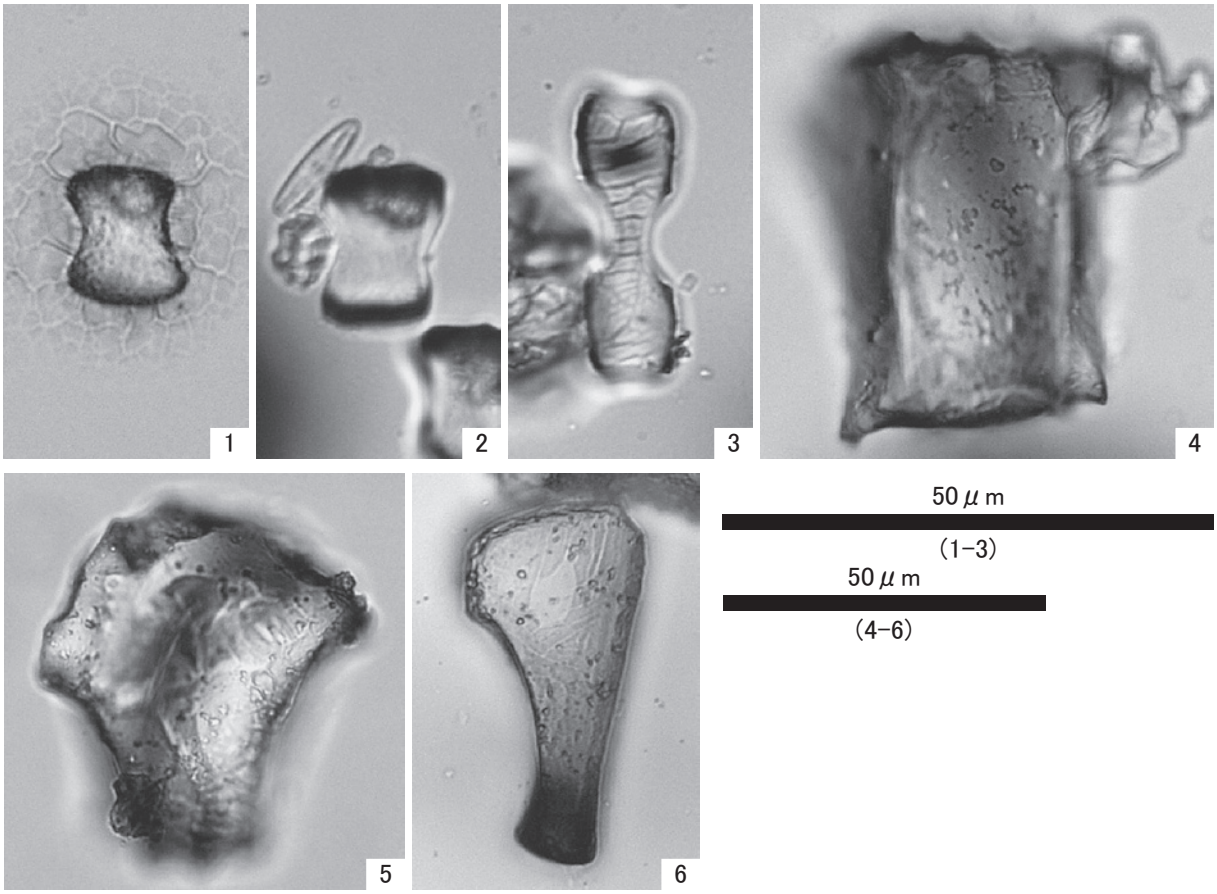


4.K-Ahの火山ガラス(平塚　T4;8)

1.0mm　0.2mm

1,2　3,4

図版75　テフラ・砂分の状況



1．メダケ属短細胞珪酸体(椀貸塚　T6;WT62011−10−2)
2．メダケ属短細胞珪酸体(平塚　T4;8)
3．ススキ属短細胞珪酸体(平塚　T4;8)
4．メダケ属機動細胞珪酸体(椀貸塚　T6;WT62011−10−2)
5．メダケ属機動細胞珪酸体(平塚　T4;8)
6．ウシクサ族機動細胞珪酸体(平塚　T4;8)

図版76　植物珪酸体

７．考察

三豊平野中央部における地域社会構成史からみた
大野原３墳（椀貸塚・平塚・角塚）の被葬者の性格

丹羽佑一

三豊平野中央部における地域社会構成史から大野原３墳被葬者の性格を明らかにすることを通じて大野原の地に巨大古墳が築造された理由を考える。

Ⅰ　三豊平野の地勢的区分

三豊平野の中央部は北の財田川と中央部の柞田川によって囲まれた北エリアと柞田川以南の南エリアに区分される。北エリアには大よそ南北３・５KM・東西７KM、南エリアには東西３・５KM南北５KMの低地が広がる。なお、この２エリアの低地の広がりは丸亀平野の約２分の１、北エリアの低地の広がりは約４分の１強である。大野原３墳は南エリアの中央部に位置する。

Ⅱ　大野原３墳史の区分

大野原３墳の築造前の、弥生時代から古墳時代前半を大野原３墳前史、横穴式石室墳築造終了後奈良時代までを大野原３墳後史として、各時代の社会の構成に直接関係すると思われる遺跡の展開を跡づける。

ｉ　前史

１　弥生時代の青銅祭器出土遺跡の展開

弥生時代の社会の構成をより直接的に示すと考えられる青銅祭器の分布をみると、北エリアに集中している。観音寺市・古川遺跡から外縁付鈕式銅鐸１口、三豊市山本町・辻西遺跡から中広形銅矛１口、観音寺市・藤の谷遺跡から細形銅剣１口、中細形銅剣２口が出土している。３種の祭器が揃っている地域は他に善通寺市域に認められるぐらいで珍しい。祭器は同時期の使用を示し、北エリアには３種の祭器を用いる３種の祭儀集団のいたことが知られる。これらの祭儀が対抗的なものであったのか、三位一体的なものであったかは明らかではない。善通寺市瓦谷遺跡では細型銅剣５口・平形銅剣２口と中細形銅矛１口が出土し、出土地未詳であるが一連のものとして大麻山の袈裟襷文銅鐸がある。我拝師山遺跡では平形銅剣４口と１口が外縁付鈕式銅鐸１口を中心に振り分けられたように出土している。これらは、直接的には新旧祭器が一ヶ所に埋納されたことを示すものであるが、当該地域では銅矛と銅剣、銅鐸と銅剣の祭儀、あるいは銅鐸・銅矛・銅剣の三位一体の祭儀のあったことも推測させる。このようなことから弥生時代の前半では三豊平野中央部北エリアには銅鉾、銅剣、銅鐸の３種の祭儀を違える３集団が共存し、おそらくは対抗することによって一つにまとまり、地域社会を形成したものと思われる。南エリアでは柞田川左岸に沿って遺跡が分布するが、青銅祭器は知られず、祭祀の展開において北エリアに従属する別の地域社会が形成されたと思われる。

２　古墳時代前半の古墳の展開

南エリア東縁の小丘陵に立地する赤岡山古墳群の第３号墳は、高さ３・５ｍ、直径２４ｍの墳丘規模、入念な施工の葺石、大型の天井石の竪穴式石室、仿製鏡１点の出土、須恵器の無いことから、前期の円

墳と考えられる。同期の北エリアには古墳は知られない。

中期にはいり半ばまでに三豊平野で最初の前方後円墳が築造される。北エリアの青塚古墳である。阿讃山地を縁取る低丘陵の末端に位置する。二重の周濠をもつ前方後円墳である。墳長４３ｍ、後円部２段築成、　後円部径約３３ｍ・高４・５ｍ・頂径約１２ｍ、前方部幅約１６ｍ・長１０ｍ、　阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式石棺の破片（縄掛突起をもつ小口部？）が出土する。短い前方部が特徴である。海浜部の円墳－丸山古墳も初期の横穴式石室に阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式石棺を設備し、同期と考えられている。

後期に入って北エリアの母神山丘陵の一画に前方後円墳―瓢箪塚古墳が築造される。盾形周濠（幅３～４ｍ）を巡らし、墳長４４ｍ、後円部径２６ｍ・高さ５・７ｍ、前方部幅２３ｍ・長１８ｍ・高さ５・１ｍを計る。善通寺市・王墓山古墳（墳長約４６ｍ）と同期とされる。瓢箪塚古墳は、位置も近接することから青塚古墳を継いだものと考えられる。北エリア前方後円墳群の形成である。

香川県では平野部各所ですでに前期の早い時期から前方後円墳群が形成されるが、三豊平野には前期の間、前方後円墳は築造されない。三豊平野より東の前方後円墳の展開を跡づけると、前方後円墳の築造は地域の豪族の連合を契機にはじまり、中期前葉に至って平野を基盤にした豪族諸連合の統合が成立することによって各平野最大の前方後円墳が築造され、その後丸亀平野西南部―善通寺市域を除いて前方後円墳の築造は終わる。

前方後円墳は地域の諸豪族の連合を代表する１豪族の長の墓として始まり、平野の諸連合を統べる連合長（１豪族の長でもある）の墓として発達し、そして終わった。各平野での統合が解体されたのである。

三豊平野では他の平野部における社会の展開は一段階遅れてはじまるが、その後は善通寺域と軌を一にして後期に入っても前方後円墳を築造する。そして６世紀中葉に至って前方後円墳の築造は終了し、それを継いで横穴式石室を設備する円墳の築造が開始されるのである。北エリア母神山丘陵の鑵子塚の築造である。後期母神山古墳群の草分けである。古墳の形式は大きく変わったが、中期以降北エリアにおかれた豪族長の墓域は変わらなかったのである。ところがそれほどの間を置くことなく、墓域は南エリアに移されることになった。鑵子塚を継ぐとされる墳墓は南エリアに築造されたのである。大野原での椀貸塚の築造である。おおよそ２００年の間豪族長の墳墓のなかった南エリアに、２重周濠の径が７０ｍに及ぶ県下最大の横穴式石室墳が出現したのであった。古墳時代の讃岐ではいわば後進的であった社会に何が起こったのであろうか。

３　大野原３墳を中心とする三豊平野の後期古墳の展開

後期後半、三豊平野では北エリア母神山丘陵に鑵子塚が築造されたのを先駆けとして、北エリア、南エリアいずれにも横穴式石室墳群が形成される。その中心として大野原３墳があるが、他の古墳群との関係を横穴式石室の形式の展開と時間的・空間的位置関係（変遷と分布）に求めることを通じて、その社会的性格を検討する。

ⅱ　讃岐地方の横穴式石室の諸形式と三豊平野における諸形式の展開

１讃岐地方の横穴式石室の諸形式

横穴式石室を石室平面１（玄門部平面）、石室平面２（玄室平面）、石室側面１（玄門部側面）、石室側面２（玄室側面）に区分し、それぞれの形を香川県下の横穴式石室において類型化すると、以下の形式を抽出することができる。なお石室側面の類型化に羨道側面を加えなかったのは、多くの石室において、羨道部が損壊状態にあるからである。

①　石室平面形式１－玄門部の平面形式

県下の横穴式石室の玄門部の平面形は、Ⅰ　両袖形、Ⅱ　片袖形、Ⅲ　無袖形に大別され、Ⅰ　両袖形は、玄門袖石と羨道側壁の面を合わせる（ａ　羽子板形），玄室側壁と羨道側壁が一体となり，玄門袖石が両側面より突出する（ｂ　突出形），突出形に近いが，玄室側壁と羨道側壁が一体で無いことから玄門袖石の羨道側面からの突出度が弱く，ａとｂの中間に位置する（ｃ　中間形）に３細分される。Ⅱ　片袖形は、ａ　左片袖形，ｂ　右片袖形に２細分される。以上は次のように表記されるが、Ⅰ　両袖形の（　）内の数値は形式を数値化したものである。

Ⅰ　両袖形（数値：羨道幅÷玄室入り口（前壁）幅）

ａ：羽子板形（89,3%～28,2%）

ｂ：突出形（110 %～80%）

ｃ：中間形（東讃の簑神 86,9　椋の木 87,2 を除くと、79,5%～70,2%）

Ⅱ　片袖形

ａ：左

ｂ：右

Ⅲ　無袖形

②　石室平面形式２－玄室の平面形式

県下の横穴式石室の玄室の平面形は、ａ　長方形，ｂ長台形，ｃ　胴張り形，ｄ　逆長台形、ｅ　撞木形，ｆ 逆Ｌ字形に大別される．また，ｃ　胴張り形は，ｃ１　胴張り形，ｃ２　準胴張り形，ｃ３　準長台形に３細別される．ｃ１，ｃ２には，玄室入り口部の壁石の構築上の処理によって結果的にこの平面形がもたらされたものもある（椋の木古墳等）。以下の表記におけるｃ２の（　）内数値は羨道幅の玄室入り口幅の割合であり、ｃ２の細分検討のための参考数値である。

ａ：長方形

ｂ：長台形

ｃ１：胴張り形

ｃ２：準胴張り形（70%台－中尾・久本・新宮・椀貸（玄門平面Ⅰｃ）、80%台－椋の木（玄門平面Ⅰｃ）・穴薬師（玄門平面Ⅰｂ）、60%台－黒島林６号（玄門平面Ⅰａ）

ｃ３：準長台形

ｄ：逆長台形

ｅ：撞木形

ｆ：逆Ｌ字形

ｇ：方形

③　玄室側面形１（玄門部側面）（→玄門部平面形）

玄室の側面形は、玄門上部と天井石、奥壁の据え方によって決定される。県下の横穴式石室の玄室の側面形は、Ａ　袖石に天井石をのせる　Ｂ　袖石上に梁石を懸け、その上に天井石をのせる　に２大別され、Ａはさらに、Ａ１　袖石上に天井石を垂直にのせる　Ａ２　袖石上に羨道側壁石がのる　に２細分される。Ｂも、Ｂ１　梁石を垂直にのせる、上下２重以上になる場合もある　Ｂ２　梁石上の天井石が玄室内にせり出す　Ｂ３　梁石上の天井石が斜めに懸けられる、Ｂ４　梁石上の天井石は玄室前壁を充填する風である　Ｂ５　梁石に小型天井石を斜めに懸け、玄室前壁を傾斜させる　に５細分される。

Ａ

Ａ１（Ｉｂ突出形が多い）

Ａ２（Ｉａ羽子板形が多い）

Ｂ

Ｂ１

Ｂ２（Ｉｃ中間形が多い）

Ｂ３

Ｂ４

Ｂ５

④　玄室側面形２（玄室側面）

玄室の側面形は、玄門上部と天井石、奥壁の据え方によって決定される。県下の横穴式石室の玄室の側面形は、ａ　天井石を水平に懸ける　ｂ　天井石を中央部が最高で前後に斜めに懸ける（寄せ棟形）　ｃ　奥壁が最高になるように斜めに懸ける（片流れ形）ｄ　奥壁にまたがる天井石を斜めに懸ける　に４細分される.

２　各地の有力古墳の横穴式石室の形式

石室平面形式１（玄門部の平面形式）におけるＩｃ（中間形）は、さぬき市簑神・中尾・北谷・椋ノ木、高松市潮満・久本、坂出市・新宮、観音寺市鑵子塚・椀貸塚に採用されている。これらの古墳は各地の後期横穴式石室墳の草分けであり、石室規模は各地において最大に位置する。この玄門部の平面形式は有力古墳、一般的には首長墓と呼ばれる古墳に固有の形式であり、その成立に北九州の影響が認められるものである。なお、これらの古墳を引き継ぐ次世代の有力古墳、それと同時に始まる中位・下位クラスの多くの古墳も、石室平面形式１がＩｂ（突出形）となる。Ｉｃ（中間形）からＩｂ（突出形）の変化は形式間で跡づけることができるが、畿内の形式の影響を想定することもできるという。

３　三豊平野の横穴式石室の諸形式の展開

三豊平野の有力古墳として、規模と形式と築造にみられる繋がりから母神山古墳群の鑵子塚、大野原の椀貸塚、平塚、角塚を上げることができる。大野原３墳は群を形成する。下位クラスの古墳も群を形成する。母神山古墳群はさらに支群を形成する。以下に各古墳群の形式の展開をみる。

ｉ　有力墓群

	石室平面形式１＋石室平面形式２（玄室奥壁/玄室長%）＋石室側面形式		
鑵子塚	Ｉｃ－中間形	ｃ１－胴張り（42,0）	Ｂ１－ａ
椀貸塚	Ｉｃ－中間形	ｃ２－準胴張り（50,0）	Ｂ２－ａ
平塚	Ｉｂ－突出形	ｃ３－準長台形（43,9）	Ａ１－ａ
角塚	Ｉｂ－突出形	ａ－長方形（57,8）	Ａ１－ａ

ⅱ　母神山古墳群

千尋神社支群　Ｉａ－羽子板形？　ｄ－逆長台形

　　Ⅲ　－無袖形？　ｄ－逆長台形

黒島林群支群

１号	Ｉｂ－突出形？	ｃ１－胴張り形（3,8m玄室長）	
６号	Ｉａ－羽子板	ｃ２－準胴張り形（55,6）	
久米塚	Ｉｃ－中間形	ｃ２－準胴張り形（58,3）（3×1,75m玄室規模）	
久米東塚	Ｉａ－羽子板	ｃ２－長方形胴張り形（21.0）4,75×1,6m玄室規模）	

上母神支群

瓢箪塚	前方後円墳－王墓山タイプの横穴式石室？		
鑵子塚	Ｉｃ－中間形	ｃ１－胴張り形（42,0）	Ｂ１－ａ
上母神４号	Ⅱ	ｄ－逆長台形	

ⅲ　大野原古墳群

小森塚古墳支群：

１号	Ⅱ		
道下１号	Ｉａ－羽子板	ｃ２－準胴張り形	（仕切石　方柱石無し）

宗像古墳支群

宗像古墳	Ｉａ－羽子板	ｃ２－準胴張り形	（方柱石無し？）

西の後古墳支群

１号	Ｉａ－羽子板	ｃ２－準胴張り形	（方柱石有り？）

以上の各古墳群の玄室長は４ｍ～３ｍである。

縁塚古墳支群

１号	Ｉａ－羽子板	ｃ２－準胴張り形(58,8)（2×3,4m玄室長）	
２号	Ｉａ－羽子板	ｄ－逆長台形(50)	
４号	Ｉｂ－突出形	ｄ－逆長台形(41)（6,3m玄室長）	
１０号	Ｉａ－羽子板	ｄ－逆長台形(63,3)	
１１号	Ｉａ－羽子板	ｄ－逆長台形(?)	

１２号　Ⅲ　－無袖　　ｃ２－準胴張り形（38,5）（1×2,6m玄室規模）
１４号　Ｉａ－羽子板　　ｃ２－準胴張り形(35)
平岡古墳支群
１号　Ｉｂ－突出形　　ｃ２－準胴張り形(44)（2,2×5m玄室規模）
３号　　ｃ２－準胴張り形
４号　Ｉｂ－羽子板？　　ｄ－逆長台形(65)（1,3×2m玄室規模）

有力墓群は、北エリア豪族連合の長の墳墓－瓢箪塚前方後円墳を継ぐものであるが、鑵子塚、椀貸塚、平塚、角塚の順で築造された事が今次の調査によって確定された。この変遷観に従えば、石室の玄室平面形式は胴張り形から準胴張り形、そして長台形、長方形と変化する。玄門部平面形式は中間形、中間形、そして突出形、突出形と推移する。石室側面形式はＢ１－ａ，Ｂ２－ａ，Ａ１－ａ，Ａ１－ａと変化する。形式の多くが代毎に異なること、その中で九州の影響が顕著な玄門部平面形式は相対的に継承性の強いことが注目される。なお、中間形から突出形への変化に畿内の形式の影響を想定する見方もあるが、形式的変化を跡づけられることから、影響があったとしても、折衷的な対応に留まったものであろう。同じく畿内の影響が想定される下位クラスに対し、この対応の点で大きく異なるのである。

下位クラス古墳群の石室諸形式は玄門部平面形式と玄室平面形式を合わせた小様式レベルで共通する事が注目される。小様式は羽子板形（玄門部平面形式）＋準胴張り形（玄室平面形式）、羽子板形＋逆長台形の２種である。これに羽子板形が突出形に変わった変形版が僅かにある。これは、玄室規模から下位クラス墓における有力墓である．中位クラス墓ということになる。小様式２種の差は、隣接してセットで分布する（縁塚古墳群）ところから、構築時期の新旧を表していると考えられる。南北２エリア間の差異なく、三豊平野の下位クラスの古墳群は１時期１種の様式にしたがって極めて統一のとれた斉一的な展開を示しているのである。下位クラス墓に特徴的な形式は玄門部平面形式－羽子板形であり、これは讃岐と畿内の間に生まれた折衷形式ではなく、畿内の形式そのものである。このことから、下位クラス墓の形式の統一的、斉一的な展開に畿内文化の介入、造墓活動への畿内政権のコントロールが認められるのである。

それでは、有力墓群と下位クラス墓群は畿内政権によって分断されたのであろうか。ところが下位クラス墓は、玄室平面形式－準胴張り形を椀貸塚と共有し、中位クラス墓は有力墓と玄門部平面形式－突出形を共有する。形式によっては繋がっている。有力墓群と下位クラス墓群は、分断はされてはいないのである。形式の明確な差異は有力墓と下位クラス墓の明確な区分、あるいは分節の状態を示すものであり、畿内政権のコントロールはそこに目的を定めたものであったと思われる。

４　三豊平野後期古墳群の分布

北エリアでは６世紀前半に母神山丘陵に前方後円墳－瓢箪塚古墳が築造され、後半に有力墳－鑵子塚、第４四半期以降７世紀の前半に中位・下位クラス墳群－千尋神社支群、黒島林支群、上母神支群が形成される。北エリアの豪族連合長、豪族のほとんどが、母神山丘陵を墓域として共用していたようである。

南エリアでは６世紀第４四半期、北エリアの有力古墳－鑵子塚を継いで、大野原に有力墳－椀貸塚が築造され、それを継いで７世紀はじめには平塚、第２四半期には角塚が築造される。この大野原３墳を中心にして、７世紀の前半には古墳小群が周辺に、柞田川の流れに沿うように分布する。また大野原で

は大野原３墳と対になるように観音堂古墳、町役場古墳、若宮（石砂）古墳が分布する。江戸初期の開発によって多くの墳墓が失われたことからこの分布にみる計画性は偶然の結果かもしれない。しかし、その分布に大野原３墳が他の墳墓群と墓域を共用していたことは認めることができる。大野原３墳は規模、石材、石室の形式において、他の古墳群に対する隔絶性を志向するが、分布においては、個々の墳墓群を一つにまとめる、中核としての在り方を明らかにしているのである。この墳墓群の組織化は始祖の統一、同族関係の確立と捉えることができるから、南エリアにおける大野原の３墳を中心とした古墳群の空間的な展開から、６世紀第４四半期に三豊平野豪族の族的統合の図られた事が知られるのである。

ⅲ　後史

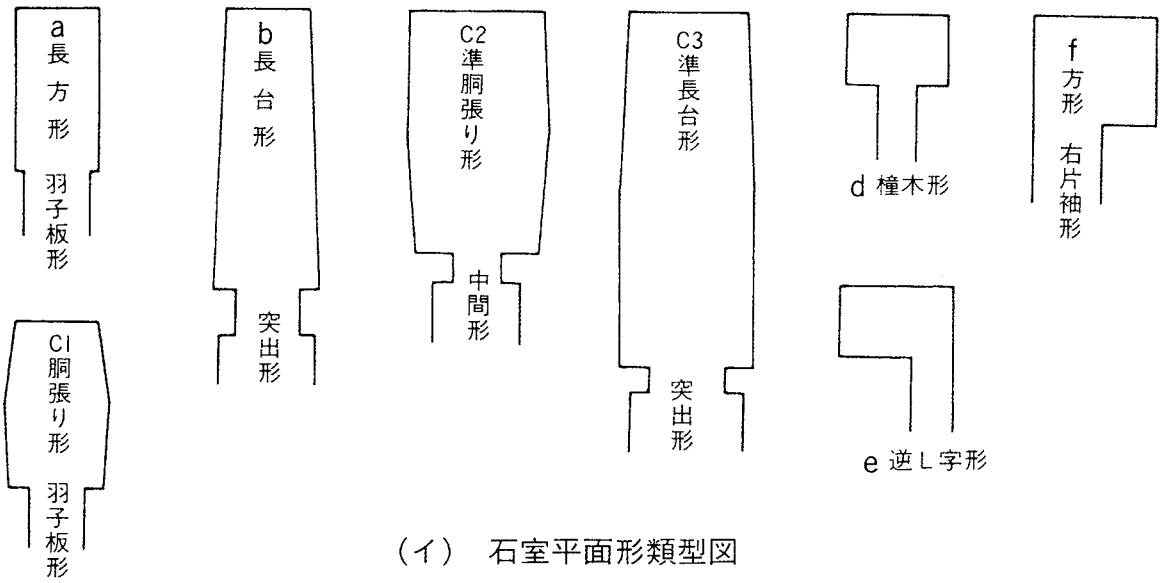
大野原の地で、椀貸塚、平塚、角塚、豪族長３代の墓が築造された後、藤原京・奈良京時代に至って、同じ南エリア、椀貸塚の北東１・５ｋｍ、柞田川の側に紀伊廃寺が建設される。寺の西方１ｋｍには柞田駅が推測されている。大野原３墳築造の豪族の氏寺を紀伊廃寺に求めることができよう。ところが、彼らの先祖伝来の地は北エリアである。北エリアの地こそ氏寺建設に相応しい。氏寺は氏族の故地、北エリアに帰還すべきであった。しかし大野原３墳の築造は南エリアもまた血統の由緒を求めうる地となし、むしろ当該期には南エリアの方が血統を顕現するに相応しい地となったのであろう。

大野原の地が歴史上再び姿を現すのは大よそ９００年後の江戸時代前期の大開拓においてである。水田開発という。椀貸塚・平塚・角塚の３墳と周囲の若干の墳墓を残して、多くの墳墓が壊滅した。その数１８０という。大野原が水田開発するに困難な地である地勢的根拠は見あたらない。古代後半から近世初期まで長く鍬が入らなかったのは、特別の地についての記憶、３墳に葬られた豪族長だけではなく三豊平野の多数の豪族達の兆域についての記憶によるところであろう。

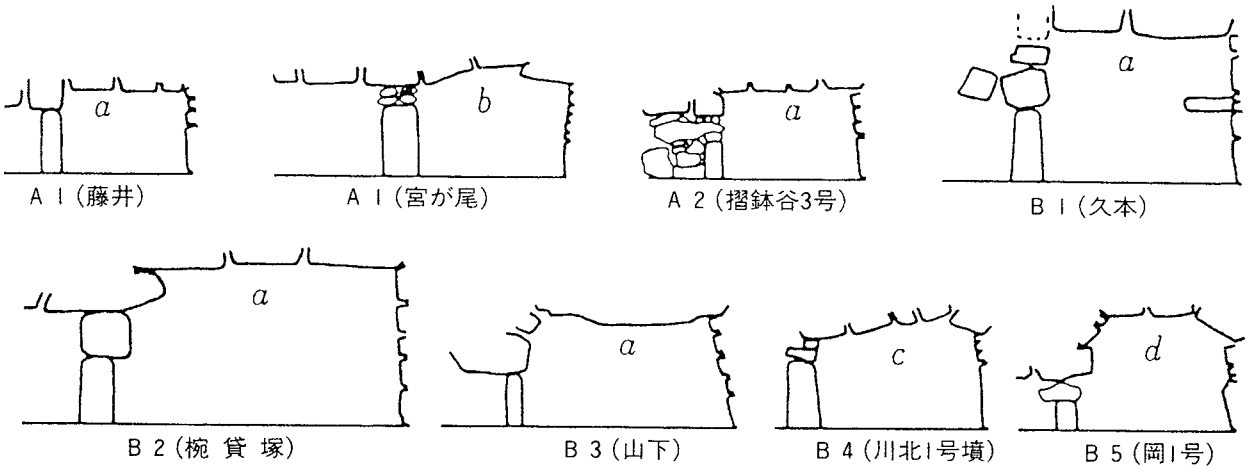
Ⅲ　大野原の地に巨大古墳が築造された理由

６世紀第４四半期、北エリアの豪族連合の長は柞田川を越え、大野原の地に埋められた。大野原椀貸塚は南北エリアの豪族の統合の記念碑である。これは三豊平野史上はじめての統一政権の誕生を考慮させるものであるとともに、他の平野部の５世紀第１四半期の豪族の統合と引き続く平野最大の前方後円墳の築造を思い起こさせるものである。椀貸塚の７０ｍに及ぶ二重周濠、県下最大の石室は各平野の最大の前方後円墳になぞらえることができるのである。

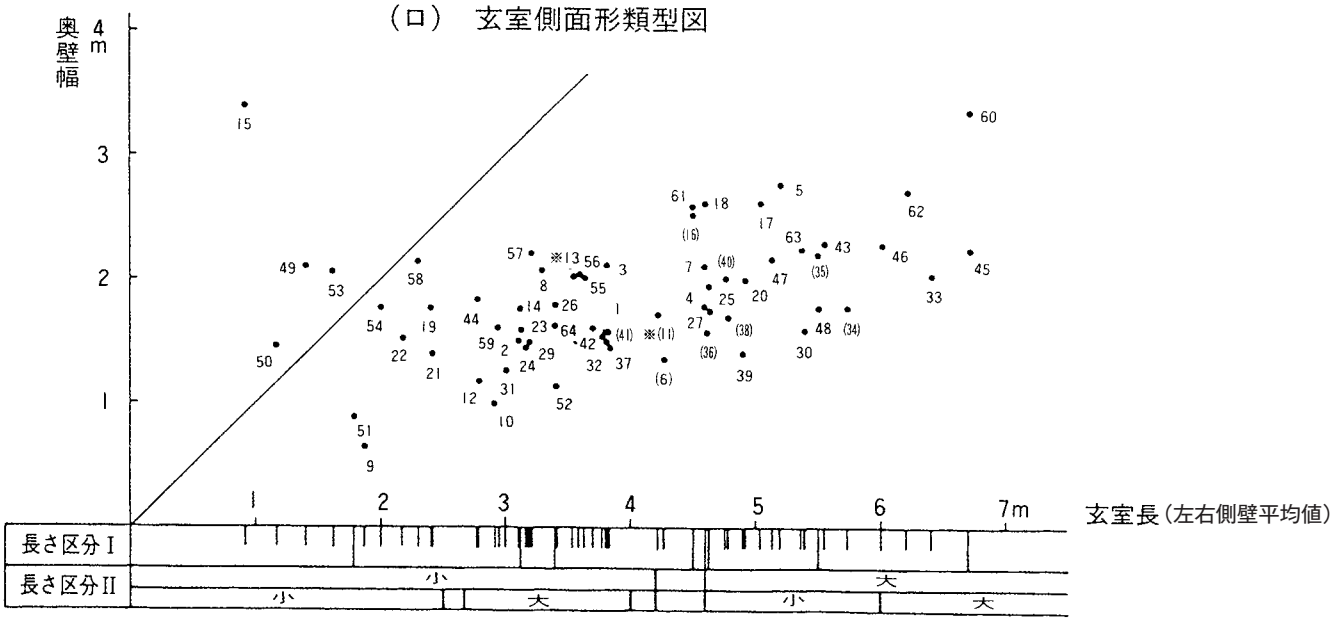
しかし問題は統一政権の中身である。大野原３墳を中心にした三豊平野の後期古墳群の展開に畿内文化の介入、畿内政権のコントロールが察知された。それは、石室の形式の推移からみて、統合を明示する椀貸塚の築造の後、平塚築造の段階に認められる。したがって、統合は三豊平野北エリア豪族連合が主体的に進めたものであるが、平塚築造に先立って畿内政権によってコントロールされることになったものと考える。コントロールの存在は有力墓と中位クラス墳、下位クラス墳の区分表示に認められる。これによって三豊平野の豪族達は畿内政権の身分制度のもとに在ったことが知られるのである。三豊平野の豪族の統合による統一政権は、畿内政権を中枢にした中央政府の三豊支部に位置づけられるのである。



（イ） 石室平面形類型図



（ロ） 玄室側面形類型図



（ハ） 玄室規模区分（60椀貸塚 61角塚 62平塚）

図53 香川県横穴式石室集成（（ ）は未調査）

大野原古墳群における石室形態・構造の変化と築造動態／讃岐及び周辺地域の大形横穴式石室墳と大野原古墳群

大久保徹也

はじめに

ここで検討する大野原古墳群および母神山鑵子塚古墳の石室形態は、これまで論じられて来たように、九州中北部から西部瀬戸内の北・西部沿岸に展開する、いわゆる複室構造石室に由来するものであろう。しかし虚心坦懐に諸古墳の石室形態を観察し故地のそれと対比するならば、彼我の密接な関係は最初の導入時期の一点においてのみ見出され、それすらも単純に特定地域の石室形態を忠実に複製したというわけではない。あくまでそれを一個の参照項目として、構築にあたってはむしろ旺盛な創造的意欲を発揮しているとさえいえよう。また導入以後繰り返される改変は、大筋でこの時期に広域で連動する指向性–使用石材の大型化志向と羨道の相対的な長大化ないし羨道／玄室一体化–に則ったものといえる。その意味で、外部の特定地域（ないしは特定グループ）との累代的な(強固で閉じた)連携関係を石室形態から読み取ることは困難だ。このことは母神山鑵子塚古墳及び大野原古墳群の諸石室を全面的あるいは部分的に参照する周辺各地の大形横穴式石室構築についてもあてはまるだろう。

以下では、最初に、大野原古墳群諸古墳と母神山鑵子塚古墳の石室形態・構造の特徴をあらためて整理する。筆者は主として石室形態の面から母神山鑵子塚古墳→椀貸塚古墳→岩倉塚古墳→平塚古墳→角塚古墳の関係を推測した。本書で報告する一連の調査でこの見通しは補強されたと考えるが、あらためて調査成果を交えてこの点を確認する。とくに石室平面形態、玄室(後室)玄門形態、使用石材サイズと石積みの特徴に注目し、上に掲げた築造順の確認とその間に生じる変化を整理する。次いで出土須恵器の面から築造時期を論じる。この中で暫定的な試案であるが当該時期の編年案を提示してみたい。

そして最後に讃岐及び四国周辺地域の大形横穴式石室墳の築造動態に言及し、以て大野原古墳群の意義を浮かび上がらせてみようと思う。

１．大野原古墳群における石室形態の特徴とその関係

（1）石室の基本構成と形態

母神山鑵子塚古墳と椀貸塚古墳とでは玄室の前方に羨道とは区別される明確な一区画を設ける。複室構造石室における前室に相当する。平塚古墳、角塚古墳ではこれを欠くが、前室区画と羨道の一体化による。平塚古墳では羨道最前面の天井石架構にその痕跡がうかがわれ、大野原古墳群以外でも前室区画の解消＝羨道との一体化の過程を指し示すものがある。この点は後に再度触れることとしたい。

ところで複室構造石室に由来する形態とはいえ、すでに母神山鑵子塚古墳の段階で後室相当区画（玄室）は長大化し、対して前方区画は矮小化の度を強めている。上に述べたようにその後は前室区画は羨道と一体化して解消の方向に向かう。さてこの中で、複室構造石室では通有の前後室の仕切り構造–前後壁面より突き出すように左右に立柱石を据え、その上部に前後より一段低く石を横架する形態–は母神山鑵子塚古墳、椀貸塚古墳では明確に観察される。これらでは前方区画（前室）と羨道の間にも同巧の構造が復元できる。平塚古墳・角塚古墳ではこの部分のとくに上部構造の変容が顕著だが、壁面から突出させる左右の区画立柱の設置はこの系統の石室群の特徴として残存する。

今少し詳しく各古墳の平面形態について確認しておこう。鑵子塚古墳は玄室（後室）長約 5.3m、玄室幅は中程で約 2.5m、奥壁と玄門部付近の幅は約 2.3m で、床面積はおよそ 13 ㎡弱を測る。玄室の長

幅比（玄室長／玄室幅　以下同じ）は2.2となる。椀貸塚古墳は玄室（後室）長約6.7m、鑵子塚同様に玄室中程がやや張り幅約3.5m、奥壁3.2m、玄門部3.0mとなり、玄室（後室）床面積はおよそ23㎡弱に達する。玄室長幅比は2.0である。平塚古墳で玄室（後室）長約6.2m、玄室幅は奥壁付近で2.6mだが前方に向かいわずかに開き玄門部付近の幅は約3.0mとなる。床面積はおよそ17㎡強で玄室長幅比2.2である。角塚古墳は玄室（後室）長約4.5m、玄室幅約2.6mで、床面積はおよそ12㎡弱を測り、玄室長幅比は1.8となる。

玄室（奥室）平面形に関しては、角塚古墳では長幅比がやや減じるものの4古墳の間でさほど大きな開きはない。玄門部以前の形状が不明な岩倉塚古墳でも玄室幅は奥壁約2.2m、中程2.4mに対して玄室長は判明している限りで4.5mを越え、おそらく5m強と見積もられる。これを含めて故地の複室構造石室の後室形態からはかけ離れて玄室長が同幅の2倍前後に達する長大な平面形をもつことが判る。

母神山鑵子塚古墳と椀貸塚古墳とで前室区画が明瞭に看取されるもののそのサイズは前者で長2.2m、幅1.7m、後者では長3.4m幅2.3mと、後室に比べ長さは半分以下、幅は２／３弱にすぎない。さらにこの二つの石室では前方に前室とは区別できる羨道部を付設する。もっともごく短く母神山鑵子塚古墳では長さ1.2m弱、椀貸塚古墳では石室閉塞石の検出位置から長1.5m程度と復元でき、幅はほぼ前室のそれに匹敵するようだ。ともにこの部分で礫積みの閉塞が観察される。羨道部は前室前方に取り付く閉塞用スペースともいうべきものだ。両者では前室と羨道の合計長は玄室（後室）長の7割前後となる。

平塚古墳と角塚古墳では前室区画と羨道が一体化し長大化が著しい。前者では長約5.9mと玄室長にほぼ匹敵し、後者では約７mと玄室長を大きく凌ぐ。また羨道幅も前者で玄室幅の77%、後者では92%に達する。要するに玄室に匹敵あるいは凌駕するほどに前室と一体化した羨道が発達する。こうした変化にも拘わらず平塚古墳では羨道最前方の天井石を一段低く架構し、この形は羨道と一体化した前室部前面区画の痕跡と解したい。なお角塚古墳では現存の最前面天井石にそうした形跡はないが、その前面の局部的な石材架構痕跡と側壁最前面位置を考慮すると手前にもう一石を架構した可能性がある。

（２）玄門部の形態と構造

岩倉塚古墳はこの部分の形状が全く不明だが、他の4古墳では前後の壁面から内方に突き出すように立て据える柱状石材を以て玄門部側面を構成する点で共通する。しかし玄門上部の架構様態や使用石材の面では変化が著しい。母神山鑵子塚古墳と椀貸塚古墳では両側立柱の上部にやや小ぶりな一石を横架し、玄室（後室）側は天井までの間をより大形の石材を積み充当する。また前室側はこの横架材に重ねるように直接天井石を架ける。共に直上の横架材を両側立柱で支持する構造である。いわゆる楣石構造が明確に観察される。細部に相違点も看取されるが二基の基本構造はよく似ている。両者の差異を補足すると母神山鑵子塚古墳では両側立柱がやや小ぶりでその直上に重ねた塊石にいわゆる楣石を架ける。また楣石を含め玄門上部の石積み高さは、母神山鑵子塚古墳約1.4m、椀貸塚古墳約1.2mと大きく異ならないが、前者では楣石の上に２石を重ねてこの間を充当するが、後者では大形石材を斜めに掛け渡す。

平塚古墳では玄門上の横架石材が両側立柱のサイズにそぐわないまでに巨大化し、この荷重を支持するため、玄室の両側壁第二段を内方に突き出すように配している。これと立柱石を以て巨大な横架石材を支える構造となる。またこの巨石化した横架石材単体で玄門上部を構成し、これに直接玄室天井石がかかる。つまり椀貸塚古墳などの典型的な楣石構造はここでは失われている。なお羨道側天井石は玄門部のそれより高く配するとはいえそれらを並べ置く。

さらに角塚古墳では両側立柱上部の石材は，前後の天井石とほとんど異ならない形態およびサイズと

化している。平塚古墳石室まで観察された羨道天井石との段差は解消され、玄室天井石との間もわずか10㎝内外の痕跡的な段差がかろうじて看取されるにすぎない。

（3）石積みの特徴と使用石材サイズの変化

続いて各古墳の主として玄室(後室)壁面の石積み状態と使用石材のサイズについて整理してみよう。もっとも以下の検討は石室内側からの表面的観察に基づき、使用石材の形状とサイズを正確に計測したものではない。しかしそれでも一定の傾向を看取することはできるだろう。

1）鑵子塚古墳の石室構築材と石積みの特徴

まずは鑵子塚古墳石室の様相をやや詳しく説明しておこう。奥壁では基底段に玄室（後室）幅に相応する幅2.2m 高1 m弱（石材サイズは表面観察の概略値。以下同じ）の巨石を据え、その上に幅0.5~1.4m 高さ0.3~0.5m 程度の石材4段を積み、天井石との僅かな間隙にはより小形の塊石を充填する。右側壁（側壁の左右表記は玄門から奥壁見通し方向の左右。以下同じ）ではやはり基底段に幅1.6～1.9m 最大高1~1.3m の巨石3個を並べる。基底石材の上端は概ね玄立柱のそれに相当する。その上位に奥壁中位段と同様サイズの石材を3段に積む。左側壁の石積みも同巧だが、基底石材が低い部分では中位段が4段構成となる。これにより玄門楣石直上の大形石材の半ばに達する高さを確保する。この後、玄室（後室）四面上端は小塊石を1~2段据えて壁高を揃え、4枚の天井石を水平に架ける。このように母神山鑵子塚古墳玄室（後室）壁面は一際大形の基底段、その半分以下の中位段、そして最上部の壁高調整用詰め石という、いわば三層構造が精緻に見てとれる。前室では右側壁は玄室（後室）中位段よりやや大きい石材を基底に置き、その上部には中位段サイズと上位詰め石サイズ石材が混在する。左側壁基底段には玄室（後室）基底石に準ずる大形石材を用い、上部に中位段サイズ石材を3段に積む。左右壁面で石積みの様相が異なるが全体として前室壁面は玄室（後室）壁面構成材より明らかに小形石材を用いる。

たとえばまんのう町安造田東3号墳や高松市山下古墳のように玄室構築石材のサイズと形状を知りうる事例を参照すれば，今挙げた母神山鑵子塚古墳石室の大形基底段は比較的平坦な広面を内側に向けるように石材を立て並べ、中位段以高では石材を平積みするとみられる。母神山鑵子塚古墳奥壁付近の計測値では床面幅2.2m に対し天井部では幅1.1m と著しく縮減する。この顕著な持ち送りは今述べた石積み様態と連動する。またこの結果、四壁上端のサイズは長さ4.5m に対して幅1m 強におさまり、これを4枚の天井石でふさぐ。天井石サイズは壁面基底段石材と大差ないようだ。

2）椀貸塚古墳の石室構築材と石積みの特徴

椀貸塚古墳はすでに見たように石室形態の点などで母神山鑵子塚古墳と共通する要素が最も多いが、玄室（後室）の床面積で約1.9倍、同容積では2.5倍以上と見積もられる。ではこうした石室規模の飛躍的な巨大化に伴って使用石材はどのように変化しているか。とくにこの点に注意してみよう。ただし現状では玄室（後室）内も床面上に流入土が堆積しているため、観察にあたって推測を交えざるを得ない部分がある。さて奥壁は4～5段で構成され、基底段には幅2.4m 高さ1.6m の大形材を据える。しかし単独で奥壁幅を充たすことができず一辺1 m大の塊石二段を添える。第二段には1.4m×1.6m、 1m×0.7m の石材を積み、三段目以高の用材は最大でも幅1m 高0.6m に収まる。右側壁では基底奥部に高さ2m　幅1.6m 以上の奥壁基底段に匹敵する巨石を置くが他は高さ1m 内外、幅1.3～2 m程度の石材からなり奥部の巨石を含め5石で基底段を構成する。第二段にも基底段よりやや小ぶりだが準じたサイズの大形材を配し、3、4段には幅1．5m 高さ0.6m 内外の石材を積む。以高は概ねこれより小ぶりの石材を用いるが、サイズと形は一様ではない。左側壁でも同様の様相が看取されるが、基底段石材のば

らつきがより大きい分、右壁第二段相当部の大形材の間に小形材が混在する。前室は床面上流入土が厚く基底段の様相が詳らかではないが、露呈している中位段以高では玄室（後室）３，４段と同程度の石材が連続する。とくに左側壁ではその傾向が強い。もっとも母神山鑵子塚古墳の前室壁面と同じように小形材が混在しており、その点で玄室（後室）と前室の壁面構成に一定の差異が見られる。

玄室（後室）の壁面構成では母神山鑵子塚古墳に類似し、やはり大まかには三層構造が看取される。一定程度の用材の大形化を志向するものの、全体として顕著な石室規模の拡大に相応するほどではない。このことは先に触れた奥壁基底石で典型的にあらわれ、また母神山鑵子塚古墳では側壁基底段が玄門立柱高にほぼ匹敵したのに対し、椀貸塚古墳で第二段の上面で対応する。同じように母神山鑵子塚古墳では約 5.2m の玄室（後室）長を左右各 3 石の基底石で形作ったのに対し椀貸塚古墳では玄室（後室）長約 6.6m を左右各 5 石で構成する。

一方、石室の巨大化に応じて玄門上部の楣石は大形化せざるを得ず、これを支える玄門立柱石自体も大形化する。しかし基底石サイズをそれほど拡大せず側壁第二段材の大形化が図られているようにみえる。また奥壁付近で床面幅は 3．5m を越えるのに対し同天井部幅は 1.5m にすぎない。前者に対する後者の縮減率は母神山鑵子塚のそれを凌駕する。これにより架構する天井石の大形化を抑えている。

上記したように母神山鑵子塚古墳と椀貸塚古墳の間で、石室の基本形態を共有しつつ規模を飛躍的に拡張しているがそれに見合うだけの用材の大形化は進んでいない。この点をあらためて強調しておこう。

３）岩倉塚古墳の石室構築材と石積みの特徴

次いで、立地の点で椀貸塚古墳ととくに密接に関係し、これに後続する岩倉塚古墳の様相を確認しよう。玄室（後室）前半が破壊されこの部分が不明だが、玄室（後室）高、同幅などから母神山鑵子塚古墳と同規模の石室と推定される。さて奥壁基底段には幅約 2m 高さ 1m 強の大形材を据え不足分を 0.3～0.4m 台の小塊石で充当する。第二・三段では幅１m高さ 0.5～0.6m台の石材を積み、上位に幅 0.5m 内外高さ 0.3m の小石材 2～3 段を重ねる。ここでも基本的には三層構造が看取される。もっとも中下段石材の大形化したことでかえって上段は縮小する。右側壁では基底段に幅 2.6m 最大高 1.4m、幅 1.8m 高さ 1.2m と奥壁基底段に同等かより大形の石材を用い、やはり中位には奥壁中位と同程度の石材を 2～3 段積む。上部は 1～2 段の小形石材で充当する。左側壁も石積みも同巧である。母神山鑵子塚古墳石室の同規模とみられるが、使用石材とくに中下段材のサイズは遙かに大規模な椀貸塚古墳石室のそれと同等であり、右側壁基底段奥部材はむしろ凌駕する。また玄室中程の奥寄り部分で計測した床面幅約 2.4m に対して天井部幅は 1.4m となる。縮減率は小さく天井幅は椀貸塚古墳のそれにほぼ匹敵する。

４）平塚古墳の石室構築材の石積みの特徴

石室には相当量の土砂が流入しており、かろうじて玄室側壁基底石の上部が露出しているにすぎない。おそらくは１m内外の堆積量を想定しておくべきだろう。この点を踏まえ、推測を交えながら検討を進める。奥壁は主として二段に積んだ大形石材で構成し、不足部分に概ね 0.5m 角の石材（最大 1m 弱×0.5m）を詰める。基底段石材は現状で幅 2.4m を測るが埋没分を加味すれば高さ 1.7m 幅 2.5m を超える大形材となろう。また第二段石材も高さ 1.5m、幅 1.3m を測る。同様の推測を加えれば、左右の両側壁基底段には各々幅 1.5m～2.5m　高さ 1.5m 内外の巨石を据えるとみられる。左右の壁面長がやや異なるが、各々4 石を以ておよそ延長６~6.5mの側壁を構成する。この点だけでもさらなる用材の大形化傾向がうかがわれる。右側壁の第二段には幅 1～1.5m 高さ 1.2m 前後を用い、これを以て玄門立柱に並ぶ高さを確保する。第三段では幅 1m 強、高さ 1m 弱の石材を並べ、その上位にはこれらのおよそ半分

程度の石材を詰める。椀貸塚古墳、岩倉塚古墳で看取された側壁第二段石材の大形化傾向はここでもより顕著な形で観察される。さて左側壁では第二段に幅 2.1m 最大高 2m の巨大石材とこれに準じた材を据える。側壁基底段石材に匹敵するかむしろそれを凌駕するサイズで一部は天井高に達している。残余の空隙には形状に応じて右側壁第三段ないし第四段相当サイズの石材で充填する。第二段用材の極度の大形化が看取されるわけだ。これは玄室天井石にもあてはまる。玄室天井部は長 6m 弱幅 2.5～3m の広がりを有するが、これをほぼ２枚の石材を覆う。とくに前方天井石のサイズは３.1m×３m以上となる。

一方、埋没が著しく羨道両側壁は基底段の状況をほとんど把握できない。しかし露出部の観察では玄室壁面に比べて全体的に小形の石材を用いており、最大でも玄室右側壁第二段材相当サイズとみられる。

５）角塚古墳の石室構築材の石積みの特徴

周知のように、石室規模の縮減にもかかわらず特に大形材を多用し石室を組む。玄室奥壁と左側壁とはほぼ一石で形作る。右側壁でも大形材一段で構成し、不足分に別材を足す。奥壁材は最大幅 2.5m 以上、高さも 2.3m 以上で、右側壁には幅 3.4m 高さ 2.4m の石材を据える。左奥壁に据えた玄室長に達する幅 4.5m 高さ 2m 以上の石材が最も大きい。玄室架構材は 2.3m×2.8m 以上、1.7m×2.7m 以上で見た目は壁面構成材の方がより大形だ。羨道部壁面は左右とも二段構成で右側壁下段に長 2.5m、左側壁下段に長 3.5m 以上の大形材を使用する。また壁面の平坦化や組合せ時の安定を図って、用材の縁辺部の剥離整形や凸部敲打整形の形跡が観察される。とくに現存最前面天井石では後者の典型を確認できる。

６）使用石材サイズと石積みの様相

以上、煩雑となったが大野原古墳群 4 石室と母神山鑵子塚古墳石室の使用石材サイズと石積みの様相をあらためて確認した。ここで確認した項目についても母神山鑵子塚古墳と椀貸塚古墳には近似した点が多い。とくに石室規模の飛躍的拡大にもかかわらず、椀貸塚古墳でそれに見合う程の用材サイズの変化が看取されないことを重ねて強調しておきたい。その点で椀貸塚古墳に後続する岩倉塚古墳の石室は母神山鑵子塚墳と同規模であるものの、用材の大型化が大きく進展しているように見える。

用材大形化の点では椀貸塚古墳、岩倉塚古墳と平塚古墳の間に最も大きな画期を見いだせるだろう。平塚古墳の巨大な玄室天井石と左側壁第二段の巨大な石材に注意しておきたい。むろん大形材の頻用という点ではほとんどそれのみを以て玄室を構成する角塚古墳が遙かにぬきんでているわけであるが、平塚古墳における最大規模用材サイズと角塚のそれに比べさほど見劣りするものではない。母神山鑵子塚以来の系統変化の終点に位置する角塚古墳石室と平塚古墳石室とでは形態／構造面の差異は小さくないが、大形材の利用能力の点では近しいものがある。

２．讃岐及び周辺地域における大形横穴式石室墳の造営と大野原古墳群の意義

以上の整理を踏まえ、大野原古墳群の築造動態を検討する。そのためには各古墳の編年的位置を確認する必要がある。そこでまず該時期の須恵器編年を簡単に整理し暫定編年案を提示しておこう。この作業と石室形態・構造の変化に留意し大野原古墳群・母神山鑵子塚古墳の編年的位置を示す。

後段では讃岐諸地域の大形横穴式石室墳の築造動態と対比し、さらに周辺地域にも言及しておきたい。

（１）讃岐地域における暫定的須恵器編年案（古墳時代後期中葉～飛鳥時代中葉）

Ⅰ期　蓋坏、無蓋高坏、短頸壺、瑞、提瓶、口頸部を強く開く長頸壺、各種甕に加えて、装飾性の高い大形器台、長脚付壺などで構成される。有蓋高坏と低脚タイプの台付壺を欠く点が特徴である。坏蓋は肩部に沈線を巡らし、まだ概ね筥形を保持する。坏身の口縁立ち上がり部は高く、坏蓋と共にしばしば

端部に鈍い面を残す。無蓋高坏は概ね長脚で三方一段の方形透かし孔を有する形態が多数派を占めるが、脚部の形状は多様である。瑳口頸部は体部を凌駕するまでに発達するがまだ基部は太い。提瓶は体部側面が凸形を呈する。また直下外方を鈍く肥厚し口縁外外面に短い平坦面を作り出す。肩部には環状把手を付す。坂出市雄山古墳群　善通寺市王墓山古墳資料を指標とする。

Ⅱ期　組成の面では新たに長脚有蓋高坏と低脚タイプの台付壺が加わる。蓋坏では蓋部肩の沈線省略が一般化し、それにつれて筥形の形状は崩れる。ただしこうした変化は漸移的で個々の形態には差異が少なくない。有蓋高坏では下端が強く開いた大形の脚部を付し、二段三方の透かし孔を穿つ。下段透かし孔が三角形ないしは顕著な台形を呈するものが多い。この他脚部が中位で強く屈折する二段構成となるものもみる。無蓋高坏では有蓋高坏を模倣するように二段の三方透かし孔を備えた形態に変化するが、多くは有蓋高坏より小形である。また一部に一段構成の透かし孔が残ることも否定しがたい。提瓶では口縁部の形態が簡略化に向かい、多くは鍵手状把手に変化する。新たに登場する低脚タイプ台付壺の脚台は有蓋高坏の一部に類似して中位で強く屈折する二段構成がみられる。高坏同様の方形透かし孔を穿つ。各種器台など大型器種にほぼ限られてきた装飾的儀礼的要素が一部の小形食器類に再び浸透すると云ってよい。いっそう進展する瑳口頸部の極端な肥大化にもそうした傾向を色濃く見ることができる。引き続き装飾性の強い器台、長脚タイプ台付壺は存在する。観音寺市長砂古 4 号墳資料を指標とする。善通寺市菊塚古墳資料の少なくとも一部はこの期に属するだろう

なお器種組成の点に明確な差異はみられないが、本期後半段階に二種の高坏でサイズと脚部形状の類同化が進むとみられる。この段階をⅡ期新とする。観音寺市母神山鑵子塚古墳資料を指標とする。

Ⅲ期　この期には新たに平瓶が加わり、提瓶は明らかに大小二類型に分化する。子持ち高坏や器台などの装飾性の強い一群の器種は本期を最後に、姿を消す。低脚タイプ台付壺では脚台の簡略化が進み、中位屈曲部の鈍化は著しい。単純なハ字形脚台もみられる。無蓋高坏はいち早く二段二方透かし孔に転じるが、まだ目立った低脚化は進まない。一方、本期古段階では有蓋高坏はまだ二段三方透かし孔を維持する。短頸壺の肩部はいち早く硬化の兆しがみられ、体最大径部に鈍い稜を形作り始める。提瓶口縁部は平瓶と同形の単純な形に変化し、肩部把手の略化が進む。この傾向は小形品ほど強い。安造田東 3 号墳資料を本期古段階の指標とする。また基本構成を共有するが、二段二方透かし孔に転じた有蓋高坏を伴う中尾古墳、久本古墳資料を指標にⅢ期新段階を設定しておく。

Ⅳ期　長脚タイプの有蓋高坏は激減し、本期では二段構成のより低脚化した形態が増える。無蓋高坏も小型化が進み、二段二方透かし孔を具えるものも残存するが、透かし孔を略し中位の沈線のみ留める個体が増える。提瓶、短頸壺はほとんど本期を以て姿を消す。台付壺では高台状のごく矮小化した脚台を付すものが残る。先進地域ではすでに以後に続く、宝珠つまみを付した坏 G が登場している時期であるが、本地域資料ではその確証はなく、蓋坏はいっそう粗雑化と小形化が進行した坏 H である。

坂出市新宮古墳前庭部出土資料、東かがわ市川北 1 号墳資料を指標とする。

Ⅴ期　蓋坏（坏 H）と少数の瑳を除き、古墳時代後期に盛行した小形器種はほぼ完全に姿を消す、代わって坏 G が普及し、なお存続する無蓋高坏は小形化／低脚化を完了し，脚中位沈線をも略するものが増える。平瓶では肩が強く張りこの部分に鈍い稜をみる形態となる。さぬき市大石北谷古墳資料、坂出市神掛神社古墳資料の一部を指標とする。古墳以外では坂出市川津一ノ又遺跡（河川改修）SD15 が本期の良好な資料群で、坂出市打越窯の操業開始期に相当する。したがって皿、台付皿などの新しい器種も本期には登場するだろう。また資料数は僅少だが高松市屋嶋城の造営時期ともみられる。

（2）大野原古墳群の編年的位置の検討

本報告第５章で示したように各古墳から出土した須恵器は多くはない。また石室の反復的な使用が一般的に想定される古墳時代後期～飛鳥時代にあっては、出土状況の観察所見を考慮しながらそれらがどこまで各古墳の築造時期を特定できるか慎重に判定しなければならない。その意味で今のところ僅少と云わざるを得ない出土須恵器から大野原古墳群諸古墳の築造時期を厳密に特定することは困難といえる。あくまで各古墳の使用期間を示唆するものである。

椀貸塚古墳出土須恵器のうち、ここであらためて注意しておきたいものは有蓋高坏脚部片である(図19-39)。この資料はT12 調査区で周堤外濠の岩倉塚古墳墳丘盛土下から検出された。したがって少なくとも椀貸塚古墳使用期間の一点を示唆し、同時に岩倉塚古墳築造時期の上限を画するものである。大形の高坏脚部片でおそらく有蓋高坏とみられる。二段の三方透かし孔を具え、脚裾付近で鈍く湾曲し，端部を外に強く引き延ばす特徴的な形状である。こうした特徴から長砂古４号墳出土資料の二段脚有蓋高坏を祖形とし、屈曲部の鈍化と極端な脚端部の引き延ばしから、その後出的形態と判断できる。したがって前項の暫定編年案ではⅡ期新段階ないしは下ってもⅢ期古段階までの間に比定できる。

岩倉塚古墳出土須恵器では町史編纂時の小発掘で玄室から出土した有蓋高坏蓋と、T1 調査区の推定石室前庭部出土の有蓋高坏に注意しておきたい。前者は口径 18 ㎝の大形品で肩部には明瞭に沈線が巡る。また頂部のつまみはしっかりした断面T字形を呈する。こうした特徴からⅡ期に比定できる。後者の有蓋高坏は前者に較べやや小形だが二段三方透かしを具え，坏部立ち上がりは高い。広く見てもⅡ期～Ⅲ期古段階の幅に収まる。

平塚古墳ではT2 調査区から坏G蓋片（図 34-1）、T3 調査区で平瓶の体上部片（図 34-10）が、T7 調査区で低脚無蓋高坏の坏部片（図 34-8）が出土している。この坏Gはより後出的な形態とみられる。口径はやや大形化し口縁かえり部はかなり縮小している。こうした形態的特徴から先に設定したⅤ期より後出する可能性が高い。平瓶は肩部の形状がわからず断定しがたいが、体部上面がかなり丸みを帯びることからⅤ期まで下らないとみてよいだろう。高坏片は坏部サイズから低脚タイプと推測でき、Ⅳ期以降に比定する。ただし下方に沈線を巡らす坏部形態に注目すればⅤ期には下らせにくいかもしれない。

角塚古墳ではT1 調査区の前庭部床面から坏G蓋片が出土している。平塚古墳出土資料に比べ、口径は小さく、全体にシャープな作りで口縁かえり部はよく下方に突出する。ここからⅤ期に比定できる。

上記の簡単な検討をここでまとめておこう。母神山鑵子塚古墳資料はⅡ期新段階の指標である。また発掘調査で確認した椀貸塚古墳周提外濠と岩倉塚古墳墳丘の関係を踏まえれば、両者はともにⅡ期新段階に比定される可能性が高い。つまり上記暫定編年案Ⅱ期新段階の中で母神山鑵子塚古墳、椀貸塚古墳、岩倉塚古墳の築造が終始することとなる。先述のとおり三基の石室には築造時期差に起因すると見られる一定の差異が認められる一方、石室の形態や石積みの特徴から特に密接な関係が読み取れることも事実である。したがって上で試みた出土須恵器の検討所見と石室形態のそれとで特に矛盾する点はない。

出土資料が乏しく、平塚古墳と角塚古墳の関係を出土須恵器から推測するのは容易ではないが、角塚古墳出土資料はごく僅少だがそれが示唆する時期は石室形態と特段食い違うことはない。また平塚古墳の築造時期比定も容易ではないが上記した平瓶等の所見は石室形態から導き出された所見と整合的であり、平塚古墳→角塚古墳の推測を妨げるものではない。

さて問題は椀貸塚古墳ないし岩倉塚古墳築造時期から平塚古墳築造までの時間的間隔である。石室形態と石積み手法の点でこの間に大きな画期を見出されることを先に述べた。この点を重視し、かつ限定

的はあるが出土須恵器を考慮に入れれば、母神山鑵子塚古墳から岩倉塚までの間、また平塚古墳と角塚古墳の間よりも大きな時間的間隔を、岩倉塚古墳築造時期と平塚古墳築造時期の間に想定しておくことをここで提案しておきたい。

あらためて整理しよう。母神山鑵子塚古墳と大野原古墳群諸古墳の築造順と築造時期は右のように推定できる。

母神山鑵子塚古墳：暫定編年Ⅱ期新段階
↓
椀貸塚古墳：暫定編年Ⅱ期新段階
↓
岩倉塚古墳：暫定編年Ⅱ期新段階
↓
平塚古墳：暫定編年Ⅳ期（?）
↓
角塚古墳：暫定編年Ⅴ期

（3）讃岐地域における大形横穴式石室墳の築造動態と大野原古墳群・母神山鑵子塚古墳

ここでは讃岐及び周辺地域の各地の盟主墳の築造時期を確認し、大野原古墳群との関係を整理する。古墳時代中期中葉に築かれた最も巨大化した２基の前方後円墳、香川県さぬき市富田茶臼山古墳、徳島県徳島市渋野丸山古墳を以て四国一円からいったん前方後円墳は姿を消す。その後、後期中葉に松山平野から丸亀平野西部の間、つまり四国北西部沿岸で一時的に前方後円墳が復活する。大野原古墳群の周辺では，善通寺市王墓山古墳、同菊塚古墳、観音寺ひさご塚古墳が存在する。王墓山古墳は暫定編年Ⅰ期、菊塚古墳はⅠ期ないしⅡ期古段階に位置づけられる。ひさご塚古墳は王墓山古墳のそれと同型式の円筒埴輪を伴い、かつ菊塚古墳では円筒埴輪樹立を停止しているのでので、Ⅰ期に比定できる。ちなみにひさご塚古墳は母神山鑵子塚古墳の至近に位置し、後者はひさご塚古墳を後継する関係が想定される。また伊予東部の旧宇摩郡域には二基の前方後円墳、四国中央市東宮山古墳と同経ヶ岡古墳が所在するが、出土須恵器から前者は暫定編年Ⅰ期、後者はⅡ期古段階に位置づけることができる。したがって大野原古墳群の造営が始まる段階で、前方後円墳の型式を再度採用したこの地域の盟主墳は姿を消す関係にある。つまり大野原古墳群および母神山鑵子塚古墳の築造段階で、盟主墳スタイルの刷新が生じている。古墳という墳墓は被葬者ないし造営集団の地位、すなわちある種の政治的秩序に占める位置を、主としてのその外観諸要素を以て表象することを強く志向するものである。こうした性格は中期段階の古墳で最も強調され、それゆえ該期には墳丘形態と規模の序列体系が充実し、埴輪、葺石等の墳丘外表諸施設と外周区画の整備が極限的に進行する。しかし後期段階にそうした志向は弱化し、王墓山古墳、ひさご塚古墳では葺石が、菊塚古墳と経ヶ岡古墳では葺石と埴輪の双方を放棄する。母神山鑵子塚古墳と大野原古墳群のスタイルをこうした変容の延長で評価することができるだろう。そしてこのような傾向と連動するように、今度はむしろ墳丘内部の埋葬施設構造に多大な労力を傾注する方向に転化する。菊塚古墳で多少は用材の大形化が看取されるものの、それらを含め盟主墳であっても小塊石や礫を以てせいぜい 10 ㎡未満の横穴式石室を組んでいたものが、一変して大形材を駆使して飛躍的に容積を拡大した大形石室の構築に向かう（巨石墳化）のである。この点もこの期の画期を構成する一面である。

続いて讃岐地域とその他の巨石墳化する盟主墳の築造動向を一瞥し、大野原古墳群との関係を見てみよう。讃岐地域ではおよそ140基弱の横穴式石室について玄室規模やその様態がある程度判明している。このうち床面積 10 ㎡を越える横穴式石室は 20 基程度で全体の 15%に満たず、讃岐地域の上位クラス盟主墳とみなしてよいだろう。またとくにこのクラスの巨石墳が集中する綾川下流域（旧阿野郡北西部）、本津川下流域（旧香川郡西部）、高松平野東縁の前田丘陵裾部（旧山田郡）に注意しておく。これらでは近接して複数の巨石墳が営まれるが、他ではこのクラスの巨石墳はほぼ単独で所在する。

綾川下流域の比較的狭隘な範囲に新宮古墳、綾織塚古墳、醍醐２号墳、3 号墳が分布する。この他、

山の神１号墳もこのクラスに属する可能性があるものの詳細は不明である。今判明している限りではこの地域の巨石墳築造は新宮古墳に始まるとみられる。また次第に変容の度を強めていくが大野原古墳群の石室形態から派生する構造である。新宮古墳では羨道との一体化が進行し、また玄室高をかなり減じているものの前室区画の痕跡器官ともいうべきやや小ぶりの前面立柱を両側におく。こうした特徴は大野原古墳群における形態変化に照らせば椀貸塚古墳と平塚古墳の間に位置づけることができる。ただし玄室長幅比は 2.3 とより狭長な形となる。前庭部から出土した須恵器の大半はⅣ期ないしⅤ期に属するが、長脚二段二方透かし孔を具える高坏１点が存在することから築造時期をⅢ期古ないし新段階に比定しておきたい。醍醐３号墳も同様に、羨道の中程に前室区画の痕跡的な立柱をとどめるが、羨道との一体化はいっそう進行し、その全体長は玄室のそれをやや上回る。玄室天井高も低く、玄室長幅比は 2.2 となる。また玄門上部に横架した石材の肥大化が著しい点も注意される。したがって新宮古墳に後出するとみるが、長脚二段二方透かし孔を具えた高坏が存在することから彼我の築造時期に大きな開きはないだろう。綾織塚古墳では平塚古墳同様に羨道前面の天井石を一段下げて架ける。しかし玄門構造の粗雑化、玄室長を凌駕する長大化した羨道長、といった形態・構造上の特徴などから前二者より一段階下るだろう。醍醐２号墳では玄門部の上部横架材の肥大化と両側立柱の形骸化が顕著に見てとれる。したがって綾織塚古墳と並行するかやや下った時期の築造が想定される。

本津川下流域の勝賀山麓に所在する鬼無古墳群では古宮古墳、山野塚古墳、鬼無大塚古墳、平木１号墳がこのクラスに相当する。いずれも際だって細長い玄室平面形をもち、総じて玄室高は低い点を特徴とする。このうち山野塚古墳と古宮古墳とでは玄門袖部の作りが曖昧で，両側基段にやや縦長の石材を立て据えるが明確な立柱構造とは言いがたい。また玄室長幅比は前者で 2.8、後者では 2.9 ときわめて狭長な玄室プランとなる。また総じて玄室天井は低く、一、二石で組む玄室前壁も高くない。また狭長な玄室に対して、それにほとんど匹敵する幅を有する羨道は短い。鬼無大塚古墳と平木１号墳で観察される明確な立柱を具える玄門構造は先の二者と大きく様変わりしている。しかし玄室長幅比は各々2.4、2.7 に達し、玄室長に対する羨道の短縮化はいっそう著しい。この点では先行形態の特徴を引き継ぐ。大野原古墳群石室と共通する上部横架材の形状などの点で後出的な形態といえる。もちろん前室区画の痕跡もとどめない。前二者と後二者各々の石室形態上の特徴からそれぞれの築造時期はごく近接するとみられる。出土須恵器から前者の山野塚古墳、古宮古墳は暫定編年Ⅲ期に、また後者の鬼無大塚古墳、平木一号墳の築造はⅣ期の中で捉えられると推測する。つまり鬼無古墳群では造営開始期には大野原古墳群ないし綾川流域の諸古墳の石室形態と系統を異にし、後半段階にいたってその要素を採用する。

高松平野東縁の前田丘陵裾部には久本古墳、山下古墳、小山古墳がやや散在的に分布する。石屋形から派生するとみられる石棚の付設でよく知られる久本古墳は玄門構造および羨道と一体化しつつもその前面両側に痕跡的な前室区画（立柱石）を見る点でやはり大野原古墳群の石室形態を援用する。玄門立柱上部の横架材は大形化を始めているが玄室天井高は高い。このことは石棚付設と連動するとみられる。また玄室長幅比は 1.9 と鬼無古墳群や綾川下流域諸墳とは様相を違える。この点は山下古墳、小山古墳に共通する要素である。出土須恵器は暫定編年Ⅲ期後半の指標としたものである。小山古墳は早くに破壊されわずかな略図から検討せざるを得ない。それによれば久本古墳と同じように羨道前面に立柱石を置き、久本古墳ではすでに略されていたが、この部分の天井石を一段下げて据えるようだ。また玄門上部横架材に重ねて天井石まで大形材を斜めに架け渡す構造を略図から推測できる。前室／羨道は一体化するものの、久本古墳より多少は椀貸塚の構造を引き継ぐ面が多いかもしれない。山下古墳では羨道に

もはや前室区画の痕跡を見いだせない。また玄門上部横架材は極度に肥大化し、その過半を羨道側壁で支持する構造となる。また玄室天井を巨大な一石で覆うことも注目される。以上、石室形態の点から小山古墳→久本古墳→山下古墳の順を想定しておく。久本古墳に先行する可能性がある小山古墳にも明瞭に前室区画の略化が看取されるので、これを椀貸塚古墳築造期まで遡上させる必要はない。また山下古墳は天井石と玄門上部横架材の巨大化は顕著だが、玄室壁面三方とも多段構成で、かつ基底段に比べ、第二段以高材はめだって小ぶりとなる。このような古相の石積みを留める点を評価すれば遅くともⅣ期のうちに収めることが妥当と考える。なお南方に少し離れて潮満塚古墳がある。石室の過半が埋没しており詳細は不明であるが、玄門部袖を明瞭に作り出す形態であることが確認できる。この点から上記三基より後出する築造時期を積極的に想定する必要はない。したがってこのエリアの巨石墳造営は暫定編年Ⅲ期のうちに始まり、Ⅳ期の中で終了するとしておきたい。

讃岐東部エリアの巨石墳築造動態は現時点で不詳と云わざるを得ない。このクラスの巨石墳では鴨部川流域の旧寒川郡南部に玄室床面積が約 14 ㎡に達する中尾古墳が単独で知られるにすぎない。器台の出土が伝えられる天王山一号墳は墳丘規模から先行する同格の有力墳とみられるが石室形態・構造に関する情報は皆無だ。中尾古墳は調査時に既に石室上部が失われており情報は乏しいが、玄門部左右にはやや小ぶりの立柱を前後壁面から突き出して据えること、前室区画は略されていること、羨道は玄室幅に比べ狭いことなどはわかる。出土須恵器から暫定編年Ⅲ期新段階に比定される。

この他、財田川右岸に単独で所在する延命古墳は讃岐地域では少数派の片袖タイプの石室を収める。一回り小ぶりとなるが，高松平野南部の東赤坂古墳、東部旧大内郡域に所在する原間 1 号墳もこの系統に属する。延命古墳は玄室両側壁基底段に長 2m 前後の大形材を据えるが、三面共に多段構成で第二段以高石材は大きくない。袖部も多段構成となる。出土須恵器からⅡ期後半～Ⅲ期に比定される。

以上、讃岐地域の大形横穴石室墳とその築造時期を簡単に示した。あらためて確認しておくと、母神山鑵子塚古墳や椀貸塚古墳は讃岐地域で最も先行して築造された大形横穴式石室である。中期に遡る高屋丸山古墳の特異な先駆的事例を別として、本地域における横穴式石室の採用はいまのところ暫定編年Ⅰ期とみられる。この時期は一部の盟主墳形態に前方後円墳を採用している。菊塚古墳を以て前方後円墳が廃絶した後に、横穴式石室の巨大化がはじまる。そうして巨大化の始点からさほど隔たらない時期の所産である椀貸塚古墳が最も傑出した規模の石室を内蔵する。また椀貸塚古墳に比べて平塚古墳の玄室規模そのものは縮小しこの小形化傾向は角塚古墳にも引き継がれるが、各々の築造時期では、この二基はともに讃岐地域の最大規模石室と評価できるものである。とくに石室形態・構造と出土須恵器から推測される角塚古墳築造段階では、上に挙げたように讃岐各地で大野原古墳群に準じた大形石室墳を一定期間築造した諸グループのいずれもが新規築造を停止している可能性が高い。

（4）四国各地における大形横穴式石室墳の築造動態と大野原古墳群・母神山鑵子塚古墳

前項では讃岐地域における大野原古墳群の位置を確認した。もう少し視野を広げてみておきたい。西方伊予地域のうち松山平野以南では有力墳であっても内蔵石室の巨大化志向は希薄に見えるが、高縄半島沿岸から東部一帯では他と同様に傾向が看取される。西接する旧宇摩郡域の石室大形化は住吉古墳もしくは向山古墳から始まるだろう。第一石室は角塚古墳のそれに近似した特徴を有するが、並置された第二石室は埋没しているが一回り大形とみられる。過去の採集遺物に子持ち高坏片を見ることなどから向山古墳の築造は暫定Ⅲ期並行期に遡ると推測する。住吉古墳は平塚古墳に類似した玄門構造を有し、向山古墳と共に石室形態・構造の面で大野原古墳群と関係が深い。ちなみにこの地域では暫定Ⅰ期～Ⅱ

期古段階並行期に東宮山古墳、経ヶ岡古墳の２基の前方後円墳が築かれる。両者の内蔵石室は同じ系統に属するが、その要素は大形化した住吉古墳・向山古墳以降の石室に引き継がれていない。今治平野奥部の野々瀬古墳群などのこれより西方に位置する大形石室墳では今のところ大野原古墳群諸石室とあきらかに関係するような形態的特徴は観察できない。

阿波地域では西部の吉野川中流域に特異な形態と構造で知られる段ノ塚穴型石室・忌部山型石室が広がる。これらは玄室平面形と特異的な発展が見られる中高式の天井架構形態にその特徴がよく表れている。おそらくは暫定Ⅰ期段階に王墓山古墳など丸亀平野一帯にも比較的見出される両袖タイプ矩形玄室が吉野川中流期で独自の変容を遂げて成立すると推測している。さて吉野川中流域における顕著な石室の大形化は太鼓塚古墳、野村八幡古墳に見られる。近似した石室形態で近接時期の所産と推測する。太鼓塚古墳の採集須恵器と両者の長大化した羨道を勘案して暫定編年Ⅲ期古段階並行と位置づける。この系統の石室の玄門構造は当初には両側面を多段構成とするが、二つの古墳では典型的な玄門立柱を採用する。石室の基本形態や天井架構様相など先行形態の主要素を多く引き継ぎつつ、玄門構造に限定して大野原古墳群と共通する要素を取り入れているといえる。なお吉野川中流域では大形横穴式石室墳の築造は短期間のうちに終始しそうだ。上記の２古墳より後出し暫定編年Ⅳ期の比定できそうな大形横穴式石室墳は明らかではない。阿波東部における横穴式石室の大形化はさほど顕著ではなさそうだ。勝浦川下流域の大形石材を用いる弁慶の岩屋古墳や観音山古墳が目につくが、玄門構造などに大野原古墳群諸石室との共通点は見いだせず、また築造時期も暫定編年Ⅳ期に下ると推測する。鮎喰川中流域の矢野古墳は天井架構等の点で中流域の特異な石室形態に共通する一方、玄門側部にひどく退化した立柱を具え、また羨道前より部分の側面に前室区画の痕跡とみられる薄い立柱を配す。出土須恵器では坏Ｇの存在などただちに先の讃岐暫定編年と対比することは難しいが、全体的様相からは概ねⅣ期並行と推測する。またこれの対岸に位置する穴不動古墳は大型石材の頻用と石室形態、とくに玄門構造から向山古墳第一石室および角塚古墳との類似が早くから指摘され、Ⅳ期ないしⅤ期に比定できるだろう。

土佐地域では、国分川右岸から浦戸湾奥部低地帯の北・東岸にかけての狭い範囲に集中して早ければⅡ期新段階に大形石室墳の造営が始まる可能性がある。段丘面に大形の方形墳丘を構える伏原大塚古墳はその最初期の候補であるが石室の規模と形態に関する情報はほぼ皆無だ。したがってこの地域の石室大形化の始点はもう少し下るかもしれない。妙見彦山１号墳や小蓮古墳といった暫定編年Ⅲ期に比定できるであろう大形石室墳はいずれも、玄室の顕著な長大化、これと対照的な短い羨道、袖部の作りをやや簡略化する玄門形態、前傾気味の玄室天井架構といった独自的な特徴を共有する度合いが強い。これらに対して整った形状の大形石材を多用する朝倉古墳では、玄室長に対してごく短縮化した羨道という先行要素の一部を保ちつつ、上部架構材の様相を含め玄門構造は大野原古墳群のそれと関係する。奥壁一段，玄室左右側面二段の石積みは角塚古墳に近似するが、横架材は相当に巨大化しつつもこれを左右の玄門立柱で支持する構造は先に示した様に平塚古墳の玄門構造よりも古相を保つ。朝倉古墳出土須恵器ではやや古相を呈する大形の短頸壺を伴いつつも蓋坏類は坏Ｇばかりとなる。坏Ｇ類の生産開始ないしは定着時期の地域的差異も考慮しておく必要があり、今ただちに朝倉古墳の築造時期を絞り込むことは難しい。ここではとりあえず大野原古墳群造営期間の後半段階に比定しておくこととしたい。

瀬戸内海北岸の類似形態石室についても合わせてここで簡単に触れておこう。備後南部の大坊古墳は早くから指摘されてきたように角塚古墳に近似する要素が多い。今少し詳細にみれば大形材一段の壁面構成が羨道に及ぶ点は角塚古墳の到達点をさらに発展させているが、玄門構造、とくに上部材と左右立

柱の関係はむしろ古相を示す。備後南部の大形石室はこの段階に至って類似性を強めている。

また山陽西部佐波川流域には母神山鑵子塚古墳の祖形と位置づけられてきた黒山３号墳、周防車塚古墳（後円部石室、前方部石室）が存在する。前者は玄室（後室）平面形や前室区画形骸化の様相について母神山鑵子塚古墳に通じる部分が少なくない。また比較的大形材を据える石室基底段に対して第二段以高に小ぶりな石材を平積みする壁面構成と玄室高の高さから母神山鑵子塚古墳に先行する築造時期が想定され、それゆえ祖形と位置づけられてきたものである。しかし玄門上部横架材の大形化は顕著であり、この点に後出的要素が見出される。母神山鑵子塚古墳石室と共有する要素は少なくないが、祖形とするには躊躇がある。また周防車塚古墳の場合、前方後円墳という点で築造時期を繰り上げる傾向が強い。また小形材を多用する壁面構成もこうした想定を促すようだ。しかし後円部・前方部の二つの石室はともに複室構造の変容・簡略化の度合いが強い。とくに玄室（後室）の長大化と低平化、玄門構造の簡略化にそれが顕著にあらわれている。また後円部石室では前面区画の粗雑・形骸化が著しいものの一応の前室区画を留めるが、石積みの様態では一見古相を醸し出す前方部石室では久本古墳や平塚古墳に見るような前室区画と羨道の一体化が看取される。石積み様態など相違点も少なくなく単純に対比することは難しいが、強いて云えば周防車塚古墳は新宮古墳以降の時期を想定すべきだと考える。したがって、周防佐波川流域の一部古墳で大野原古墳群石室の様相を共有する関係が生じたことは想定してよいが、母神山鑵子塚古墳の祖形と位置づけることは難しい。

３．大野原古墳群の意義

上記したように、伊予東部（宇摩郡）との間では石室形態・構造を共有する度合いが強い。また経ヶ岡古墳（暫定編年Ⅱ期古段階並行）と住吉古墳あるいは向山古墳までの盟主墳築造の空白期間を考慮すれば、大野原古墳群造営開始期の少なくとも一時期において彼我の一体的な関係を推測しても良いかもしれない。吉野川中流域の大形横穴式石室墳では要素の一部が、また同下流域（鮎喰川水系）ではⅢ期新段階以降に遅れて形態・構造の共有関係が認められる。このことは土佐地域でも同様である。

また暫定編年Ⅱ期新段階～同Ⅴ期まで大野原古墳群では巨石墳の造営が続く。しかも台地縁辺に順次配列された諸墳は相互に視認可能な位置関係にあり、燧灘海上を含めかなり広い範囲から大形墳丘の並置を見渡すことができる。いうまでもなくこうした古墳群のありようはむしろ古墳時代前期末～中期的な様相を想起させるもので、古墳時代後期～飛鳥時代においてこれ程の期間同一地点において累代的に盟主墳の造営が繰り返されることはきわめて特異である。綾川流域の諸古墳全体でもその造営はⅢ期～Ⅳ期の幅に収まる。その中の醍醐古墳群に限定すれば始点はもう一段階新しくなる。このことは上に挙げた鬼無古墳群や前田丘陵裾部の諸古墳についても相当するし、四国各地の同様の古墳群を見渡しても異ならない。この点に、傑出した墳丘規模や内蔵石室規模と共に、大野原古墳群の重要な特質がある。

讃岐及び四国地域において、巨石墳造営は大野原古墳群で始まり、大野原古墳群の終焉とともに巨石墳の時代は幕を閉じる、と表現しても大過ないであろう。なお先に言及したが、屋嶋城造営時期（667年）を反映するとみられる城内出土須恵器は大野原古墳群の終焉に一致もしくはごく近接時期に比定されることはきわめて示唆的である。

＊紙幅の都合で用意した図表、註を全て省略したことをお詫びしたい。大野原古墳群諸石室の形態／構造の詳細と出土遺物は本書の各古墳報告の項で確認されたい。別の機会にあらためて私見を論じなおしたいと思う。

大野原古墳群からみた後・終末期の首長墳

菱田哲郎

大野原古墳群に対する調査について、一応の節目を迎えた時点で、あらためてその特色から位置づけを考えてみることにしよう。形状や数値については、すでに総括にまとめられているので、ここでは繰り返さないが、6 世紀後葉から 7 世紀前半にかけての首長の奥津城として次々と大型横穴式石室を内包する古墳が築造された点に最大の特色がある。墳丘についても、周堤がめぐる椀貸塚古墳、さらに大型となり径 50mをはかる平塚古墳、そして大型方墳の角塚古墳というように、時期とともに形態を変えており、石室についても複室構造から単室構造へ、玄室平面形が胴張り形から矩形へ、石室断面も台形から矩形へと変化し、おおむね畿内地域の石室を志向する方向への変化がうかがえた。数代にわたる首長墳における変化が明瞭な事例として特筆することができよう。

椀貸塚古墳が周堤をもつ古墳であったことは、後期首長墳の特徴について新たな知見となった。中期古墳では、畿内をはじめ各地域の前方後円墳に外堤がめぐることはむしろ一般的であるが、後期になると奈良県市尾墓山古墳のように外堤をもつ前方後円墳は依然として築かれているが、次第にみとめられなくなる。そして、椀貸塚古墳のように、大型円墳に周堤をともなう事例は、かなり珍しい例とすることができる。ただし、福岡県彦徳甲塚古墳、宮崎県西都原 206 号墳、滋賀県弁天塚古墳のように、後期後半から終末期にかけて周堤をもつ円墳が散見されることも事実である。この時期の円墳は、墳頂部に平坦面をもたないなど、後期前半までの円墳とは異なるものであり、したがって周堤についても、中期古墳の外堤の系譜で考えるべきではないだろう。弁天塚古墳の例のように、周濠に対して墳丘が著しく小さい例もあるが、彦徳甲塚古墳は径 29m、西都原 206 号墳は径 36mと大型であり、椀貸塚古墳と比べても遜色ない。前期以来の首長墳が営まれる西都原古墳群において大型横穴式石室を内包する 206 号墳が 7 世紀前半を代表する古墳であり、また彦徳甲塚古墳が位置する甲塚古墳群は、「豊国造」の奥津城と考えられており、抜きんでた首長の存在が想定されている。弁天塚古墳群が含まれる勝堂古墳群も、7 世紀前半においては近江最大級の首長墳が展開しており、この地の有力豪族である愛知秦氏の奥津城に比定されている[1)]。愛知秦氏は、白村江の戦いのおりの将軍である朴市秦造田来津を輩出しており、中央でも名の知れた大豪族であった。周堤をもつ後期円墳という側面からは、いずれも各地域の最有力者の墓に用いられるという特徴が導き出され、椀貸塚古墳をはじめとする大野原古墳群の被葬者像を考える助けとなる。

この後・終末期の大型円墳にともなう周堤の起源については、類例が少ないので即断することはできないが、椀貸塚古墳が複室構造をとる横穴式石室で、九州から瀬戸内西部に系譜がたどれたことが参考となろう。豊前や日向の例の例は、椀貸塚よりも時期的に下るものであったが、周堤の成立が九州にあることを示唆しているように思われる。

大野原古墳群は、岩倉塚古墳も含め、6 世紀後葉から 7 世紀第２四半期にかけて累代の首長墓が形成された古墳群とすることができる。このような累代首長墓型の古墳群は、後・終末期に各地で展開している。郡ごとに大型石室が抽出され、郡領クラスの先祖とみなされることも多い。しかし、大野原古墳群のように、より規模の大きな石室、墳丘をもつ古墳が累代形成される事例は限られてくる。先に挙げた勝堂古墳群の位置する近江では、より成立の古い大岩山古墳群とこの勝堂古墳群が傑出した存在であり、甲山古墳に代表される大岩山古墳群は「安国造」の奥津城を示すと考えられている。勝堂古墳群で

は、径32mと赤塚古墳、径40mクラスのおから山古墳が含まれ、6世紀後葉から7世紀前半に営まれた点で、大野原古墳群とほぼ併行する時期にあたることがわかる。

山城の場合は、嵯峨野古墳群が傑出した存在であり、秦氏の奥津城とみて間違いないであろう。秦氏は、この葛野郡を本拠とするが、隣接する乙訓郡、愛宕郡、紀伊郡、宇治郡などにも進出していたことが確認されており、これら北山城一帯の首長墓として嵯峨野古墳群をみなすことが可能である。

出雲の場合も西出雲の今市・塩冶古墳群と東出雲の山代・大庭古墳群が二大古墳群であり、出雲を二分する勢力が想定されてきた。東側については出雲臣の可能性が高いが、『出雲国風土記』の記載から明らかなように、出雲臣は意宇郡のみならず、飯石郡など周辺の郡領も輩出しており、山城国の秦氏と同様の評価が可能である。このような、郡レベルを超えた累代首長墓型古墳群は、各地にみとめられ、上総の内裏古墳群、上野の総社古墳群のように古くから国造クラスの墓域として理解されている。大野原古墳群における大型横穴式石室の存在は、その被葬者が讃岐あるいは北四国において傑出した位置を占めることは、上述してきた諸例から判断して確実視できる。

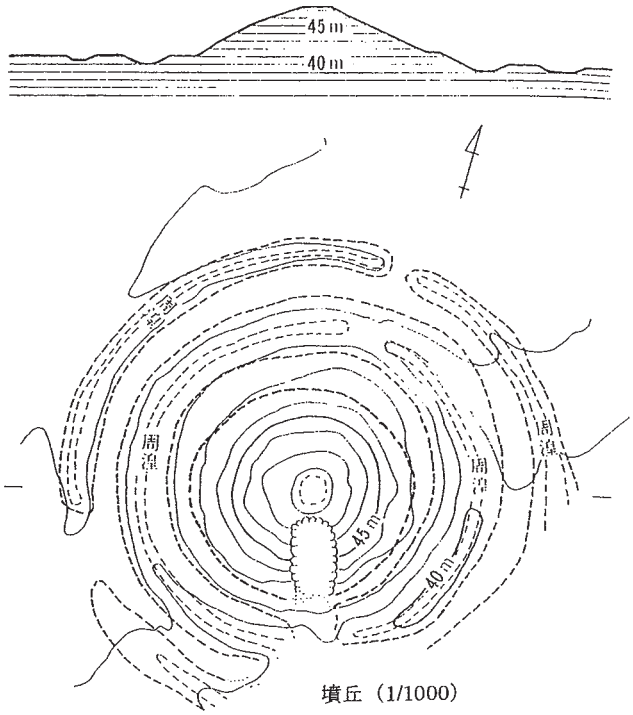
大野原古墳群の被葬者像については、これまで紀氏との関係がしばしば想定されてきた。周辺に「紀伊」「木の郷」の地名が残り、また『和名抄』に刈田郡紀伊郷や坂本郷（紀氏と同族の坂本臣との関係）が記されているからである。そして、紀氏は、紀伊や和泉から西方、阿波や讃岐にひろく分布を広げており、瀬戸内海の南岸ルートを押さえた豪族であると評されてきた[2)]。先にみた山城の秦氏や出雲の出雲臣のように、その拠点となるところに累代型の首長墓古墳群が形成されているとみるならば、北四国の紀氏系氏族の中心がこの大野原古墳群の被葬者、つまり刈田郡の紀氏と考えることが許されよう。

大野原古墳群の角塚古墳の被葬者が埋葬されたのち、孝徳朝の立評により刈田評が成立したと考えられ、その子孫が評督、さらに郡領になったことが考えられる。その段階の中心が大野原古墳群から1kmあまり東北にあたる青岡廃寺の周辺に求められるが、おそらくは椀貸塚古墳の時期以来の拠点であったと考えられる。6 世紀からつづいたこの地域の勢力が、その後にどのような展開を遂げるのかは、寺院や郡衙遺跡などの解明を待たなければならないが、他地域の大国造と同じく、勢力を削がれて分断される運命にあったと想像される。ともかく、角塚古墳の位置づけには、このような評制、国郡制による地方支配の浸透も念頭に置く必要があり、方墳であり、かつ精美な畿内型石室をもつことの背景には、7世紀における地域社会の変容があるとみておくべきである。

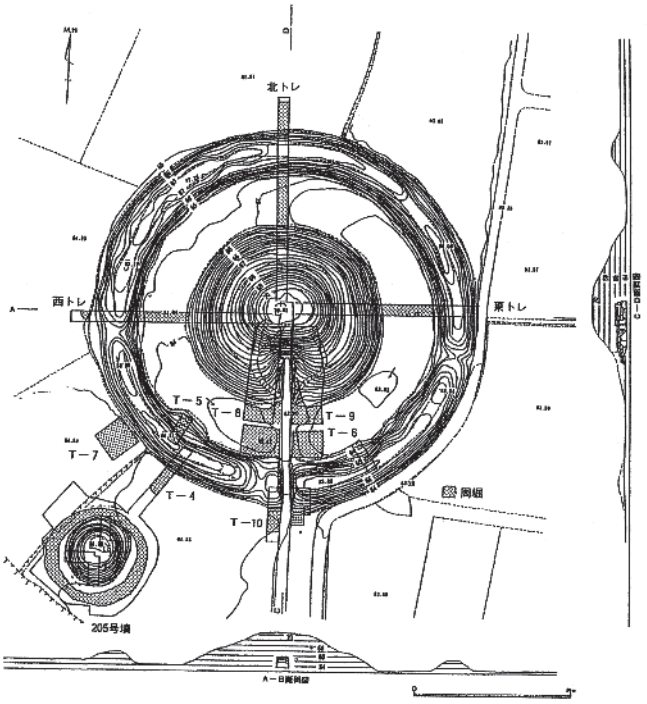
以上述べてきたように、律令国家が形成される前段階に、どのように地域が編成されたのかということを考える上で、大野原古墳群のような、地域で頂点を占める首長墓古墳群が重要な位置を占めている。椀貸塚古墳が築造される6世紀後葉という時期は、地域編成にとっても重要な時期にあたっていると考えられ、列島全体の動向も見据えて位置付けていく必要がある。大野原古墳群の調査成果は、地域の歴史にとって豊かな内容を追加するだけでなく、どのように地域が統合され、編成され律令国家にいたったのかという大きな問題に直結する重要性を帯びていると評価できる。

註

１）細川修平2007「勝堂古墳群の造営」『淡海文化財論叢』２輯、同刊行会。
２）岸俊男1966「紀氏に関する一試考」『日本古代政治史研究』、塙書房。

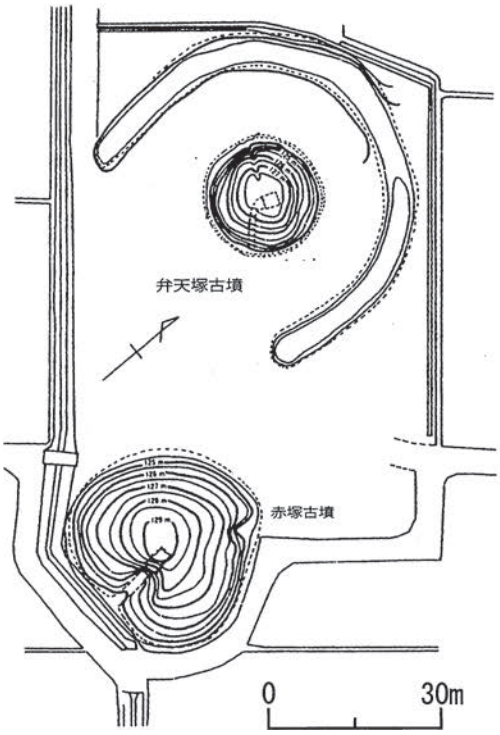


彦徳甲塚古墳

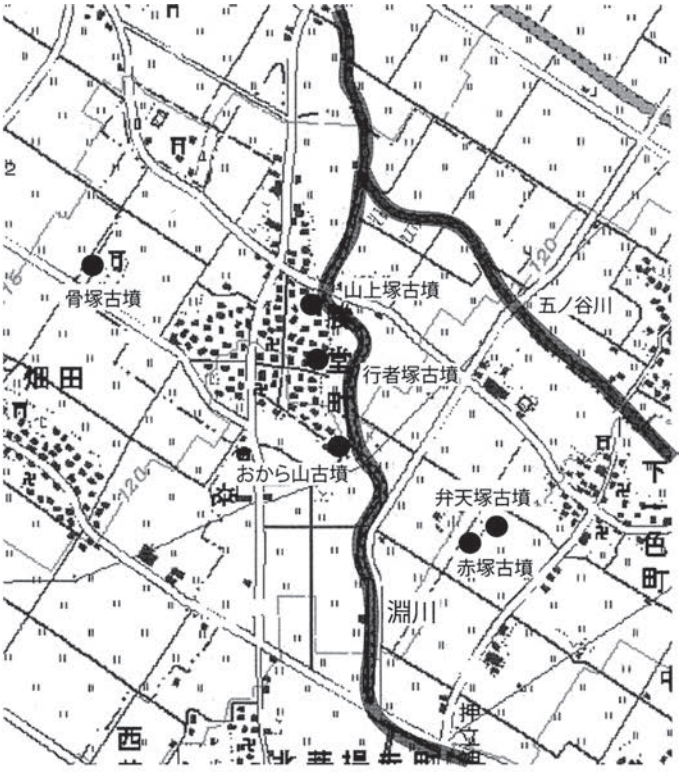


西都原206号墳

図54　九州の周堤付円墳



赤塚古墳・弁天塚古墳地形測量図



勝堂古墳群分布図

図55　勝堂古墳群（註１文献による）

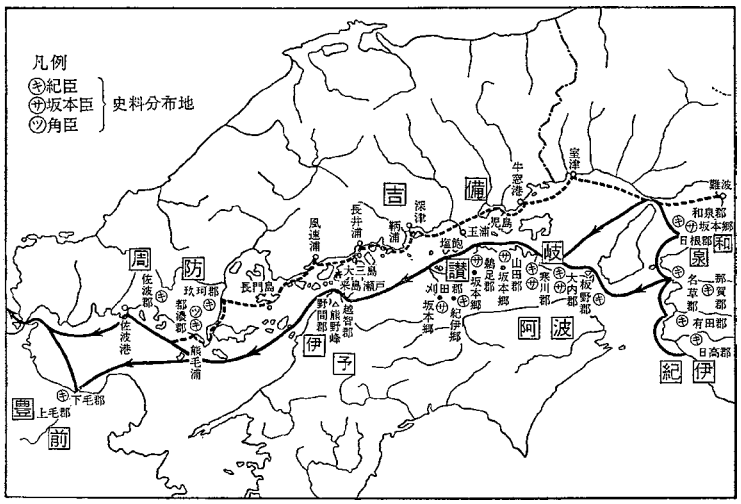


図56　紀氏系氏族の分布（岸俊男による）

８．総括

（1）各古墳の概要

①椀貸塚古墳

墳丘及び外周施設　直径 37.2m の大型円墳の墳丘高は現状値で 9.5mあり、その大部分が盛土築造である。墳丘周囲には二重の周濠と周堤が配されている。周濠は外濠に比して内濠の規模が幅・深度ともに上回り、周堤は周濠開削時に基盤層を削り残し、その上に盛土を施したもので、内濠と周堤の幅はほぼ同じで約 8m を測る。周濠を含めた墓域の直径は 70m あり、その占有面積は約 3,850 ㎡である。

石室　S-41°-W（南西）方向に開口する両袖式の大型横穴式石室であり、羨道＋前室＋玄室（後室）の複室構造である。玄室に比して前室は小規模である。内側に突出した玄門立柱石の上部に玄門部天井石を高架し、その上に大型石材一石を斜め架けする。玄室側壁の平面プランは緩やかな胴張構造である。左右の側壁はおおむね５段積みで、持ち送り構造であり、玄室横断面形は台形である。前室の袖石の上部にも玄門部天井石同様に一段低く石材を架けている。羨道部は上部構造を失うが、塊石と 16 層に細分できる被覆土で丁寧に閉塞した状況が確認できる。

石室規模は床面での数値を提示できないが、現況では全長 14.8m、玄室長 6.8m、玄室最大幅 3.6m、玄室高 3.9m（現状値）、玄室床面積 24.6 ㎡を測り、玄室空間容積は 72.7 ㎥と推定でき、本古墳群最大規模の石室となる。

出土遺物　石室床面は未調査であり、墳丘や外周施設出土の須恵器に限られる（40 点）。時期比定が可能な須恵器は少ないが、岩倉塚古墳墳丘盛土に覆われた外濠下部の初期堆積土中から出土した高坏脚部の須恵器 (椀貸塚実測図番号 39) は長脚二段三方透かしであり、TK43 式並行期に属する (註1)。

②平塚古墳

墳丘及び外周施設　直径 50.2m の大型円墳であり、墳丘高は現状値で約 7m である。墳丘周囲には幅 8.4m の周濠が廻り、それを含めた直径 66.7m、その占有面積は約 3,490 ㎡を測る。墳丘の大部分は盛土で築造される。段築や葺石はみられず、埴輪の樹立も確認できない。

石室　S-33°-W（南南西）方向に開口する両袖式の大型横穴式石室である。玄室の下半 1/3 程度は流入土で埋没する。現況では矩形の平面形を呈し、玄門立柱石を内側に突出して配置し、その上に玄門部天井石を高架する。前壁はこの一石のみで、羨道部天井より一段低く架ける。側壁は基底石に大型石材を用いた 4 段構成で断面形状は台形を呈する。羨道は長く延び羨門石が内側に少し突出して配されている。羨道入口付近の天井石は羨道部天井石よりわずかに低く高架される。なお、羨門石外部には小型石材で構成された列石がある。

石室規模は床面での数値を提示できないが、現況での全長は 13.2m、玄室長 6.5m、玄室最大幅 3m、玄室高 2.6m、玄室床面積 18.3 ㎡、玄室空間容積 41.3 ㎥を測る。

出土遺物　石室床面は未調査であり、墳丘や外周施設出土の須恵器に限られる（13 点）。羨道前面の列石付近からで出土した蓋坏の蓋 (平塚実測図番号 1) は、かえりが退化しており、角塚に後出する形式である。石室形態等から勘案して平塚古墳の追葬期間を示唆するが、築造時期を示すものとは言えない。

③角塚古墳

墳丘及び外周施設　長軸長約 42m×短軸長約 38m の方墳で、現況での推定墳丘高は 9m である。周囲には幅 7m の周濠が巡り、周濠を含む占有面積は約 2,150 ㎡を測る。標高 28m 前後に基盤となる水平面を成形し、以後盛土を施す。墳丘北側では傾斜角度 30°の墳丘面が確認できる。葺石、埴輪の樹立は確認できない。

石室　S-9°-E（南南東）方向に開口する両袖式の大型横穴式石室である。床面検出は行っていないが、平面は矩形を呈し、玄門立柱石は内側に突出する。立柱石の上に玄門部の天井石を高架するが、羨道部天井と同化する。玄室の各壁は花崗岩の一石１段積み、断面形は矩形である。

床面での数値を提示できないが、現況での石室全長は 12.5m、玄室長 4.7m、玄室最大幅 2.6m、玄室高 2.4m の規模であり、玄室床面積 10.1 ㎡、玄室空間容積 25 ㎥を測る。

出土遺物　石室内は未調査であり、墳丘や外周施設出土の須恵器に限られる（23 点）。時期比定が可能な須恵器は少ないが、トレンチ１の羨門石近くで出土した須恵器の蓋坏の蓋 (角塚実測図番号 1) は、口径、かえりの長さ等から TK217 式並行期に属する。

（２）大野原古墳群の編年的位置

①石室構造／形態からの検討

椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳の石室について、次の五つの点で構造的な変化を見ることができる。

①玄室側壁の石積みの段数の変化では、椀貸塚古墳５段→平塚古墳４段→角塚古墳１段となり、段数の減少傾向が認められ、同時に使用石材の巨石化と壁面の平滑化が進行している。

②椀貸塚古墳では側壁の持ち送りが著しく玄室横断面形が台形だが、側壁の段数の減少傾向に伴ってしだいに変化し、角塚古墳では矩形となっている。

③玄室天井石の高さと前室・羨道の天井石高の比高差がしだいに小さくなる変化が認められ、玄室と羨道部天井高の平準化傾向があると同時に玄室天井高も低くなる。

④玄門部の構造は、椀貸塚では玄門立柱石の上部に玄門部天井石を高架し、その上に大型石材一石を斜め架けするが、平塚では一石のみに変化する。角塚では羨道天井部と同化する。

⑤玄室幅と羨道部幅の同等化である。椀貸塚古墳では玄室と前室に幅差を認めるが、平塚古墳では幅差が僅少化し、角塚古墳では同等化する。

こうした変化の方向性から本古墳群では椀貸塚古墳→平塚古墳→角塚古墳と変化することは疑いない。加えて、椀貸塚古墳のみ複室構造のように見えるが、平塚古墳の羨道入口の天井石が一段降下した状況と右側壁入口の羨門石の状態は、椀貸塚古墳の前室と羨道が変質した痕跡と捉えられ、前室の形骸化と羨道との一体化と理解できる。

以上のような石室構造の変化は、母神山鑵子塚古墳 (註2) や椀貸塚古墳の複室構造を基本とし大野原古墳群で独自に展開しながらも、広域に連動する指向性に合致したものでもある。

②出土遺物からの検討

各古墳からの出土点数は多くないが重要な手がかりとなるものがある。

椀貸塚古墳では、トレンチ 12 の椀貸塚古墳外濠底面の上層で岩倉塚墳丘裾の盛土にパックされた高坏脚部の須恵器は長脚二段三方透かしであることから陶邑 TK43 式並行期であると考えられる。平塚古

表10　椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳　計測データ

（単位：m）

	椀貸塚古墳			平塚古墳			角塚古墳		
墳形	円墳			円墳			方墳		
墓域	直径70m			直径66．7m			縦48.4×横44.5m		
墳丘	直径37．2m			直径50．2m			縦41.7×横37.8m		
周濠等	二重周濠＋周堤（幅8m）			周濠幅8．4m			周濠幅7m		
築造時期	6世紀後葉			7世紀初			7世紀第二四半期		
石室長	左側壁	右側壁		左側壁	右側壁		左側壁	右側壁	
石室全長	14.62	14.83		12.63	13.22		12.54	9.90	
（羨道長）	3.36	3.66		5.68	5.86		6.97	4.38	
（前室長）	3.44	3.45							
（玄門袖石長）	1.03	1.03		0.98	0.87		1.17	0.83	
（玄室長）	6.79	6.69		5.97	6.49		4.40	4.69	
石室幅									
奥壁部	3.50			2.85			2.48		
玄室中央部	3.62			2.81			2.55		
玄室玄門部	3.20			3.04			2.49		
玄室最大幅	3.64			3.04			2.58		
玄門部	1.28			1.81			1.66		
前室玄門側	2.56			2.35		（羨道玄門側）	2.30		（羨道玄門部）
前室中央部	2.47			2.50		（羨道中央部）	2.20		（羨道中央部）
前室袖石側	計測不能			2.27		（石室開口部）	不明		（石室開口部）
前室袖石部	1.10								
石室高	左側壁	右側壁		左側壁	右側壁		左側壁	右側壁	
奥壁部	3.44	3.36		2.44	2.45		2.35	2.33	
玄室中央部	3.90	3.84		2.54	2.57		2.18	2.22	
玄室玄門部	3.00	2.87		2.63	2.64		2.01	2.27	
最大高	3.90	3.84		2.63	2.64		2.37	2.33	
玄門部	1.55	1.60		1.55	1.57		1.77	1.80	
前室玄門側	2.15	2.12		2.15	2.10	（羨道玄門側）	1.76	1.82	（羨道玄門側）
前室中央部	1.97	1.99		1.80	1.68	（羨道中央部）	1.76	1.45	（羨道中央部）
前室袖石側	1.78	1.79		1.48	1.11	（石室開口部）	1.66	1.12	（石室開口部）
前室袖石部	0.75	0.76							
玄室床面積	24.60 ㎡			18.26 ㎡			10.10 ㎡		
玄室空間容積	72.71 ㎥			41.34 ㎥			25.03 ㎥		

※発掘調査で確認された数値以外は、石室内床面未検出、石室内へ土砂流入や石室開口部の破壊等により、計測数値は現状の数値である。

墳はトレンチ2の列石付近で出土した蓋坏の蓋については7世紀後葉のものと見られ、築造時期を示すものではないと判断する。角塚古墳の左側壁の羨門石近くから出土した蓋坏の蓋はかえりの形状等でTK217式並行期と位置付ける。

また、その他の間接的情報として、石室形態の面で椀貸塚古墳の祖形とみられる母神山鑵子塚古墳出土の須恵器はTK43式並行期に属する。椀貸塚古墳の外濠を半分埋めるように築造された岩倉塚古墳の墓道出土の須恵器はTK43式並行期である。

③大野原古墳群(椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳)の変遷

大野原古墳群の編年的位置は、主として石室構造や形態の変化で、椀貸塚古墳→平塚古墳→角塚古墳という相対関係を認めることができる。また、出土遺物からは、平塚古墳出土須恵器は角塚古墳のそれより後出する可能性が高いが、出土状況から追葬時資料と見なすことは否定されない。石室形態から上記したように平塚古墳は椀貸塚古墳と角塚古墳の間に位置づけるべきであるから、平塚古墳の築造時期を今のところTK209式並行期と推測しておくことが妥当であろう。

よって、大野原古墳群の編年的位置は椀貸塚古墳（TK43式並行期）→平塚古墳（TK209式並行期）→角塚古墳（TK217式並行期）とすることが可能である。

（3）大野原古墳群の歴史的位置

①大野原古墳群の特質

本古墳群の特質は、傑出した規模の墳丘と横穴式石室を備えた諸墳が、TK43 式並行期から TK217式並行期の間に、同一地点で継起的に築造されていることである。

40～50mクラスの墳丘規模、大部分を盛土で築造した腰高の墳丘、幅広の周濠や周堤を伴う二重周濠(註3)で区画された広大な占有面積等3墳の墳丘規模は讃岐のみならず四国や西日本においても卓越した存在である。また、流入土が最も少ない箇所を基準に算定した玄室床面積では、椀貸塚が24.6㎡、平塚が18.3㎡、角塚が10.1㎡を測る。時期が下るにつれて玄室は小型化するが、所属時期別ではいずれも四国最大規模の石室であり、中国地方最大規模の石室に準じる規模を有する。さらに、本古墳群中最大規模の椀貸塚古墳と同時期の国内石室との比較では上位10位以内の規模となる。(註4)

一方、古墳時代後期後葉～飛鳥時代前半期に少なくとも3世代の半世紀間に渡って、卓越した規模の盟主墳が同一古墳群内で連綿と築造され続ける現象は極めて特異な状況である。しかも相互の関係を誇示・確認するように近接した箇所に築造する(註5)。四国では本古墳群に準じたクラスの古墳は単独で立地する例が多く（讃岐：讃岐中部の綾川流域の新宮古墳・綾織塚古墳、讃岐東部の高松平野東部の久本古墳や山下古墳、東予：向山古墳、阿波：穴不動古墳、土佐：小蓮古墳、朝倉古墳等）、群形成を認める場合でもその造営期間は本古墳群ほど長くはない。

②三豊地域における大野原古墳群

讃岐西部に位置する三豊地域は燧灘に面し、三野郡と刈田（豊田）郡の二郡にわたる地域であり、三豊平野と呼ばれる平野が広がる。古墳時代前期には前方後円墳や積石墳は認められず、総じて古墳の築造は低調であったが、中期には丸山古墳、青塚古墳、赤岡山古墳等、中型円墳や帆立貝式前方後円墳が築造される(註6)。ただし、これら中期の各首長墳は造墓地を違え、一地域を核とするような安定した首長基盤の形成には至っていない。

後期前葉（集成９期後半）に、柞田川流域の母神山丘陵に三豊地域唯一の前方後円墳である瓢箪塚古墳が築かれる（全長 44m、盾形周濠）。瀬戸内南岸地域での前方後円墳の再出現、断続ナデ技法を有する円筒埴輪の共伴等、地域勢力の再興ないし結集を示すとともに、背景には中央勢力による瀬戸内海南岸航路の整備が想定できる。続く首長墳として、隣接した位置に鑵子塚古墳が築かれる（TK43 式並行期、径 30m以上の円墳、本格的な大型横穴式石室の採用）。同地域では下位層の活発な造墓活動も確認でき（50 基強の横穴式石室墳で構成される母神山古墳群）、ようやく安定した首長墳の築造基盤が形成されたと理解できる。しかし、同古墳群では鑵子塚古墳に後続する首長墳はみられず、約３km 離れた大野原古墳群に移動し、そこで継起的に首長墳が築造される（註7）。

前代の盛行とは対照的に、古代以降、柞田川流域の動態は低調化する。柞田駅や柞田郷の設置、古代寺院である青岡大寺（安井廃寺）の造営等はあるが、讃岐の他地域に比して突出したものではなく、当地域は前代の盛行を失う（註8）。対照的に三豊地域北部の三野郡は、中央や讃岐中部地域との関係を深めながら勢力を拡大する。白鳳期建立の妙音寺は、畿内型横穴式石室を内包する延命古墳の近接地に位置し、讃岐中部の古代寺院と同文の瓦を用いる（2.5km の箇所に所在する道音寺も同様）。さらに、妙音寺の創建に伴って瓦生産を開始した宗吉瓦窯跡は、その後藤原宮瓦の生産を始め、官営工房としての役割を担うとともに、讃岐中部の宝幢寺にも供給する。

つまり、三豊地域の中核は大野原古墳群が築造を停止する前後に、柞田川流域から三豊地域の北部に移行しており、古墳時代後期から飛鳥時代前半期に讃岐のみならず、四国地域内においても突出した存在であった柞田川流域は、以降一郡程度を統治する程度の勢力へと相対的に鈍化していく。

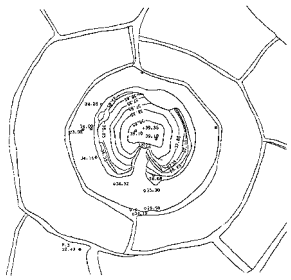
③四国最大規模の巨石墳群としての大野原古墳群

これまで大野原古墳群もしくは三豊地域における位置付けを検討してきたが、本節ではやや視点を広げ、讃岐及び周辺地域との関係を整理する。

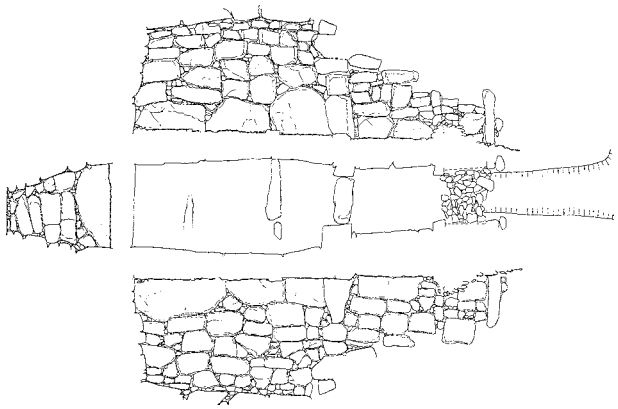
ａ）、讃岐地域

讃岐地域の横穴式石室の導入は集成６期の丸山古墳に遡るが、現時点では後続する盟主墳への継続的な採用状況は明らかではない。その後、集成９期前半期には母神山古墳群に点的な分布を認め、集成９期後半期にその数を増加させる。中期に築造を停止していた前方後円墳が再び築かれる時期に相当し（丸亀平野西部の王墓山古墳、菊塚古墳、母神山古墳群の瓢箪塚古墳）、そこへの横穴式石室の採用に連動して数は多くないが、讃岐中西部を中心に横穴式石室墳が展開するようになる。当該期の石室は個々に特徴的で個性的な形態を呈するが、概して石室用材は小形であり、玄室床面積も 10 ㎡に満たない。

続く、集成 10 期には鑵子塚古墳に大型横穴式石室が採用される（瓢箪塚古墳に後続する盟主墳）。複室両袖型石室で、玄室床面積は 12 ㎡を越え、玄門部と羨道部に立柱石を内側に突出させて配置する。本タイプの石室は大野原古墳群に引き継がれ、使用石材の大型化、前室と羨道の一体化と連動した羨道規模の長大化といった指向性で変遷するとともに、讃岐各地の石室の導入や展開に影響を与えていく。後に国府が築かれる綾川下流域では、痕跡化した複室構造を認める新宮古墳、前室と羨道は一体化するが羨道天井部を一段下げて高架した綾織塚古墳に大野原古墳群からの影響が窺え、一体化が完成した醍醐２号墳に至る。高松平野東縁部では久本古墳の羨門立柱石に前室と羨道が一体化した状況が窺え、先行する小山古墳に複室構造が採用される等、綾川下流域と同様に継起的に大野原古墳群と同構造の石室が採用される。一方、高松平野西部でみられるように、群内に横穴式石室が展開する過程で、大野原古

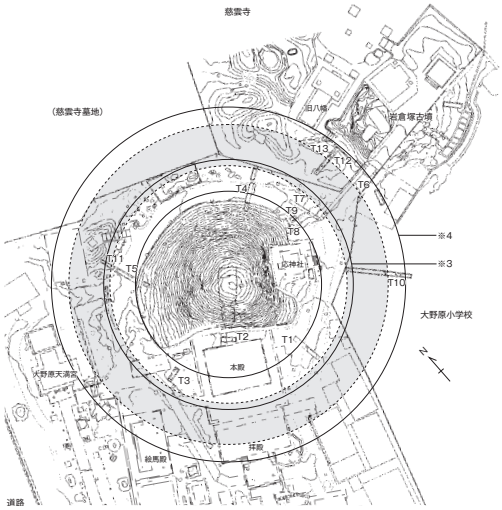


円墳：直径30m

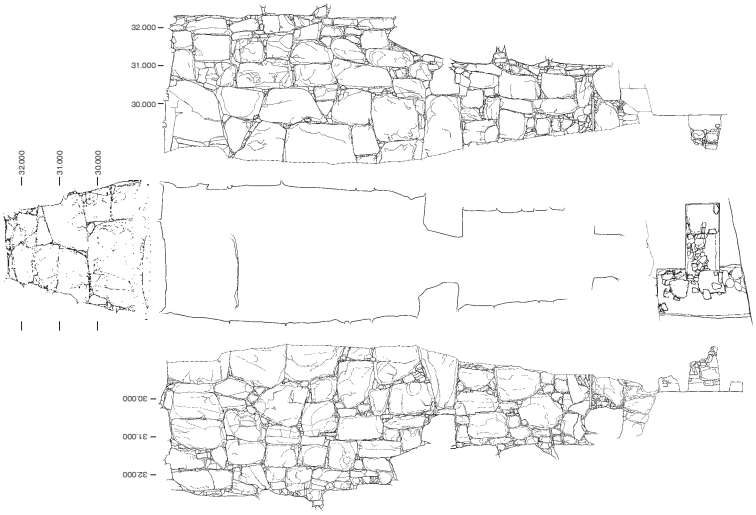


母神山鑵子塚古墳　石室全長9.8m

TK43

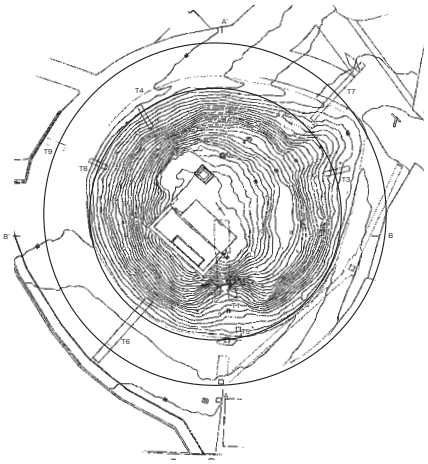


円墳：直径37.2m（周濠周堤を含む直径70m）

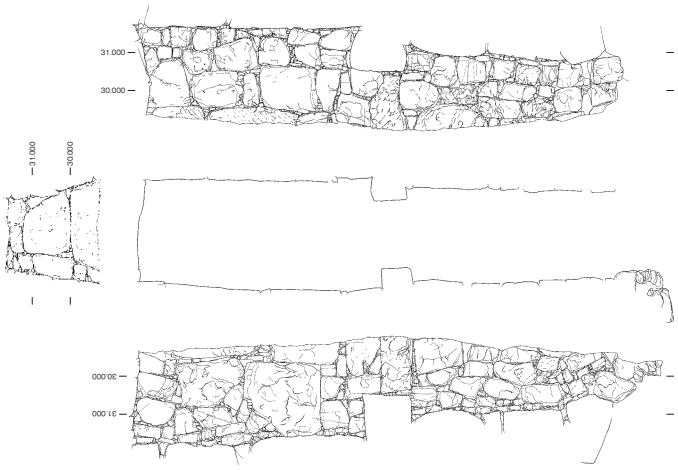


椀貸塚古墳　石室全長14.83m

TK209

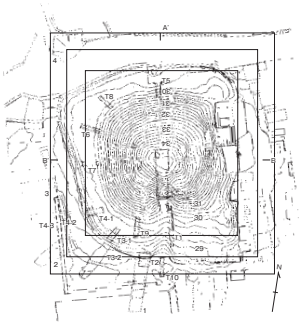


円墳：直径50.2m（周濠を含む直径66.7m）

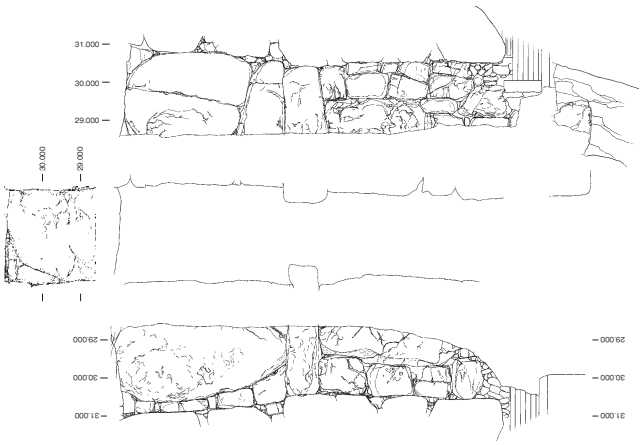


平塚古墳　石室全長13.22m

TK217



方墳：41.7m×37.8m（周濠を含む範囲48.4×44.5m）



角塚古墳　石室全長12.54m

図57　墳丘・石室変遷図（墳丘1/1,500、石室1/200）

墳群の石室構造の要素を採用した地域もある(玄門部の横架材を立柱石で支持する要素等)。このように、讃岐各地の石室、なかでも大型石室墳の構築に大野原古墳群が関与した状況が想定できる。さらに、築造時期別では、椀貸塚古墳、平塚古墳は讃岐最大規模石室であり、角塚古墳の築造段階では大野原古墳群に準じた規模の石室を構築した地域における古墳の新規築造は行われていない可能性が高く、讃岐における横穴式石室の構築、なかでも大型石室墳の構築は大野原古墳群が主導したものと評価できる。

また、当地域の盟主墳スタイルという側面では、中期段階では埴輪、葺石等の墳丘外表諸施設や外周区画といった墳丘形態や規模に序列体系の基軸を認めるが、後期初頭では前方後円墳という形態を採用しながらも、葺石や段築、埴輪等は失われる。さらに、鑵子塚古墳や大野原古墳群の段階では、外周区画は維持するが前方後円墳という墳形は放棄され、逆に埋葬施設の構造や規模に多大な労力を投下するようになり（巨石墳化)、盟主墳スタイルや序列体系が刷新された画期と捉えることができる。

ｂ)、燧灘沿岸地域

大野原古墳群が所在する三豊地域は燧灘の東岸部に位置し、讃岐中部地域以東との一定の関係を保ちつつも、燧灘沿岸地域、なかでも西接する旧宇摩郡域と濃密な関係を形成する。

集成９期後半、瀬戸内南岸地域で前方後円墳の築造が再開される時期に至り、旧宇摩郡域と三豊地域では一時的ではあるが、はじめて前方後円墳が築造される（東宮山古墳・経ヶ岡古墳、瓢箪塚古墳)。前後する時期に三豊地域では 50 基強の横穴式石室墳からなる母神山古墳群が築造を開始するが、群中の千尋神社４～６号墳の羽子板状の石室平面形は経ヶ岡古墳に酷似する等、地理的要因に基づく両地域の繋がりが看取できる。一方、旧宇摩郡域では２基の前方後円墳に後続する盟主墳は確認できないが、三豊地域では瓢箪塚古墳→鑵子塚古墳→椀貸塚古墳→平塚古墳と継起的に盟主墳が築造される。その後、旧宇摩郡域では盟主墳の一定の空白期を経て、大型横穴式石室を内包する住吉古墳と向山古墳が築造されるが､両石室は先行する２基の前方後円墳の石室や旧宇摩郡域以西で展開する石室とは系譜が異なり、大野原古墳群の石室に酷似した特徴を有する。つまり、両地域は旧国を越えた範囲に展開するが、燧灘東岸地域としての地域的なまとまりを有するとともに、少なくとも、大野原古墳群の造営開始期においては一体的な関係であったと評価できる。

ｃ)、四国地域

四国各地に視野を広げると、大野原古墳群で展開する石室と同構造・同形態の石室が散見できる。

伊予地域では旧宇摩郡域の住吉古墳と向山古墳で確認できる。前者は平塚古墳、後者は角塚古墳に酷似した玄門構造を呈し、向山古墳の１号石室は羨道が著しく長大化し、玄室は相対的に小型化する。阿波地域では吉野川中流域の太鼓塚古墳に石室の大形化を認め、玄門立柱石を採用する等、大野原古墳群と共通した特徴を有する。また、鮎喰川中流域の矢野古墳では痕跡的な複室構造を認め、対岸の穴不動古墳では玄門部構造や大型用材の多用等に角塚古墳や向山古墳の影響を認める等、大野原古墳群との関係が窺える。土佐地域では大野原古墳群とは異なる系譜の大型石室墳が展開するが（妙見彦山１号墳や小蓮古墳。玄室長の長大化と羨道の短縮化、内側に突出しない玄門配置)、朝倉古墳では大野原古墳群に酷似した石室が採用される。用材の巨石化は角塚古墳、玄門構造は平塚古墳に酷似するが、羨道部を短縮化させた形態は小蓮古墳等に通じる。

以上、概観したように、四国各地に大野原古墳群と同構造・同形態の石室、玄門構造が酷似する石室が分布する。盟主墳スタイルが刷新される当該期において、巨石墳化と直結する石室形態を四国地域内で共有する意味は小さくない。継起的な築造状況や分布等を考慮すると、本タイプの石室の構築は、四国各地域と横断的な関係を保持しながら、一貫して大野原古墳群が担ったものと考えられ、讃岐及び四

国地域における巨石墳の造営は大野原古墳群が主導したと評価できる。

最後に、近世以降の本古墳群を取巻く状況について整理する。椀貸塚古墳は大野原八幡神社の本殿の背後に位置し、『大野原開墾古図』（カラー図版３）が如実に示すように、神社創建当時から椀貸塚古墳と一体をなしている神社の御神体というべき存在であると理解でき、大野原開墾の精神的支柱の役割を担っている。平塚古墳においても墳丘や周濠も同神社の所有地であり、大野原地区の秋祭りでは御旅所として使用されており、神事が執り行われる神聖な場所として地域の誰もが認識している。角塚古墳は墓地に隣接しているが、主要部分は同神社の所有地である。これら３墳には江戸期の開墾以来それぞれ特別な役割が付与され、地域のシンボルとして、精神的な支柱として当地の発展とともに歩んできた歴史があり、それゆえに良好な状態で保存されてきたのではなかろうか。今後の大野原古墳群の保存・活用のためにはこうした視点も欠くことができないものであり、大野原八幡神社関係者および地域住民とともに推進していく必要がある。

註１　須恵器の年代観については暫定期に陶邑編年に準拠した（田辺昭三ほか 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、田辺昭三『須恵器大成』角川書店）。ただし、当該時期は器種の消長、各々細部形態にかなり顕著な地域差が見出せる。今後、讃岐地域の須恵器編年の再検討を進める方針であるが、その場合も本報告書で報告した諸墳の編年的位置そのものに変更の必要はないと考える。

註２　椀貸塚古墳の石室は、本古墳群から３km ほど離れた母神山古墳群の鑵子塚古墳（TK43 式並行期）の石室を祖形とする。複室構造で、玄室（後室）に比して著しく矮小化した前室を前方に設け、短い羨道部が付設する。玄室平面形は胴張りプランで、内側に突出させて玄門立柱石を配置する。その上部に一石を介在させて玄門部天井石を高架し、上部に２段分の前壁を構築する。前室の玄門立柱石も内側に突出し（多段積み）、羨道部前面にも１石の細長い方柱状の石材を配置する（羨門立柱石）。石室全長 9.8m、玄室床面積約 14 ㎡。椀貸塚古墳との前後関係が問題となるが、出土須恵器や前壁構造用材規模、立地等から、鑵子塚古墳は椀貸塚に先行するものと考えられる。

註３　６世紀後半以降における椀貸塚古墳に認める二重周濠と周堤は全国的にも類例は乏しく、車塚古墳（栃木県）、彦徳甲塚古墳（福岡県）、鬼の窟古墳（宮崎県）、築山４号墳（島根県出雲市）などが挙げられるに過ぎない。

註４　６世紀代では、見瀬丸山古墳（奈良県）、観音山古墳（群馬県）、高倉山古墳（三重県）、加牟那塚古墳（山梨県）、姥塚古墳（山梨県）、こうもり塚古墳（岡山県）、真弓鑵子塚古墳（奈良県）、箭田大塚古墳（岡山県）などが挙げられる。

註５　３墳は 600m の範囲に直線的に配置される。相互の距離は椀貸塚古墳―角塚古墳間が約 400m、角塚古墳―平塚古墳間が約 200m を測る。二重周濠等の外周施設で区画した広大な占有面積や傑出した墳丘規模の視覚効果は高いものであったと推測できる。注視すべきは可視対象であり、陸路との関係は示唆的である。大野原古墳群周辺の古代南海道の位置は特定されていないが、三野郡から柞田川右岸の推定ラインを直線的に延伸すると、本古墳群の近くを通過するものと見られ、延伸ラインは３墳の直線的配置にほぼ並行する。一方、古代刈田郡の津はおそらくは柞田川河口に求められる（本古墳群の北方約３km）。本古墳群と港との関係は言及できないが、立体観のある墳丘は海路からの眺望も可能であったと推測できる。

註６　海浜部に所在する丸山古墳は、讃岐で最初に横穴式石室を導入した古墳であり、阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺を内包する。続く青塚古墳でも九州系の石棺が採用される。九州系石棺の移動に伴う輸送ルートに代表される内海航路の確保という動向のなかで、島嶼部が少ない燧灘東面という地理的要因に支えられ、航路沿いの要衝地としての役割が求められたものと推測できる。

註７　一般成員も埋葬する共同墓地的な母神山古墳群からの分離、傑出した墳丘規模が示す可視効果への期待（陸路・海路からの眺望に基づく権力誇示）等、様々な要因が考えられる。ただし、首長墳の築造基盤の母胎となる集落域は引き続き、柞田川流域に所在したと思われる。

註８　こうした盛衰は、大野原古墳群を中心とした燧灘沿岸勢力の分断を意図した国家政策としての新たな地域枠組みの設定、つまり讃岐と伊予の国境設定に起因するものと考えたい。

表11　大野原古墳群関係文献資料一覧表

『新修　大野原町誌』 H17.2.27　大野原町
『観音寺市内遺跡詳細分布調査報告書－大野原町編－』 2008.3.31　観音寺市教育委員会
『香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書』 2009.3　観音寺市教育委員会
『香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書（別冊）』 2010.3　観音寺市教育委員
『香川県文化財年報　平成20年度』 2010.3　香川県教育委員会
『香川県文化財年報　平成21年度』 2011.2　香川県教育委員会
『香川県文化財年報　平成22年度』 2012.2　香川県教育委員会
『香川県文化財年報　平成23年度』 2013.2　香川県教育委員会
『香川の文化財』 H8.3　編集 香川県教育委員会　発行 香川県文化財保護協会
『大野原町誌』 S31.8.15　大野原町
『香川縣三豊郡史』 S48.4.11　三豊郡役所
『復刻版　史蹟名勝天然紀念物調査報告　下巻』 S50.2.10　香川県など
『新編　香川叢書　考古編』 S58.3.31　香川県教育委員会
『全国古墳編年集成』 1997.6.25　石野博信編
『大野原町の文化財』 S59.3.10　大野原町
『大野原開墾古図』 正保２年（1645）
『御宮相續ニ付万事覚帳』 貞享２年（1685）
『香川県讃岐國三豊郡大野原村　鎮座　郷社八幡神社之景』 明治３５年（1902）
『復刻讃岐叢書（第一）国譯　全讃史』昭和47年8月1日発行　発行所　藤田書店
『古今　讃岐名勝圖繪』昭和5年10月20日発行　発行所㈱高松製版印刷所
『増補　西讃府志』 S4.11.3　舊丸亀藩京極家
『さぬきの遺跡』 S47.9.1　高橋邦彦ほか
『名東縣下第廿四大區四小區　讃岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内　拾　從千三百九十六番至千五百八十六番』 明治６年（1873）
『角塚―大野原中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告―』 1995.3　大野原町教育委員会
『岩倉塚古墳発掘調査現地説明会資料』 H15.2.9　大野原町教育委員会
『横穴式石室の導入と展開【発表要旨集・導入期横穴式石室集成】』 2013　中国四国前方後円墳研究会

遺物観察表

・ここでは、本書において報告している大野原古墳群の土器についての観察表を掲げる。
・土器の観察表については、本文中の図番号・器高・口径・胎土・内外面の色調・焼成・器面調整等・出土地区・備考について掲げた。また、他の時代の土器についても、古墳の遺物に続けて観察表の中におさめている。
・観察表中において、特に単位を示さない場合、数値はcmを単位とする。
・出土地区については、層位とは関係なく破片の出土した地区を示している。
・土器の観察表は、久保田が作成・編集を行った。

表12　土器観察表Ⅰ（椀貸塚古墳）

※括弧標記は復元径及び復元高

番号	種　類	器　種	器高	口径	胎　　土	外面色調	内面色調	焼　成	器面調整等 外面	器面調整等 内面	出土地区	備　　考
1	須恵器	高杯(脚部)	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	黄灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ11排土中	2011-H23-11-25 WK0001　スカシ孔1
2	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	神社境内で表面採集	2013-H25-03-08 WK0002
3	須恵器	提瓶	不明	5.3	普通　石英、長石	黄灰	灰	良好	回転ナデ カキメ	回転ナデ	トレンチ1	2009-H21 WK0003
4	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰(自然釉付着)	灰褐	良好	回転ナデ 沈線2条	回転ナデ	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0004
5	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	黒	黒灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0005
6	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰(自然釉付着:暗緑色)	灰白(自然釉付着)	良好	タタキ	青海波文、ハケ	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0006
7	須恵器	不明	不明	(7.5)	密　石英、長石	灰白(自然釉付着)	灰白(自然釉　付着)	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ10排土中	2011-H23-10-17 WK0007
8	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰褐	灰	良好	－	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0008
9	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰褐	灰	良好	－	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0009
10	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	青灰	青灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0010
11	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰	黒灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0011
12	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐	青灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0012
13	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0013
14	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰茶	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0014
15	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰茶	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0015
16	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰茶	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0016
17	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0017
18	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰茶	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0018
19	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰(自然釉付着:黒色)	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0019
20	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰白	灰白	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0020
21	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰茶	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0021
22	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黄灰	黒灰	良好	－	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0022
23	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ6	2011-H23-05-16 WK0023
24	須恵器	蓋杯？	不明	不明	やや粗い　石英、長石	黒灰	灰	良好	ナデ	回転ナデ	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0024
25	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	黒灰	青灰	良好	タタキ、ナデ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0025
26	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰	灰	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	トレンチ6	WT6-201109-29 Wk0026
27	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	自然釉付着(茶褐色)	灰	やや不良	－	青海波文	トレンチ12排土中	2012-H24-09-19 WK0027
28	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0028
29	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0029
30	須恵器	不明	不明	不明	やや密	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0030
31	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0031
32	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	黒灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0032
33	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0033
34	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰白	灰白	やや不良	タタキ、ハケ	青海波文	トレンチ3排土中	2009-H21 WK0034
35	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐(自然釉付着:暗緑色)	灰褐	良好	回転ナデ	ナデ	トレンチ12	2012-H24-09-24 A WK0035
36	須恵器	有蓋高杯？	不明	不明	密　石英、長石	灰褐(自然釉付着:暗緑色)	灰褐	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ12	2012-H24-09-24 B WK0036
37	須恵器	有蓋高杯？	不明	不明	密　石英、長石	灰褐(自然釉付着:暗緑色)	灰褐	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ12	2012-H24-09-24 C WK0037
38	須恵器	高杯(脚部)	不明	不明	密　石英、長石	灰褐(自然釉付着:茶褐色)	灰褐	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ12	2012-H24-09-24 D WK0038　スカシ孔2
39	須恵器	高杯(脚部)	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐(自然釉付着:黒色)	灰褐(自然釉付着:暗緑色)	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ12	2012-H24-09-25 EF WK0039
40	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰	灰	やや不良	タタキ	青海波文	トレンチ12	2012-H24-09-21 WK0040

表13　土器観察表Ⅱ（平塚古墳）

※括弧標記は復元径及び復元高

番号	種　類	器　種	器高	口径	胎　　土	外面色調	内面色調	焼　成	器面調整等外面	器面調整等内面	出土地区	備　　考
1	須恵器	蓋杯の蓋	不明	(14.2)	やや密　石英、長石	灰褐（自然釉付着）	灰	良好	－	回転ナデ	トレンチ2	2010-H22 HI 0001
2	須恵器	甕？	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰白	やや不良	タタキ	青海波文	トレンチ3	2010-H22-12-17 HI 0002
3	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ3	2010-H22 HI 0003
4	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰白	やや不良	タタキ	青海波文	トレンチ3	2010-H22 HI 0004
5	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰白	灰白	不良	タタキ	青海波文	トレンチ3	2010-H22 HI 0005
6	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	カキメ	回転ナデ	トレンチ3	2010-H22 HI 0006
7	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	自然釉暗緑色	灰	良好	－	回転ナデ	トレンチ3	2010-H22-11-18 HI 0007
8	須恵器	高杯	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ7-1 排土中	2011-H23-03-11 HI 0008
9	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰	灰	良好	ハケ	青海波文	前庭部表採	2009-H21-11-05 HI 0009
10	須恵器	平瓶	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰	良好	－	回転ナデ	トレンチ3	2010-H22 HI 0010
11	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ、ハケ	青海波文	トレンチ3	2010-H22 HI 0011
12	－	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰	灰褐	やや不良	－	－	トレンチ3	2010-H22 HI 0012
13	土師器	甕	不明	不明	やや粗い	赤褐	赤褐	やや不良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	トレンチ3	2010-H22-11-19 HI 0013

表14　土器観察表Ⅲ（角塚古墳）

※括弧標記は復元径及び復元高

番号	種　類	器　種	器高	口径	胎　　土	外面色調	内面色調	焼　成	器面調整等外面	器面調整等内面	出土地区	備　　考
1	須恵器	蓋杯の蓋	不明	(13.0)	やや密　石英、長石	灰	灰白	良好	回転ヘラケズリ	回転ナデ	トレンチ1	2012-H24-03-27 KA 0001
2	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐（自然釉付着）	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1排土中	2013-H25-03-24 KA 0002
3	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰	青灰	良好	回転ヘラケズリ	－	トレンチ3礫層中	2012-H24-02-24 KA 0003
4	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	表面採集	2012-H24-02-24 KA 0004
5	須恵器	蓋杯の蓋	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	回転ヘラケズリ	回転ナデ	表面採集	2013-H25-09-22 KA 0005
6	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	青灰	黒灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1	2012-H24-11-28 KA 0006
7	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	青灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ9	2013-H25-03-19 KA 0007
8	須恵器	甕？	不明	不明	密　石英、長石	オリーブ色、灰茶褐色（自然釉付着）	自然釉付着	良好	沈線2条、波状文	－	トレンチ1	2012-H24-03-27 KA 0008
9	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐（自然釉付着）	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1	2012-H24-03-27 KA 0009
10	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐（自然釉付着）	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1	2012-H24 KA 0010
11	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ、ハケ	－	トレンチ1	2012-H24 KA 0011
12	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰（自然釉付着）	自然釉付着（暗緑色）	良好	タタキ	－	トレンチ1	2012-H24 KA 0012
13	須恵器	蓋杯の身	不明	不明	密　石英、長石	灰褐	灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ1	2012-H24-11-22 KA 0013
14	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ4-2	2012-H24-03-01 KA 0014
15	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1	2012-H24-02-10 KA 0015
16	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰	灰	良好	タタキ、ハケ	青海波文	トレンチ2排土中	2012-H24-03-13 KA 0016
17	須恵器	不明	不明	不明	普通　石英、長石	灰（自然釉付着）	灰褐	やや不良	タタキ、ハケ	青海波文	トレンチ2排土中	2012-H24-03-13 KA 0017
18	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	灰褐	灰褐	やや不良	タタキ	青海波文	トレンチ2排土中	2012-H24-03-13 KA 0018
19	須恵器	高杯？	不明	不明	密　石英、長石	灰茶	灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	トレンチ1	2012-H24-11-30 KA 0019
20	須恵器	不明	不明	不明	やや密　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1付近表面採集	2013-H25-12-07 KA 0020
21	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	黒灰	灰	良好	タタキ	青海波文	トレンチ1付近表面採集	2013-H25-12-07 KA 0021
22	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	自然釉付着（暗緑色）	灰	良好	－	青海波文	トレンチ1	2012-H24-03-07 KA 0022
23	須恵器	不明	不明	不明	密　石英、長石	灰褐（自然釉付着）	灰	良好	タタキ	－	トレンチ3礫層中	2012-H24-03-01 KA 0023

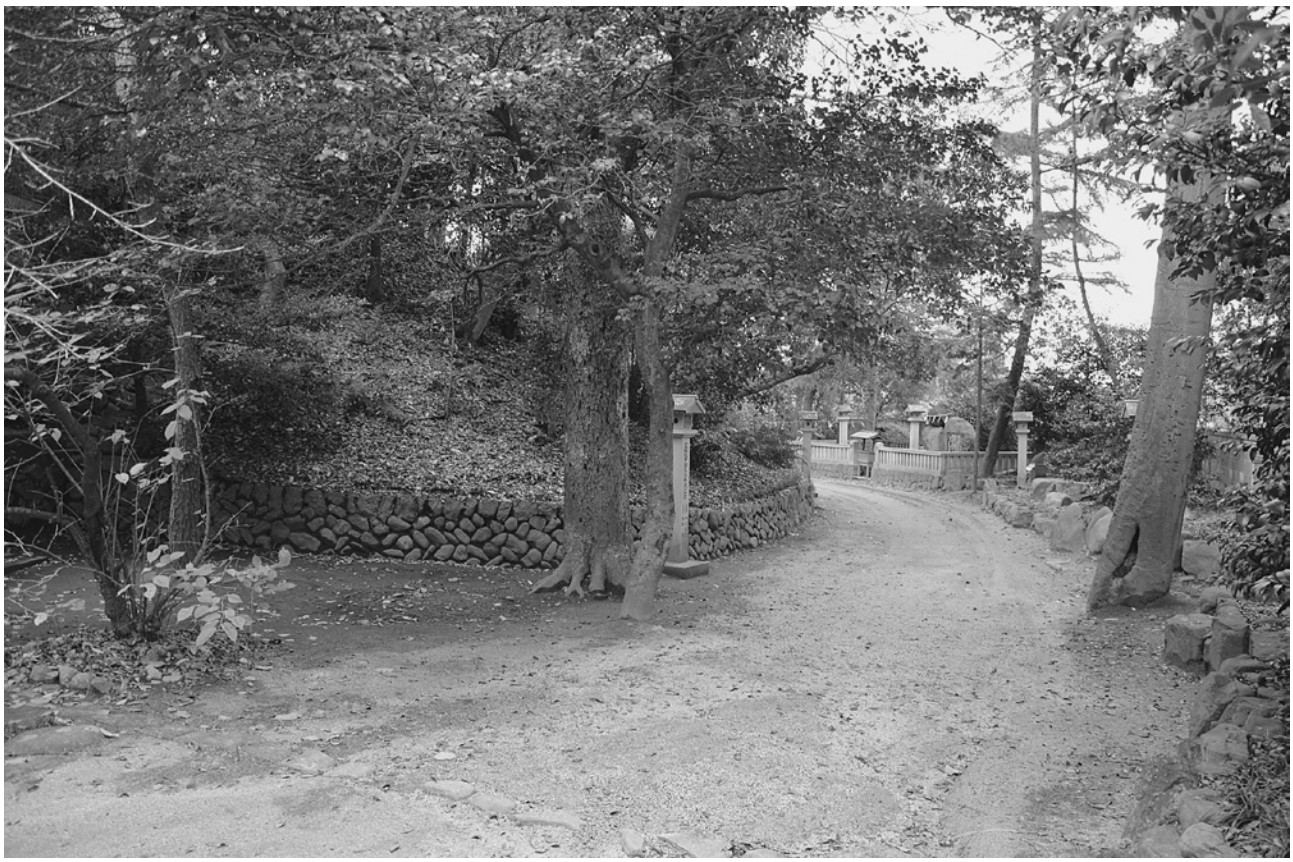
図　版

図版１－１　墳丘（北東側から撮影）合成写真

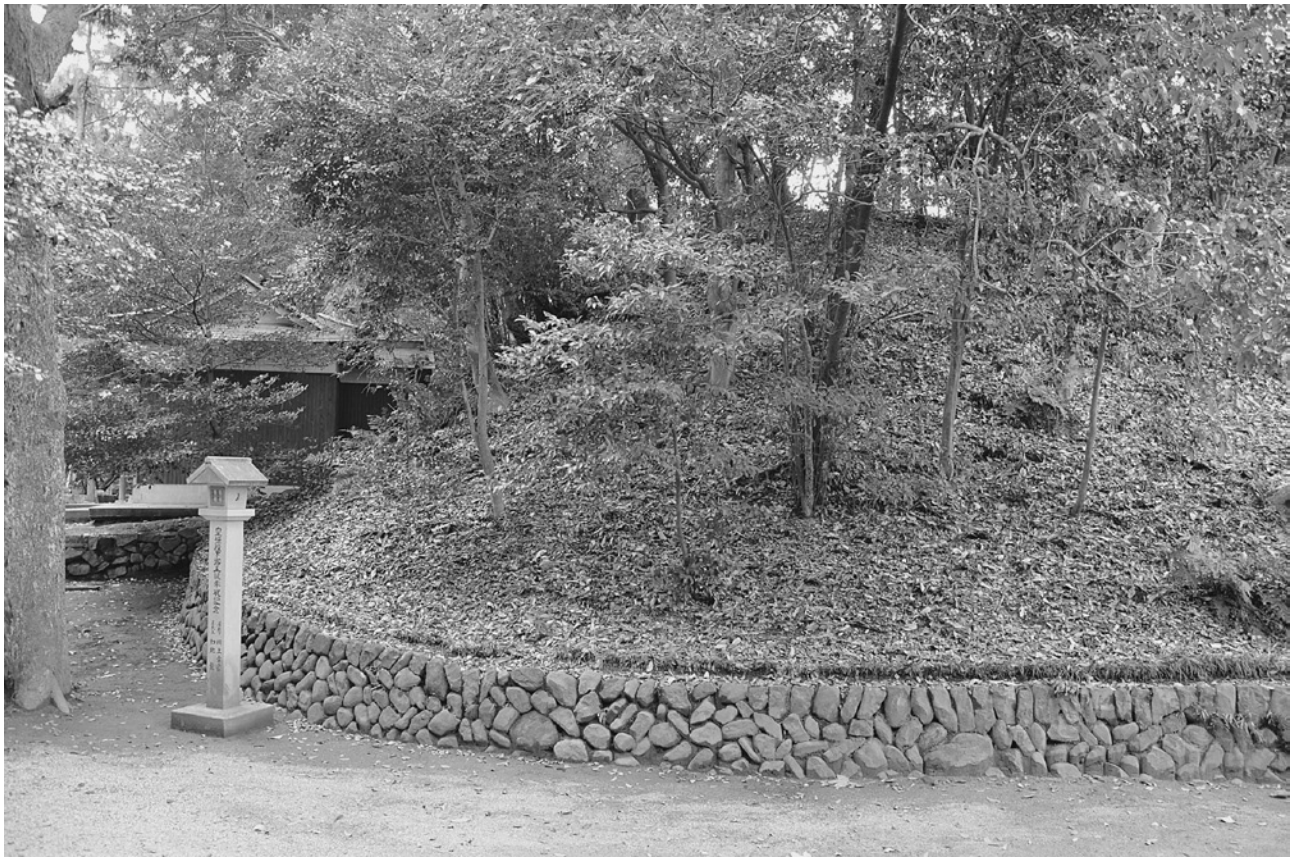
図版１－２　椀貸塚の石碑と墳丘（西側から撮影）

図版２－１　石室開口部

図版２－２　墳丘（南側から撮影））

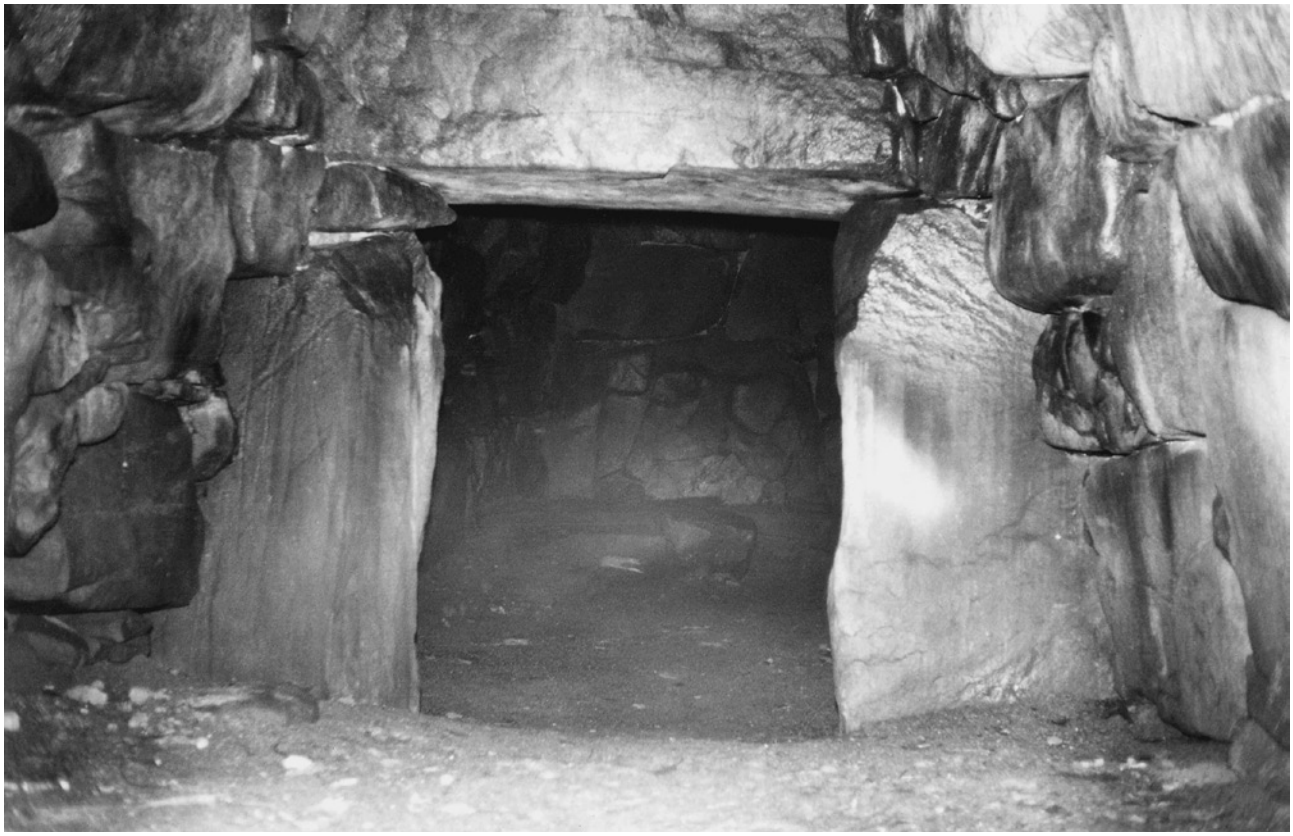


図版３－１　墳丘（トレンチ６付近から墳丘北東部を望む）

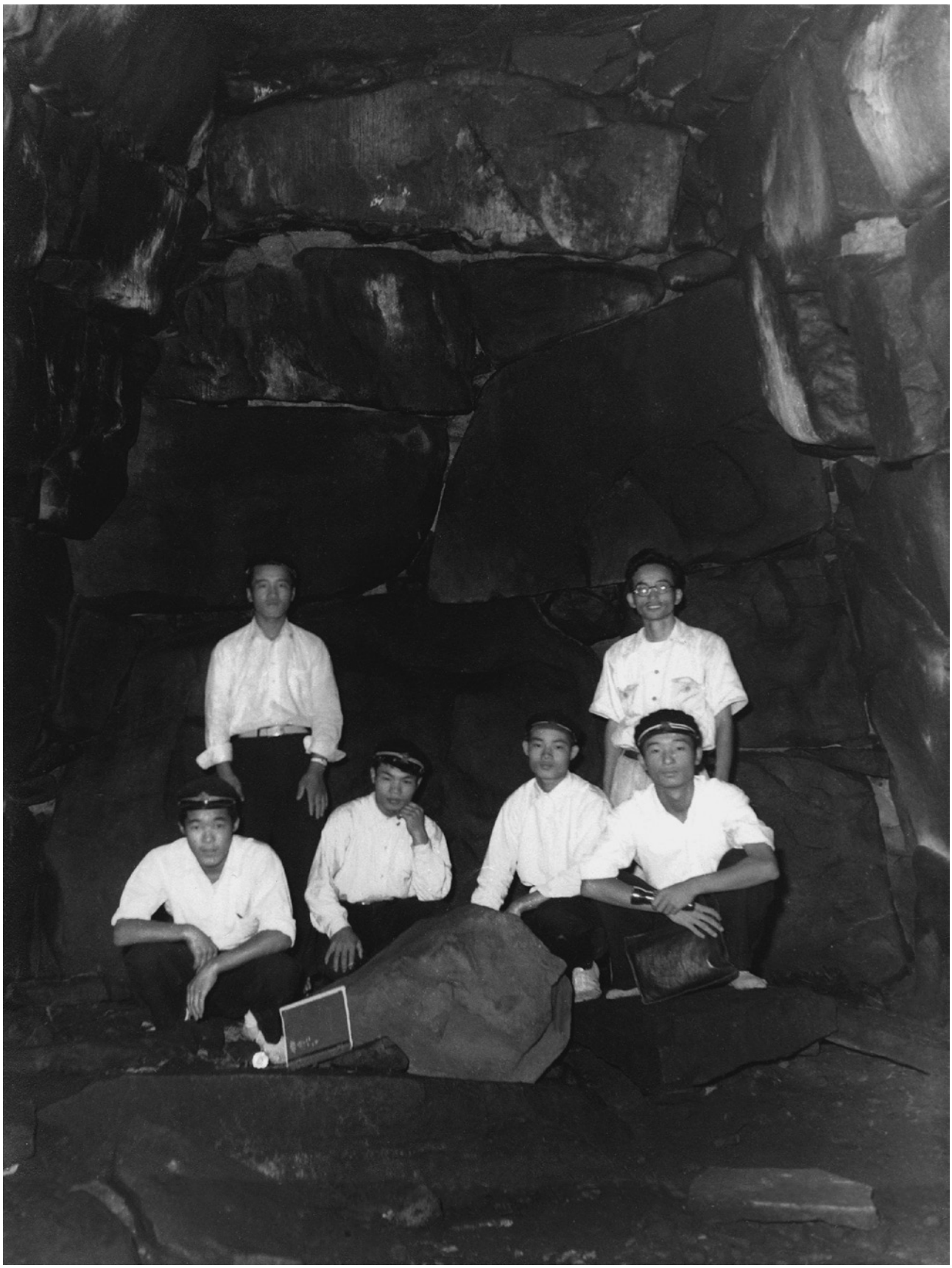


図版３－２　墳丘（北東側から撮影）

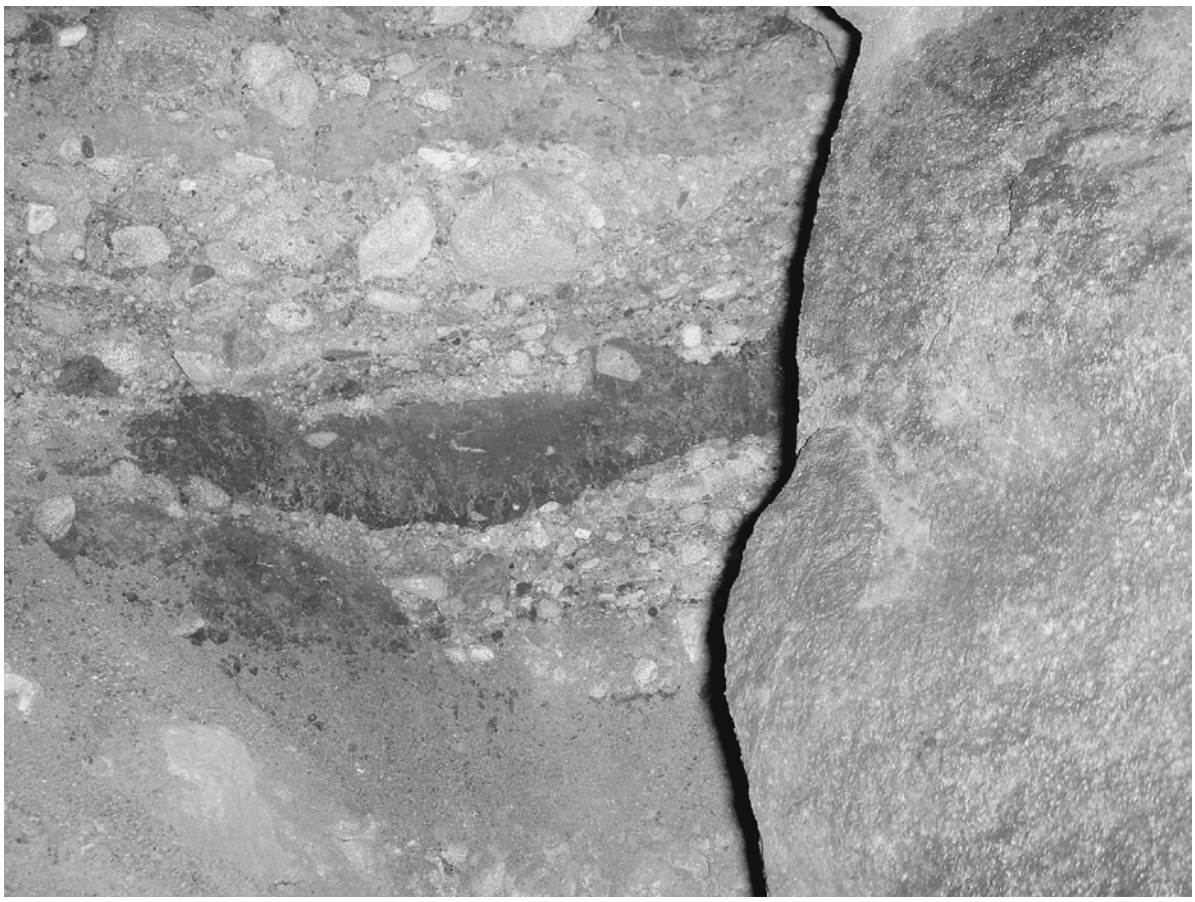
図版４－１　大野原八幡神社境内の八重垣神社（周堤部）



図版４－２　石室　前室から玄門、奥壁を望む（撮影年代不明）



図版５　石室　玄室奥壁前（昭和28年10月4日撮影）



図版６－１　石室　玄室奥壁側　左側壁の石材が抜け落ちた跡の状況

図版６－２　石室内の「詰め土」

図版７－１　トレンチ１の土層

図版７－２　トレンチ１　周濠（内濠）と検出された石垣

図版８－１　トレンチ１　石垣裏（墳丘側）の状況

図版８－２　トレンチ２　羨道の閉塞石

図版９－１　トレンチ２　羨道右側壁と閉塞石

図版９－２　トレンチ２　羨道部（手前が左側壁、奥が右側壁）

図版10－１　トレンチ２　羨道左側壁と閉塞石

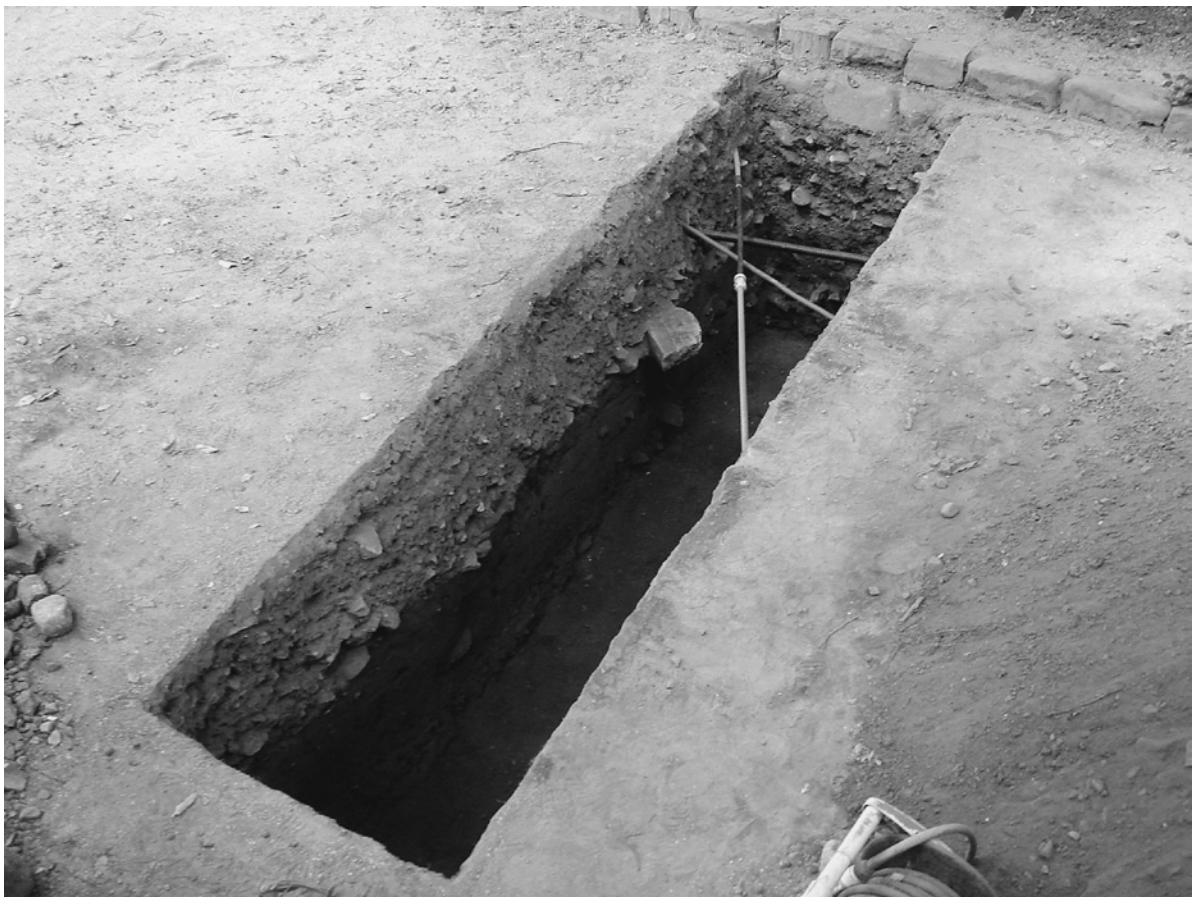
図版10－２　トレンチ２　羨道の閉塞土

図版11－１　トレンチ３　石垣検出状況

図版11－２　トレンチ４－３　石垣の内側の墳丘盛土

図版12－１　トレンチ４－１　墳丘裾部と周濠（内濠）の状況

図版12－２　平成14年度の調査状況（トレンチ４近くの墳丘裾部）



図版13－１　トレンチ５－１

図版13－２　トレンチ５－２　昭和期に造成した盛土の状況

図版14－１　トレンチ６（椀貸塚側から岩倉塚側を望む）

図版14－２　トレンチ６（岩倉塚側から椀貸塚側を望む）

図版15－１　トレンチ６　内濠外縁部

図版15－２　トレンチ６　周堤部土層

図版16－１　トレンチ６　周堤部から外濠にかけての状況（写真左側が周堤、右側が周濠（外濠））

図版16－２　トレンチ６　外濠外縁部の状況：写真左の石組は後世の水路

図版17－１　トレンチ８、９、７、６（写真手前から）

図版17－２　トレンチ７で検出された石垣

図版18－１　トレンチ９（トレンチ７の石垣に続く石垣）

図版18－２　トレンチ10（外濠から内濠を望む、大野原小学校校庭）

図版19－１　トレンチ10　内濠外縁部

図版19－２　トレンチ10　外濠検出状況

図版20－1　トレンチ11　内濠外縁部

図版20－2　トレンチ12（椀貸塚側から岩倉塚を望む：周堤、外濠、岩倉塚墳丘）

図版21－1　トレンチ12（岩倉塚側から椀貸塚側を望む）

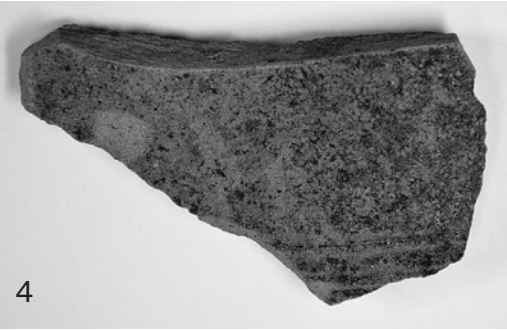
図版21－2　トレンチ12　椀貸塚外濠と岩倉塚墳丘の重なりの状況（1）

図版22－1　トレンチ12　椀貸塚外濠と岩倉塚墳丘の重なりの状況（2）

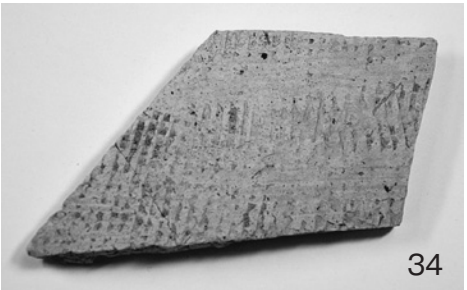
図版22－2　トレンチ12　周堤

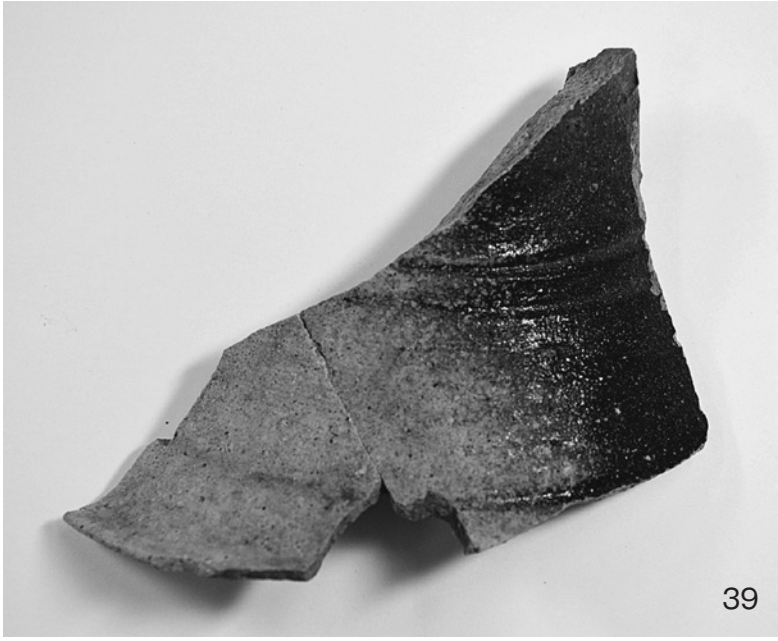
図版23－1　トレンチ13　外濠、旧八幡の石垣、岩倉塚古墳墳丘

図版23－2　トレンチ13　旧八幡の石垣と岩倉塚古墳墳丘の状況

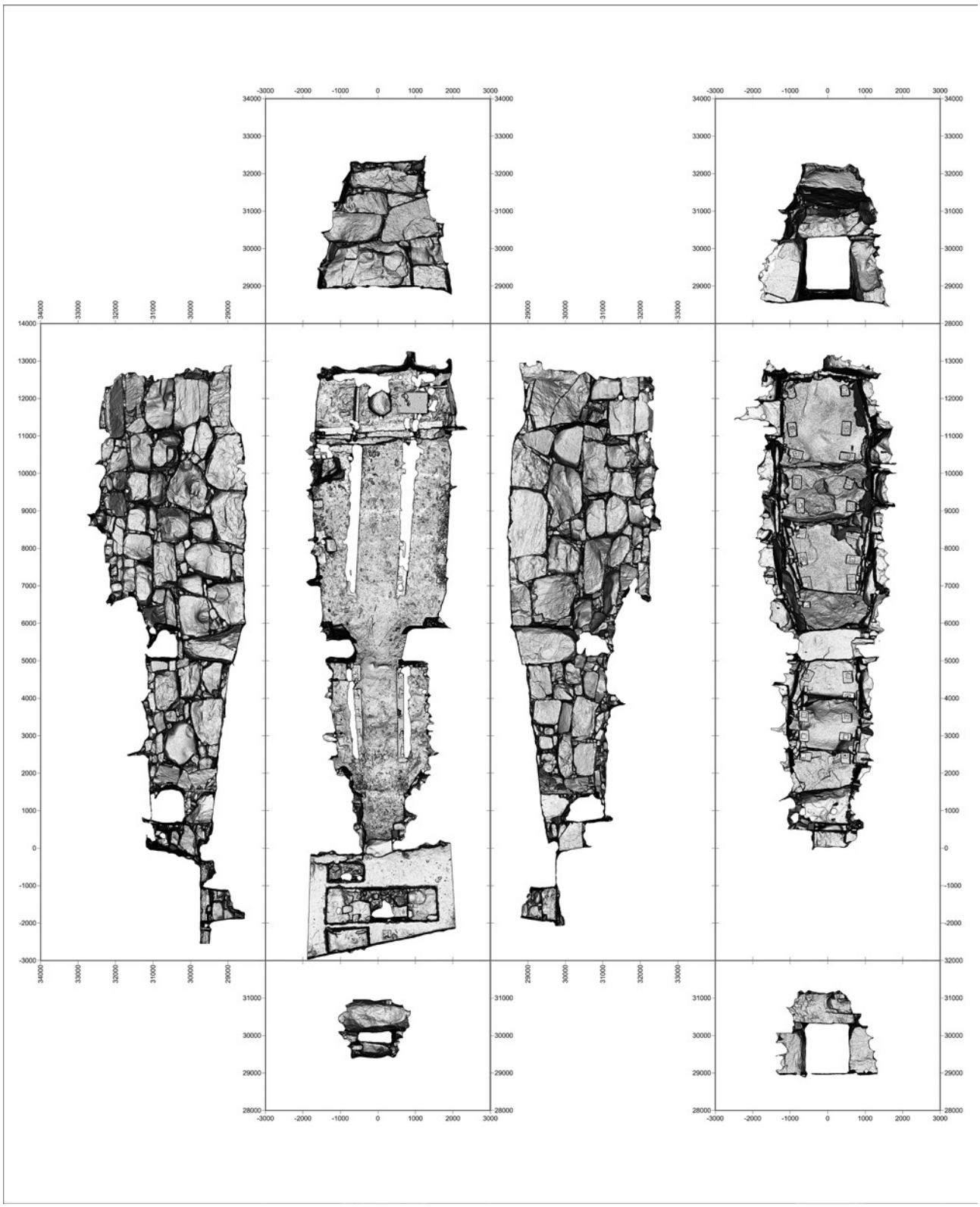


図版24　出土須恵器（1）

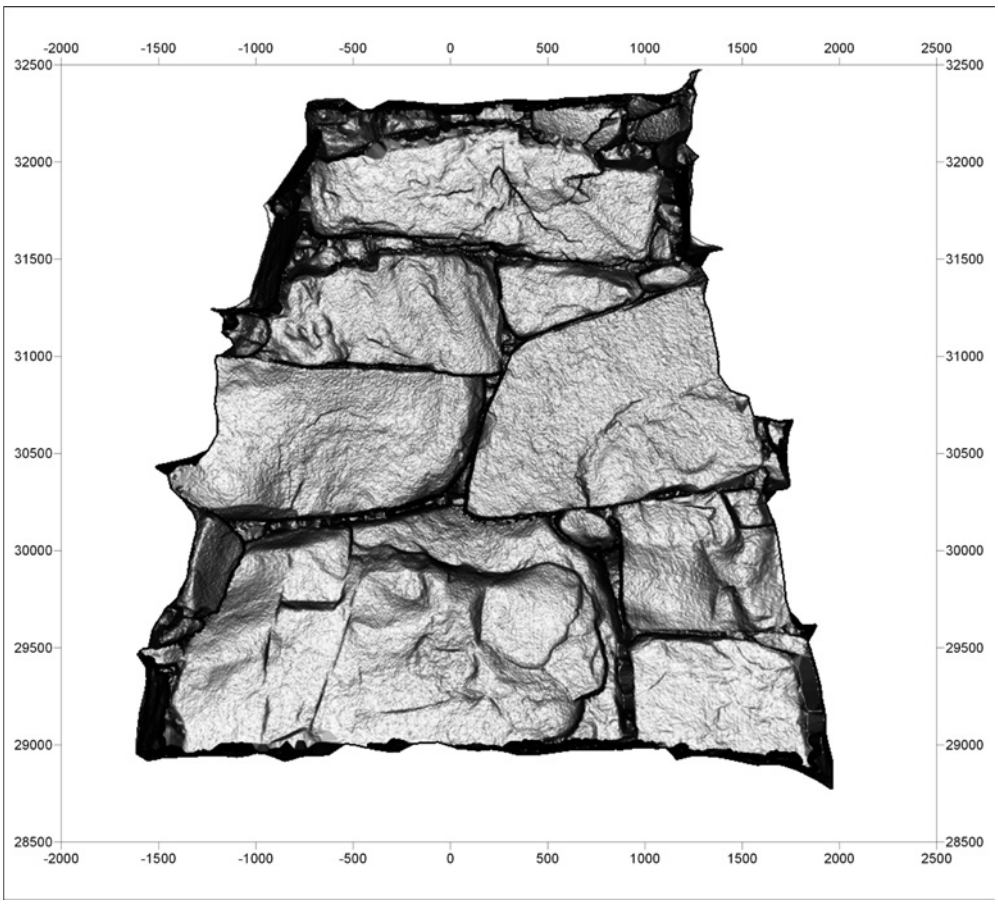




図版25　出土須恵器（2）

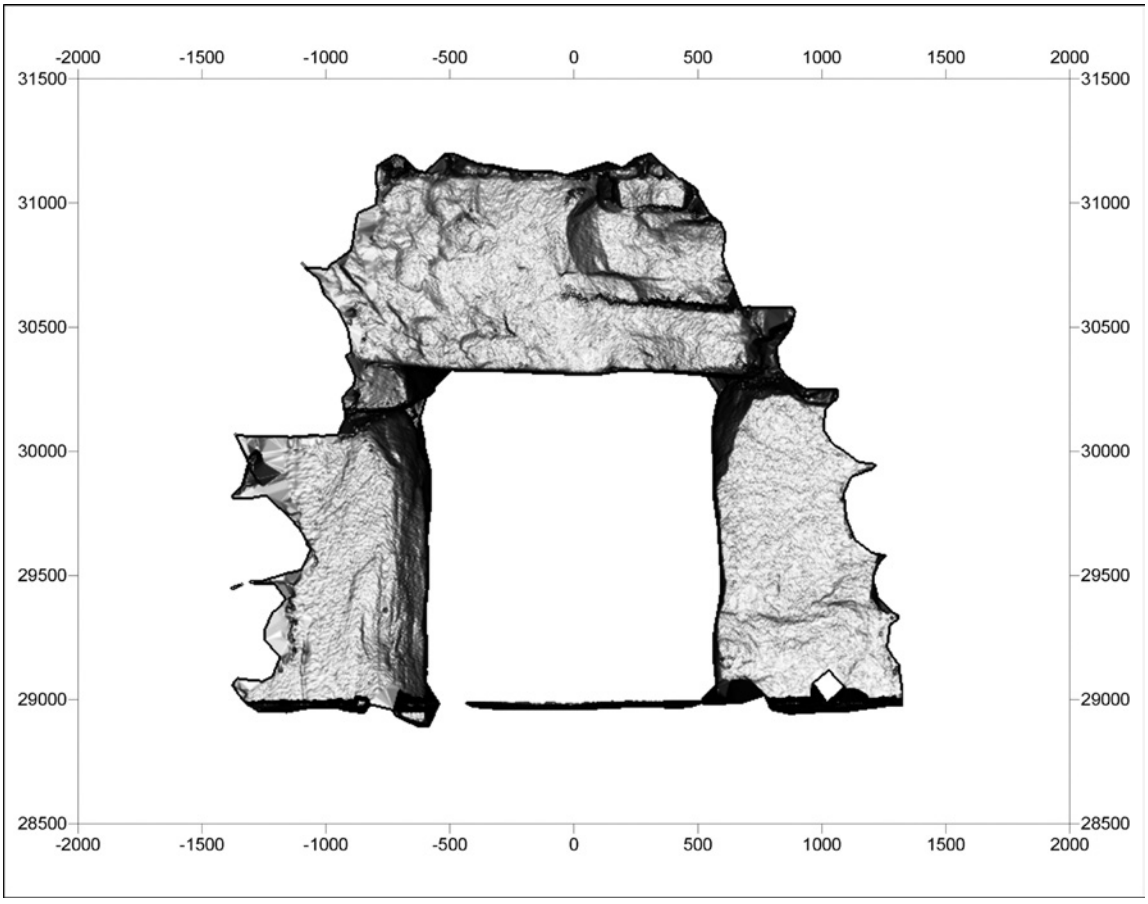


図版26　石室　展開図（三次元地上レーザー計測画像）

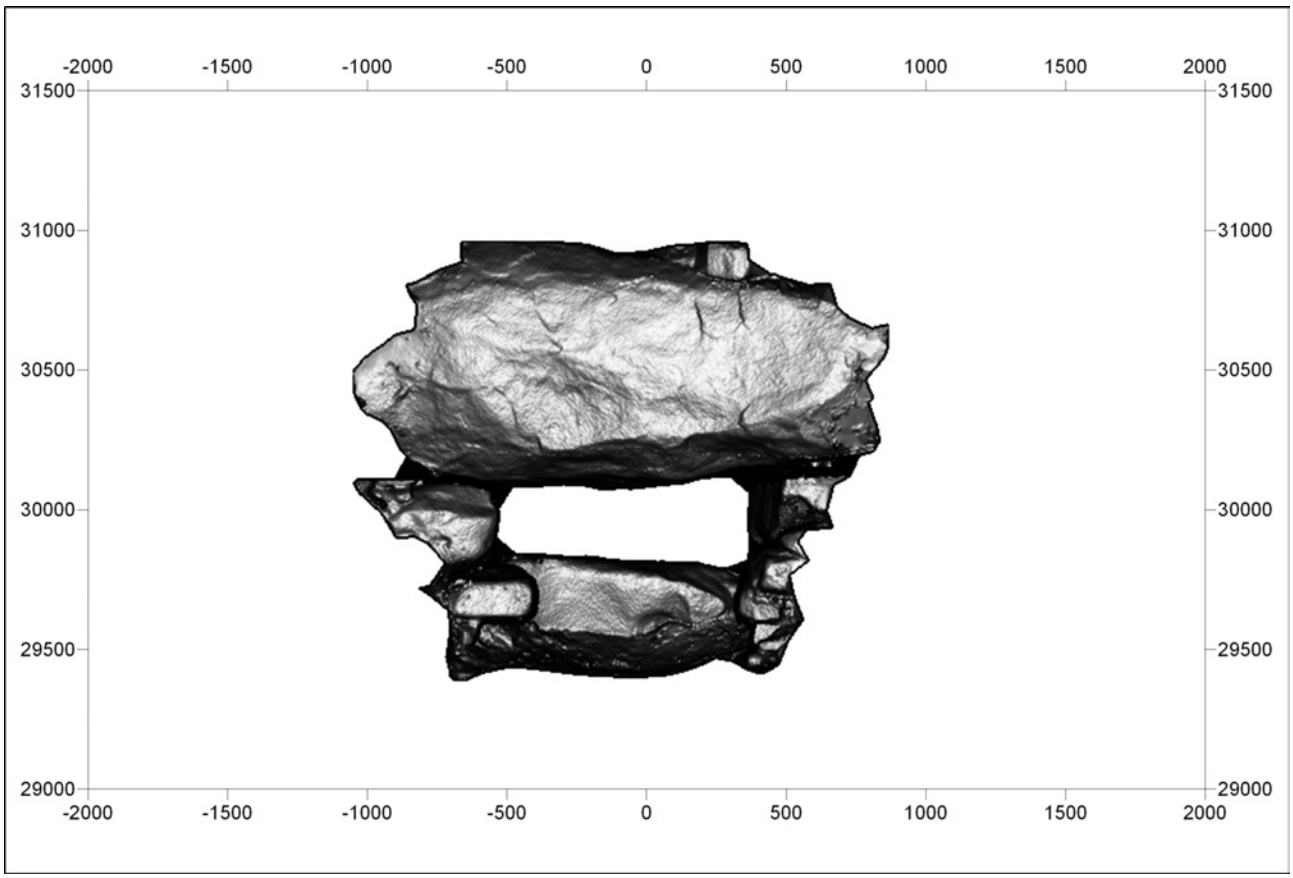


図版27－１　奥壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）

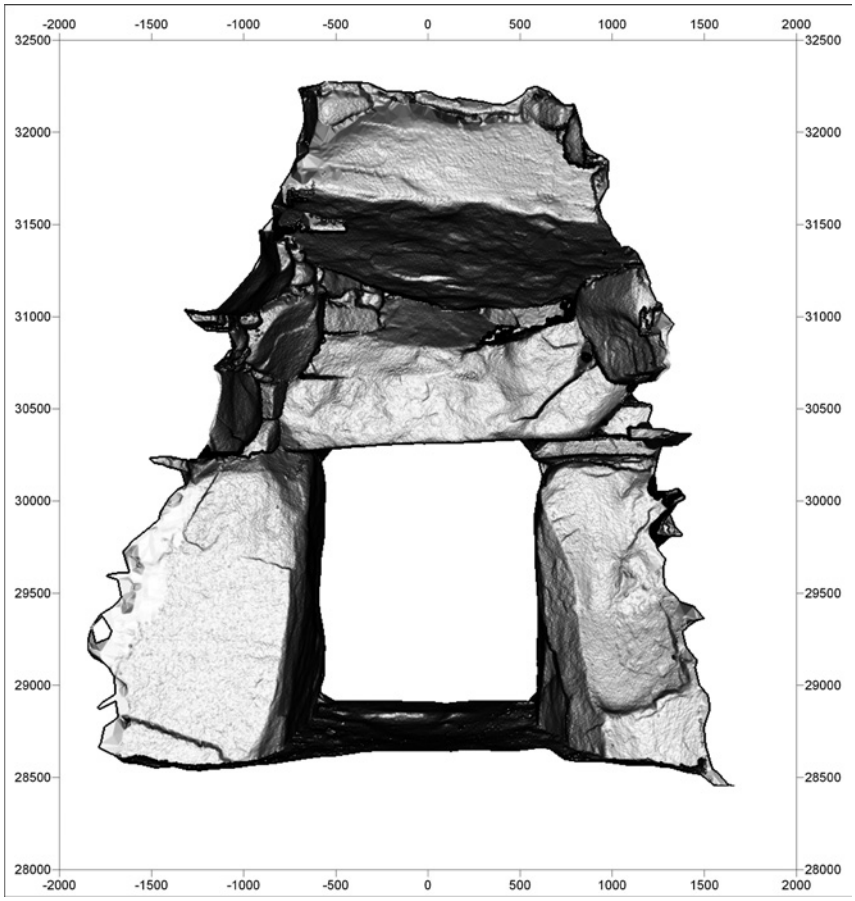
※図版横の数値は標高を示す。（例：30000→30.000m）以下同様。



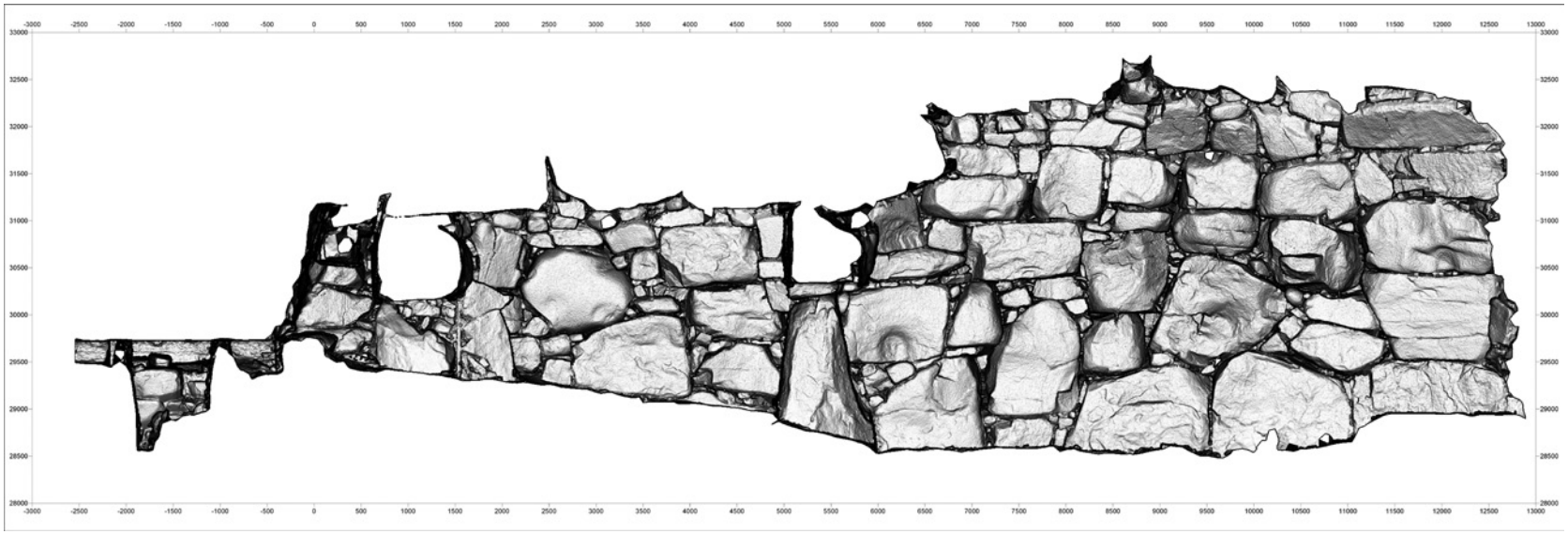
図版27－２　前室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



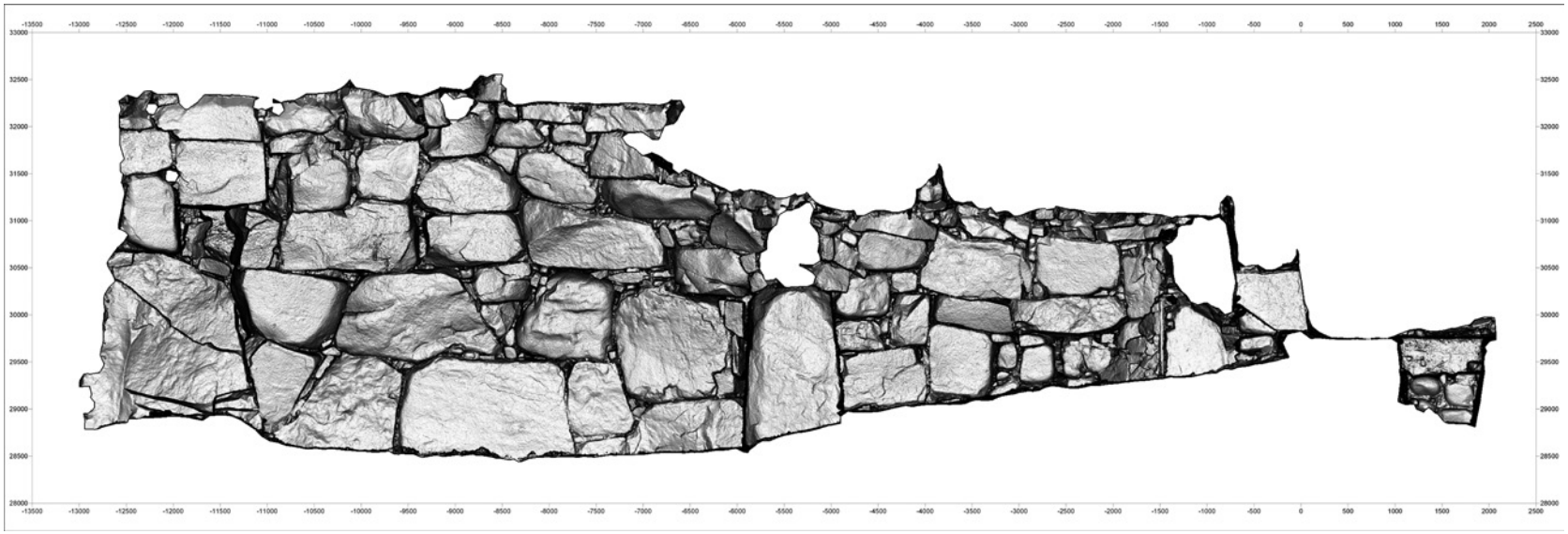
図版28－１　前室袖石部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



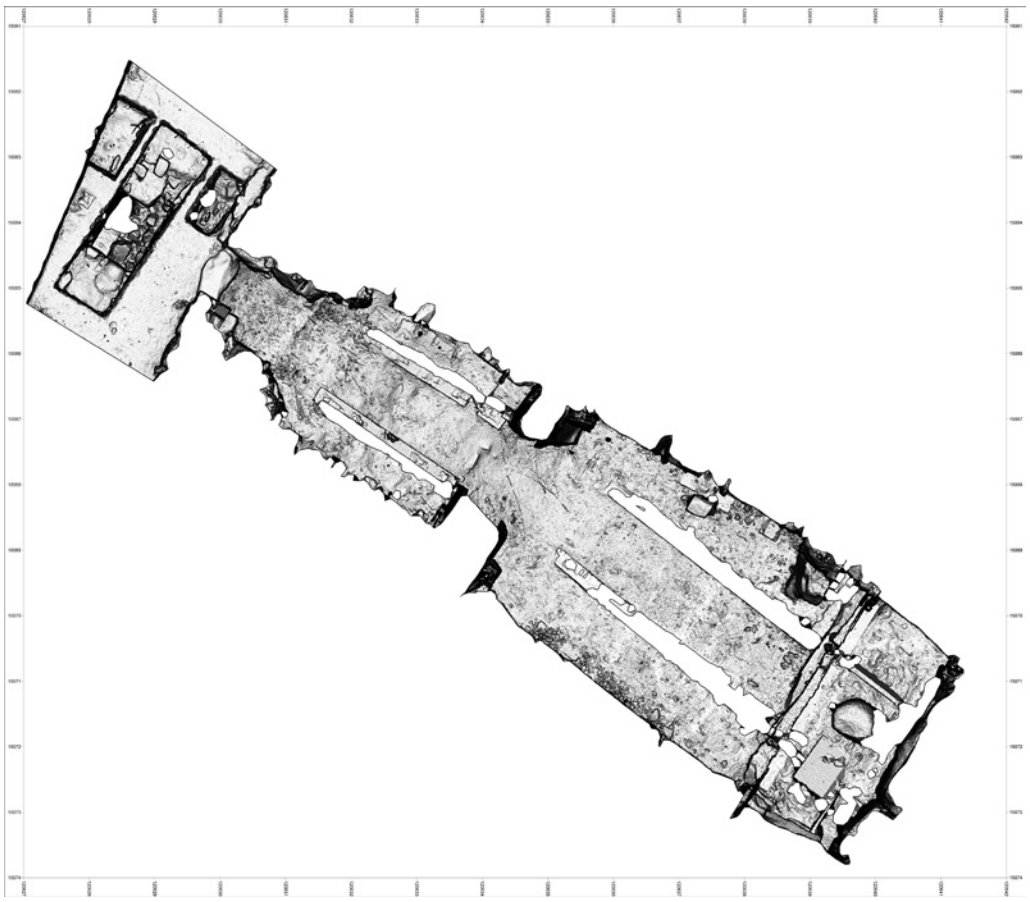
図版28－２　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



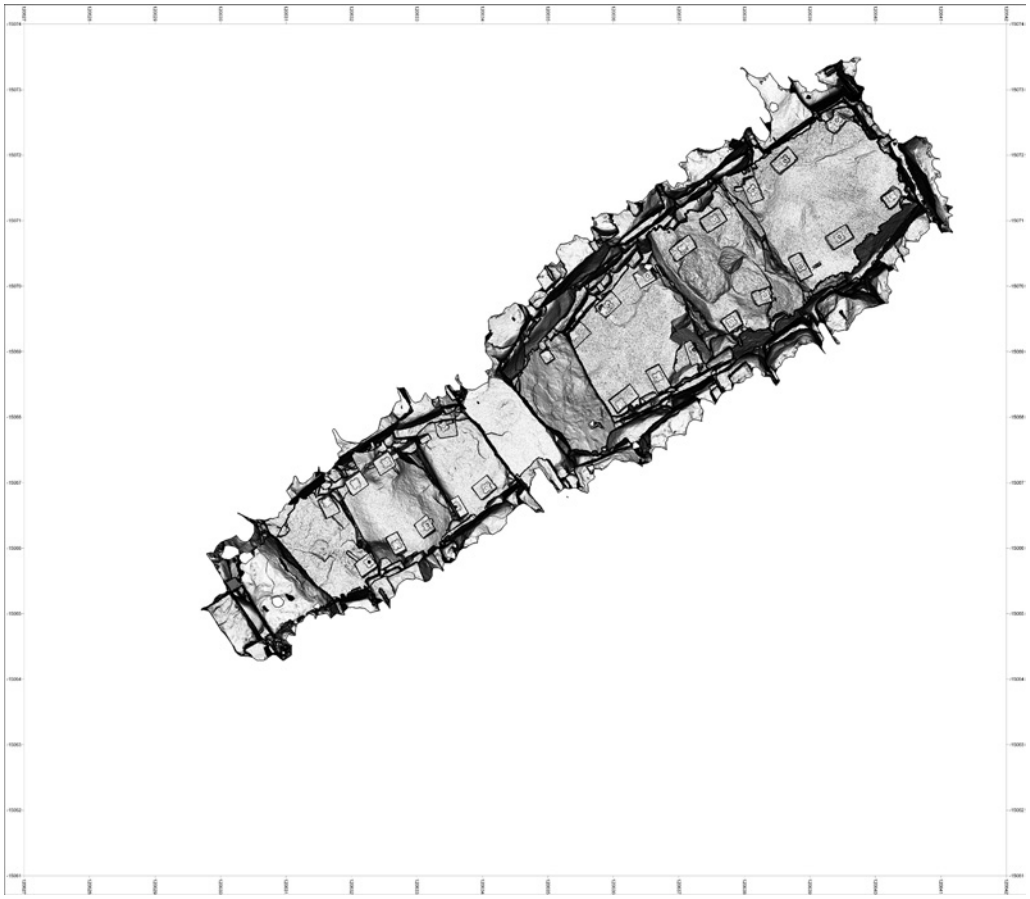
図版29－１　右側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版29－２　左側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）

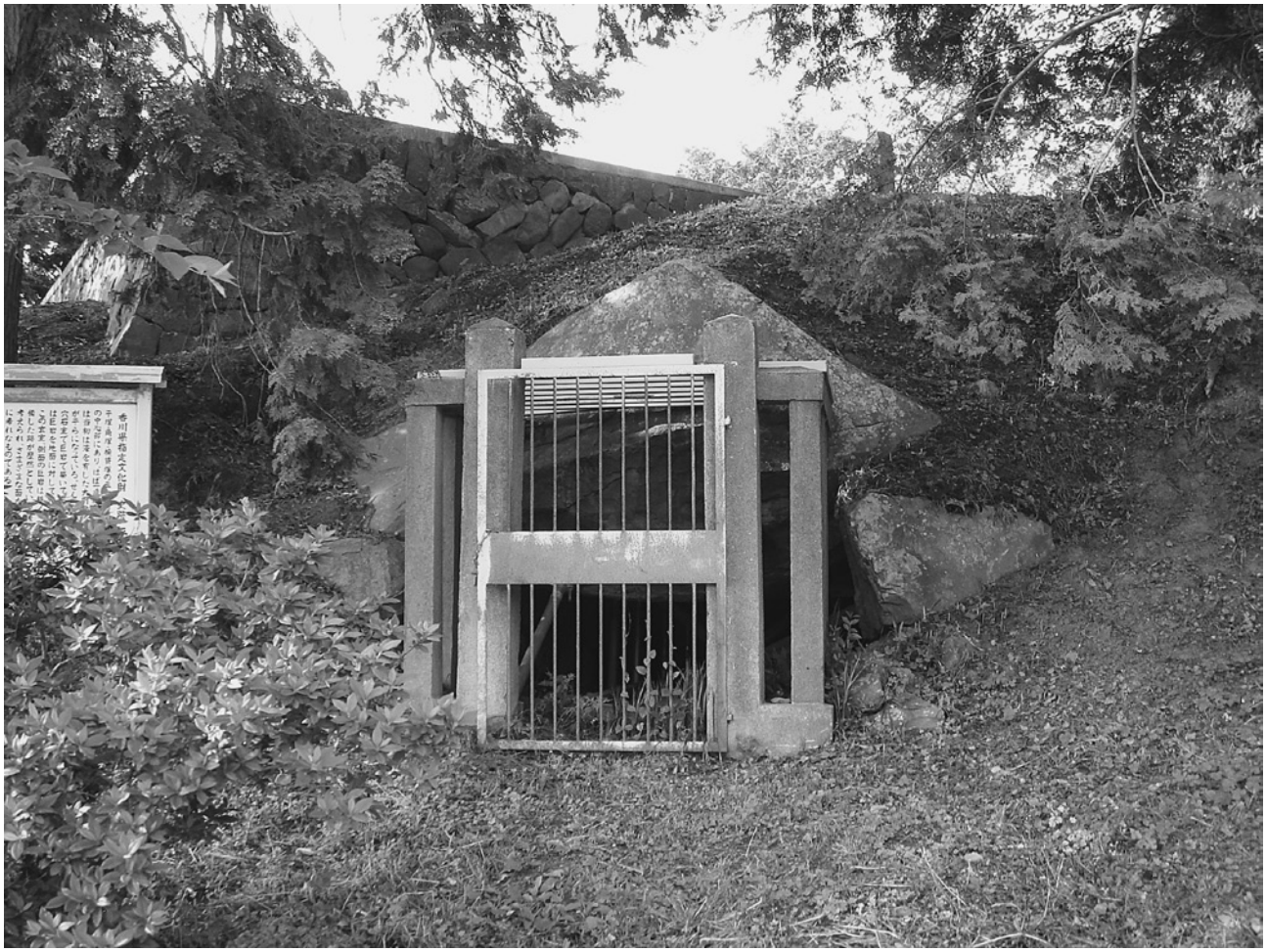


図版30－１　石室床面　平面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版30－２　石室天井部　平面図　三次元地上レーザー計測画像）

図版31－1　墳丘（東側から撮影）



図版31－2　石室開口部

図版32－１　トレンチ１　石室左側壁外部の土層（１）

図版32－２　トレンチ１　石室左側壁下層の状況（２）

図版33－１　トレンチ１　東側セクション

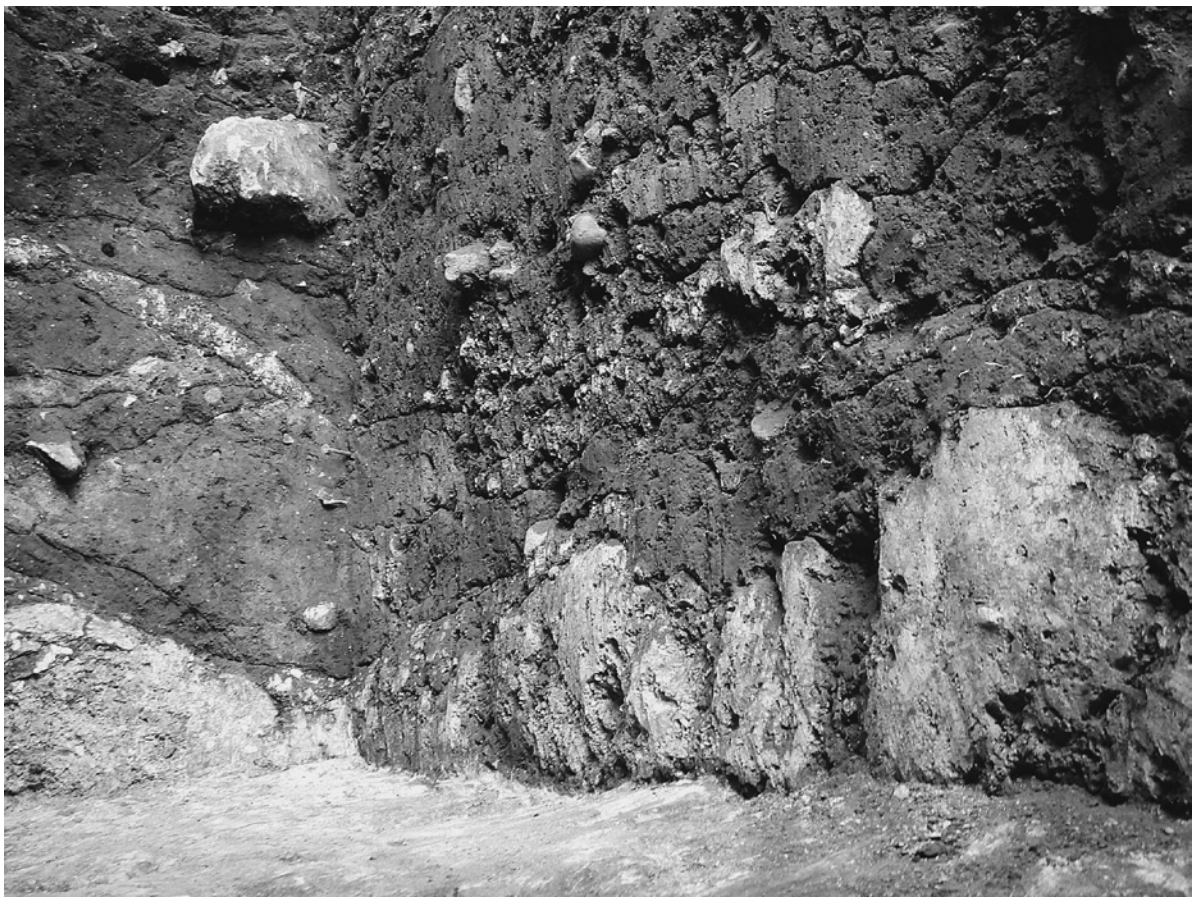
図版33－２　トレンチ２　石室右側壁外部の列石

図版34－１　トレンチ２　石室右側壁外部の列石の状況（平面）

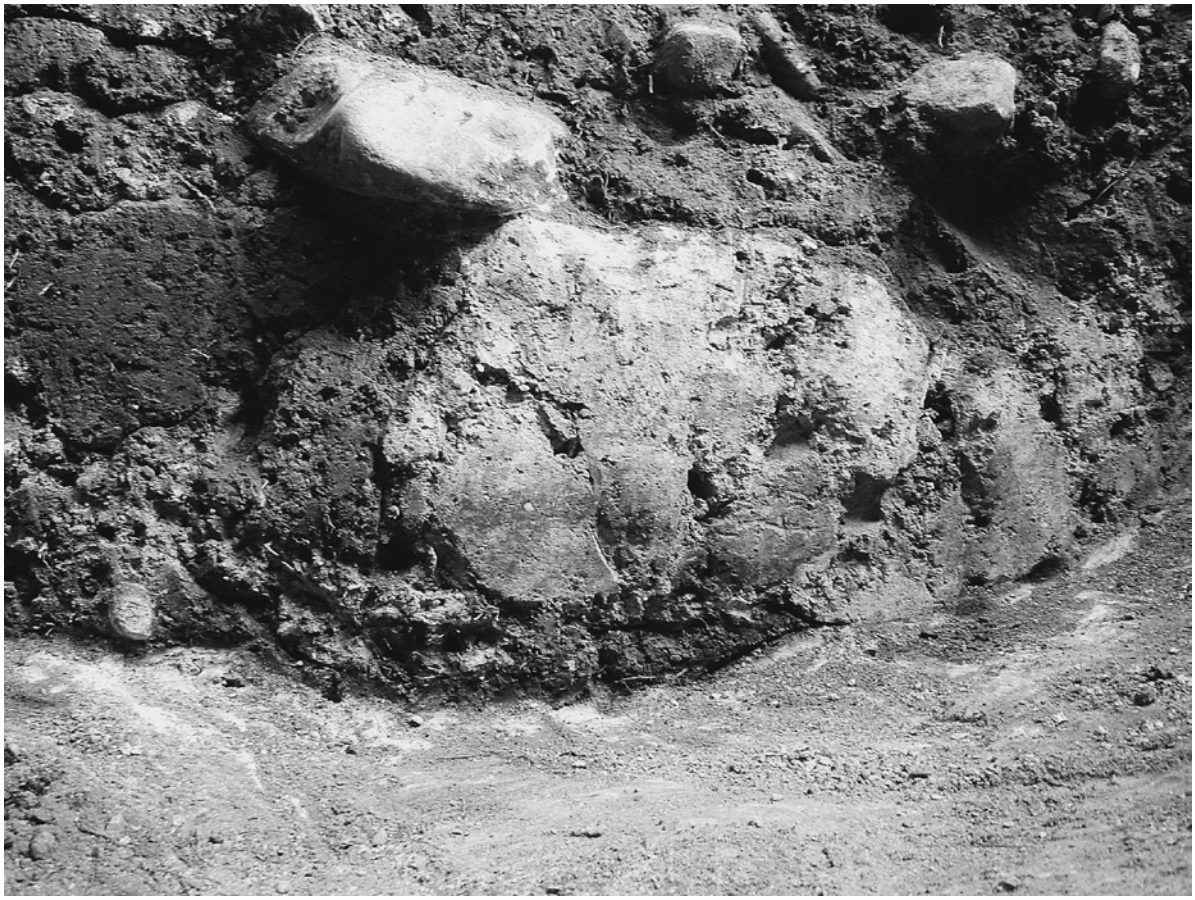
図版34－２　トレンチ３

図版35－１　トレンチ３　南側セクション　周濠部付近の土層

図版35－２　トレンチ４



図版36－１　トレンチ４　西側セクション　地山層と盛土下層部



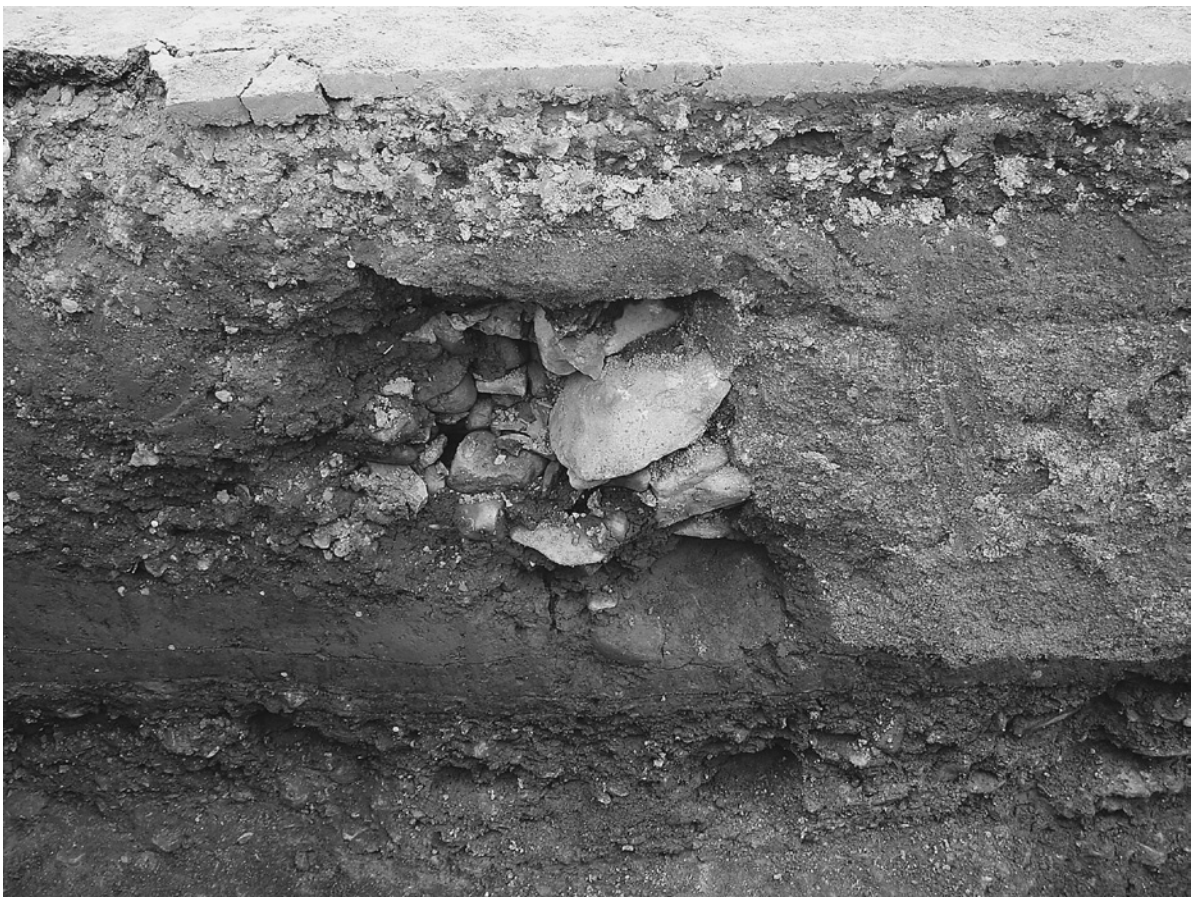
図版36－２　トレンチ４　西側セクション　地山層直上の黒色土と地山ブロック

図版37－１　トレンチ４　南側（石室側）セクション

図版37－２　トレンチ４　堤状遺構と周濠（写真左）

図版38－１　トレンチ５　西側セクション

図版38－２　トレンチ６－１



図版39－１　トレンチ６－２

図版39－２　トレンチ７－１　周濠外縁部

図版40－１　トレンチ７－２　地山の立ち上がり箇所

図版40－２　トレンチ８

図版41－１　トレンチ８　東側セクション

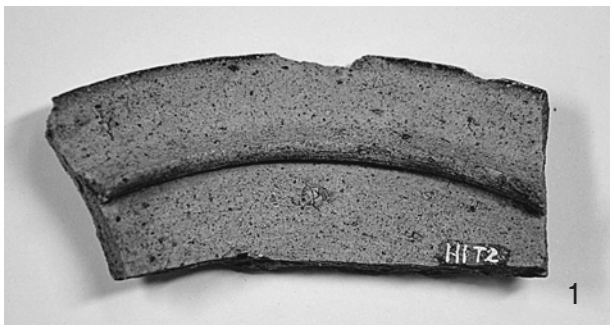
図版41－２　トレンチ９　東側セクション

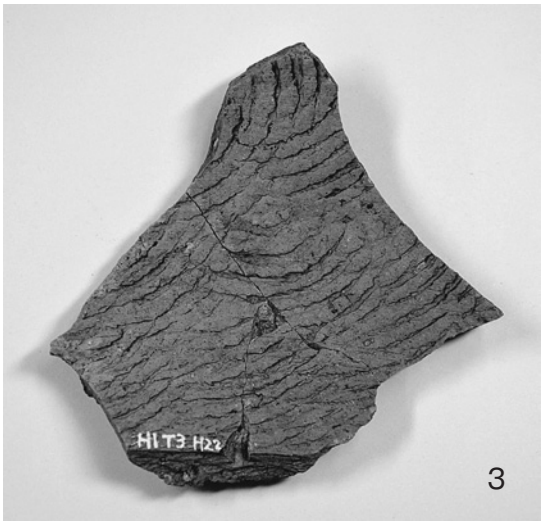
図版42－１　右側壁玄門部　玄門立柱石と「支え石」

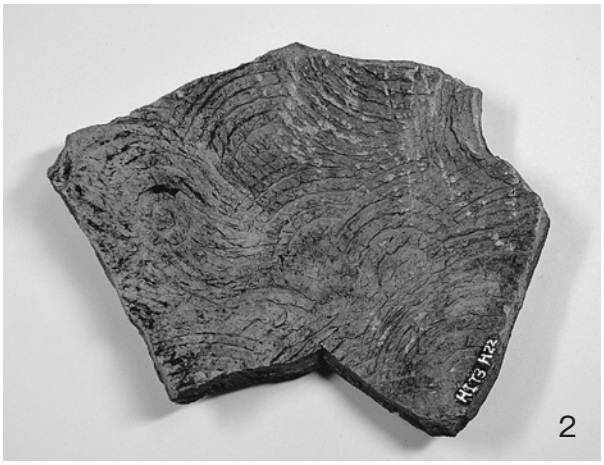
図版42－２　左側壁玄門部　玄門立柱石と「支え石」

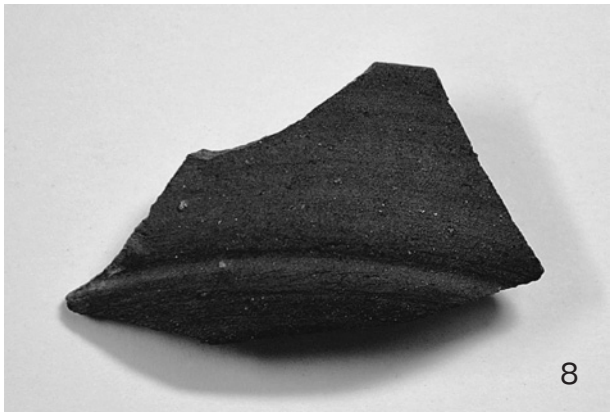
図版43－１　石室　右側壁の羨門石（写真左下）

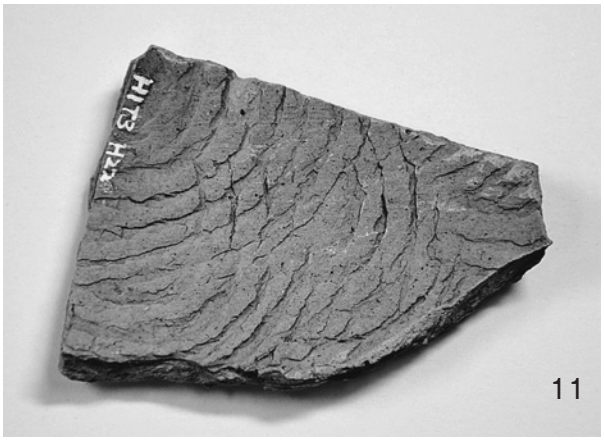
図版43－２　石室内の「詰め土」（羨道右側壁玄門付近）

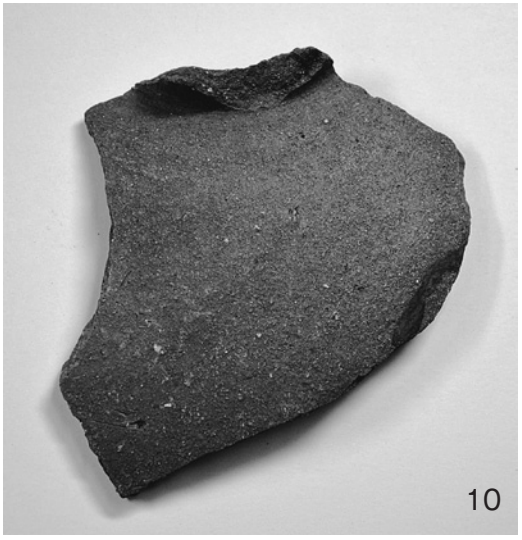




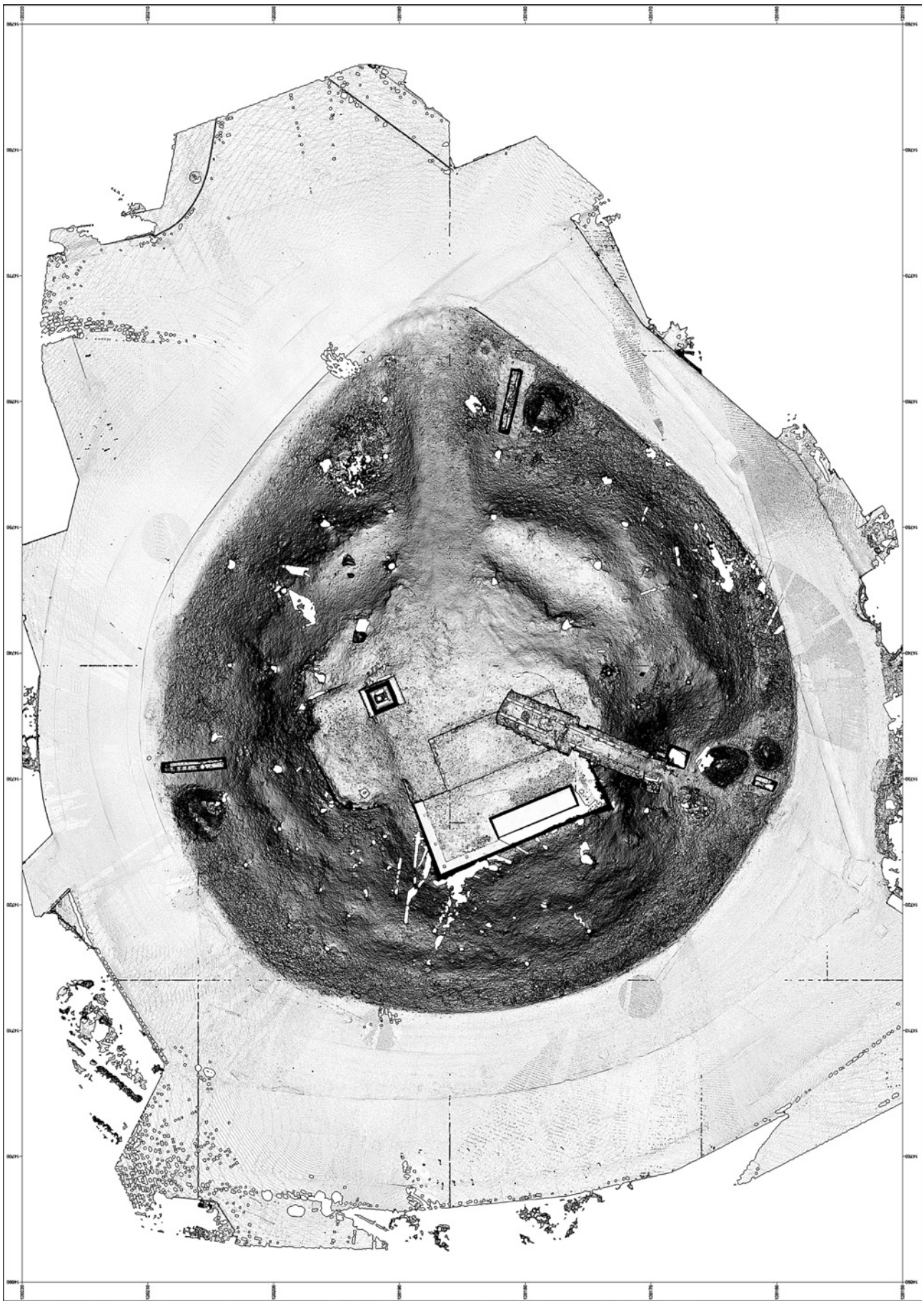




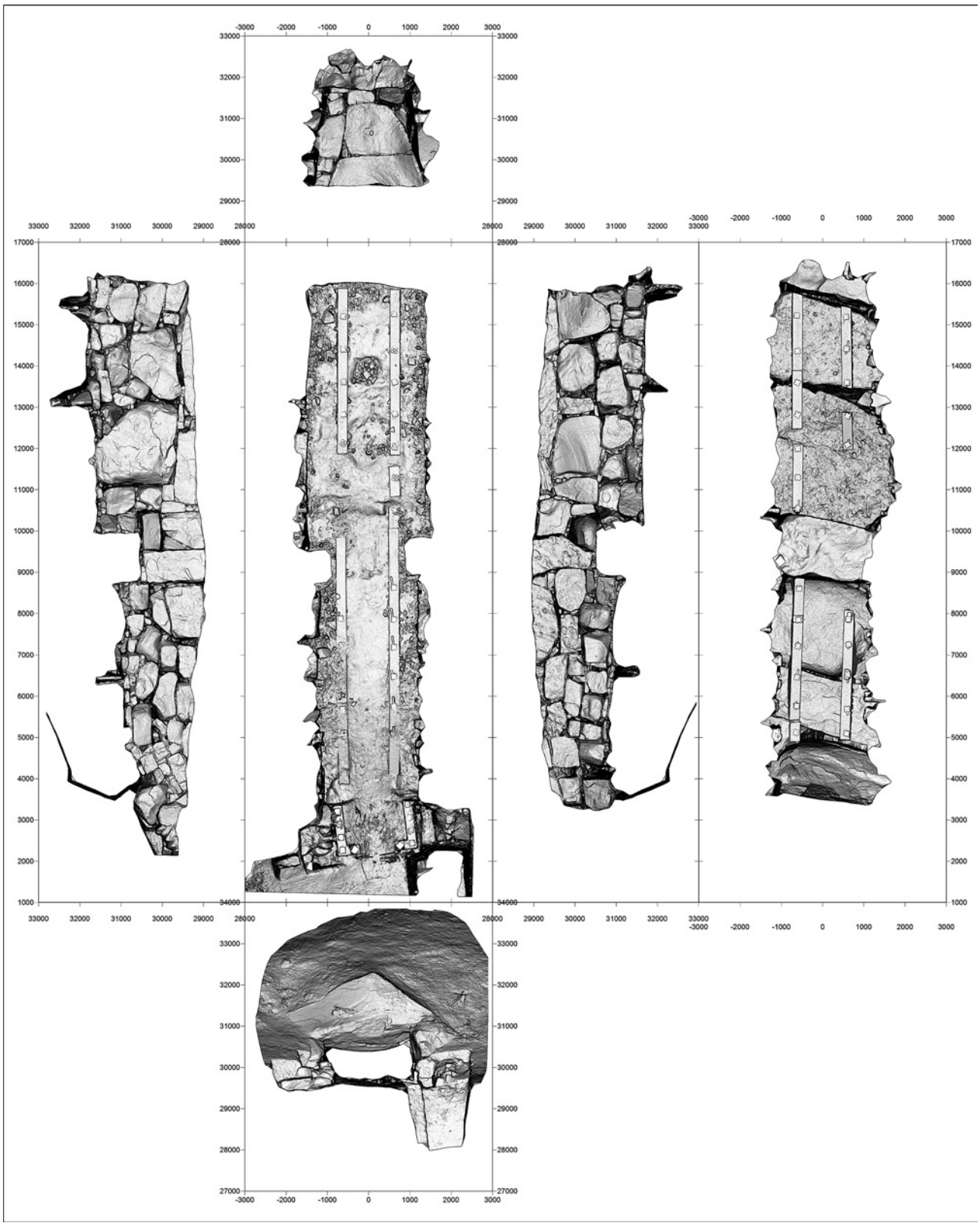




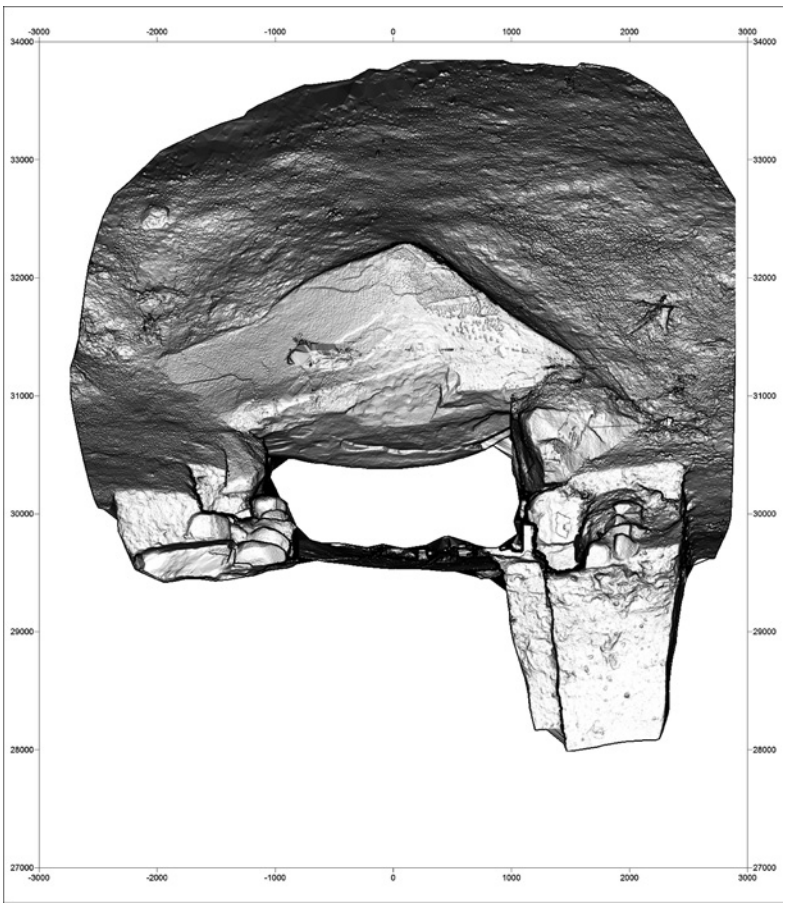
図版44　出土須恵器



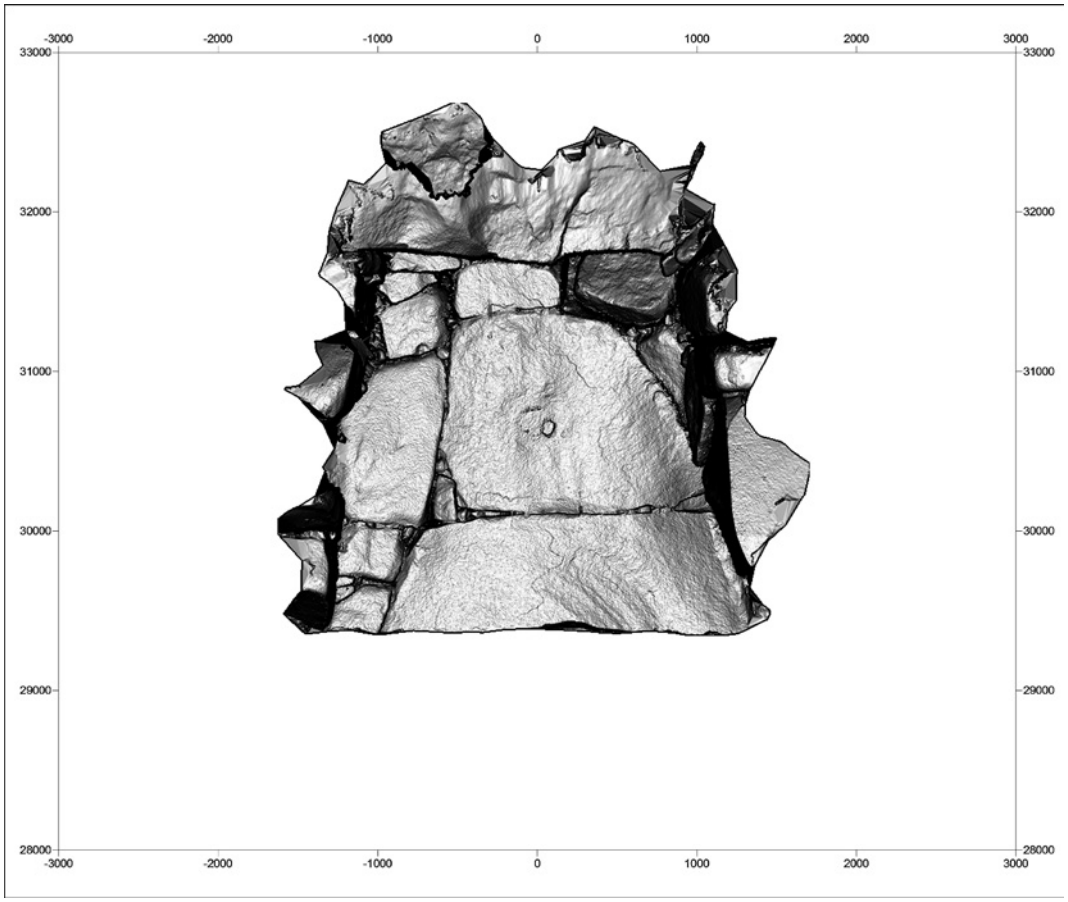
図版45　墳丘平面図（三次元地上レーザー計測画像）



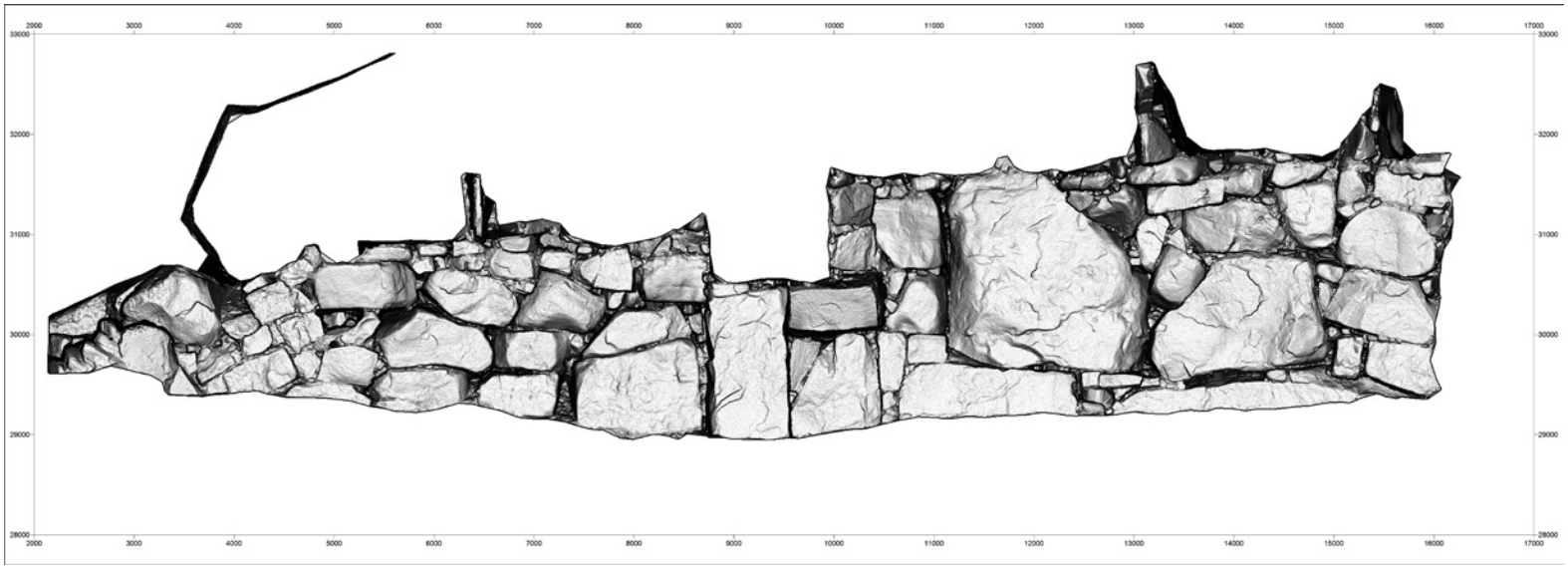
図版46　石室展開図（三次元地上レーザー計測画像）



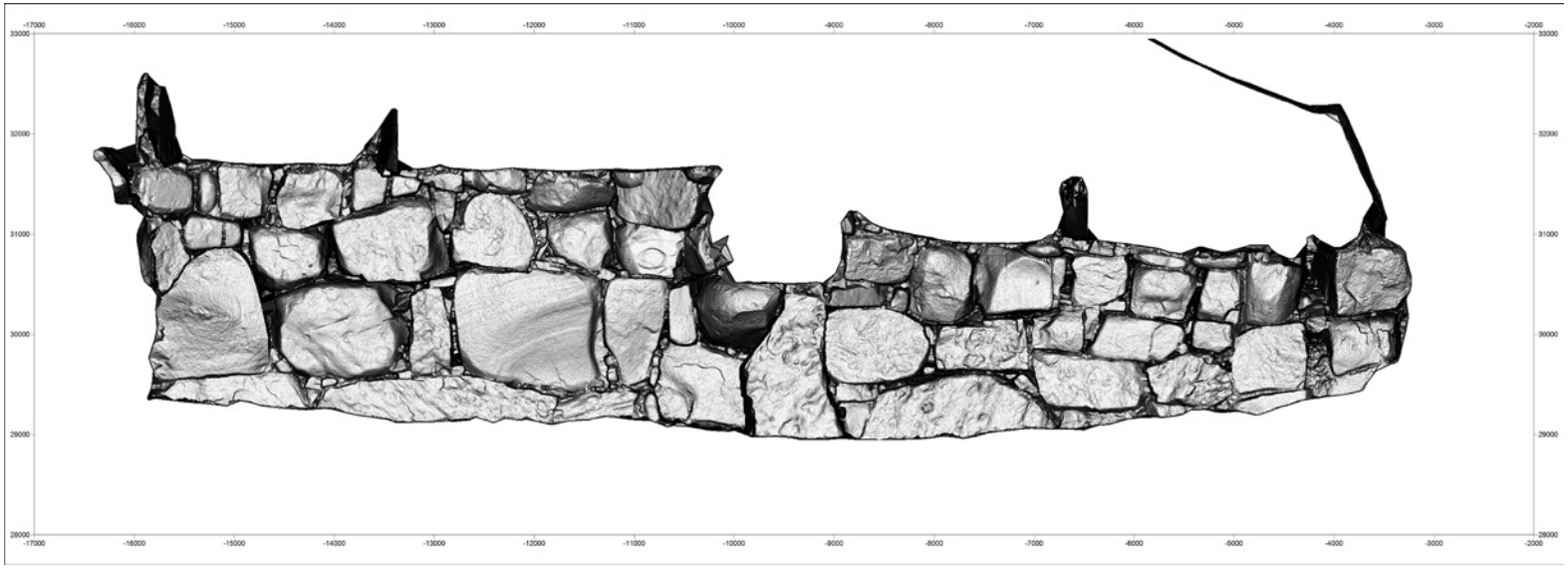
図版47－１　石室開口部（三次元地上レーザー計測画像）



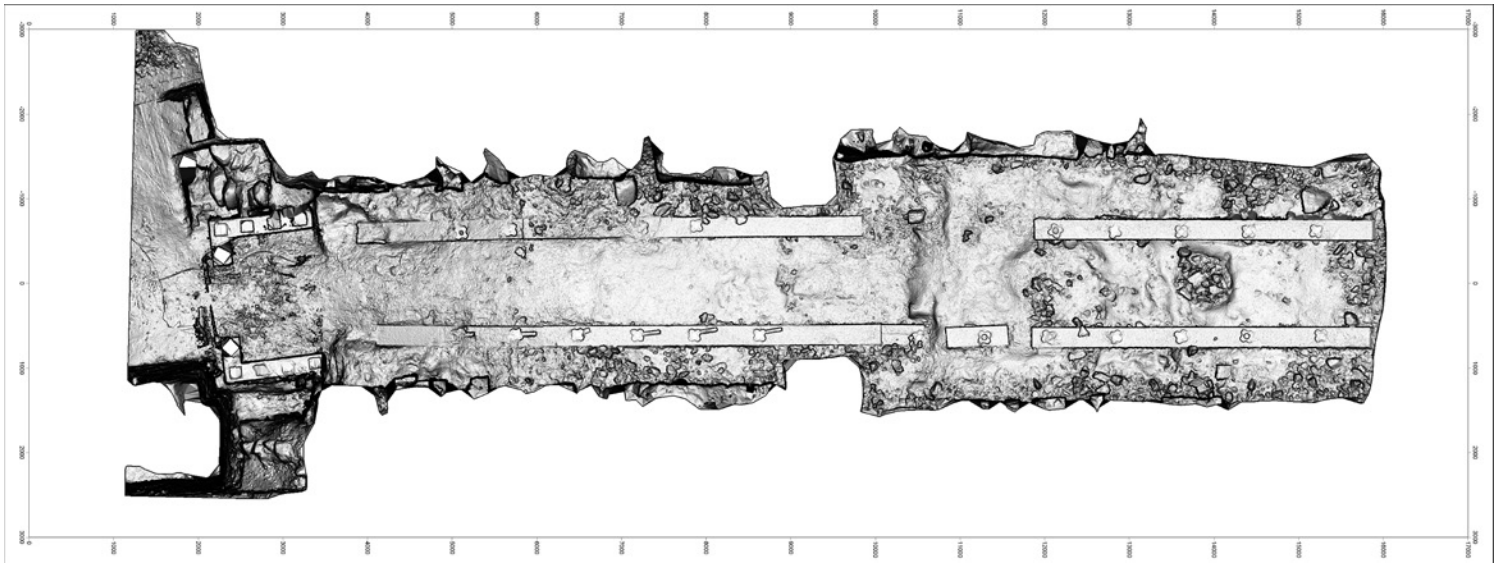
図版47－２　奥壁部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



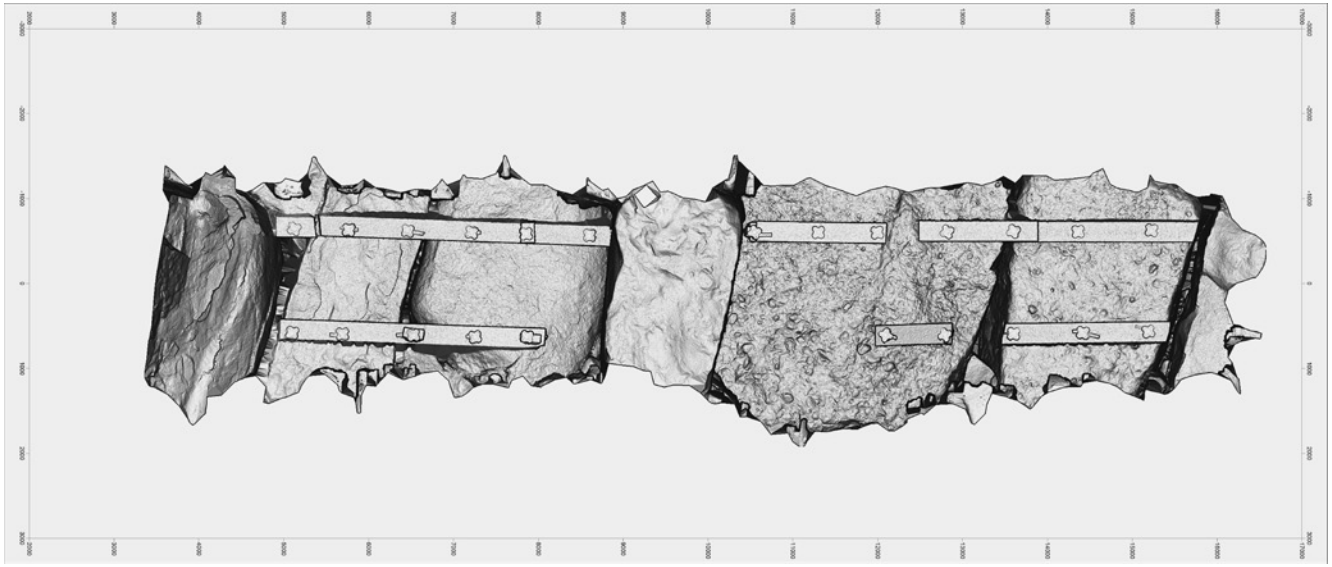
図版48－１　右側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



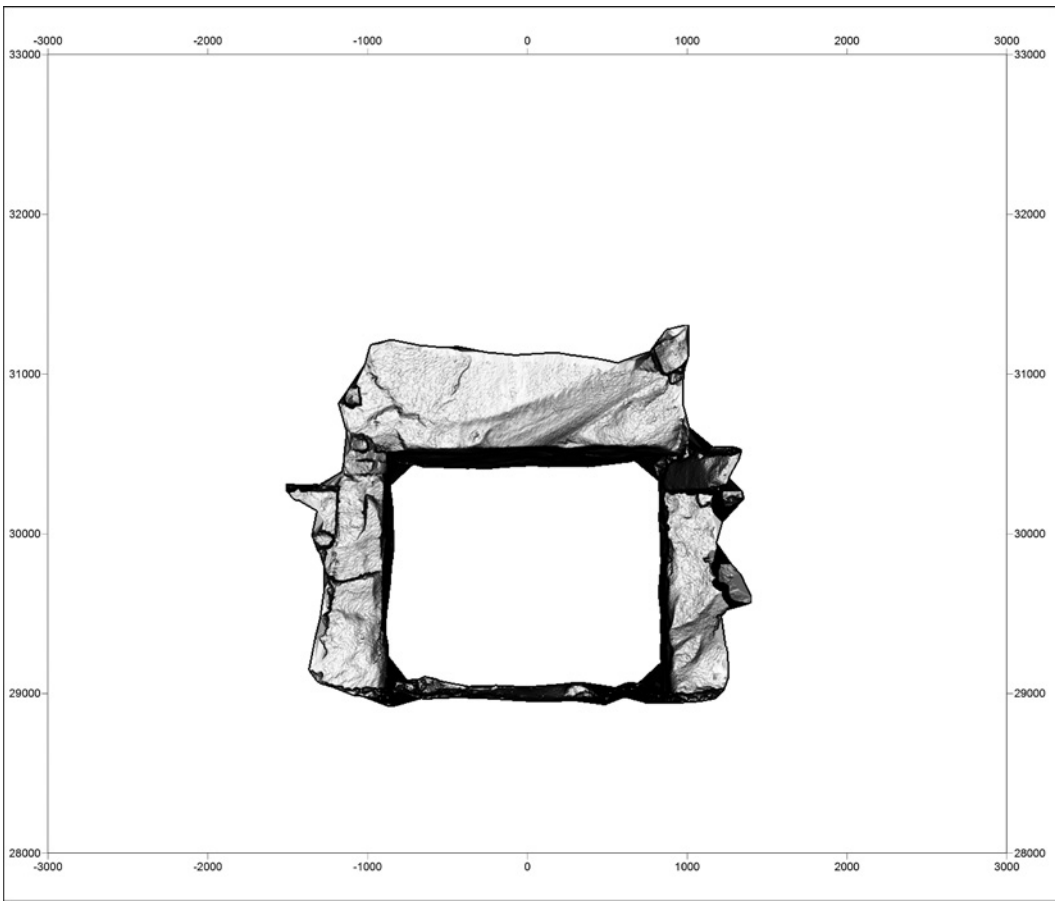
図版48－２　左側壁　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



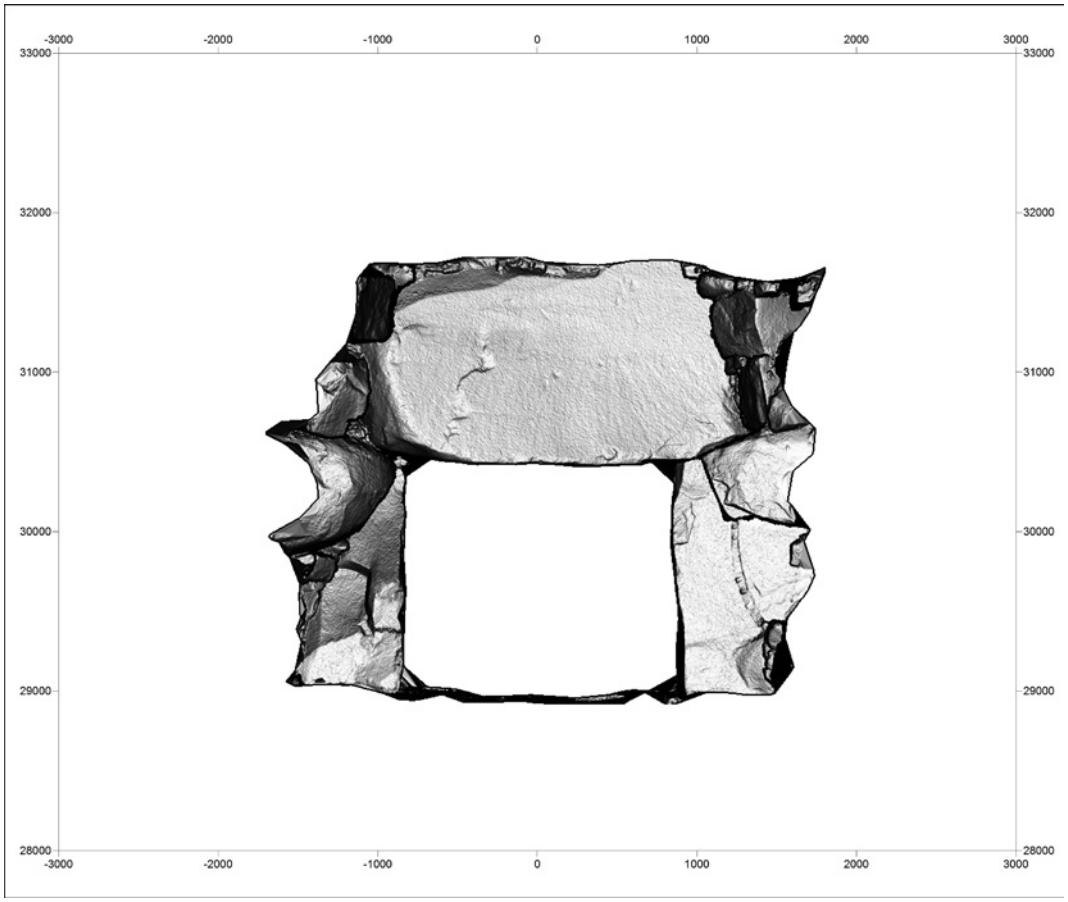
図版49－１　石室床面　平面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版49－２　石室天井　平面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版50－１　羨道玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



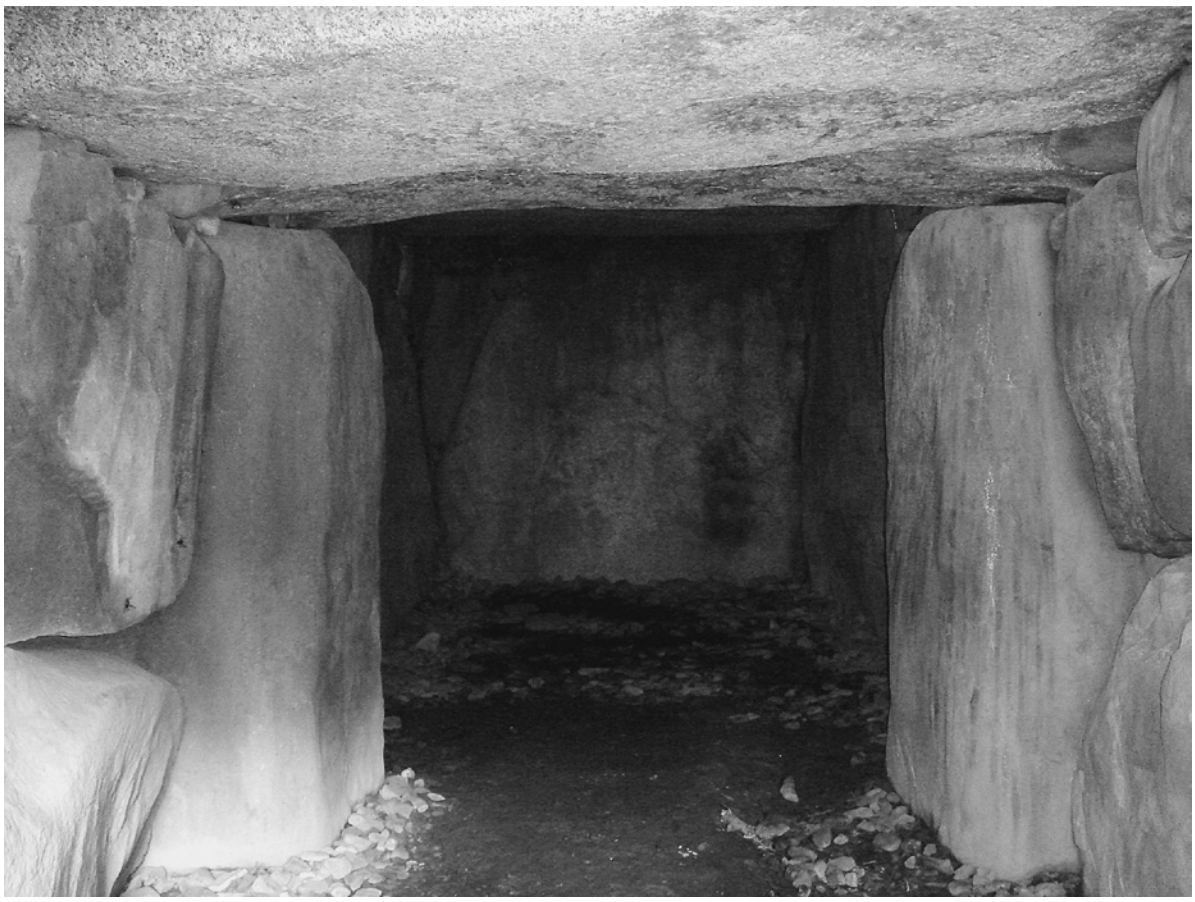
図版50－２　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）

図版51－１　墳丘（南西側から撮影）

図版51－２　墳丘（北西側から撮影）

図版52－１　墳丘（東側から撮影）

図版52－２　石室開口部



図版53－１　石室（羨道から奥壁を望む）

図版53－２　石室　奥壁

図版54－１　トレンチ１　羨門石（左側壁）

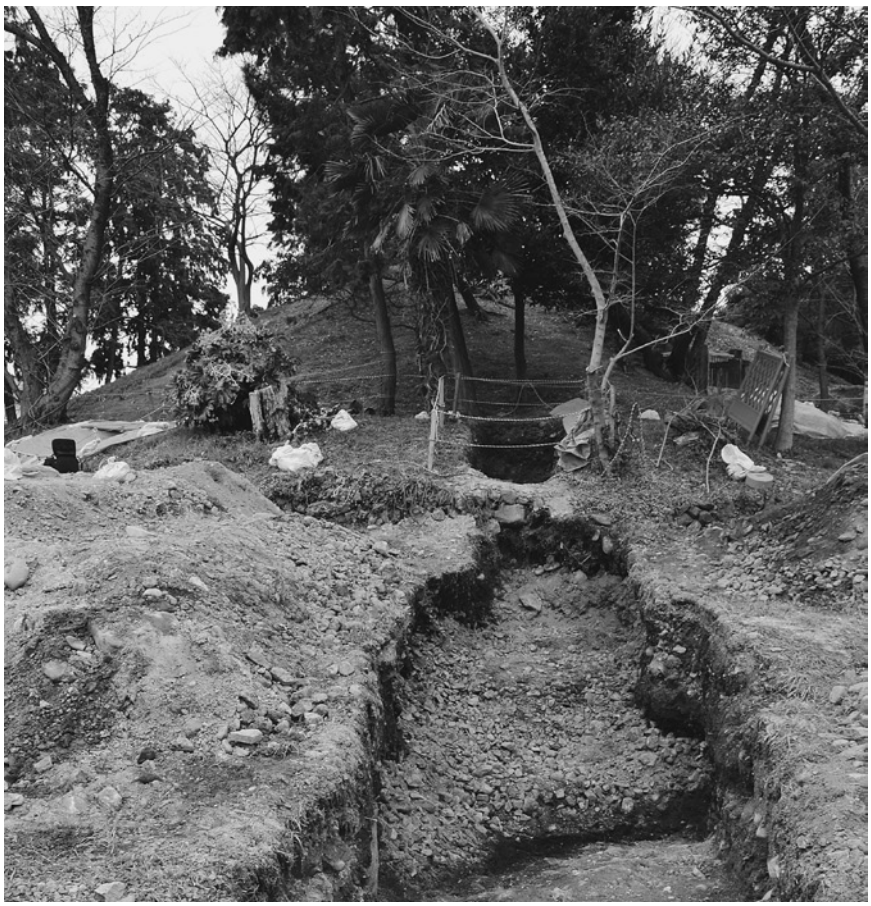
図版54－２　トレンチ１　羨門石下部と須恵器出土状況

図版55－１　トレンチ１　羨門石付近の土層

図版55－２　トレンチ２　北側セクション

図版56－１　トレンチ３－１

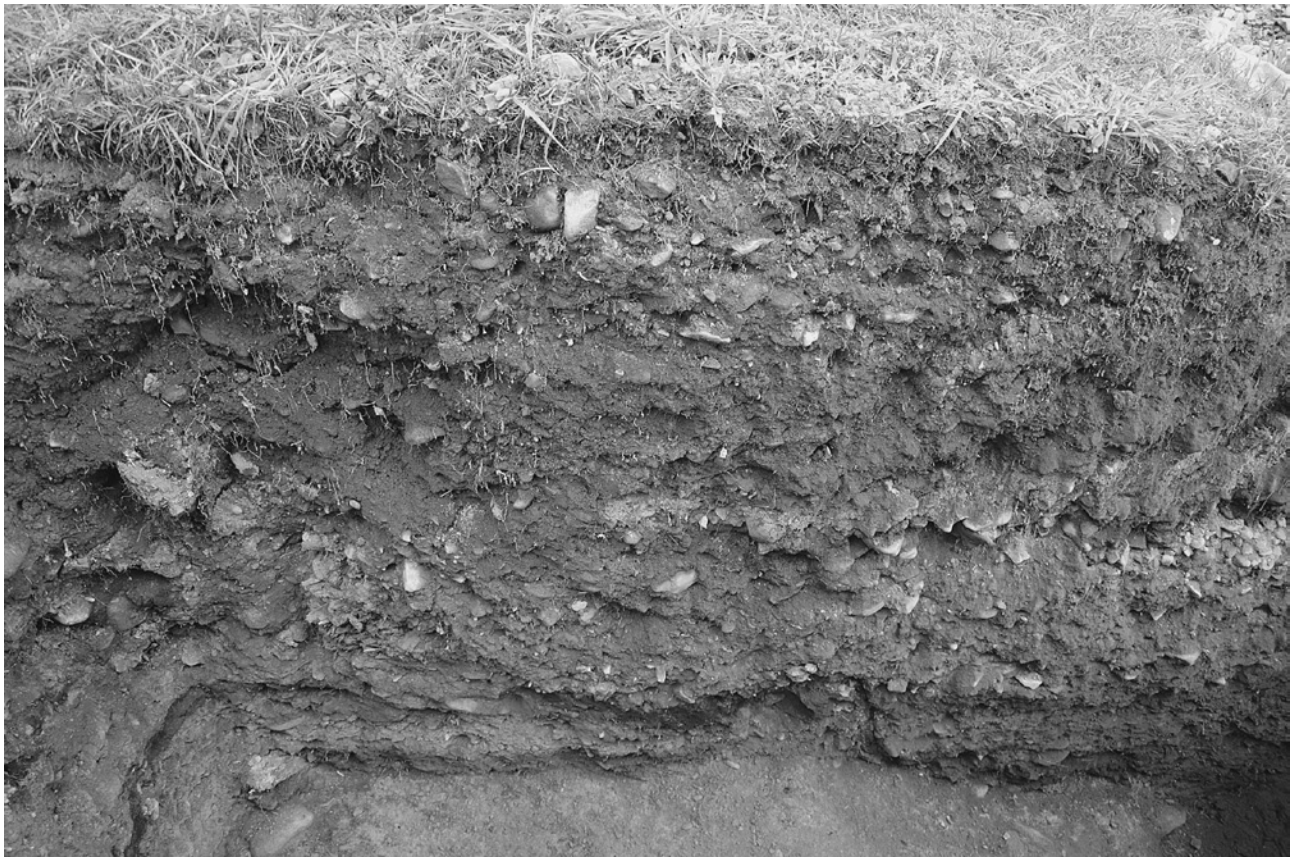
図版56－２　トレンチ３－２　周濠外側斜面を検出（墳丘側から周濠に向かって撮影）



図版57－１　トレンチ３－２　（周濠から墳丘に向かって撮影）

図版57－２　トレンチ３－２　東側セクション　周濠外側斜面を確認

図版58－１　トレンチ３－２　西側セクション　周濠外側斜面を確認



図版58－２　トレンチ４－１　南側セクション

図版59－１　トレンチ４－１　東側セクション

図版59－２　トレンチ４－２　南側セクション

図版60－１　トレンチ４－３　北側セクション

図版60－２　トレンチ５

図版61－１　トレンチ５（拡張）

図版61－２　トレンチ５（拡張）東側セクション

図版62－１　トレンチ５（拡張）墳丘下層部

図版62－２　トレンチ５（拡張）西側セクション

図版63－１　トレンチ６（写真手前が周濠側）

図版63－２　トレンチ６　北側セクション

図版64－１　トレンチ７　北側セクション

図版64－２　トレンチ８

図版65－１　トレンチ８　東側セクション　地山層直上の黒色土層

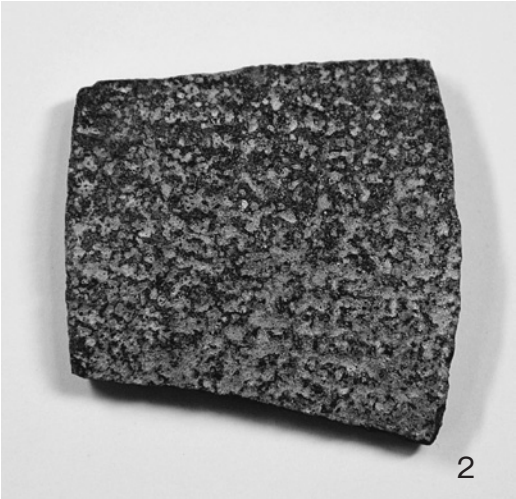
図版65－２　トレンチ９

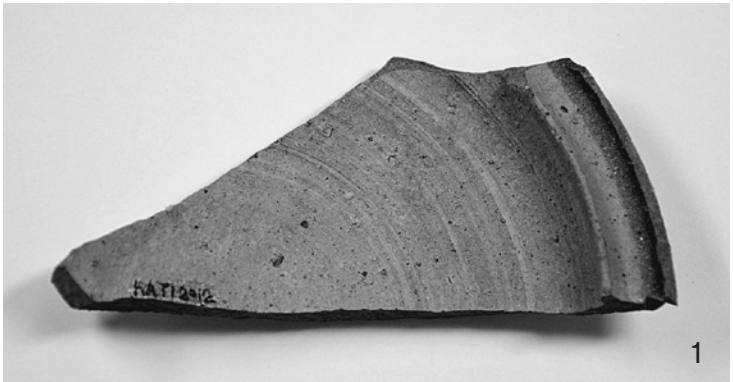
図版66－１　トレンチ９　西側セクション

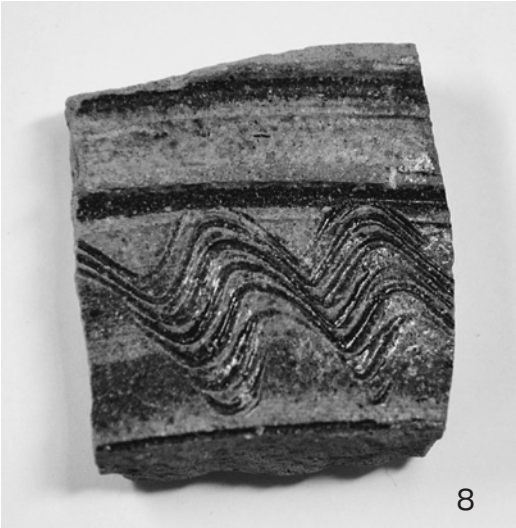
図版66－２　トレンチ10

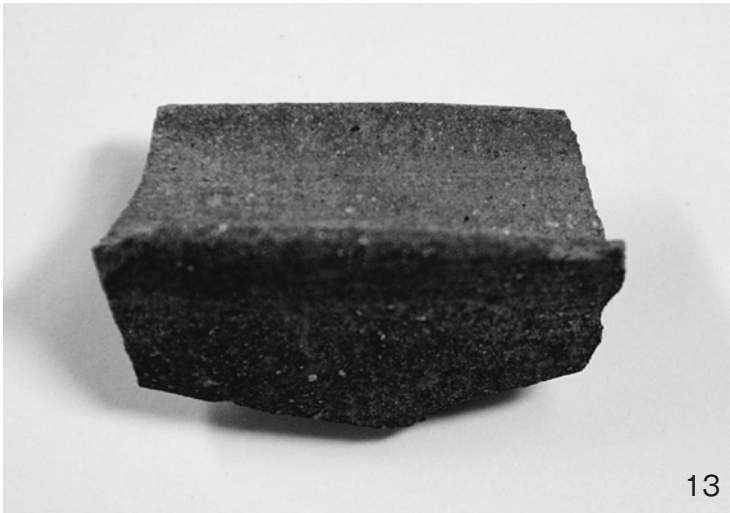
図版67－１　トレンチ10　東側セクション

図版67－２　トレンチ10　西側セクション

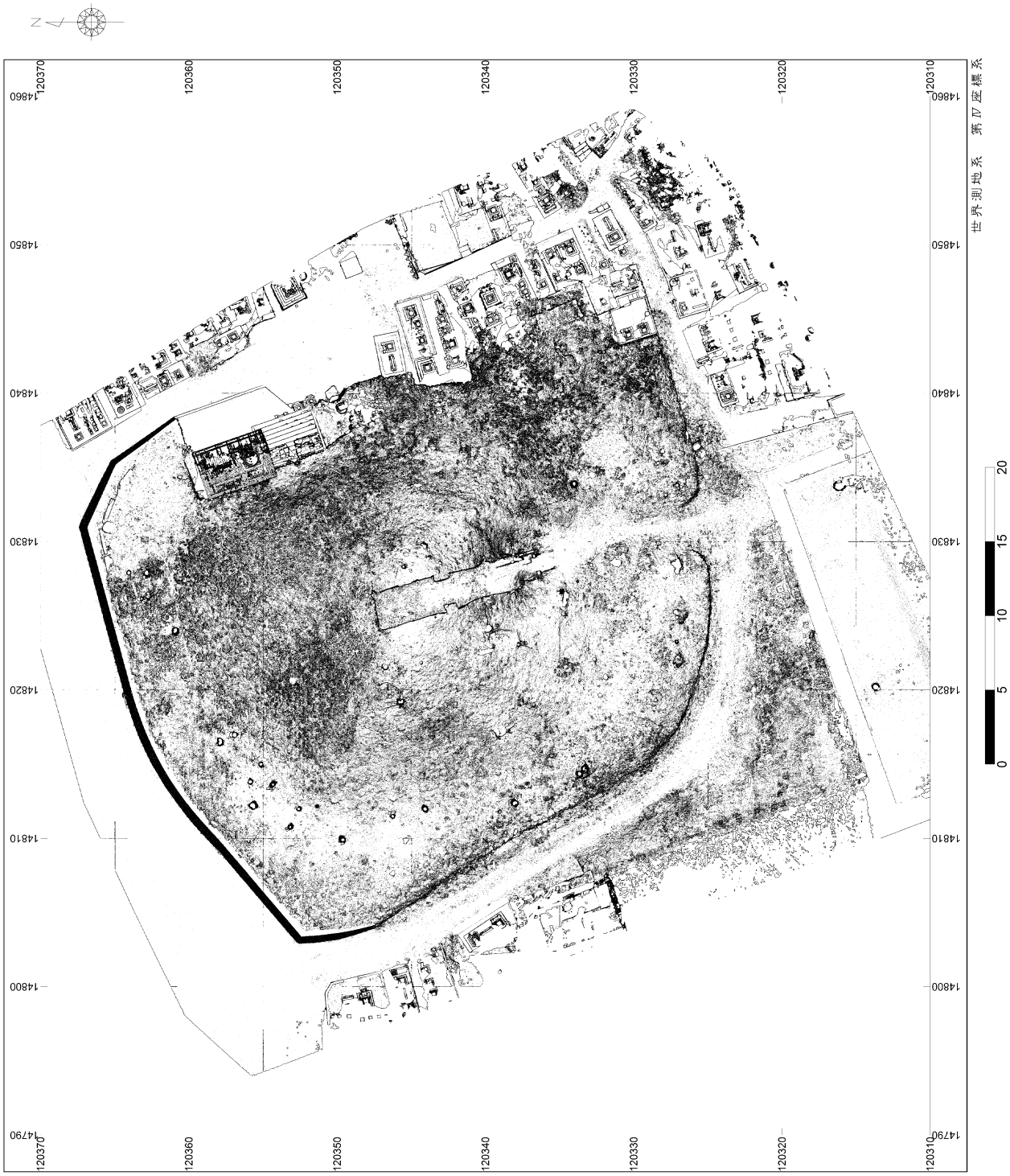




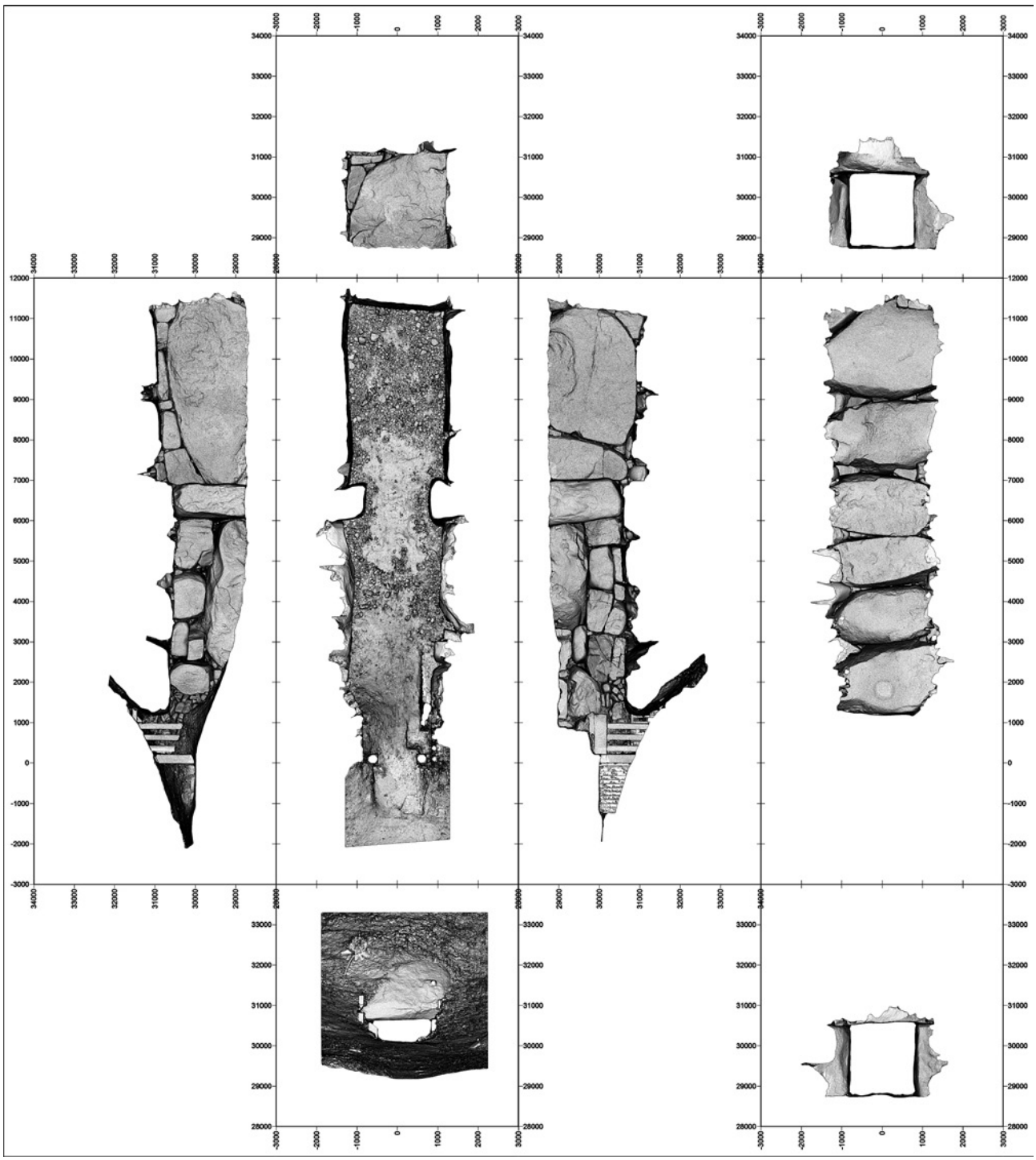




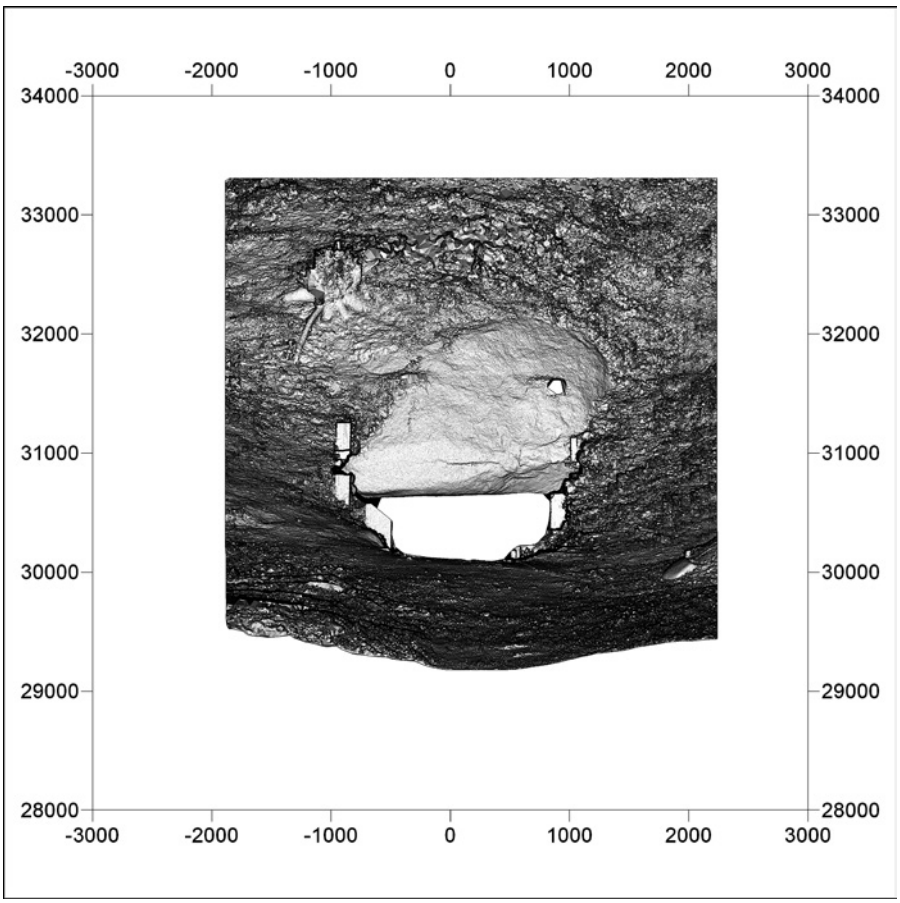
図版68　出土須恵器



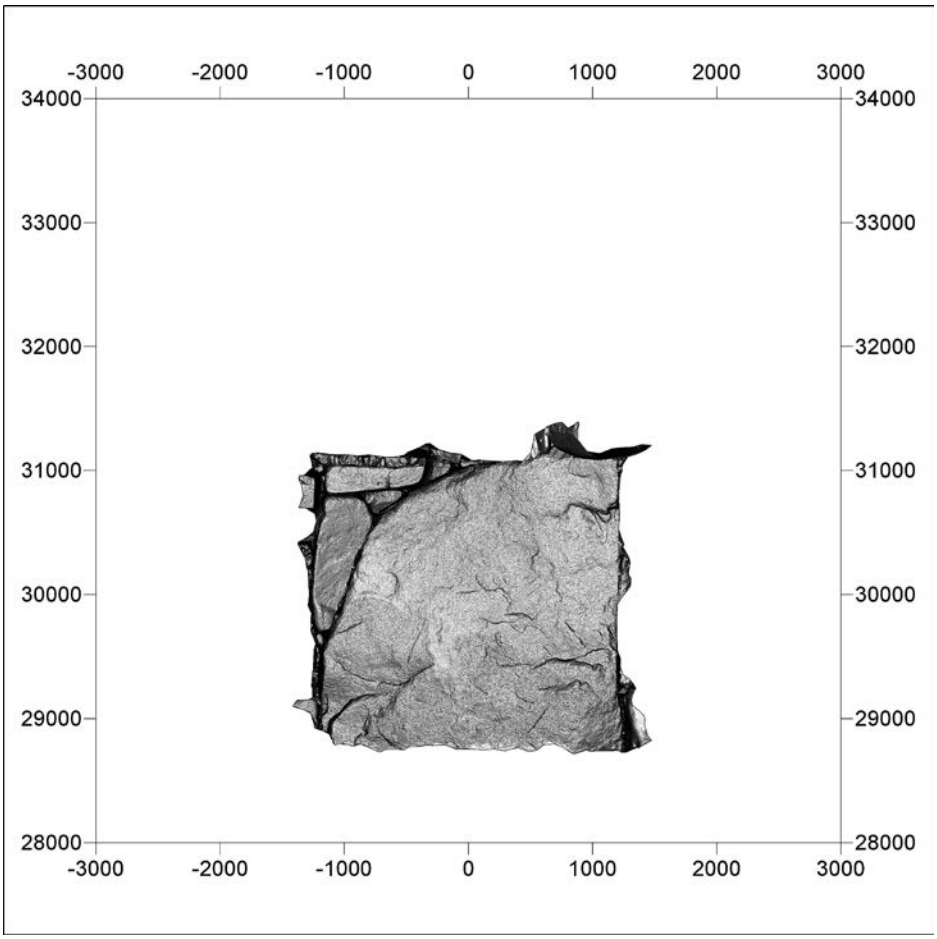
図版69　墳丘平面図（三次元地上レーザー計測画像）



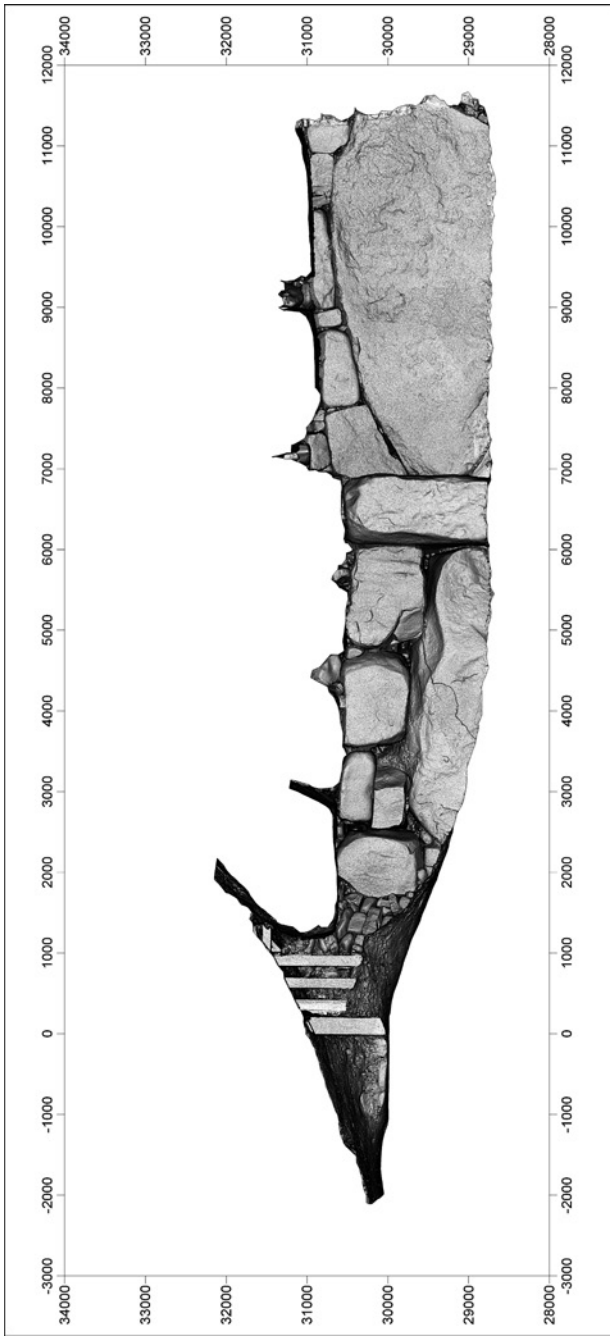
図版70　石室展開図（三次元地上レーザー計測画像）



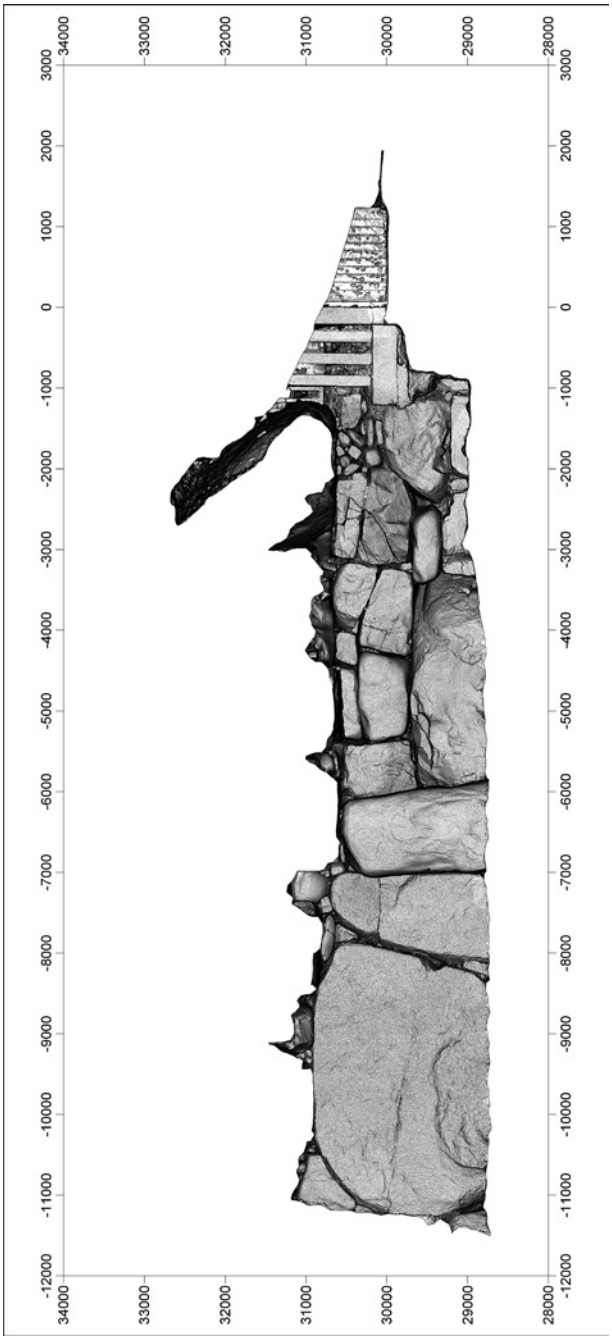
図版71－１　石室開口部（三次元地上レーザー計測画像）



図版71－２　奥壁部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）

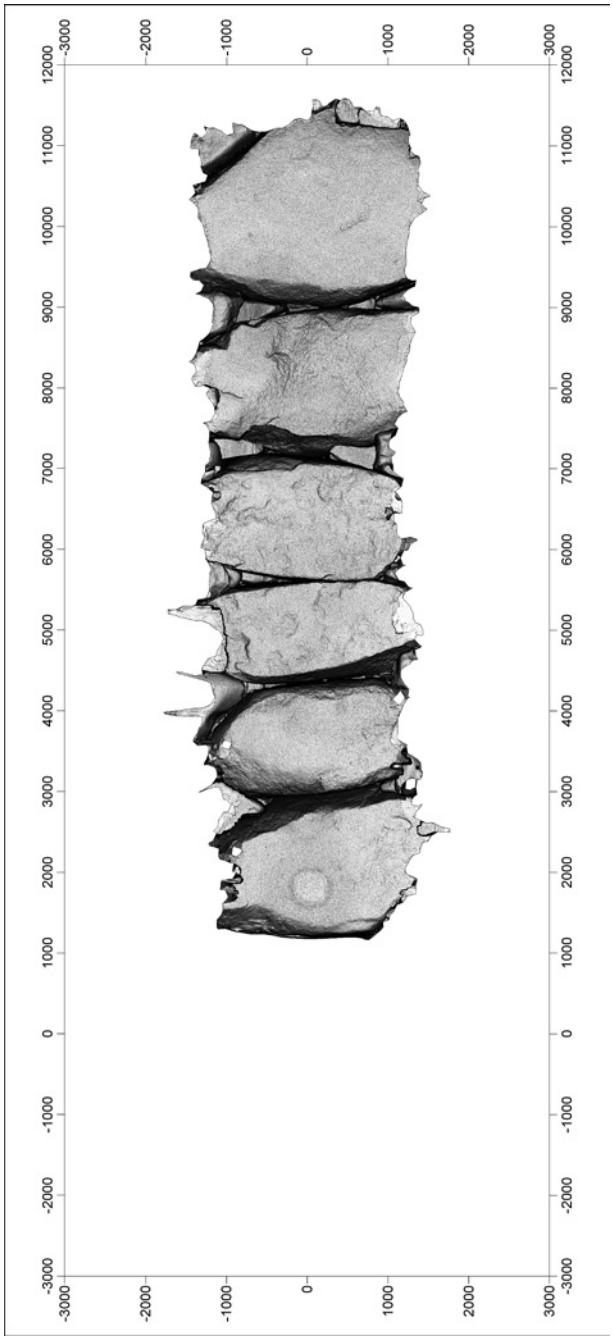


図版72－1
右側壁　立面図
（三次元地上レーザー計測画像）

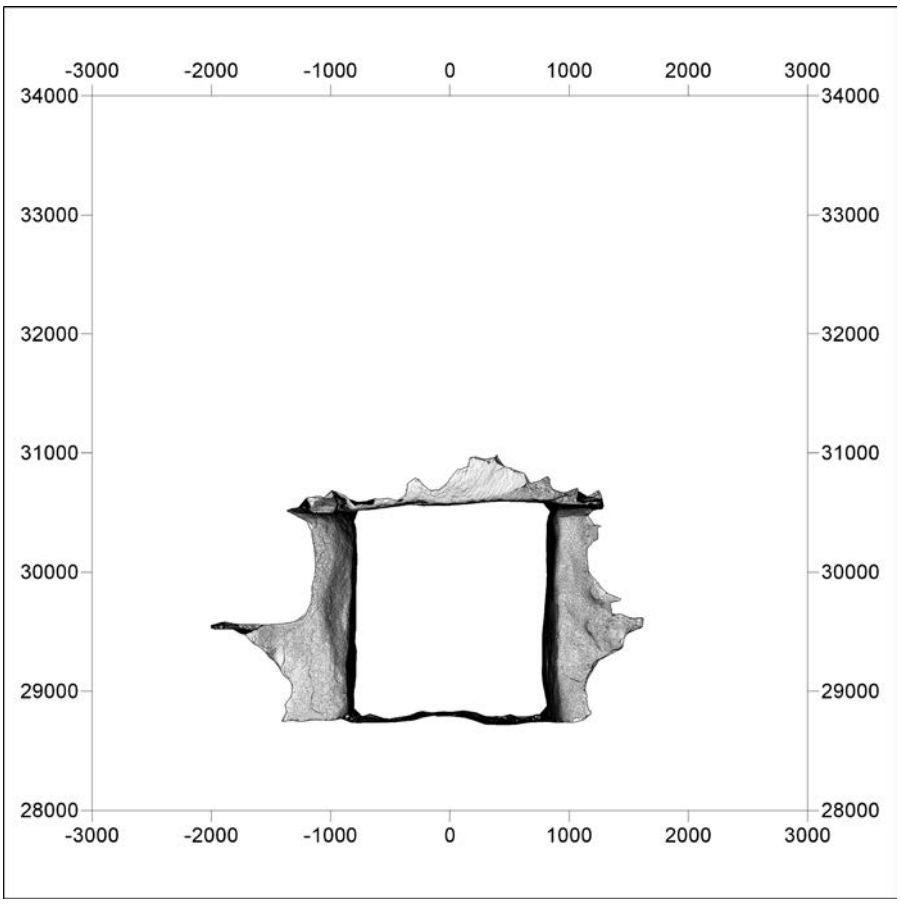


図版72－2
左側壁　立面図
（三次元地上レーザー計測画像）

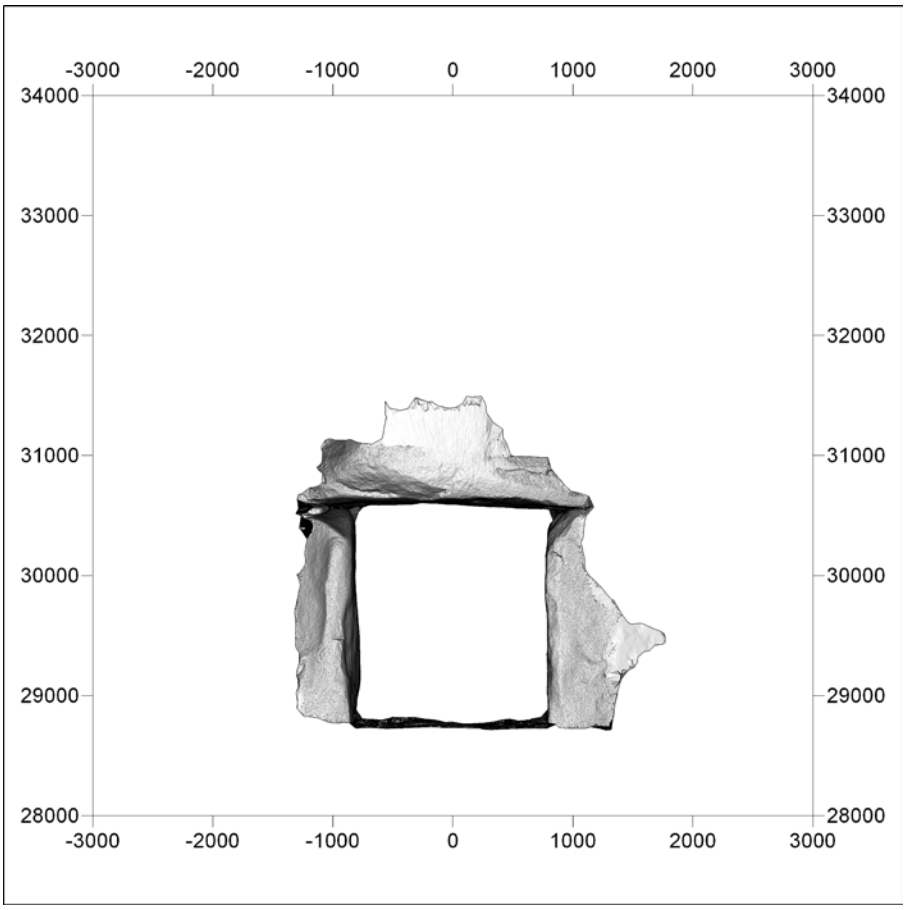
図版73－１
石室床面　平面図
（三次元地上レーザー計測画像）



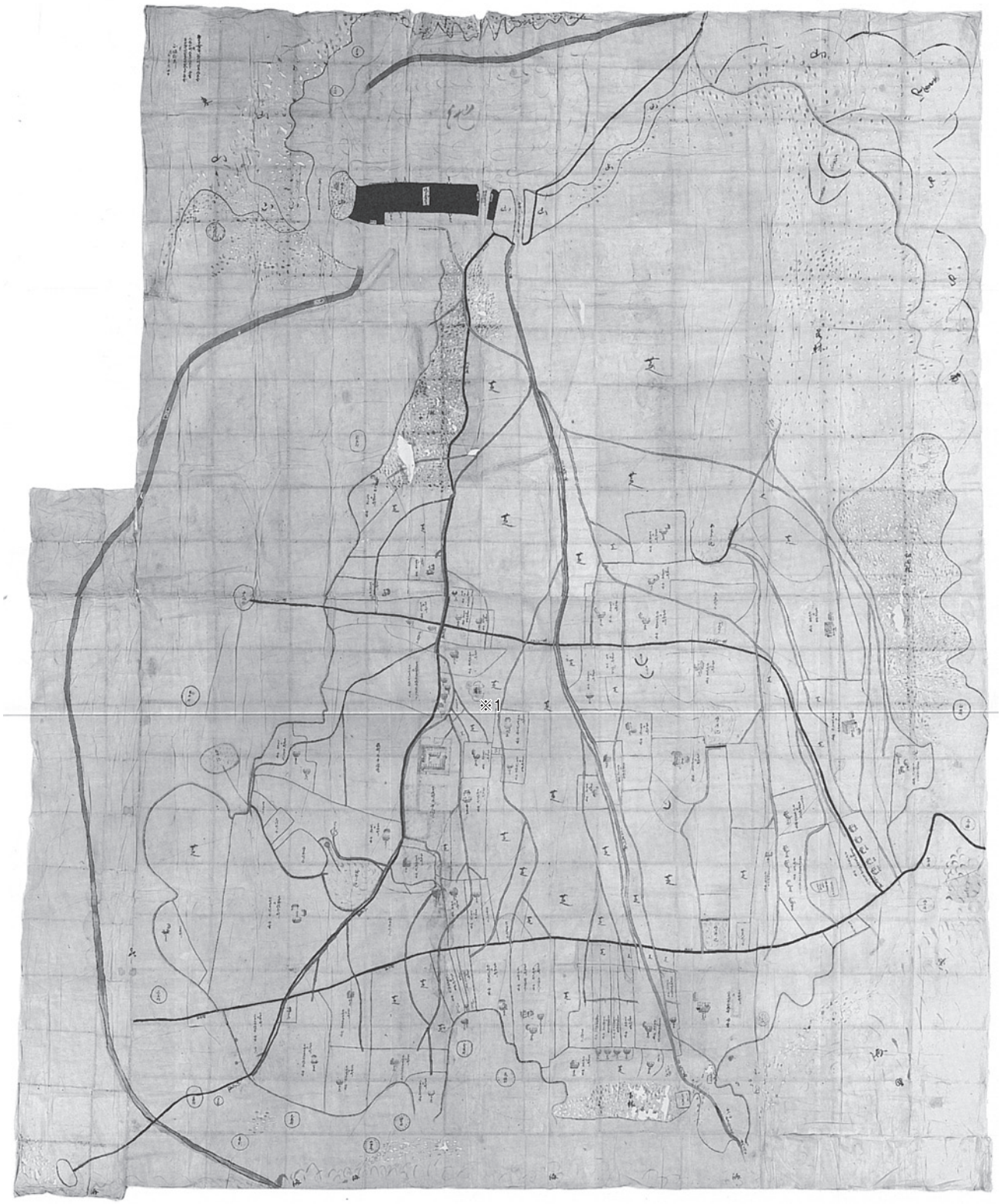
図版73－２
石室天井　平面図
（三次元地上レーザー計測画像）



図版74－１　羨道玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版74－２　玄室玄門部　立面図（三次元地上レーザー計測画像）



図版77　『大野原開墾古図』　1645（正保２）年（『新修　大野原町誌』より転載）
※１　大野原八幡神社と椀貸塚古墳（カラー図版３参照）

地形之覚

一三間四尺　本社
本社前迄
但後ノ方ニテ一間広リ
申筈

一二間半　鈎屋

一二間　拝殿

一五間半　穴地
但拝殿と玉垣之間

〆拾三間四尺

但塚穴の口きわより
玉垣之きわ迄

今迄は塚穴石垣きわより
玉垣迄拾弐間弐尺

一塚穴二戸仕ル筈
但穴へ少入候得者戸仕筈

一拝殿両脇之堀り
埋メ申事

一西之分坪数五十六坪

一東之分坪数六拾坪

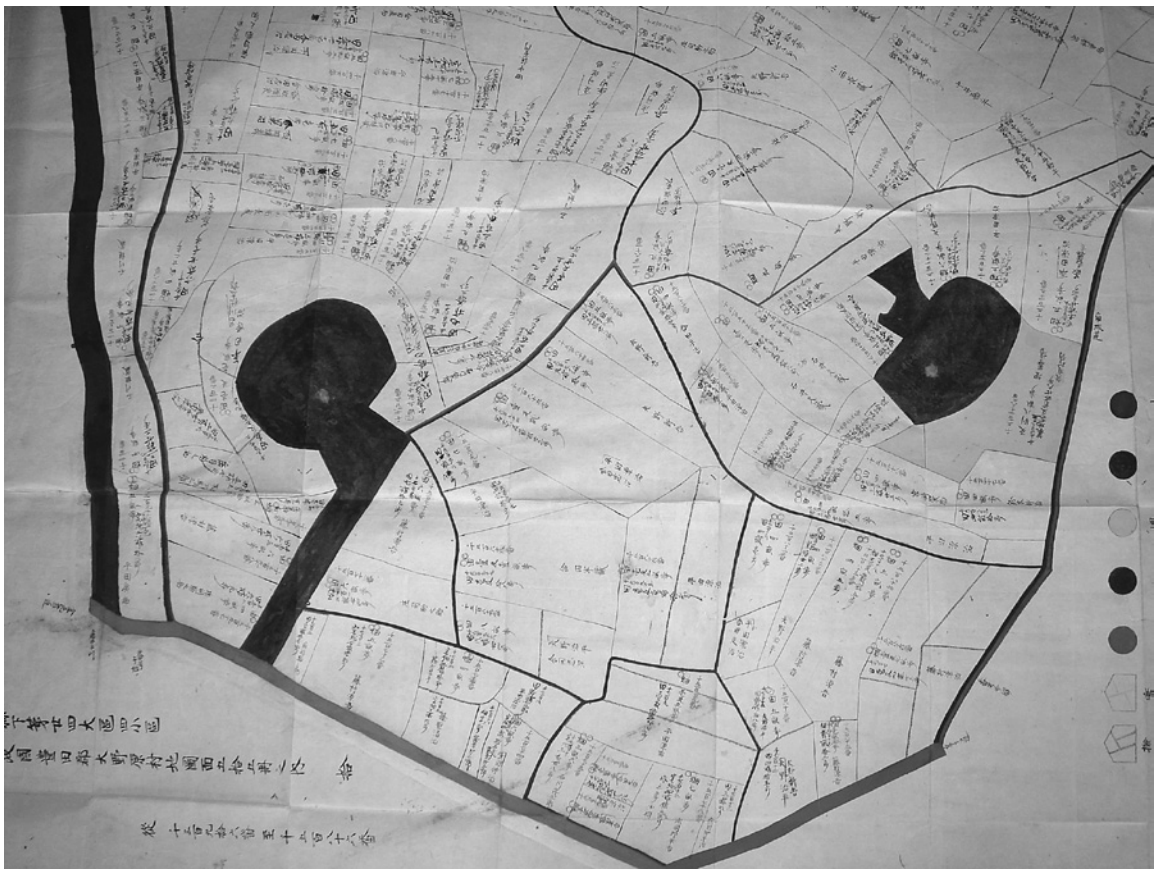
今迄之藪の根者
外に植替申筈

一塚穴之左者広ケ
石垣も仕筈

一右両方之堀リ埋土
者塚之両脇又者
馬場の両脇小塚ノ
土取申筈

一忠兵卫方より之道筋ヲ
付替申筈但忠兵卫
雪隠きわより弐間半
上より道付申筈

図版78　『御宮相續ニ付万事覚帳』　1685（貞享２）年



図版79－１『名東縣下第廿四大區四小區　讃岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内　拾從千三百九十六番至千五百八十六番』 1873（明治６）年　平塚古墳と角塚古墳周辺部分

図版79－２『香川県讃岐國三豊郡大野原村　鎮座　郷社八幡神社之景』1902（明治35）年
（町制25周年　『写真は語る百年のあゆみ』大野原町　より転載）

図版80－１　平塚古墳付近での秋祭の風景（昭和10年頃？）

図版80－２　航空写真　昭和30年頃（平田昌久氏提供）

報告書抄録

ふりがな	おおのはらこふんぐん いち （わんかしづかこふん・ひらづかこふん・かくづかこふん）
書名	大野原古墳群Ⅰ（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）
副書名	範囲確認調査
シリーズ名	観音寺市内遺跡発掘調査事業報告書
シリーズ番号	15
編著者名	久保田昇三（編）　丹羽佑一　大久保徹也　菱田哲郎
編集機関	観音寺市教育委員会
所在地	〒768-8601　香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号　TEL 0875-23-3943　FAX 0875-23-3943
発行年月日	2014（平成26）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
わんかしづかこふん 椀貸塚古墳	かがわけんかんおんじしおおのはらちょうおおのはら 香川県観音寺市大野原町大野原 1913番地1ほか	372056	2006	34° 5′ 16″	133° 39′ 48″	20090702～20091221 20110502～20111125 20120903～20121012 20131004～20131107	26 34 7 6	保存目的調査
ひらづかこふん 平塚古墳	かがわけんかんおんじしおおのはらちょうおおのはら 香川県観音寺市大野原町大野原 1533番地ほか	372056	2008	34° 5′ 1″	133° 39′ 35″	20091105～20100202 20101115～20110331 20120210～20120217	（地形測量のみ） 61 7	保存目的調査
かくづかこふん 角塚古墳	かがわけんかんおんじしおおのはらちょうおおのはら 香川県観音寺市大野原町大野原 1681番地ほか	372056	2009	34° 5′ 6″	133° 39′ 38″	20120209～20120329 20121121～20130329 20130705～20131003	45 27 14	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椀貸塚古墳	古墳	古墳時代 6世紀後葉	横穴式石室（複室構造） 二重周濠 周堤	須恵器	円墳　墳丘直径37.2m 周濠を含む墓域直径70m 石室　羨道＋前室＋玄室　全長14.8m 玄室長6.8m　玄室最大幅3.6m　玄室最大高3.9m 玄室床面積 24.6㎡　玄室空間容積 72.7㎥
平塚古墳	古墳	古墳時代 7世紀初	横穴式石室 列石（前庭部） 周濠	須恵器	円墳　墳丘直径50.2m 周濠を含む墓域直径66.7m 石室　羨道＋玄室　全長13.2m 玄室長6.5m　玄室最大幅3m　玄室最大高2.6m 玄室床面積 18.3㎡　玄室空間容積 41.3㎥
角塚古墳	古墳	古墳時代 7世紀第二四半期	横穴式石室 周濠	須恵器	方墳　縦41.7×横37.8m 周濠を含む墓域縦48.4×横44.5m 石室　羨道＋玄室　全長12.5m 玄室長4.7m　玄室最大幅2.6m　玄室最大高2.4m 玄室床面積 10.1㎡　玄室空間容積 25㎥

要約

大野原古墳群は、香川県の西端に位置する観音寺市大野原町大野原に所在する古墳時代後期～終末期に築造された古墳群である。そのうち椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳は昭和28年に香川県指定史跡となっており大野原三大古墳として広く知られている。これに岩倉塚古墳を加えて4基の大型横穴式石室墳が存在し、これらの築造年代とその順序は、椀貸塚（6世紀後葉）→岩倉塚（6世紀後葉）→平塚（7世紀初）→角塚（7世紀第二四半期）であり、各古墳が築造されたそれぞれの時期においては四国最大級の石室規模を誇っている。特筆すべきは、椀貸塚（円墳）の複室構造の横穴式石室の玄室規模は畿内中枢部の横穴式石室規模に準ずるものであること。また、この時期には珍しく墳丘周囲に二重周濠と周堤が配されており、周濠を含む墓域の直径は70mとなる。　平塚（円墳）は墳丘規模では香川県最大のもので、周濠を含めた墓域直径は66.7mであり、椀貸塚に準ずる規模である。　方墳である角塚は花崗岩を玄室の主たる石材と天井石のすべてに用いた巨石墳であり、同古墳群最後の大型横穴式石室墳である。今回の平成21年度から25年度までの範囲確認調査では、これまで未詳であった、横穴式石室の全長やその規模、形態、墳丘の直径、周濠等を含めた占有面積を確認することができ、遺跡の文化財的価値を再評価し、今後の保存・活用を図るための基本的な資料を得ることができたことが大きな成果と言える。

大野原古墳群Ⅰ

（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）

国庫補助事業報告書

範囲確認調査

2014（平成 26）年 3 月 31 日発行

編集・発行　観音寺市教育委員会

〒768-8601

香川県観音寺市坂本町一丁目 1 番 1 号

電話　0875-23-3943

印　　刷　美巧社